

---

# 道程

実川 渉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

道程

### 【Nコード】

N9993T

### 【作者名】

実川 渉

### 【あらすじ】

君を思ふ 心はなとか あさからむ 吾玉の緒の あらんかぎり  
は

常陸の領主・佐竹義宣は、心を閉ざし寵童との狭い世界に満足していた。

だが、世継ぎが生まれないため家臣のすすめで従妹である岩瀬御台を側室に迎えた。自分の殻に閉じこもりとする義宣と岩瀬御台は反発するが、徐々に歩み寄り惹かれあうようになる。

岩瀬御台との出会いにより、義宣は自分の過去と向き合い成長していく。

戦国時代末期～江戸時代初期、佐竹義宣の生涯と側室・岩瀬御台とその周りの人々の物語。

この作品は戦国時代末期～江戸時代初期の實在の人物・出来事を題材にしたフィクションです。

「時雨」(<http://tokisame.yaekumo.com/>)掲載作品の転載です。

## 無垢の子ども（一）

無垢の白さを染める赤。

白い打掛を染める赤い血痕を義宣はじつと見つめた。打掛を染める血は、乾ききっているはずなのだが、まだ乾いていない血のように赤く鮮やかだった。打掛を手にとって血痕に触れてみる。これが、あの女の血か。

黙って打掛をなぞる義宣が恐ろしいのか、この打掛を義宣のもとへ持ってきた侍女は、怯えたように平伏していた。義宣が侍女へ視線を投げると、それを感じたのか侍女はますます深く頭を下げた。

「御台は、なぜ死んだ？」

義宣の問いに肩を震わせた侍女は、はい、と答えた声まで震えていた。

「御台さまは、急な病に侵されまして、ご病死なされました」

「病死。御台は急に胸でも患ったのか。それで、吐血をして死んだ。そういうことか？」

「仰せのとおりにございます」

「そうか」

手にしていた打掛を侍女の前に投げた。侍女は、どうすればいいのか戸惑っているようだ。

「あの、こちらはいかがいたしましたでしょうか？」

「燃やせ」

「え？」

「跡形もなくなるように燃やしてしまえ。御台の遺品はすべて燃やせ。御台が急な病で死んだのだ。御台の遺品に、その病のもととなったものがあるかもしれないだろう？」

「ですが、すべてでございますか？打掛も、小袖も、何もかも」

「俺がそう言っている。御台の遺品はすべて燃やす。そうだな、烏山の方角に向けて燃やしてやれば、御台も喜ぶのではないか」

御台が喜ぶ、などということは、御台が生きている間一度も考えたことはなかった。死んでから初めて口にするなど、笑えてくる。はっ、と自嘲の笑みを漏らすと、侍女は言いにくそうに、あの、と口を開いた。

「実は、この打掛は御台様が殿様にお届けするようにと遺言されたものです。それでも、燃やさなければならぬのですか？」

「燃やしたくないのか？」

「あ、いえ、その」

口ごもる侍女は、否定の言葉を口にしようとしているが、その態度を見れば何を望んでいるかは明らかだ。義宣は立ち上がり、侍女が胸に抱こうとした打掛をむずと掴んだ。

「お前が燃やしたくないというのならば、俺が燃やすまでのことだ。御台は俺に受け取ってほしがっていたのだろう？ならば、俺が手ずから灰にしてやる。お前は御台の遺品を燃やせ。畳も襖もすべてだ。御台の血がついているだろうからな」

御台の血、という言葉をやさしく言っておたじようて義宣の前から立ち去った。急いで太田城に帰り、ほかの侍女たちと手分けをして御台の遺品を片付けるのだろう。本当に燃やすかどうかは分からない。ただ、義宣の気持ちとしてはすべて燃やしてしまいたかった。

小姓に命じて、庭で打掛を燃やす準備をさせた。小姓たちは、そのようなこと我らが行います、と言ったが、義宣が燃やさなければ意味がないのだ。御台は義宣に渡すよう命じた。ならば、燃やすとしたら、それを受け取った義宣が燃やすべきなのだ。

準備が整い、赤々と燃える炎の中に打掛を放り投げた。打掛は炎に包まれ、染み込んだ御台の血ごと燃えていく。その様を義宣は目を逸らさずにじっと見ていた。

「どこまでも、那須の女か」

ぽつりと呟いた言葉は炎の音に飲み込まれた。燃え尽きた打掛は灰となり、風に吹かれて空へと舞い上がった。

御台が死んで一月も経たないうちに、義宣の継室は多賀谷重経たがやしげつねの娘と決まった。どうやら、重経が必死に父に頼み込んだらしい。もともと人質として差し出していた娘を側室にしてくれというのならまだ分かるが、当主の継室にしてくれというのは、おかしい話のように思う。義宣が多賀谷の姫を望んだわけでもない。

だが、誰でもよかった。ただ、義宣に逆らわない女ならばよかった。その点、人質となっている多賀谷の姫はうってつけなのかもしれない。父から持ち出されたこの話を、義宣はすぐに承諾した。

家中では御台が死んで一月も経っていないというのに、もう継室を定めたことを快く思っていない者もいるようだった。そのせいか、それとも義宣が御台の遺品を燃やせと命じせいか、御台は病死ではなく義宣が殺したのだとか、自害をしたのだとかいう噂が広まった。言いたい人間には言わせておけばいい。半年も経ったら、どうせ誰もが御台のことなど忘れてしまうに違いない。義宣も、あの女のこととは忘れてしまいたかった。だが、白い打掛に染み込んだ赤い血が、なかなか義宣の脳裏からは消えてくれない。

「殿」

自分と呼ぶ声に義宣は現実引き戻された。廊下を歩いていた義宣の後ろには、人見藤道ひとみふじみちが立っていた。

「どうした、主膳」

「実は、殿に推挙したい者がおります」

「ほう」

「一年ほど私のもとに置いていたのですが、なかなか聡明で、共に仕事を任された者たちなど神童と呼ぶほどなのです。きっと殿のお役に立ちましょう」

「神童か」

その評判がどこまで本当のことかは分からないが、藤道がすすめるその神童とやらに会ってみるのもいいかもしれない。御台が死に、

その死をめぐって様々な噂が飛び交うこの状況は不愉快だ。何か新しいものを取り入れるのも悪くない。もしかしたら、藤道もそれを考えて義宣に推挙の話を持ってきたのかもしれない。

「いいだろう、分かった。内膳を推挙してきた主膳の目に狂いはないだろう。近いうちに吉日を選んで連れてこい。噂の神童に会おう」

はい、と言つて頭を下げて藤道は去つて行つた。後ろ姿から藤道の意気込みが伝わってくるようだった。藤道がかつて推挙した<sup>しづえ</sup>江政光は優秀な人材で、義宣は政光を重用していた。

藤道に小さく苦笑しながら、政光を推挙した藤道が、今度はどのような神童を連れてくるのか、義宣は少しだけ楽しみに思っていた。

## 無垢の子ども（二）

穿きなれぬ袴の裾に足を取られそうになって、金阿弥きんあみは少しよるめいた。それに気付いたのか藤道が振り向く。恥ずかしくて、何事もなかったように振る舞ったが、藤道は苦笑していた。

初めて上がる城内は緊張する。藤道の屋敷も立派な屋敷だと思うが、やはり城となると規模が全く違う。歩いている廊下も磨き上げられていて、もしかしたら自分の姿が映るのではないだろうか、と思ってしまう。先導する藤道の背中を追いかけるので精一杯だった。

数日前までは、自分が城に上がるなど考えたこともなかった。兄のりただの憲忠は城で殿様である義宣の側近くに仕えているが、末っ子の自分は、せいぜい出世して藤道の祐筆ゆうひつになればいい方だと思っていた。

それに、いくら兄が殿様の側近くに仕えているといっても、梅津家は浪人出身の新参者だ。金阿弥は藤道に会うことすら滅多にないのだから、まさか城に住むような高貴な人物と会えるとは思ってもみなかったのだ。

だが、数日前に城から戻った藤道にいきなり呼び出され、お目見えが許されたことを告げられた。何のことが分らず、ばかんとしている、殿様にお会いするのだ、と教えられた。

その日から毎日、城に上がった時の礼儀作法や、義宣にお目見えしたときの振る舞い方などをみっちり教え込まれた。兄にもどうすればいいか聞いた。兄は、そう難しく考えることはない、と言ってくれた。父は金阿弥がお目見えを許されたことをとても喜んでくれた。

今日は朝から譜代の子弟が着るような質の良い小袖と袴を着せられた。さすがにいつも着ているものでは粗末すぎて、殿様の御前には上がれないのだろう。金阿弥を気遣って藤道が用意してくれたのだ。だが、こんな立派な格好をした自分は自分ではないような気が



した。それに、似合っていないと思う。不釣り合いなのだ。そう思  
つて、金阿弥は見える範囲で何度も自分の格好を確認した。藤道は  
似合っていると言ってくれた。それが金阿弥は嬉しかった。

前を歩く藤道の足が止まり、金阿弥も同時に足を止めた。藤道は  
振り向いて金阿弥の耳元に口を寄せた。

「良いか、教えたことは覚えているな？」

「はい」

「殿はお前の兄の話題も出すだろうが、いつものように『兄上』と  
呼んではならぬからな」

「分かっております」

本番で失敗しないように、家でも兄のことは通称である「半右衛  
門<sup>もん</sup>」と呼んで練習してきたのだ。せっかくお目見えの場が与えられ  
たのだから、失敗してはいけない。失敗したら、目をかけてくれた  
藤道に恥をかかせることになるのだと父にきつく言われてきた。ぎ  
ゅつと胸元を握りしめると、藤道が、そうか、と呟いた。

「殿、人見主膳<sup>しめぜん</sup>にございます」

入れ、という声が襖越しに聞こえて、金阿弥の緊張は一気に高ま  
った。今聞こえた声が、義宣の声なのだ。大きく息を吸って落着  
こうとしたが、落着かない。襖は開かれ、藤道は室内へと入って  
行く。その後ろについて、金阿弥も室内に足を踏み入れた。

緊張で足が自分の足ではないようだ。袴が真新しく穿きなれない  
ものだということも重なって、とても歩きにくい。廊下でよろめい  
たときのようになっではいけない。ちゃんと背筋を伸ばし、足を進  
めた。

だが、ただ足を進めたはずなのに、金阿弥の視界が揺らいだ。あ  
と思わず声が出た。その瞬間には、ぐらりと体が傾き既に転んでし  
まっていた。

「金阿弥」

藤道の驚いた声が聞こえる。恥ずかしい。恥ずかしくてたまらな  
かった。顔に熱が集まる。あんなに練習してきたのに、その成果を

發揮する前に転んでしまうなんて、台無しだ。鼻の奥がつんとする。こんなことで泣いてどうするのだ、と思うが涙が滲んだ。

「大丈夫か？」

藤道の声とは違う声がして、顔を上げると、見知らぬ人が手を差し出してくれていた。恐らく、この人が義宣なのだろうということには分かった。先ほど聞こえた声と同じだ。だが、まさか殿様が手を差し出してくれるとは思えず、じっと見つめてしまった。

もう一度、大丈夫か、と尋ねられ金阿弥は頷いた。だが、この手を取っていいものか悩む。それが伝わったのか、ほら、と急かされ、金阿弥はようやくおずおずと義宣の手に自分の手を重ねた。その手をいきなり引つ張られ、驚いている間に義宣に抱き上げられていた。「殿、お止めください」

「別にいいだろう、主膳。かわいそうに、まだ本当に子どもではないか。神童と言っても、せめて十三、四にはなっていると思っていた。泣かなくてもいい。緊張したのか？」

義宣は金阿弥が転んだことを怒っていないらしい。それどころか、優しい言葉をかけられて嬉しかった。つい気が緩んでしまい、素直に頷くと、藤道の、こら、という声が聞こえた。だが、義宣は静かに、そうか、と言った。

「お前は素直な子どもだな」

「ありがとうございます」

やっとの思いでそれだけ口にする、畳の上に下ろされて、ぽんぽんと頭を軽く撫でられた。

「改めて聞こう。名は何という？」

「は、はい、梅津金阿弥です」

立ったまま頭を下げた後、本当は平伏して、もっと難しい言葉を使わなければならなかったのだと思い出したが、もう遅かった。

「では、半右衛門はお前の兄か？」

「はい」

「いくつになる？」

「十一になりました」

「兄と一緒に働きたいか？」

「兄上と一緒に働いてもよろしいのですか？」

ぱつと顔を上げた後に、またしても自分の失敗に気づいた。室内に入る前も藤道に注意されたというのに。あまりの失敗続きに、また泣きそうになってしまふ。はつとして口を押さえる金阿弥がおかしかったのか、義宣が笑みを漏らした。藤道はため息をついている。

「主膳、金阿弥を俺にくれ」

「殿、よろしいのですか？」

「ああ、気に入った。金阿弥も半右衛門と共に働くことを望んでいるようだ。いいではないか」

なあ、と話を振られてもどう答えたらいいのだろうか。ただ、兄と一緒に働けると嬉しいことは事実なので、義宣の言葉に頷いた。

「分かりました。殿がそこまでおっしゃるのなら、明日からでも金阿弥は登城させましょう」

「そうしてくれ。こいつの父親にもお前から話を通しておけ」

「はい」

金阿弥が黙っている間に、義宣と藤道の間では話がまとまったらしい。金阿弥は藤道ではなく義宣の家臣になったということでもいいのだろうか。

「ではな、金阿弥。明日から、お前は俺のものだ」

先ほど撫でられたときと同じように頭を撫でられる。その手があたたかくて、何だかとても嬉しかった。

「はい、お殿様」

金阿弥が笑うと、義宣も小さく笑ってくれた。

藤道に連れられて退室するとき、一度だけ振り返ると、義宣が軽く手をあげてくれた。それに手を振ってこたえようと、藤道に怒られてしまった。

だが、退室してから藤道が、よかったな、と言ってくれて、嬉しかった。

### 無垢の子ども（三）

お目見えの次の日から、金阿弥は人見家ではなく城で義宣に仕えるようになった。

同朋どうほうとして仕えることになったのだが、同朋がどのような仕事をするのか分からず、城内での作法なども分からず、それらを覚えることで精いっぱいだった。幸いなことに、兄がもともと義宣に同朋として仕えていたため、兄から詳しい話を聞けたのだが、兄はいつも金阿弥の面倒を見てくれるわけではない。だから、分らないことは同年代の小姓たちに聞いたのだが、小姓たちは何も教えてくれなかった。

城内の小姓たちは、佐竹家の譜代家臣の子弟なのだと兄に教えられた。譜代の子弟は、金阿弥のような浪人出身の子どもが、いきなり義宣に召しだされたことが面白くないのだそうだ。兄も、いつもその小姓たちの親に「浪人上がり」といわれていると言っていた。慣れない城勤めに、冷たい同僚たち。登城してから家に帰るまで毎日気を張りつめていなければならなかった。これならば、藤道のもとにいた方がよかったかもしれない、と思うこともあった。

だが、せっかく義宣が直々に金阿弥を召しだしてくれたのだ。だから、同僚たちに冷たくされようと、浪人の子どもだと蔑まれようと、せめて義宣の役に立てるようになりたかった。見様見真似で仕事を覚え、家に帰ってから寝る間を惜しんで復習をした。その甲斐があつて、三月も経つ頃にはひとりで大概のことはできるようになった。

ここまで頑張れたのは、義宣のおかげだ。義宣は優しくかった。城に上がらなければ、会うことも声を聞くこともできない雲の上の人だったのに、浪人の子どもである金阿弥にとっても優しくかった。義宣のそばにいられることを思うと、やはり登城してよかった、と思う。義宣は金阿弥が失敗をしても怒らなかつた。次はうまくできるだ

ろう、と言つて励ましてくれた。暇があればそばに呼んで、家中の話や他家の話などをしてくれた。

菓子を与えてくれることもあった。大事にしまつて家に持つて帰ろうとすると、いつもその場で食べるように言われた。義宣がくれる菓子は金阿弥が口にしたことのないものばかりで、思わず、おいしい、と呟いてしまう。そうすると、義宣は、よかったな、と言つて微笑んでくれる。それが少し恥ずかしかったが、嬉しかった。

金阿弥は、義宣から一度聞いた話は忘れないようにした。義宣の話を覚えていると、義宣は褒めてくれるのだ。義宣に褒めてもらえるのが嬉しくて、金阿弥は努力した。そのたびに義宣は褒めてくれた。頭を撫でてくれることもあった。

ほかに、金阿弥が知らなかったことを、義宣はいろいろと教えてくれた。常陸の金山の話や、検地の話など、まだよく分からないこともあったが、教わるのが嬉しかったし、知らないことを教えてもらうのは楽しかった。分からないことは、兄や兄の同僚の政光に聞いて勉強した。

義宣にはいつも優しくしてもらつてばかりで、教えられてばかりで、今はまだ何も金阿弥には返せるものがないから、ただ懸命に努力した。いつか兄や政光のように、義宣の役に立てるように、と一心に思い勉強した。

だが、そうして義宣の役に立とうとしている金阿弥のことを、譜代の子弟たちはよく思っていないようだった。この間は、廊下を歩いていたら足をひつかけて転んでしまった。怪我はなかったが、転んだ時は痛かった。人気がない部屋に連れ込まれて、いい気になるな、と言われたり、いろいろな悪口を言われたりしたこともある。ただ、義宣の役に立ちたいだけに、そう言われると悲しくなる。それでも、金阿弥は意地悪をされているということを義宣には言わなかった。告げ口をしているようで、何となく嫌だったのだ。それに、義宣に言つと、ますます意地悪がひどくなりそうな氣もしていた。

そのことを知っているのか知らないのか、それは分からないが、義宣は頻繁に金阿弥を呼んで、色々な話をしてくれた。頭を撫でられるだけではなく、膝の上に載せられそうになったときは驚いた。

「殿、いけません」

金阿弥がやんわりと義宣の腕を押し返そうとすると、義宣は不満そうな顔をした。だが、いくら子どもだからと言って義宣の膝に載るなど、いけないことだと思うのだ。初めて義宣に会ったとき、金阿弥を抱き上げた義宣に、藤道は、いけません、と言っていたではないか。

「嫌なのか？」

「いいえ、そんなことはありません」

嫌だなど、とんでもない。慌てて首を振ると、体が一瞬浮き、義宣と向かい合うように膝の上に載せられていた。

「嫌ではないのだろう？じゃあ、いい。俺がこうしたいんだよ」

義宣の腕が背中に戻され、優しく抱きしめられた。義宣の体温が伝わってきて、とてもあたたかい。抱きしめられた瞬間は緊張したが、その緊張が解けていく。頭を撫でられるよりも、ずっと嬉しかった。

怒られるかもしれない。だが、もしかしたら義宣は許してくれるかもしれない。胸の前で握りしめていた手を、金阿弥はそろそろと伸ばし、義宣の首に抱きついた。義宣の体が一瞬びくりと動いたので、怒られるかと思って手を元に戻そうとした。

「いい」

「え？」

「そのままでいろ」

そのまま、というのは義宣の首に抱きついていてもいいということだろうか。戻そうとした手をそのままにして抱きつく、と、義宣の腕の力が少し強まった。あたたかい。

義宣に抱きしめられていたのは、短い時間だったのだと思う。だが、金阿弥には時が止まったように長い時間を感じられた。義宣の

腕が離され、膝の上から下ろされても、まだ義宣の腕の中のあたた  
かさが残っているような気がした。

## 無垢の子ども（四）

金阿弥を側に置くようになってから、半年以上が経った。義宣は金阿弥を側に置いて離さなかった。時間ができた時は呼んで、とりとめのない話をし、菓子を与え、たまには金山のことや検地の話もした。

どんなにつまらない話でも、金阿弥は目を輝かせて義宣の話を聞いてくれた。初めて出会った時と同じ、澄み切った目で一心に見つめてくる。それが義宣は嬉しかった。

それだけではなく、金阿弥は勉強熱心で、義宣が話したことは一度聞いたらずれずにいるようだった。義宣の言葉をまるで金科玉条きんかぎよくじょうのように思っている節も見受けられる。将来は政光や憲忠のようになるかもしれない。そう思うと、ますます金阿弥を離さなかった。

そのことを、譜代の連中はよく思っていないようだった。政光や憲忠たち浪人出身の新参が義宣に重用されればされるほど、譜代連中から冷たい目で見られていることは知っていた。それは金阿弥も同じだろう。それどころか、まだ幼い子どもだからこそ、あらぬ疑いをかけられているかもしれない。

まさか義宣の耳に入るとは思っていなかったのだろうが、浪人出身の者たちをよく思っていない連中が、尻奉公と陰口をたたいているのを聞いている。十を過ぎたばかりの子どもに、そのようなことはしない。だが、そんなことを言われてしまうほど、義宣は金阿弥を可愛がりすぎているということなのだろう。

金阿弥を連れて城内を歩いていると、東義久ひがしよしひさとすれ違った。義久は廊下の端に寄り礼をしたが、頭を上げた時に金阿弥を見ていた。

「殿」

「何だ？」

振り向くと、義久は咎めるような目で義宣を見ていた。その目に腹が立った。



「随分と可愛がられているようですね」

「何のことだ？」

「有能な者を、身分にとられずに重用なすることは結構にございますが、少々度が過ぎるか」と

「何が言いたい？」

「譜代、一門から不満が出ております」

義久の目が金阿弥を睨んだように見えた。金阿弥は怯えたのか、ぎゅっと義宣の袖を握りしめてきた。

「分別が肝要にございます」

それだけ言うと、義久は再び礼をして去って行った。義久に言われたことは、言われずとも自分でも分かっていることだ。自分でもこれはおかしいと思っている。金阿弥を可愛がるにも度が過ぎていることは分かっている。だが、義久に言われると腹が立つ。中立を装って分別顔をして、一門、譜代のために義宣に忠告するのだ。

義久は佐竹家一門衆筆頭である東家の当主だ。家中では発言力を持つている。一門、譜代のことを考えているに違いない。義宣の気持ちなど、考えようと思ったことすらないはずだ。

「殿」

立ち去る義久の背中をじっと睨みつける義宣の袖を、金阿弥が軽く引つ張った。心配そうに義宣を見上げる金阿弥を見て、少し怒りが和らいだ。

「気にするな」

そうは言ったものの、金阿弥はまだ何かを気にしているようで、部屋に戻っても浮かない顔のままだった。義久の言葉をまだ気にしているのだろうか。

「殿」

「どうした？」

「お聞きしたいことがあります」

「何だ？」

浮かない顔をした金阿弥が少しでも話しやすくなるように、なる

べく優しく促してやったつもりだ。だが、金阿弥はためらうように視線をさまよわせ、ようやく口を開いた。

「何故、私をお側に置いてくださるのですか？」

「中務なかつかさの言ったことを気にしているのか？」

一瞬、声が低くなつたのが自分でも分かった。これはいけない、と思つたがもう遅かつた。金阿弥は慌てて、いいえ、と必死に首を振つた。

「以前から、一度お聞きしたいと思つていたのです。私は、まだ子どもで、しづえな いぜん渋江内膳殿や半右衛門のように殿のお役に立ちたいのに、全然お役に立てなくて、それでも、殿は私をお側に置いてくださいます。とても嬉しいのですが、いつももどかしい気持ちになるのです」

「そんなことを気にしていたのか」

こくりと頷く金阿弥を見て、義宣は小さく笑つたが、金阿弥にとつては重要なことだつたのだろう。周りからよく思われていなければ、尚更、何故、という気持ちは強まつたに違いない。そんなことと言つたのは不適切だつたな、と思つた。

「金阿」

「はい」

「俺は、お前のそういうところが好きだから、側に置いているんだよ」

「そういうところ？」

「ああ。素直で正直で、純粹なところだ」

義宣の言葉に納得できないのか、金阿弥は首をかしげて、じつと義宣を見つめてきた。だから、そういうところが好きなんだ、と言いたくなつたが、金阿弥には分からないだろう。

「お前は、初めて俺に会つたとき、恐らく随分練習をしてきたのだろうが、転んでしまつただろう？その時、お前は何も言い訳をせずに、ただ泣いた。その後も飾らずに、そのままのお前でした。主膳はお前が失敗をしたと嘆いていたが、俺は、そういうお前が好まし

「と思った」

子どもでも、自分の保身のためには嘘をつく。もしも譜代の家の子どもが義宣の前で転んだら、袴が悪いのだとか、普段はこんな失敗はしないだとか、言い訳をするだろう。だが、金阿弥は何の言い訳もせずに、ただ素直に泣いた。それが義宣には好ましく思えた。

「お前なら、偽りなく俺に接してくれると思った」

金阿弥は信じられると思った。義宣を義宣だと知りながらも、義宣に抱き上げられ、じっと見つめてきた真っ直ぐな瞳は、純粹で澄み切っていて、心の奥底まで見透かされそうな気持ちになった。だが、同時にこんなにも真っ直ぐに見つめられたことはなく、この幼い瞳は信じられると思った。

初めて義宣を見つめる目に出会ったのだ。純粹で無垢な子どもの目に惹かれた。期待した。義宣だけを見て、濁りも曇りもない眼差しで、ただ一心に義宣を慕って、忠誠を誓う存在を期待した。だから、側に置きたいと思った。

そして、側に置いて、義宣だけを見つめ、義宣だけを慕う存在にしようとしている。

さすがに、それを金阿弥に言うわけにはいかなかったが、このまま見つめられていると醜い心の奥底が覗かれそうな気がして、ごまかすように金阿弥の頭をぼんぼんと撫でた。

「それだけではない。金阿は俺のために努力してくれている。だから、側に置きたいんだ。いずれは内膳や半右衛門を超すかもしれないな。期待している」

「はい。早く大きくなって、殿のお役に立ちたいです」

「それは楽しみだ」

義宣の言葉ひとつで、心底嬉しそうににこりと笑う金阿弥は可愛い。側に置いて離したくなくなる。

義久の言う通りだ。分かっている。度が過ぎている。それでも、期待せずにはいられない。何も知らない子どもを側に置いて、ただ一途に義宣だけを慕うようになってほしかった。

変わらぬ純粹さと無垢な思いを、奇跡のような何かを、義宣は幼い子どもに期待していた。

## 無垢の子ども（五）

どこまでも続く海が目の前に広がる。その海に大きな夕日がゆつくりと沈んでいく。夕日を映した海は赤く輝いて、とても美しかった。

「殿、すごいです。ご覧ください。夕日が海にのまれていくようです。すごい、すごい」

この感動を義宣に伝えたいのだが、うまく言葉が出てこない。どの言葉も、この景色を表すには相応しくないように思えてくる。それに、感動で胸がいっぱいになって、言葉が出てこないのだ。

「そんなに身を乗り出したら、海に落ちるぞ」

「申し訳ありません」

海の美しさに興奮して、ついはいしゃぎすぎてしまったようだ。義宣に言われたとおり、身を乗り出しすぎていた。義宣に心配をさせてしまった申し訳なさと、幼子のようにはいしゃいでしまった恥ずかしさから金阿弥は俯いた。その金阿弥の頭に、ほんと義宣の手が載せられた。

「謝るな。俺は、お前にこの景色を見せたいと思って連れてきた。

お前が喜ぶのなら、俺は嬉しい」

「ありがとうございます、殿。とても嬉しいです」

「そうか、それは良かった」

義宣の優しさに応えるように、金阿弥は思いをこめて義宣を見上げた。わざわざ名護屋<sup>なごや</sup>まで連れてきてくれて、こんなにも美しい景色を見せてくれて、本当に嬉しいのだ。その思いが伝わったのか、義宣は頭に置いた手で頭を撫でてくれた。

「常陸では海から朝日が昇るのに、ここでは夕日が海に沈むのですから、面白いです」

「金阿は物知りだな」

「半右衛門から聞きました」

金阿弥が義宣のもとへ来てから、最初の年が明けた。年が明けてから、義宣は秀吉の命に従って名護屋へ来ていた。金阿弥も一緒に連れてきてもらった。まだ幼い金阿弥は、自分は常陸に置いて行かれるものだと思っていたので、義宣と一緒に名護屋へ来られて嬉しかった。

義宣が名護屋へ来たのは、秀吉の唐入りのためだと聞いている。その唐入りのために全国から大名たちが名護屋に集まり、朝鮮へ戦をしに渡っているのだとも聞いた。

義宣にはまだ渡海の命は下されていないが、名護屋にいる以上、いつかは義宣も朝鮮へ渡ってしまう。そのようなことはないと思うのだが、渡海したら、もしかしたら義宣はもう二度と帰ってこないかもしれない。朝鮮の寒さは常陸の比ではなく、水も体に合わないのだと聞いている。異国の地は危険に満ちているのだ。それを思うと、いつまでも義宣に渡海の命が下らなければいいのに、と思う。

今は名護屋で特にすることがないので、茶の湯や蹴鞠などをして義宣は過ごしている。常陸にいるときよりも義宣と一緒にいる時間が多く、こうして海に連れてきてもらうこともある。海を渡れば戦が待っているというのに、穏やかな日々が続いているような気がしていた。

こうして過ごす日々を楽しいとか、幸せだとか思ってしまうのは、朝鮮で戦っている人たちに失礼だと思うのだが、金阿弥は幸せだった。それでも、義宣が渡海することを考えると不安で仕方がなくなる。複雑な気持ちになって、思わず義宣の袖を握りしめてしまっていた。

「どうした、金阿？船に酔ったのか？」  
「いいえ」

義宣の言葉に首を振り、周りを見渡した。義宣が今日供として連れて来たのは、金阿弥のほか兄と政光と向宣政の三人だった。この三人は義宣に最も重用されている。だが、三人の姿はいつの間にか見えなくなっていた。船の上のどこかにはいるのだろうか、姿は

見えない。それならば、三人から義宣と金阿弥の姿も見えていないはずだ。そのことを確認して、金阿弥は義宣にびったりと寄り添った。

「殿」

「どうした？」

「私は、殿とお会いすることができて、本当に嬉しいと思っています。殿のお側にいられて、嬉しいのです」

義宣が朝鮮に渡って、もしものがあつたら、と思うと、金阿弥は自分の思いを義宣に伝えておかなければならないと思った。だから、日ごろ思っている自分の気持ちを、真心をこめて口にしたつもりなのだが、義宣は驚いた顔をした。もしかしたら、こんなことを言うのは失礼だっただろうか。

「それは、俺がこの海のように珍しいものをお前に見せたり、お前の興味を引く話を聞かせたりするからか？」

「違います。それは、それも嬉しいですけど、そうではないのです」「では、何だ？」

義宣に問われて、金阿弥は言葉に詰まった。この気持ちをうまく伝える言葉が見つからない。いろいろな言葉を頭に浮かべてみるのだが、どれもしくりこないのだ。

「あの、殿は違うのです。今まで出会った誰とも、殿は違います」

「どう違うんだ？」

「うまく言うことができないので、子どもの言うこととお笑いになつて構いません。ただ、殿とお会いすることができて嬉しい。その気持ちばかりなのです。誰に対する気持ちとも違います」

そつだ、義宣はほかの誰とも違う。この気持ちをどう表現すればいいのだろう。義宣と会えてよかった。誰にも、こんな気持ちを抱いたことはない。それをうまく伝えられなくてもどかしい。

「金阿」

俯いていると、頭上から義宣の声が聞こえた。顔を上げようとしたのだが、一瞬で義宣に抱き上げられていた。義宣の顔が目の前に

ある。なんだか恥ずかしかった。

「ありがとう、嬉しいよ」

真剣な眼差しで見つめられ、恥ずかしかったが、それ以上に嬉しくて義宣に抱きついた。義宣が笑った気配がした。

「殿」

「ん？」

「お慕いしております」

この言葉は事実だが、金阿弥の気持ちを表すには少し違う気がする。それでも、言葉にして義宣に伝えたかったから、口にした。

「俺のことが好きか？」

「大好きです」

素直に思ったままを口にしたら、義宣に強く抱きしめられた。その腕の温もりが嬉しかった。心地よかった。

耳元で小さな声がした。とても小さな声だったが、金阿弥にはしつかり聞こえた。

俺も金阿弥が好きだよ。

この日を、この言葉を、絶対に忘れないと金阿弥は強く思った。



## 無垢の子ども（六）

年が明けても、佐竹家に渡海の命は下されなかった。昨年は来春渡海の予定だと聞かされていたが、特にその沙汰はなかった。ただひたすら、名護屋の秀吉の茶会や蹴鞠、狂言などに付き合うばかりだ。この陣中の様子を知ったら、渡海した諸将は何と思うだろうか。このまま渡海せずに済むのだろうか、と義宣は思っていたが、六月に入って義久たちを渡海させることになった。だが、義久たちは戦をすることなく帰ってきた。金阿弥は義宣も渡海しなければならなくなるのではないか、と心配していたようだが、結局義宣は一度も渡海することなく、八月に秀吉が大坂へ戻ったのに合わせて名護屋を発った。

朝鮮へ渡っている諸将へは悪いが、これでしばらくは渡海の心配はない。金阿弥も安心しただろうと思ったが、名護屋を発つ頃から金阿弥は少し元気がないようだった。もう渡海の心配をしなくてもいいのだと言い聞かせると、安心したように笑ったのだが、やはり元気がない。

「金阿、どうかしたのか？」

「あ、いえ、何でもありません」

長く名護屋にいたせいで体調を崩したのか、それとも何か不安でもあるのか。元気がない金阿弥が心配だったので、二人きりで話を聞こうと思った。だが、金阿弥は何でもない、と言う。何でもないはずがない。

「元気がない。何でもないはずないだろう？俺には話したくないのか？」

「いいえ、そんなことはありません」

必死に首を振る金阿弥が可愛らしくて、思わず笑みが漏れてしまう。相手は十三の子どもだというのに。

迷うように視線をさまよわせた後、金阿弥はおずおずと義宣の顔

を見上げてきた。その目は不安そうだった。

「母の命日が近いのです」

予想外の金阿弥の言葉に義宣は驚いた。まさか金阿弥の元気がない理由が、母親の命日が近いことだとは思わなかった。それに、義宣は金阿弥の母親がすでに死んでいることを知らなかった。今頃が母の命日だというのなら、昨年も一昨年もこの頃は、金阿弥は義宣のもとにいたはずだ。渡海の噂のせいで、金阿弥を気遣う余裕が今まではなかった。だから、気づかなかったのだ。

「子どもだと笑われても構わないのです。自分でも、十三にもなつていまだに母の命日が近くなると気落ちするなど、おかしいと思います」

「おかしいとは思わない」

寂しそくに苦笑する金阿弥の手を握ると、金阿弥は驚きに目を見開いた。手を強く握りしめても、驚いているせいか金阿弥は義宣の手を握り返さなかった。

「お前がよければ、話してくれないか」

「え？」

「お前と母親の話だ」

なぜ金阿弥が母親の命日が近付くと気落ちするのか。なぜ母親にこだわるのか。子どもだから、と言ってしまえば片付くかもしれないが、義宣はそれを知りたかった。金阿弥は再びためらうように視線を彷徨わせたが、しばらくして口を開いた。

「母が亡くなったのは、私が五つのときでした」

「五つ。そんなに幼いときに母を亡くしていたのか」

「はい。だから、母のことを私は覚えていないのです。どんな顔だったか、どんな声だったか、全くと言っていいほど分からないのです。たまに、父や兄たちが母の話をして、私には全く分かりません」

「そうか」

「だからだと思っんです。だから、母の命日が近付くと、今でも元

気がなくなります。もう昔の話なのに。覚えてもいない母のことを、思ってしまうんです。すみません、こんな話」

義宣に手を握られたまま金阿弥は俯いた。母親の話をさせたら、ますます元気がなくなってしまうたように見えた。そんな金阿弥の姿を見ていると堪らなくなつて、握った手を引いて抱きしめた。

「殿？」

「寂しかったんだな」

義宣がぼつりと呟くと、腕の中で金阿弥がびくりと肩を震わせた。じつと目を見つめると、小さく首を振った。

「そんな、私には父も兄もいて、とても優しくて、だから、寂しいなんて、そんな」

「本当は、寂しかったんだらう？」

重ねて問うと、金阿弥の目にじわじわと涙が浮かんできた。いっぱいにたまつた涙が、瞬きをした瞬間に零れ落ちる。頬を伝う涙を拭つてやると、金阿弥は義宣の首にひしと抱きついてきた。

「寂しかった」

小さな声は震えていた。その声は消え入るように小さかったが、金阿弥の寂しさは痛いくらいに伝わってきた。

「みんな母上のことを知っているのに、私だけ知らなくて、母上に愛された記憶もなくて、父上も兄上たちも優しくなかったけれど、本当は、ずっとずっと寂しかった」

金阿弥の涙が義宣の肩に染み込んでいく。肩に顔を埋めて静かに涙を流す金阿弥の背を、慰めるように撫でた。

「俺もだよ」

義宣の呟きに金阿弥が顔を上げた。涙に濡れた目と視線がぶつかり、義宣はかすかに苦笑を浮かべた。

「俺も、ずっと寂しかった」

「けれど、殿にはお母上様が」

「母上か」

鼻をすする金阿弥の顔を、再び肩に埋めさせて頭を撫でた。金阿

弥の目にじつと見つめられると、心が痛む。確かに、母を亡くした金阿弥にしてみれば、義宣の言う寂しさは違うのかもしれない。だが、義宣もずっと寂しかった。金阿弥の中に、自分と同じ寂しさを見た気がしたのだ。

「愛されなければ、同じだろう」

独り言のように呟いた義宣の言葉が、金阿弥に聞こえたかは分からない。ただ、義宣は金阿弥を強く抱きしめた。金阿弥もぎゅっと義宣に抱きついてくる。

「金阿」

「はい」

「まだ、寂しいか？」

「殿がいらっしゃるから、寂しくないです」

金阿弥は更にきつく抱きついてきた。抱きつくというよりも、首にすがりつかれているようだ。だが、これは照れているのだ。そのくらいは分かる。金阿弥以外の言葉なら、義宣がいるから寂しくない、ということ信じられないだろう。金阿弥は違う。金阿弥ならば信じられる。

ずっと側に置いてきたのだ。金阿弥は義宣だけを見ている。

「俺も寂しくないよ、お前がいるから」

大人と子どもが抱き合って、互いに寂しくないと言い合う姿は滑稽なように思えたが、なぜか自分たちには似合いの姿のような気がした。

寂しいと泣いて義宣にすがり、今は照れて顔を隠す金阿弥が愛しくて、腕の力をゆるめて顔を上げさせた。金阿弥の目は初めて会った頃と変わらずに澄んでいて、他人に暴かれたくない心の奥底まで見透かされるような気がした。金阿弥の目に映る自分は、醜い大人だ。

いたたまれなくなつて、金阿弥の目を手で塞いだ。そして、そつと金阿弥に口づけた。

## 無垢の子ども（七）（前書き）

男性同士の性的な表現があります。苦手な方はご注意ください。

## 無垢の子ども（七）

鹿島六万石。かしま加藤清正が秀吉に贈った朝鮮土産の手水鉢。かとうきよまさで

それが、秀吉から義久が与えられたものだ。名護屋から戻り、大坂城へ秀吉のご機嫌伺いに出向いたら、いきなり秀吉からそのことを告げられた。驚きという言葉では表現できない衝撃だった。

秀吉が義久に鹿島六万石を与えるということは、義久が大名になるということだ。石高が違っただけで、義久は義宣と何ら変わらない。もはや義久は秀吉にとって陪臣ばいしんではないのだ。上杉家うえすぎにおける直江兼続かねつぐと同じだ。兼続は秀吉から直々に領地を与えられている。だが、義久は兼続とは違う。義久は佐竹義久だ。義久には佐竹家の血が流れている。義久がその気になれば、義宣を引きずり降ろして宗家の当主になることもできる。

義久は義宣よりも才覚がある。義宣より年を重ねているからではない。本当に、持って生まれたものが違うのだ。見ていれば分かる。義宣は遠く及ばない。このことは、家中の誰もが分かっていることだ。だから、一門、譜代の連中は義宣を若い当主と侮っている。

義久の名が高まるにつれて、自分はお飾りの当主にすぎないのだという気持ちが強くなっていった。陪臣だった義久でさえ、秀吉に羽柴姓をもらえるのだ。そして、今は秀吉の家臣となった。義宣が必ず佐竹家の当主でなければならぬ理由などないのではないか。義久が佐竹家の当主でも全く問題はないに違いない。

一門の筆頭で、譜代連中も義久を信頼している。一門、譜代の象徴のようだ。当の義久は、本当は一門や譜代の味方だというのに、分別顔をして中立の立場を取っているように見せている。義久にますます信頼が集まった。今回も、義久は秀吉に大名として取りたてられたにも関わらず、自分は佐竹家の家臣であることに変わりはないと言っている。

自分が立っている場所を、土台から揺さぶられているような気が

した。腹立たしかった。一門や譜代の連中も、義久も腹立たしかった。

だが、それだけではないのだ。義久は命に従って朝鮮へ渡り、その褒美として秀吉から手水鉢を贈られた。六万石の大名に取り立てられた。

朝鮮へ渡ったのは義久で、義宣ではない。その義久に褒美が与えられるのは当然のことだろう。それに対してどうこう思う義宣のほうがおかしいのだ。それは分かっている。だが、なぜ義久なのだ。なぜ義久は秀吉に六万石を与えられるのだ。まるで、義久は義宣から独立したもう一つの佐竹家のようなのだ。いずれ、義宣の地位さえ奪ってしまうような気がした。

義宣から佐竹家を取ったら、何が残るのだろうか。何も残りはしないだろう。家臣たちは、みな佐竹家に仕えているのだ。浪人出身の家臣たちは、義宣が当主でなくなったら、また浪人して新たな仕官先を探すのだろう。何も当主は義宣でなくてもいいのだ。むしろ、信頼されている義久の方が相応しいのではないか。そんな考えすら浮かんでくる。

義久という人間は、義宣の存在を根底から揺るがしている。

昔、母の命に従って政宗を逃がしたのは義久だ。今度は、義宣の地位を脅かすというのか。

そんな事態はありえないと思いつつも、もしかしたら、という思いもある。もしもそうなった時、義宣を見捨てずにいてくれる存在などいるのだろうか。

ひとりだけ、思い浮かんだ。そのためにそばに置き続けてきたようなものだ。義宣だけを見つめ、義宣にだけ忠誠を誓う存在。ただひたすら、一途に義宣に思いを寄せる存在。

もう、金阿弥しかいないと思った。壊れていきそうな危うい均衡を保つためには、金阿弥しかいない。

全て自分のものにしてしまいたかった。義宣だけの金阿弥でいてほしかった。金阿弥だけだ。

大坂城から屋敷へ戻り、すぐに金阿弥を控えさせておいた部屋へ向かった。荒々しく襖を開くと、金阿弥が驚いて振り向いた。だが、義宣の姿を見ると嬉しそうに口許に笑みを浮かべた。誰も信じられない。もう、義宣にはこの幼い子どもだけだ。

肩を掴んで畳の上に金阿弥を押し倒した。金阿弥の喉から息が漏れる音がした。小さな体の上に馬乗りになって、手首を押さえた。これで、金阿弥は義宣から逃げられない。

金阿弥の顔が強張った。突然のことに驚いているのか。そうではない。目が怯えていた。一心に義宣を見つめてくる目が、不安と恐怖に揺れている。

それが苛立たしかった。怖かった。金阿弥にまで拒絶されてしまったら、どうすればいいのだろうか。

「金阿」

名を呼ぶと、金阿弥がびくりと肩を震わせた。体が硬くなっているのが分かる。その金阿弥の唇に口づけた。唇を舌で割ると、きつく食いしばった歯列にぶつかった。その食いしばられた歯が、義宣に対する金阿弥の拒絶のようで、怖かった。歯列を舌でなぞっても、金阿弥はますますきつく食いしばるだけだった。

唇を離すと、ほっとしたのか金阿弥は口を開いて息を吸った。その隙について、義宣は再び口づけた。金阿弥の口内に舌を侵入させる。舌と舌が触れあった瞬間、金阿弥の舌は逃げるように奥へ引込んだ。だが、その舌を追いかけて、からめとり、逃げることは許さなかった。

息苦しいのか、金阿弥は義宣の腕を振りほどこうと必死にもがいた。だが、手首を押さえつけられているせいで満足な抵抗はできなかった。

金阿弥を接吻から解放すると、息を吸った拍子に唾液を呑み込みきれなかったのか、むせていた。閉じられた金阿弥の目から涙が流れ落ちた。一筋涙が流れると、堰を切ったように金阿弥はぼろぼろと泣きじゃくった。



「泣くな」

涙を拭おうと金阿弥の顔に手を伸ばすと、拒絶するように顔を背けられた。初めてだ。初めて、金阿弥に拒絶された。冷たい何かが胸の中へ流れ込んでくるようだった。傷が膿んで、じくじくと痛むようでもあった。

怯える金阿弥の肩をきつく掴んだ。金阿弥は身じろいだが、金阿弥を氣遣ってやる余裕などなかった。氣遣うつもりもなかった。

「俺が怖いかな？」

金阿弥は目を瞑ったまま答えようとしなかった。そのことに、胸の痛みが増した。苛立った。

「俺に触れられるのは嫌かな？泣くほど嫌なのか？泣くほど俺が怖いのか、金阿弥」

何か言おうとしたのか、金阿弥の口が開かれた。だが、その口から漏れたのは嗚咽だけだった。そんなにも義宣のことが恐ろしいのか。思わず肩を掴む手に力がこもった。

「お前は、俺を好きだと言ったよな？俺を慕っていると言ったよな？俺に会えてよかったと。俺はほかの誰とも違うと。それは嘘か？俺のことを好きなんじゃなかったのか？」

「好き、です。お、お慕いしています」

震える声。だが、その声は嘘には聞こえなかった。今まで何度も聞いてきたこの言葉を信じたかった。

「なら、目を開ける」

思った以上にきつい口調で命令してしまったせいか、金阿弥は更にきつく目を瞑った。

「目を開ける、金阿弥。俺を見る。俺を見るんだ。俺だけを見る」  
義宣を見てほしい。曇りのない純粹な眼差しで、義宣だけを見つめてほしい。頼みこむように、縋るように、義宣は金阿弥の肩を揺さぶった。

涙に濡れた目が開かれる。その目は、まだ怯えてはいいたが、その奥底に義宣を信じて縋る光が見えたような気がした。それが嬉しか

った。金阿弥だけは、義宣を見捨てずにいてくれる。

「泣いて、いるのですか？」

予想外の金阿弥の言葉に、義宣は何を言われているのか一瞬分からなくなった。泣いてなどいない。泣いているのは、金阿弥だ。ただ、胸が痛んで仕方がない。

「いいや、痛いんだ」

「痛い？」

「ああ、痛いよ」

心配してくれたのか、金阿弥はそつと義宣の頬に触れた。義宣は金阿弥にひどいことをしているはずなのに、その優しさがあたたかくて、かえって胸が痛んだ。

堪らなくなつて、義宣は金阿弥を抱きしめた。骨が軋むほど強く、腕に掻き抱いた。

「金阿、俺が好きなんだろう？なら、俺を拒むな。拒むことは許さない」

腕の力を緩めて金阿弥の鎖骨の辺りを吸い上げた。赤い跡がそこに残った。金阿弥は義宣のものだという証のようだ。

薄暗い満足感が、胸の痛みを和らげた。

## 無垢の子ども（八）（前書き）

男性同士の性的な表現があります。苦手な方はご注意ください。

## 無垢の子ども（八）

怖かった。ただひたすら怖かった。

唐突に現れた義宣にきつく抱きしめられたと思ったら、視界が反転していた。目には確かに天井が映っているはずだが、覆いかぶさる義宣しか金阿弥には見えなかった。その義宣の顔も影になって、よく見えない。それが余計に金阿弥の恐怖心を煽った。

なぜ、こんなことになっているのだろう。名護屋から無事に大坂へ帰ってきて、義宣は秀吉のもとへ挨拶をしに出かけた。それだけのはずなのに、帰ってきた義宣はなぜ金阿弥にこんなことをするのだろう。

名護屋からの帰り、母が恋しいと泣いた金阿弥を優しく抱きしめてくれたのは、最近のことではないか。あの義宣が、何をしようとしているのだろうか。

口づけられて、息ができなくて苦しい。怖い。いつもの義宣ではないようだ。

俺が怖いか、と問われる。

確かに今の義宣は怖い。だが、いつもの義宣を知っているから怖くないとも言えるような気がする。義宣が、金阿弥に酷いことをするはずがない。今まで二年以上そばにいて、そのくらいのことは分かっているつもりだ。だから、怖いが怖くはない。

俺を好きだと言ったよな、と言われた。その声は金阿弥を詰っているようだった。

今まで口にしてきたこの言葉を疑われるのは、とても悲しくて、震える声で義宣が好きだと訴える。真心をこめて言っただけだ。義宣が好きだ。その言葉に偽りはない。今までも、今も、何も変わりはしない。

目を開けるように言われて目を開けると、涙で視界がぼやけるせいか、義宣は泣いているように見えた。それが不思議だったが、何

だか胸が痛んだ。

俺を拒むな、俺だけを見ろ、と繰り返す義宣に鎖骨の辺りを吸われた。少し痛かった。胸をはだけられ、手を這わされ、思わず悲鳴のような声をあげてしまった。それでも、義宣の手の動きは止まらなかった。

着物を全て剥ぎ取られ、体を重ねられ、揺さぶられながら、金阿弥の意識は朦朧として闇に吞まれていった。

かすかに射しこむ朝日を感じ、目を開けると、霞む視界の中に義宣の背中が見えた。何か書きものでもしているのか、手を動かしている。

次第に覚醒していく意識の中、金阿弥は昨夜義宣にされた行為のひとつひとつを思い出していた。思い出すつもりなどなかったのだが、意識せずとも脳裏に浮かんできてくる。何度も嫌だ、やめてほしい、と頼んだのに、義宣は離してくれなかった。いつもの義宣ではないようで怖かった。

だが、義宣よりも行為そのものの方が怖かった。不安だった。痛かった。行為の痕跡は、ところどころに見える痣のような跡だけだが、痛みはまだ残っていて、体が軋むようだった。

今の義宣は、背中しか見えないがいつもの義宣のように見える。安心して、ほっと息をつくとき、義宣が振り向いた。その顔は、昨夜見た顔ではなく、いつもの義宣の顔だった。よかった、と安心するとともに、なぜか義宣を見ていられなくなり、金阿弥は布団の中に隠れた。

「金阿」

優しい声で名を呼ばれ、布団をめくられた。義宣は微笑んで金阿弥の頭を撫でてきた。その手があたたかくて、甘えるように目を瞑った。

「喉が渴いてはいないか？白湯でも飲むか？」

こくり、と頷くと既に用意がされていたのか、白湯が入れられた湯呑が差し出された。体を起こそうとすると、義宣が手を添えて支えてくれた。差し出された白湯を飲む金阿弥の様子を、義宣はずっと見ている。義宣に見られていると、何だか恥ずかしい。

義宣に見られていると、昨夜のことを思い出してしまふ。今思えば、あの行為は以前に父から見せられた、男女の閨での秘戯を描いた枕絵と同じだったのだろう。赤面して目を逸らそうとした金阿弥に無理やり枕絵を見せて、父は男同士でもできることだと言っていた。

だが、あくまでも絵を見ただけのことと、何も知らなかったのだ。ただ、昨夜のことが見せられた枕絵と同じことだということは察しがついた。

たまらなく怖くて、不安で、思い出すと羞恥でいたたまれなくなる。父は、思いを寄せあう者同士のする行為だと言っていたが、義宣はなぜ金阿弥にあのようなことをしたのだろうか。義宣は金阿弥の主で、金阿弥はただの同朋に過ぎないというのに。

ただ、ほかの家臣たちと比べると、どうやら自分は目をかけられているらしい、ということは譜代の子弟たちからいじめられたことによつて分かつてはいた。それに、今までそばに置いてもらっていて、義宣が金阿弥にとても優しくしてくれていることは、誰に言われずともよく分かつている。金阿弥が義宣を好きだと言ったとき、義宣も金阿弥を好きだと言ってくれてもいる。それがとても嬉しかった。

それでも、義宣と金阿弥はあくまでも主従のはずだ。確か、小姓の中にはこのようなことを務めるものもいると聞いてはいるが、もしかしたら同朋も同じだったのかもしれない。父が言いたかったのは、そういうことだったのだろう。

金阿弥が白湯を飲む間、義宣は、体の具合は大丈夫か、気持ち悪くはないか、と金阿弥の体調を気遣ってくれた。その声はいつにな

く優しい。思わず甘えたくなくなってしまっ

「殿」

「何だ？」

「昨夜のことなのですが」

ちらりと義宣の顔を見ると、義宣は少し気まずそうな顔をした。なぜ、そんな顔をするのだろうか。

「なぜ、あのようなことをなさったのですか？」

「なぜ、か」

一瞬黙り込んだ後、義宣は金阿弥を抱えて膝の上にのせた。突然のことに驚いて、義宣の肩をぎゅっと掴んでしまった。

「お前は、俺のことが好きだろう？」

「好き？」

「ああ。金阿は、俺のことが好きなんだろう？」

なぜ、こんなことを聞かれているのだろうか。金阿弥は昨夜の行為の理由を聞いていたはずなのだが、義宣に問いで返されてしまった。そういうえば、昨夜もこんなことを聞かれた。そのことを疑問に思ったから、なかなか答えられずにいると、義宣の表情が曇った。

「俺のことを、嫌いになったか？お前に怖い思いも、痛い思いもさせたのだから、仕方がないか」

「いいえ、嫌いにはなりません」

確かに昨夜の行為は痛かったし、怖かった。それでも、やはり義宣は義宣だから、嫌いになるはずがない。

「好きです」

義宣の目を見つめ、好きだと言うと、義宣は安心したように微笑んだ。

「だからだ。俺も、金阿のことが好きだからだよ」

好き。好き、とはどのような意味だろうか。金阿弥が義宣を慕う気持ちと同じなのだろうか。以前、名護屋で言われた意味と同じだろうか。父に見せられた枕絵の男女が抱いているような気持ちだろうか。分かるような気もするし、分からないような気もする。ただ、

金阿弥と義宣は主従なのだから、枕絵の男女とは違う気がするのだ。  
「だが、すまなかったな。無理を強いてしまった」

謝罪の言葉を口にして、義宣は膝の上にのせた金阿弥を優しく抱きしめてくれた。背を撫でながら、すまなかった、ともう一度耳元で囁かれ、顔を上げると、そっと口づけられた。昨夜のような恐怖はない。少しくすぐつたいような口づけだった。

「俺にはお前だけだよ、金阿。お前だけだ」

「はい、殿」

義宣の真意はよく分からなかったが、金阿弥は義宣が好きで、義宣もそうだから、昨夜の行為に及んだのだと言われて、そういうもののなのかもしれない、と金阿弥は思った。

お前だけ、という言葉の意味も、どう捉えるべきなのか分からなかったが、金阿弥は義宣を誰とも違う特別な存在だと思うのだから、それと同じかもしれない。そうだいいな、と思いつつ、はい、と頷いた。



## 無垢の子ども（九）

金阿弥を初めて抱いた日から一年近く経った。これまで以上に義宣は金阿弥を離さなくなつた。その一年の間に義宣は、名護屋出陣で遅れていた水戸城みとじょうの修築を行つたり、秀吉の命で伏見城ふしみじょうの普請を行つたり、忙しい日々を送つていた。

もちろん、一門や譜代の連中から義宣の寵を受けていることを理由に、金阿弥がいじめられないように配慮はしている。ただでさえ、浪人出身だ、尻奉公で気に入られているのだ、と言われているのだ。連中の言う尻奉公とは違うが、実際に金阿弥が義宣のお手つきだと知られたら、金阿弥に対する風当たりはますます酷くなるに決まっている。

それに、金阿弥を側に置くのは何も可愛がるためだけではない。もともと神童と評判の金阿弥だったが、成長するにつれてその才には磨きがかかり、特に金山や財政のことには子どもとは思えないほどの能力を見せている。同じ浪人出身で義宣が重く用いている向むか右かう近宣政こんのぶまさや渋江内膳政光しぶえないぜんまさみつ、兄の梅津半右衛門憲忠つめつはんえもんりただとともに使つても遜色はないほどだ。だから、義宣は金阿弥を側に置いて離さなかつた。金阿弥の義宣に対する思いは成長しても変わらず真つ直ぐだった。

ただ、最近は昔のように可愛がられるのが恥ずかしくなつてきたのか、抱きあげようとすると嫌がられるようになった。だが本気で嫌がつていないことくらい顔を見れば分かる。素直ではなくなつてきたが、閨事には慣れてきたようで、初めのころのように泣かれることも、嫌がられることもなくなつた。

純粋な子どもをこの手で汚した。それでも金阿弥の本質は変わらず、一途に義宣を見つめてくれている。それが嬉しかった。

諸将が朝鮮出兵で疲弊している中、義宣は伏見城の普請に追われながらも、まだ平穏な日々を過ごしていた。だが、伏見の佐竹屋敷で事件が起きた。近習の宣政が血相を変えて義宣のもとへやって来

た時、義宣はちょうど金阿弥とともにいるところだった。宣政は、金阿弥の姿を見た瞬間、気の毒そうな顔をしたが、その理由が義宣には分からなかった。宣政は、金阿弥に対して息子を可愛がるように友好的だったはずだが、どうしたのだろうか。

「殿、まことに申し上げにくいのですが、半右衛門がお屋敷の中で喧嘩沙汰を起しました」

「半右衛門が、喧嘩だと？」

金阿弥の顔が、驚きと恐怖で強張るのが分かる。憲忠は金阿弥の兄だ。兄が喧嘩沙汰を起したと聞けば、恐ろしくもなるだろう。喧嘩を起こした者は、どちらも成敗するというのがならわしだ。

「それで、相手は誰だ、右近？」

「は、はあ。それが、御一門に連なる真崎家の嫡男、孫三です」  
「真崎だと？ 厄介な」

真崎家は宣政の言うとおり、佐竹家の一門だった。佐竹家五代義重までさかのぼることになるが、その五代義重の三男義澄の子の義連が真崎家の祖にあたる。孫三の家はその真崎家の中で分家にあたる家系だった。だが、一門であることに変わりはない。

一方、憲忠は義宣がここ数年で召し抱えた新参者だ。しかも、浪人出身だった。金阿弥の父親でもある憲忠の父親の道金（どしきん）は、もともと伊達家臣の家に生まれたが、幼いころに兵乱に遭遇し、それ以降は叔父の僧のもとで世話になったのだそうだ。その後、宇都宮家の家臣に仕え、そこで憲忠と金阿弥が生まれた。だが、道金は浪人して常陸へ流れてきた。そして、息子たちを佐竹家に出仕させたのだ。憲忠は、もともと義宣の幼なじみでもある一門衆の北義憲（きたよしのり）に仕えていたが、義宣が義憲に頼んで宗家へ出仕させた。義憲のもとで働く憲忠の姿を見て、宗家で自分の側近として働かせたいと思ったのだ。

その憲忠と真崎孫三の喧嘩と言うのだから、理由は聞かずとも分かる。一門、譜代は新参者が義宣の側近として働くことを快く思っていないかつし、新参者は自分たちを蔑む一門、譜代が疎ましかっ

た。その水面下での争いが、ついに表面化してしまったのだ。

「厄介なのは、相手だけではないのです」

「喧嘩、新参と一門の争い、これ以上に面倒なことがあるのか？」

「孫三は、半右衛門に殺されています」

「何だと」

義宣の声に、金阿弥はびくりと震えた。思っていたよりも、大きな声が出てしまったらしい。だが、それほどまでに義宣も衝撃を受けたのだ。ただの喧嘩ならまだしも、憲忠が孫三を殺したとは。

「右近、すぐに半右衛門を連れてこい。半右衛門は、今どうしているのだ？」

「半右衛門は、内膳が捕らえています。すぐに、連れて来させましょう」

慌てて出ていく右近の姿が見えなくなると、義宣はため息をついた。金阿弥は幼い瞳に涙を浮かべて、義宣を見上げている。

「殿、兄が取り返しのつかないことをいたしました。申し訳ありません」

「いや、金阿弥が謝ることではない」

「あの、兄は、これからどうなるのでしょうか？」

「喧嘩は両成敗と決まっている」

「そうですよね」

本当は、義宣に兄を助けてほしいと言いたいのだろうが、金阿弥は黙ってうつむいただけだった。兄の今後に心を痛める様子を見ると、そのいじらしさに義宣も心が痛む。だが、義宣の思考は怒声によって断たれてしまった。

「お屋形様、梅津半右衛門と真崎孫三の件、お耳に入りましたか」

義宣のもとにやって来たのは、一門と譜代の連中だった。誰もが半右衛門の起こした事件に怒りが頂点に達しているのが分かる。

「半右衛門を真崎家にお渡しただけですか？」

「それは無理だ。俺は、まだ半右衛門から何も聞いていない。俺が話を聞き終えるまで、半右衛門の身柄は俺が拘束する」

「話など簡単なことですぞ。半右衛門が孫三を殺した。それだけではありませんか」

「だから、なぜ半右衛門が孫三と喧嘩になったのかを知らなければならぬのだ。半右衛門は一方的に孫三を殺害したのではなく、喧嘩の結果として孫三が死んだのだろうか？」

「半右衛門が孫三を殺したという事実に変わりはありませんまい」

「まこと、新参者が一門に刃を向けるとは、何を考えているのか」

「これだから、某どもは新参者に対して、これまで苦い顔をしてきたのだ。お屋形様、此度の件でお分かりになったでしょう。新参者の増長は捨て置けぬ」

「喧嘩両成敗に則り、半右衛門に死を命じられるべきですな。切腹など、某どもは認めませぬ。あの者には斬首がふさわしい」

いきり立つ一門、譜代連中は、矢継ぎ早に半右衛門や新参者に対する不平不満を口にした。だが、それは新参者を重用する義宣に対する不満でもあった。一門や譜代のこういうところが嫌なのだと、義宣は言ってやりたかったが、黙って連中の話を聞いていた。

「とにかく、半右衛門は俺の家臣だ。孫三もそれに変わりはない。俺が今後どうするべきか決める。今は、お前たちは下がっている」「きつく罰せられることを、我々は願っております」

一門、譜代連中は、去り際に金阿弥の姿を見つけ、睨みつけてから去って行った。連中の言いたいことも分かる。喧嘩の結果、死人が出たのだから、いきり立つのも無理はない。だが、連中の怒りのおかげで、義宣はかえって冷静になれた。義宣も半右衛門に対して怒りは感じたが、連中の相手をしていたら、怒る機会を逸してしまっただった。

「殿、右近です。内膳と半右衛門を連れてまいりました」

宣政に連れられて入って来た政光と憲忠は、二人とも血に塗れていた。憲忠の血は、孫三の返り血だろう。政光は憲忠を取り押さえようとして、その血がついただけだ。憲忠は自分の行いを悔いているのか、義宣の前に出ると、すぐさま両手について平伏した。

「まことに申し訳ないことをいたしました。殿に目をかけていただいていたというのに、恩を仇で返す始末。切腹でも斬首でも、某は謹んでお受けいたします」

「まあ、待て、半右衛門。確かに喧嘩は両成敗。お前には死をもつて償ってもらふことになるが、その前に事情を説明しろ」

憲忠は義宣の言葉に、ただ深々と頭を下げるばかりで、喧嘩の成り行きを説明しようとしなかった。説明する気がないのでなく、ことの深刻さに言葉が出て来ないのだろう。憲忠の隣に座っていた政光が、憲忠の代わりに口を開いた。

「私が代わりにご説明いたします」

「ああ、頼む、内膳」

「半右衛門と孫三は、お屋敷の廊下ですれ違おうとしたところ、互いに肩をぶつけてしまったようです。孫三は、新参者が廊下の端に寄らないのは、一門に対する侮辱だと怒り、半右衛門に土下座をして謝れと要求したそうです。半右衛門は、土下座をしろと言われる筋合いはない、とそのまま無視をしようとしたのですが、孫三はしつこく絡み、そこで喧嘩となりました。ここまでは半右衛門から聞いた話で、ここからは私が実際に見たのですが、孫三は刀を抜いて半右衛門に斬りかかり、かえって半右衛門に斬られ、命を落としたのです」

「そこで、内膳が止めに入ったのか？」

「私が止めに入ろうとした時には、すでに遅く、半右衛門の刀は振り下ろされた後でした」

やはり、義宣の思ったとおり、一門と譜代と新参者との軋轢の結果がもたらした喧嘩だった。どちらが悪いと断定することはできない。ここで憲忠の罪を認めなければ、今後新参者はますます白い目で見られることは明らかだった。一門、譜代の義宣に対する目も厳しさを増すだろう。

「事情は分かった。だが、喧嘩両成敗の掟を破ることはできない。半右衛門は、明日にでも切腹を命じることになるだろう」

「殿、兄に死を命じられるのならば、私ももう殿のおそばにはいられません。私もお家から追放としてください」

「金阿弥は事件に関係がないだろう？」

金阿弥は涙ながらに義宣に訴えたが、憲忠と金阿弥は兄弟とはいえ別の人間だ。憲忠の問題と金阿弥は関係がない。だが、義宣の寵愛を笠に着て、自分を愛しく思うならば兄を助けてほしい、と言えることもできるのに、そうしようにしない金阿弥に義宣は心が動かされた。

「殿、どうしても半右衛門は切腹でしょうか？」

「ああ。一門や譜代の連中は、真崎家に半右衛門を引き渡せ、斬首にしろ、とうるさい。切腹は、俺の譲歩の結果だ」

「しかし、半右衛門を切腹とすると、殿はますます一門や譜代の方々に縛られるではありませんか？半右衛門は、殺さぬ方が良く考えます」

「何だと？」

政光は義宣をまつすぐに見つめて、半右衛門は殺さない方が良く言いきった。政光は、金阿弥と同じく人見藤道の推挙で義宣に仕えるようになった者だ。もとは下野の小山家の族臣の家系に生まれ、小山家が滅亡した後は父親に従い各地を流浪し、常陸にやってきた。もとの名を荒川弥五郎あらかわやしろごろうと言ったが、同じく小山家の家臣で小山家中では名族だった渋江氏光も常陸で義宣に仕えており、政光は氏光の養子となつて渋江内膳政光になったのだった。政光も、憲忠や金阿弥と同じ新参者の浪人出身だ。

「殿は、一門や譜代の方々の家柄に縛られた考えがお嫌いで、私どものような新参者を重用なさったはずです。しかし、ここで彼らの要求を入れて半右衛門を殺してしまえば、せっかくここまで新参者を重用なさってきた殿のお考えは、振り出しに戻ってしまうのではないのでしょうか？一門、譜代の方は増長し、古い考えに縛られてしまふのではないかと、私は危惧しているのです。時勢を理解できない者の言葉は危険です」

義宣は新しい考えや能力を持った者たちをそばに置き、家中の改革ができないものかと思っていた。そのための新参者の登用だったのだから、政光の言うことは一理ある。もっとも、これは政光が自分の現在の立場を守るための発言でもあるが、このくらいのふてぶてしさがなければ、一門や譜代を相手にこれから出世していくことは難しいだろう。政光の賢さに、義宣は思わず口許に笑みを浮かべてしまった。

「分かった。内膳の言うことはもっともだ。俺としても、実のところ半右衛門を失うのは痛い」

「殿、まことですか？」

金阿弥の顔がぱつと明るくなった。憲忠は優秀な人材だ。失うのは義宣にとって痛手ではあるが、金阿弥に悲しい思いをさせたくないという気持ちも多少はある。

「半右衛門、俺はこれから又七郎にあてて書状を書く。お前は、常陸の又七郎のもとへ行け」  
またしちろう

「それは、某はどうなるということでしょう？御北様おきたさまのもとで、腹を切ればよいのでしょうか？」

「いや、又七郎に匿ってもらえ。俺の方で、お前は出奔したことにしてやる。ほとぼりが冷めた頃に、また呼び戻してやるから、今はとりあえず着替えてすぐに伏見を発て」

「あ、ありがとうございます。このご恩は、決して忘れません」

涙をこぼしながら、再度深々と頭を下げて憲忠は屋敷を去って行った。残された金阿弥は、兄の命が助かったことに涙し、政光は満足そうにしていた。宣政も、安堵の表情を浮かべている。

翌日、憲忠の脱走を聞いた一門や譜代の連中は、義宣のもとへやってきて文句を言ったが、義宣は知らぬの一点張りで通した。梅津家は憲忠の父の道金の代で断絶、憲忠の扶持は召し上げ、見つかり次第義宣のもとへ送り届けさせ、切腹させる、と約束を取り付けたことで、何とか納得させることができた。だが、義宣はこの約束を守る気などまったくなかった。

金阿弥や政光、宣政に対する風当たりも以前より厳しさを増したが、義宣は新参者をそばに置くことはやめなかった。しばらくして、常陸の義憲から書状が届いた。憲忠は深く反省し、義憲と父親の監督下で、日々写経と読書に励んでいるそうだ。

今回は憲忠の追放で事態は収まったが、いずれ古参と新参の争いには決着をつけなければならぬだろう。その時、佐竹家はどうなるのか、今のうちから対策を考えておかなければなるまい、と義宣は思った。



## 無垢の子ども（十）

憲忠が佐竹家から姿を消してしばらくすると、一門や譜代も憲忠と真崎孫三の喧嘩沙汰を話題にする者は少なくなっていた。だが、まだ憲忠を呼び戻すことはできない。最低でも、三年ほどは義憲に匿ってもらわなければならないだろう。

だが、金阿弥は兄が生きているだけで嬉しいようで、以前と変わらぬ明るさで義宣に接していたし、義宣に深い恩を感じているようだった。

年の瀬になると、母がしきりに義宣のもとへやって来るようになった。先の御台が死んで一月もしないうちに決められた許嫁の多賀谷の姫が、年が明ければ十三歳になる。母は姫が十三歳になったら正式に義宣と結婚させるつもりらしい。死者が出た悲しい事件を忘れるためには、めでたいことが必要だ、などと言ってくる。

姫は義宣の許嫁と決まってから、伏見屋敷にいる母のもとで暮らしていた。ちょうど今、義宣は秀吉の命で伏見に滞在していて、しばらく国許へ帰る予定はない。年が明けたら吉日を選んで祝言が行われることになった。

新しい妻は、もともと多賀谷家の人質として佐竹家に送られていた姫だ。人質の姫が当主の妻になる。おかしいことのように思えたが、その方がいいのかもしれない。もともとが人質の姫ならば、実家を何よりも大事にして手に負えない女ということはないはずだ。

年が明けて、義宣と多賀谷の姫は伏見屋敷で重臣たちに取り囲まれて祝言を行った。その席には、政光も宣政も出席していない。古参の誇りを傷つけないために、義宣は正月の席にも、新参者は決して出席させなかった。いくら能力が優れて、義宣に重用されていて、古参でなければ祝いの席には出席できないのだと見せつけることで、古参の連中を満足させようとしていた。

祝いの席に並んだ古参の重臣たちは、名門佐竹家の嫁が人質だっ

た多賀谷の姫であることが不服のようだった。宴の騒々しさの中、ひそかにかわされる不満が聞こえてきた。

宴が終わり、夜が更け、義宣と姫は褥が整えられた寢所で向かい合った。頭を下げる幼い少女を義宣は黙って見ていた。

やはり十三歳はただの少女だ。金阿弥を初めて抱いたとき、金阿弥も十三歳だったはずだが、少女である分当時の金阿弥よりももっと小さい。

以前、まだ姫が人質だったころ、太田城の人質を集めて置いておく棟で、この姫を見たことがあったはずだが、その時は人質の中の一人としか思っていなかったため、印象など覚えていない。もしかしたら言葉を交わしたこともあるかもしれないが、それも覚えていない。

この幼い妻のことを、何も知らないからこそ義宣は期待していた。ほんの少し、一握りの小さな期待を抱いていた。

金阿弥を側に置くようになって、子供特有の純粹さとひたむきさを知った。金阿弥は一途に義宣を慕ってくる。それは、金阿弥には義宣しかないからだ。

この姫も、何も知らない子供だ。義宣が妻として側に置いておけば、義宣を一途に慕うようになるかもしれない。もとが人質ならば、頼るべき相手は義宣だけだと思うようになるかもしれない。

それに、もしかしたら、そんなことをしなくても、自然と義宣を慕ってくれるようになるかもしれない。

そんな都合のいいことはない、と八割方思いながらも、心の片隅で、今度こそ、と期待をしていた。この姫は先の御台や母とは違うはずだ。

「姫、顔を上げろ」

「は、はい」

少し腰を曲げて、視線が同じ高さになるようにした。声もなるべく優しくかけたつもりだ。だが、はい、と返事をしたものの、姫はなかなか顔を上げようとしなかった。緊張しているのだろうか。

「姫」

もう一度声をかけると、姫は顔を上げず、逆にますます深く頭を下げた。

「た、多賀谷重経の娘、に、ございます」

たどたどしく、不自然に区切られた言葉で挨拶を述べる姫の声は、かすかに震えていた。その震える声に、義宣は眉をひそめた。

「それは分かっている。姫の名は、何という？」

今もなるべく優しく話しかけているつもりだが、姫は深く下げた頭をさらに下げた。褥に額がつくのではないだろうか。

「ごめんなさい。多賀谷重経の娘、り、琳<sup>りん</sup>、に、ごさい、ます」

多賀谷の姫、琳の声は、かすかな震えどころではなく、完全に震えていた。それどころか、涙声にも聞こえる。その声を聞いて、義宣は落胆した。

この状態では、夫婦として初夜を迎えることなど到底できそうにない。琳はこれから行われるはずの行為に怯えているのかもしれない。とりあえず、互いに顔を合わせるくらいはした方がいいだろう。と思い、琳の顔を上げさせようと肩に手をかけると、琳は大げさに肩を震わせた。

「う、ごめんなさい」

謝った瞬間に顔を上げた琳の目には、涙がいつぱいに溜まっていた。それは、義宣への恐怖と怯えによる涙だった。幼い少女の表情は強張っていて、義宣を恐れているのだとすぐに分かった。

かすかにしか抱いていなかったが、そのかすかな期待が消えうせた。涙を目に浮かべて義宣を怖がる少女に、何かを期待することなどできない。

義宣がため息をつく、琳はまたびくりと震えた。瞬きをした瞬間、涙がぼろぼろと零れ落ちた。

なぜ、ここまでびくびくと怯えられなければならないのだろうか。十三歳も年上の男が怖いのだろうか。それとも、佐竹義宣が怖いのだろうか。

おそらく、琳は佐竹家が怖いのだろう。人質として佐竹家にいたから、佐竹家が怖い。自分の命は佐竹家に握られている。そして、その佐竹家の当主は義宣だ。つまりは琳の命は義宣の手のうちにあるということだ。だから、義宣が怖い。涙を流して怯えるほどに、義宣を怖がっている。

結局、ここでもまた佐竹家という名が問題になるのか。

「泣くな」

それだけ言って、義宣は琳のいる寢所を出て行った。ごめんなさい、と呟く琳の声が聞こえたような気がしたが、気のせいかもしれない。耳に残っているのだ、琳の声が。ごめんなさい、と言う声が。結婚はしたものの、琳の義宣に対する怯えは消えないように思えた。もともとが人質の妻ならばうまくいくような気がしたが、それは間違いだっただろうだ。夫をあれほどまでに怖がっている妻と、うまくやっていける自信などなかったし、うまくやっていくつもりもなかった。

やはり義宣には、金阿弥しかないのだと思った。

## 無垢の子ども（十一）

琳を妻に迎えてしばらく経ったが、琳が義宣に慣れる気配はまったくなかった。琳のもとを訪れるたびに、怯えたようにびくびくされる。そんな琳と夫婦として夜をとくに過ごすことなどない。

幼い妻との今後を思うと気が重くなるが、それ以上に、大地震のために普請中だった伏見城が崩壊してしまったことが、義宣の気持ちを重くさせた。秀吉の命で、領内から金を集め普請をしたというのに、崩壊してしまつてはすべて無駄になつてしまつた。ただ、今度は伏見城の再建を命じられないことを祈るばかりだが、佐竹屋敷が地震の被害を受けなかっただけでもありがたいと思うべきなのかもしれない。頼りない琳に代わり、母が奥の女たちを取り仕切り、屋敷の片づけをしていた。琳がしたことは、秀吉のもとへ向かう義宣の身支度を手伝つただけだ。

地震の直後、準備が整うと義宣はすぐさま秀吉のもとへ駆けつけた。秀吉は、大庭に幔幕を引いてその中にいた。城壁はことごとく崩れ倒れていた。この城壁のどれかは、佐竹が普請したものなのだろう、と思つた。

秀吉としばらく話をした後、屋敷へ戻ろうとすると、ちょうど徳川家康が秀吉のもとへ駆けつけてきたところだった。

「佐竹殿」

「内府殿」

「殿下にあやまちはありませんでしたかな？」

「あやまちはございませんでした」

「どちらにいらっしゃいますので？」

「大庭に幔幕を引いていらっしゃいます」

「そうですか。では」

会釈をして去る家康に、義宣も軽く頭を下げた。家康は内大臣で、義宣よりも格上の大名だ。だが、義宣は家康のことを好いていなか

つたため、ただ問われたことにのみ返答をした。あまり深く関わるつもりはない。

家康は源氏を称しているが、何が源氏だ、と義宣は言っただけでやりたかった。源氏というのは、我が佐竹のようなものを言うのだ、と。そのことを露骨に露わすつもりはないが、家康がどう感じているのかは分からない。

人の良さそうな笑みを浮かべて、何を考えているのか分からない男というのが、家康なのだ。

地震から二月ほど経ったところ、明から和議の使節が秀吉のもとへやってきた。その使節が持参した国書を見て、激怒した秀吉は朝鮮への再び兵を向けることを決意した。年明けに加藤清正、小西行長たちが渡海すると決まったが、義宣は出陣命令が下されなかった。

そのことに義宣は安堵した。加藤清正、小西行長は年が明けて渡海したが、義宣は伏見に残っていた。渡海せずにすんだ、と安心していただけところに、親戚関係にある宇都宮国綱が秀吉の怒りに触れ、領地を没収されてしまった。国綱は、常陸の隣国、下野国の宇都宮十八万石の領主である。国綱の妻は義久の娘で、父の養女として宇都宮へ嫁いでいる。しかも、国綱の母は父の妹で、国綱は義宣の従兄弟にあたる。

国綱は子がなく、秀吉の義弟の浅野長政の子である浅野長重を養嗣子とし、家督を相続させようとしたが、国綱の弟の芳賀高定が反対したらしい。そのことが、秀吉の怒りを買って、国綱の所領は没収され、宇都宮家は滅亡となった。

それだけでは秀吉の怒りが収まらなかったようで、宇都宮家が後継ぎ問題で争いを起こしたのは、隣国であり親戚関係にもある佐竹家の監督が行き届いていなかったため、と義宣についても処分を行おうとした。

あまりに突然のことで、義宣はどうすればいいのか判断に困った。宇都宮の争いを止められなかったことは、義宣も悔いている。だが、秀吉がここまで怒っているのは、自分の妻の妹の夫である浅野長政

の子を、養子に迎えることを芳賀高定が拒んだからだろう。これがほかの大名の子だったら、秀吉は何も言わなかったはずだ。

最近の秀吉は、何かおかしい。養子の秀次を自害させ、自分の子どもを溺愛している。今回のことも、おかしいと義宣は感じた。

秀吉の怒りを免れ、宇都宮と同じ末路をたどらないためにどうすることが最善なのか、義宣は考えた。毎日険しい顔をしている義宣を心配しているのか、金阿弥は義宣のそばにいた。

「殿」

「何だ？」

「あの、差し出がましいようですが、治部少輔じぶしょうふさまにご相談なさってはいかがでしょうか？」

「治部殿に？」

「はい。太閤殿下のお怒りを鎮められるのは、治部少輔さまだけだと伺っております」

確かに、金阿弥のいうとおり、最近の秀吉が話を聞くのは、石田三成みつなりだけだ。三成には、小田原以来世話になっており、義宣は三成と懇意にしていた。三成も、義宣を徳川の押さえと期待しているらしかった。

金阿弥の言うとおり、今は三成に頼るしかないようだ。そうと決めたのなら、まずは三成のもとへ使者でも行かせようかと思ったが、渋江政光が来客を告げにやってきた。

「殿、石田治部少輔さまがお見えです」

「治部殿が？分かった。すぐに参ると伝えておけ」

噂をしていた三成が屋敷に訪れるとは思わなかったので驚いたが、政光が三成だと言うのだから間違いない。政光は以前、常陸の検地の際に三成と行動をとみにしている。

三成のもとへ行くと、三成は余裕があるように見えた。宇都宮のことで、三成も気を揉んでいるのではないか、と思ったが、そのよくな様子は見えない。

「佐竹殿、突然の訪問失礼した」

「いえ、治部殿でしたら、いつでも歓迎いたします」

「今日訪ねたのはほかでもない、宇都宮のことにございます」

「は。その件につきましては、私の監督が行き届いていなかったばかりに、治部殿にはご迷惑をおかけいたします」

義宣が頭を下げると、三成は、気にするな、と言うように笑って手を振った。

「佐竹殿の監督不行き届きである、と考えることもできましょう。しかし、親戚であるとか、隣国であるとか、それだけの理由で佐竹殿までを処罰するのは、こちらとしても痛手が大きい。何と言っても、佐竹殿には江戸の徳川殿を抑え込んでいただかなければなりませんからな」

「では、治部殿」

「殿下には、私の方から話をしておきました。何、佐竹殿まで処罰すると仰せになった時は、虫のいどころでも悪かったでしょう。佐竹殿に罪はないことを述べたところ、すぐにお許しくださいました。ただし、お父上にも早々に上洛していただいた方がよろしかろう。佐竹殿が殿下に頭を下げるより、お父上とお二人の方がなおよろしい。また、浅野長政の側から何か言ってくるかもしれませんが、関わらないことですな。そうそう、それから、宇都宮からの荷物は、一切ご領内へは入れないこと。宇都宮とは今後一切関わらぬことを示さなければなりませんまい」

三成の言葉は信じてても良いものだろうか。義宣も佐竹領を没収、佐竹家は滅亡という末路をたどるのかと冷や汗をかいていただけに、すぐには三成の言葉を信じる事ができなかった。

「治部殿、それはまことですか？」

「ええ。殿下は、佐竹侍従殿は天下の名門、源氏の当主。にわか源氏の誰かとは違う、家を潰すのはまことに惜しい、との仰せ。先ほど私が申した通りになさつてくだされば、問題ないかと思えます。それにしても、佐竹殿にまで累を及ぼそうとなさるとは、正直私も驚きました」



「治部殿、まことに、何とお礼を申し上げてよいか。治部殿のご尽力に感謝いたします」

再び義宣が頭を下げると、三成は、どうか私の忠告をお忘れなきように、と言い残して去って行った。豊臣一の能吏は、佐竹と宇都宮の問題にばかり関わっているわけにもいかないのだ。政光に三成を送らせて、義宣は国許にいる父にあてて書状を書いた。

宇都宮滅亡と、義宣の処分についての顛末。三成のとりなしで累をまぬがれたこと。秀吉へのご機嫌伺いのために、父にもはやく上洛してほしいということ。宇都宮からの荷物は、一駄たりとも佐竹領に入れないこと。三成から忠告されたことをすべて書き、すべては三成の尽力によるものだということも父に伝えた。

筆を置き、ようやく義宣は安堵することができた。伏見大地震、朝鮮への再征、それに今回の宇都宮の事件。いろいろなことが突然襲ってきたようだった。特に、宇都宮の件は佐竹家の存亡に関わる重大な事件だった。

ここ数年、秀吉は少しおかしくなってきた。それは義宣だけではなく、当然誰もが感じていることだろう。三成の言葉から察するに、三成も秀吉の今の状態をあまりよく思っていないようだった。秀吉のせいで滅亡かと思いましたが、三成には感謝するばかりだ。この恩はいつか返さなければなるまい。三成が義宣の力を必要とした時には、必ず三成の力になろう、と義宣は固く心に決めた。

## 無垢の子ども（十二）

人見藤道の推挙で義宣に仕えるようになって、何年が経っただろうか。十一歳の時から仕えているのだから、もう七年になる。金阿弥は十七歳になっていた。

最近、同じ年頃の小姓たちは元服をして新たに名乗りをもらい、義宣に改めて仕えるようになっていた。金阿弥ぐらいの年頃ならば、元服していてもおかしくはない。金阿弥もそろそろ自分も、同朋ではなく祐筆あたりに出世して、金阿弥ではなく兄のように新たに名乗りをもらうのだろうと思っていた。だが、義宣からそんな話が出る気配は全くなかった。

ここ最近、伏見の大地震や、宇都宮の領地没収にともなう処分の問題など、義宣を煩わせることばかりが続いていたため、金阿弥の元服が遅れているのだろう、と思うことにした。それに、金阿弥の兄はいまだ罪人扱いとなっている。実際、宇都宮の事件は佐竹家にとって非常に重大であった。義宣が処分されなくてよかった。宇都宮国綱は、結局領地を没収されたあげくに備前に配流になってしまっている。

義宣の寝所に呼ばれることも、そろそろなくなるだろうと思っていたのだが、そんなことはなかった。十七歳になって、初めて抱かれた時のような幼さも可愛らしさもなくなっていることは分かっている。だから、そろそろ飽きられると思っていたが、どうやら義宣はまだ金阿弥を手もとに置いてくれるらしい。

それがとても嬉しい反面、少しだけ嫌だった。

義宣が金阿弥を側に置いて、昔と変わらず可愛がってくれることはとても嬉しい。いつまでも、こうして側に置いていてほしいと思う。だが、それが叶わないことくらい金阿弥にも分かる。年が明ければ、義宣は継室を迎えて三年目になる。義宣は、口では、継室は幼すぎて話にならない、と言っているが、その継室も今では十五歳

の立派な娘だ。近いうちに、義宣の子を身ごもることもあるだろう。以前に比べると、義宣が継室のもとへ通う回数が増えていく。

それに、周りが元服して大人の仲間入りをしていく中で、自分だけがいつまでも金阿弥のまま、義宣の庇護のもとにいて、可愛がられているのは恥ずかしかった。

義宣の側にいたい。だが、いずれこの時は終わる。義宣に可愛がられていたい。だが、いつまでも子どものままにいるのは嫌だし、恥ずかしい。

義宣に甘えたい気持ちと、恥ずかしさや不安が心の中でせめぎ合い、つい義宣にすぎない態度を取ってしまう。

抱き上げられそうになると、嫌だと言ってしまふ。頭を撫でられると、子ども扱いするな、と言ってしまふ。いつも言った後に後悔するのだが、義宣は金阿弥の葛藤などお見通しなのか、それとも子どもっぽいと思っているのか、ただ笑って甘やかしてくれた。それが心地よいから、金阿弥もつい甘えてしまふ。

義宣は継室を迎えたのだし、金阿弥もいずれ元服し、妻を迎え、家を構える。そうすれば、この曖昧で心地よい関係など終わってしまうのだ。金阿弥は義宣と恋仲にあるわけではない。義宣は一度も金阿弥との関係に名をつけることなどなかったし、金阿弥も義宣と恋仲だとは思ったことがなかった。

金阿弥は義宣を好きだと言った。すげない態度を取ってしまったとしても、今でもその気持ちに変わりはない。義宣も金阿弥を好きだと言ってくれた。だが、あくまでも主と同朋だ。

もうすぐ終わってしまうのかもしれない。そう思っていたというのに、義宣に寢所へ呼ばれた。最近では継室のもとへばかり行っていて、金阿弥は放っておかれていたのだ。

寢所の前まで来ると、いきなり襖が開いて、義宣の腕が伸びてきた。その腕に腕を掴まれ、倒れるように義宣の腕の中へ収まった。

「殿？」

「二人の時は、そう呼ばない約束だろう？」

「義宣様」

初めて抱かれた後から、二人きりの時はそう呼ぶように言われていた。義宣の名を呼ぶと、義宣は満足そうに笑った気配がした。

「御台様のもとへ行かれなくてよろしいのですか？」

「どうした、やきもちか？」

「そんなことはありません。ただ、思ったことを言っただけで。お父上でいらつしやる北城さまや、大御台さま、御一門、譜代の方々は、皆さまお世継ぎを期待なさっていますからね」

「可愛くないことばかり言う。そこが可愛いな、お前は」

「だから、やきもちではありません。それに、可愛いという言葉は、御台様に言っただけで上げればよろしいではありませんか」

またやってしまった。昔ならば、素直に礼を述べることができたはずなのに、いけないことを言ってしまった。義宣は気を悪くしただろうか。抱きしめられているせいで、義宣の顔は見えない。ただ、ぽんと背中を叩かれた。

「御台のことは口にするな」

そう言っただけで義宣は、金阿弥の口を塞ぐように口づけてきた。軽く触れるだけで離れていく口づけは、繰り返されるうちに深いものへと変わっていった。幼いころは怖がっていたが、もう怖くはない。

義宣に抱き上げられ、用意されていた褥へ運ばれる。こうなっただけで嫌がってみせたところで無意味だと分かっているから、恥ずかしさはあったが金阿弥はおとなしく義宣に身を任せた。

行為の後、甘やかすように金阿弥の頭を撫でてくる義宣に、金阿弥はぽつりと本音を呟いた。

「私、もうこういうことはされないのだと思っていました」

「何故だ？」

「だって」

予想外だ、という顔をする義宣に、もう十七歳になって臺が立つ

ているし、継室のもとへ足繁く通っているから、とは言えなかった。先ほど、御台のことは口にするな、と言われていた。それに、そんなことを言ったらやきもちをやって拗ねているようで、言えるはずがなかった。

「継室のもとへよく通っているからか？」

義宣に答えを言い当てられ、どうしようか迷ったが、素直に頷いた。それを見て義宣は苦笑をもらした。苦笑されて少し恥ずかしい。「俺にはお前だけだと言ったことを忘れたのか？」

「まさか、忘れるはずありません」

名護屋で好きだと言われたことも、伏見でお前だけだと言われたことも、忘れるはずがない。片時も忘れたことなどなかった。それを忘れたのか、と聞かれるのは心外で、思わず必死に否定するような口調になってしまった。義宣がまた苦笑した。

忘れるはずがない。その言葉を信じていないわけでもない。だが、いつまでも揺るぎないものだと思じていられるほど子どもでもない。「俺には、お前だけだよ」

言い聞かせるように言われ、金阿弥は義宣に抱き寄せられた。

義宣は継室を迎えた。曖昧な関係は終わると思っていた。だが、そうではないのかもしれない。義宣は今でも、金阿弥だけだと言ってくれる。金阿弥が義宣を他の誰とも違うと思う気持ちも、今でも変わらない。

義宣の言葉を信じようと思った。今まで何度も義宣は、お前だけと言ってくれた。疑う必要などない。今までの関係は、これからも続くのだ。

「義宣様」

「何だ？」

抱き寄せられたまま、甘えるように義宣の首に腕を回す。昔のように、大好きです、と言いたかったが、恥ずかしくて言えなかった。ただ、その分の思いをこめて抱きついた。

抱き返してくれる義宣の腕はあたたかくて、昔と何も変わらなか

った。そのことが嬉しくて、金阿弥は更にきつく義宣に抱きついた。

### 無垢の子ども（十三）

義宣と琳の間に、子どもができる気配は全くなかった。琳が義宣の継室になって、もうすぐ三年になろうとしていた。

もともと、琳が義宣の妻になった時がまだ十三歳の少女だったのだから、その少女に子どもを期待する方がおかしいのだ。初めの頃など、怯える琳と閨を共にすることすら難しかったというのに。

だが、琳が幼いことも、琳が怯えて閨事がままならなかったこともおかまいなしに、譜代家臣の連中は、お世継はまだか、と何度も義宣に言ってくる。先の御台とは六年間の結婚生活だったが、子どもは一人もできなかった。琳とはまだ二年だ。年が明けてようやく三年目になる。そう簡単にできはしないだろう。まして、琳は先の御台と違って、まだ少女だ。先の御台は、義宣よりも二つ年上だった。

それでも連中は義宣を急かす。父が今の義宣の年の頃には、既に弟の盛重も生まれていたのだと言って、義宣にも早くお世継を、と期待する。

連中が世継を望むのは、佐竹家が安泰でなければ我が身も安泰ではいられないからだろう。

毎日のように、直接、または遠まわしに世継をせがまれ、うんざりだった。御台様にお世継ができないのならばご側室を、とまで言われた。

そこまで言うのなら、側室の一人でも迎えてやろうと思った。それで、連中の気が少しでも晴れておとなしくなるというのなら、女の一人や二人を側室にすることなど、簡単なことだ。誰か適当な女を側室にしまえばいい。

そう思ったが、義宣は琳を継室に迎えた時のことを思い出した。連中は、多賀谷の姫でも文句を言っていた。人質だった娘を、と。適当な女を側室にすれば、また面倒が起きるだろう。だが、どこか

の家の姫を側室にしたところで、家同士の衝突があるに決まっているのだから、それは更に面倒だった。

何をするにも、老臣たちが障害になる。それが昔から嫌だった。

こめかみを押さえつたため息をついた時、ある姫の存在を思い出した。あの姫ならば、連中も文句を言わないだろうし、面倒が起きるはずもない。

岩瀬の姫。

その姫を、側室にすると決めた。

金阿弥に酌をさせながら杯を重ねていると、金阿弥が首を傾げた。何か気になることでもあったのだろうか。

「どうした、金阿？」

「いえ、今日の義宣様は、いつもより上機嫌のように見えましたので、良き女性でも見つけれられたのかと思ひまして」

「良い女を見つけたと言ったら、妬けるか？」

「まさか」

義宣の問いに嫌味なくらいにこやかな笑顔を浮かべて金阿弥は答えた。最近、可愛げがなくなってきた。思っているであろうこととは裏腹のことを言うのだ。可愛くない。今も少くくは面白くないと思っているはずだ。もっとも、可愛くないところが可愛いのだが、本人はそれを分かっていない。

「まあ、良い女を見つけたというのは、嘘ではないな」

意地悪く笑ってみせると、金阿弥はあからさまにむっとした。どんなに言葉で本心を偽っても、表情は昔と変わらず正直だ。

「譜代の老臣どもが、俺に世継はまだか、側室を迎えろ、と言っているのは、お前も知っているだろう？」

「はい」

「あつらえ向きの女がいたんだよ」

「そうですね。義宣様にとって都合のよろしい姫君がいらっしゃる



とは思えませんがね」

「それがいたんだ。誰だと思う？」

「さあ？」

わざと金阿弥をからかうような物言いをするのは意地が悪いと思うが、いちいち義宣の言動に反応する金阿弥がいけない。つい意地悪をしたくなってしまう。だが、そろそろからかうのはやめた方がいいだろう。金阿弥が気の毒だ。

「岩瀬<sup>いわせ</sup>の姫だ」

「岩瀬の姫君？」

「ああ。母の姉の娘、つまりは俺の従妹だな。須賀川二階堂の姫と  
すががわにかいどう言えば分かるか？」

そこまで言う和金阿弥は、ああ、と呟いて頷いた。どこの姫のことを言っているのかようやく分かったようだ。

岩瀬の姫は、義宣の母の姉の養女だ。産みの母親も義宣の母の姉である。血の繋がった従妹の姫ならば、誰も文句は言わないだろう。譜代連中も何も言わないはずだ。そして、母は恐らく琳を御台に迎えた時よりも喜ぶだろう。

家柄の問題は、岩瀬の姫が義宣の従妹ということで十分だった。

「それだけではない。あの姫は、俺の伯母にあたる養母ともども佐竹家の庇護のもとに生きる身だ。側室にしても、俺がこの姫に実家のことでわずらわされることはないだろう」

「本当に、義宣様にとって都合のよろしい姫君ですね」

「そう思うだろう？」

義宣がふつと笑うと、金阿弥は大袈裟にため息をついてみせた。どうしたというのだ。

「それでは、私がこうして呼び出されることもなくなるのですね？」

「何を言っている？」

「だって、ご側室を迎えられるのですから、私はもう不要でしょう？」

清々しますよ、と続けた金阿弥は、本気でそんなことを思ってい

るのだろうか。いつものように意地を張った言い方をしているのか  
と思っただ、琳を迎えた時もこんなことを聞かれたことを思い出し、  
もしかしたら金阿弥は本気で言っているのかもしれないと思った。

「まさか。何度言わせれば気が済むんだ？お前は、俺が好きなんじ  
やないのか？」

「それは、その」

「それは？」

顔を覗きこむと、金阿弥は目を逸らして俯いた。この反応を見れば  
言われずとも金阿弥の気持ちは分かるが、言葉にしてはしなかった。  
金阿、と名を呼ぶと、金阿弥は恥ずかしそうに義宣を見上げた。

「好き、です」

「俺もだよ」

そう言っただけ金阿弥の頬に手を当てて、甘やかすように優しく口を  
吸った。こういう時の金阿弥は、素直に義宣のいうことを聞く。

子どもの頃から金阿弥は何も変わらない。義宣には、金阿弥だけ  
だった。

## 岩瀬の姫（一）

戦場の空気が本丸にまで伝わってくる。男たちの叫び声と、女たちの悲鳴が聞こえる。

怖くなつて養母の打掛を握りしめると、祥さちの手に養母の手が重ねられた。養母の手はかすかに震えていたが、それでも祥はそのぬくもりに安心した。

「後室御前いこうしむぎぜん」

家臣の誰かが、本丸に飛び込んできた。険しい表情で養母を呼ぶ。嫌な感じがした。

「何ですか、落ち着きなさい」

「長禄寺に火を放たれました」

「まさか。長禄寺のあたりは筑後ちくごが守っているではありませんか」

筑後は聞いたことのある名前だ。確か、守屋筑後守もりやちくこのかみ。二階堂家にかいどうに代々仕えている者で、二階堂四天王の一人なのだそうだ。養母も信頼している家臣のはずだ。

「その筑後守殿が、かねてより伊達に内通していたようで、長禄寺に火を放ち家臣二百人と共に我が二階堂家を裏切りました」

養母や祥とともに本丸に詰めていた侍女たちが、この家臣の言葉を聞いて色めいた。子どもの祥にも、これがいかに大変なことかわかる。長禄寺は本丸のすぐ近くだ。直にこの本丸まで火が回るに違いない。それに、代々二階堂家に仕えた家臣が裏切ったのだ。他の家臣も守屋に同調して裏切るかもしれない。

「お養母かあさま」

養母の手を握ると、養母は祥に向かって微笑んできた。そして立ち上がり、恐怖と混乱に陥りそうになっている侍女たちと、急を告げに来た家臣を見据えた。

「二階堂の人間が見苦しいですよ」

「ですが後室御前、このままでは伊達勢がここへやってくるのは時

間の問題です。いかがなさるのですか？」

「自害すればよいのです」

養母の言葉に、本丸は静まり返った。養母の言葉に迷いはない。須賀川城の女城主として、養母は伊達と戦うと決めた時から、敗れた場合のことを考えていたのだろう。伊達はすでに祥の実家の蘆名あしな家を滅ぼし、その勢いで須賀川に迫っている。奥州で伊達政宗になうはずがない。それでも、二階堂家の誇りをかけて、養母は伊達と戦うことを決断した。その時と同じ顔を養母はしている。

夫の死後、ひとりで須賀川城を守り続けた養母の姿は力強かった。「私は女の身ですが、須賀川城の城主です。この城から逃げようとしたところで、政宗に捕まり殺されるに決まっています。ならば、私は自害を選ぶ。それだけのことです。お前たちはこの子を連れて逃げなさい。いくら政宗と言っても、力ない女を無碍には扱わないでしょう」

背中を押されて、祥は侍女たちのもとへとやられた。侍女たちの中には泣き崩れている者もいる。祥の頬にも涙が伝った。養母に逃げよう言われても、侍女たちは誰も逃げようとしなかった。祥も養母を置いて逃げられるはずがないと思った。

「お養母さま」

養母に駆け寄ろうとしたが、侍女の鏡田かがみだに後ろから抱きしめられて動けなかった。

養母が懷から短刀を取り出した。何の細工も施されていない質素な短刀。その短刀が鞘から抜かれ、刃がきらりと光った。

自害の刃が養母の胸に刺さる。その瞬間を目に焼き付けなければならぬと思いながらも、祥は目を瞑ってしまっていた。

侍女たちが息をのんだ。後室御前、という悲鳴が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、短刀は畳の上に転がっていて、養母の腕は見知らぬ兵に掴まれていた。

「亡き二階堂盛義殿にかいどうもろぎよしの奥方、阿南殿でいらっしやいますね」

養母の腕を掴んだ兵が口を開いた。養母は落ち着いた顔で頷いた。

「私が二階堂盛義の妻です」

「我が主、岩城常隆様がお呼びです。ご同行願います。輿の用意も整っております。さあ、姫さま方も早く」

岩城からの迎えだと聞いて、その場は明るくなった。岩城常隆は、いわきつねたか養母の甥、つまりは祥の従兄弟にあたるのだと、鏡田が祥にそつと教えてくれた。養母は、本当に岩城からの迎えなのか迷ったようだったが、侍女たちの喜ぶ姿に気が緩んだのか、静かに、はい、と言った。

兵たちに言われた通り、用意された輿に乗ったはいいが、進むうちに養母の顔が険しくなった。何故だろうか。祥には分からなかったが、養母はいきなり、輿を止めるように要求した。だが、その声を無視して輿は進んだ。

「お養母さま？」

「お祥、この輿は岩城のものではありません。伊達の陣へ向かっています」

養母の言うとおり、輿は止まることなく伊達の陣へと進んで行った。政宗に捕まることを拒み、二階堂の誇りを胸に自害しようとした養母は、結局のところだまされて伊達の兵に捕らわれてしまった。祥と侍女たちも、養母とともに伊達の兵に捕まり、政宗のもとへ連れて行かれた。

政宗は、伯母である養母のことを敬うような態度を取り、本当は戦などしたくはなかった、伯母上のために新たに館を作ろう、と言ってきた。養母は政宗の申し出を断り、政宗が用意した豪華な食事にも、菓子にも手をつけようとしなかった。ただ、侍女に持たせた小袋に入った白米だけを食べていた。祥もそれにならった。

政宗は須賀川城を攻め落とした敵だ。蘆名も滅ぼしている。政宗は祥の家と実家を滅ぼした。祥にとって政宗は憎むべき敵だった。敵の施しは受けない、という養母の気持ちは祥にも分かる。

そうした日がしばらく続いた。まるで、養母と政宗の根競べのようだった。負けたのは政宗の方だった。

政宗は、養母と祥たちを須賀川城から連れて来た伊達の兵九人全員を無残にも殺したのだ。この兵たちは、須賀川落城の時から敵だというのに、祥たちに随分と親切にしてくれていた。それが政宗の反感を買ったらしい。伊達の兵でありながら、二階堂に味方するとは許せない、という理由で殺されたのだそうだ。

このことがあって、養母は完全に政宗と決別した。そもそも、初めから養母は政宗の世話になるつもりなどなかったのだ。だが、政宗は自分の顔に泥を塗られたと思い、激怒したようだった。

その後、養母は祥を連れて甥の岩城常隆を頼って岩城へ落ちて行った。だが、常隆は太閤秀吉に従い小田原へ赴いた帰りに、命を落としてしまった。頼りにしていた常隆亡き後、養母も祥も岩城家にはいられなかった。

「お養母さま、わたしたちこれからどうするのですか？」

「そうですね、常陸へ行きましょう」

「常陸？」

「ええ。私の妹が常陸の佐竹家に嫁いでいます。ですから、今の当主の義宣殿は、お祥の従兄にあたるのですよ。きっと、私たちの面倒を見てくれます」

「須賀川からは、また離れてしまうんですね」

「寂しいかもしれませんが、大丈夫。私がついています」

「はい」

「それに、侍女たちも一緒です。お前が懐いている、鏡田も一緒ですよ」

「はい」

須賀川を離れ、親類を頼って生きるしかない身の上に不安を覚えなと言ったら嘘になる。だが、養母がいてくれるから、祥は平気だった。

養母はいつも、あたたかい手で祥を守り、導いてくれる。養母がいてくれるなら、どんなところであろうとも平気に違いない。

## 岩瀬の姫（二）

祥は蘆名家の次女として黒川城に生まれた。父は養母である阿南おなみの息子の蘆名盛隆あしなもりたかで、母は阿南の妹だった。

阿南は祥にとって祖母でもあり、伯母でもあった。父の盛隆は二階堂家の嫡男だったが、阿南の夫の二階堂盛義が蘆名家に降伏した時、その証として父は蘆名家の人質になったのだそうだ。母は伊達家の娘で、もともと蘆名盛興あしなもりおきの妻だったが、世継ぎがいまま盛興が死んでしまった後、人質だった父が母の婿となり、蘆名家の当主になった。盛興と母の間には、祥の異父姉にあたる一人娘しかいなかったのだ。

そして、祥が生まれた。父も母も優しくて、とても幸せだった。妹も生まれ、弟も生まれた。だが、弟が生まれてすぐに、父が家臣に殺された。理由は分からない。ただ、悲しくて、辛かった。

父が死んでしばらくして、母から二階堂家の養女となる話を持ちかけられた。その頃、二階堂家では当主の盛義が病死し、跡を継いだ父の弟の行親ゆきちかも戦死し、誰も跡を継ぐ人間が残っていなかった。残された未亡人の阿南が、須賀川城の城主となっていた。その阿南が、祥を養女に欲しいと言ってきたのだそうだ。

行親が戦死した時点で、この話は既に両親と阿南の間では進められていたらしいのだが、両親は最初渋っていたらしい。行親が戦死した頃は、まだ蘆名家には子どもが姉と祥しかいなかった。だから両親は渋ったのだ。その後、妹が生まれて、念願の世継ぎとなる弟も生まれた。そこで、両親は祥を養女にする話を承諾したそうなのだが、父が家臣に殺された。この事件によって、祥の須賀川入りは年明けにまで延期されたのだ。

そして年が明け、母から養女に言ってくれと頼まれた。本当は行きたくなかった。祖母でもあり伯母でもあると言われても、顔も見ることがない人の所へ行くのは怖かった。何よりも、母に見捨てら

れたような気がしてたまらなく悲しかった。この時、祥はまだ六歳だった。

だが、泣きながら祥を抱きしめ、何度も、ごめんなさい、と繰り返す母を見て、祥は嫌だとは言えなかった。泣かないで、と母に言う、母はますます酷く泣いたので、困惑したことを覚えている。

その後、須賀川へ出立する準備が整えられ、祥は家族と離れてひとり須賀川へ向かった。祥を出迎えた二階堂家の家臣たちは、口々に父のことを懐かしみ、鼻が父に似ているだとか、いや口元が似ているのだとか、言うので、少しだけほっとした。二階堂家の家臣たちにとって、祥は亡き主の忘れ形見なのだ。

本丸に通され、阿南に挨拶をした。緊張していて、怖かった。夫と息子の死後に城主となる人は、どのような女丈夫なのだろう、と思った。だが、顔を上げて見た阿南の顔は、姉妹である母とはあまり似ていなかったが、母に似た強さと優しさが感じられたので、怖くはなかった。

今日から私がお前の養母です、と言われ、阿南に優しく抱きしめられた時から、阿南は祥の養母になり、祥は養母の養女になった。

それから五年が経った。その間に、弟は病死し、佐竹家の次男が姉と結婚して蘆名家を継いだ。だが、蘆名家は政宗によって滅ぼされた。そして、同じく政宗によって二階堂家も滅ぼされたのだった。その結果、祥は養母と共に佐竹義重に嫁いだ養母の末の妹を頼り、佐竹家にやってきたのだ。

廊下の軋む音が聞こえた。大御台様がいらっしゃいます、という侍女の言葉を聞いて、ようやく養母の妹である佐竹家の大御台との対面がかなうのだと知った。祥と養母は、しばらく部屋の中で待たされていたのだ。

すつと襖が開くと、養母によく似た女性が入ってきた。この人が佐竹家の大御台。祥があわてて頭を下げようとすると、大御台はそれを手で制した。その手は爪の先までぴしつと真っ直ぐで、養母と似ている顔立ちも、似ているはずなのに、よく見ると冷たい印象を



受けた。

二階堂家へ養女に入った時のことを思い出し、祥は緊張で硬くなつた。

「阿南姉様、お久しぶりです」

「此度は、義重よししげ殿にもお前にも迷惑をかけることになってしまつて、申し訳ありません」

「どうか、お気になさらないでください。夫の義重も義宣も、姉様と姫を歓迎しております」

養母と話をしていた大御台の視線が祥に移った。目が合った瞬間、どうしていいか分からず、小さく笑みを浮かべると、大御台もかすかにほほ笑んでくれた。

「姫、私とそなたの養母上は姉妹。そなたと義宣はいとこ。気兼ねせずともよい」

「ありがとうございます」

「世話になります」

「できれば姉様や姫のために何かしたいのですが、私は義重殿と共に上洛せねばなりません。何でも、今後大名の妻子は京で暮さねばならぬようでした」

「そうですか」

「ご安心ください。姉様と姫には心安くお過ごしただこうと、下河辺に新たに館を作りました。そこでお暮しください」

新たに館を作ったということは、城ではなくそこで、養母や侍女たちと暮らすということなのだろうか。そうならば、ありがたかった。城の中で暮らすのは、息苦しいような気がしたのだ。城の奥は大御台と義宣の御台のもので、そこに側室でも侍女でも何でもない祥は居づらいうと思う。

大御台に礼を述べて、養母と祥は佐竹家に用意された館に移り住んだ。そこでの暮らしは平穏で、表の世界でのことも、自分たちにはまるで関係のないことのように思えた。ただ、佐竹家で義宣の御台が死んだ後、祥が新たな義宣の妻になるのではないか、という噂

が立つた。鏡田は噂に期待していたようだが、それは思いすごしに過ぎなかった。多賀谷の姫がいずれは継室になるのだと聞いた。

祥が嫁入りに適した年齢になっても、祥たちの暮らしは変わらなかった。平穩すぎて、このままでいいのだろうか、とさえ思うほどだった。養母も、祥が十四、五歳になつたら、義宣は祥を自分の養女にでもして、どこかの家に嫁がせるか、義宣の側室にするのだろうと思っていたらしい。実際、義宣は祥が十四歳になった時、一度この館へ足を運んでいる。だが、そのような気配は全く見えなかったので、養母はもしかしたら祥に婿を取らせて二階堂家を再興させてくれるのか、と期待したようだが、その気配も全く見えなかった。このまま養母や鏡田たちとこの館で暮らし、年を取っていくのかと思っていたが、年が明ければ十九歳になるという年の瀬に、京にいる義宣から文が届いた。義宣からの、初めての文だった。

何が書かれているのだろう、と思い広げてみると、そこには養母とともに京見物でもしてみてもどうか、というようなことが書かれていた。だが、これが義宣の伝えたい真意ではないことくらい、祥にも分かる。もう子どもではない。

義宣は、祥を側室にするために京の屋敷へ呼んでいるのだ。

### 岩瀬の姫（三）

年が明けて、祥は義宣に言われた通り、養母と共に京へ向かった。少し京見物をした後、佐竹屋敷へ行くと、大御台に出迎えられ、義宣は祥を側室にするつもりだと告げられた。やはり、京見物というのは口実で、そちらが本当の目的のようだ。

いずれ義宣から呼び出されるだろうから、それまではゆっくりしていればいいと大御台に言われた。しばらくはこの屋敷にすることになるのだから、義宣の御台に挨拶をした方がいいとも言われたので、養母とともに御台へ挨拶をしに行った。御台は祥よりも三、四歳年下だと聞いていたが、年よりも少し幼く見えた。おとなしそうな少女だった。

義宣は、祥を側室にするつもりだと大御台から聞いたが、京へ着いてから数日、義宣は祥の元へはやってこなかったし、正式に側室にするという話も祥のもとへはこなかった。もしかしたら、側室にするというのは、大御台や祥の勝手な考えで、本当に義宣は京見物をさせようと思ったただけなのだろうか、と思い始めた頃、義宣の渡りがあると告げられた。

突然義宣がやって来ると言われても、どうすればいいのか分からず、養母に助けを求めたが、養母は、義宣に任せていればいい、としか言ってくれなかった。

結局、どうすればいいのかわからないまま、祥は寢所で義宣の渡りを待っていた。廊下の軋む音が聞こえ、慌てて頭を下げた。

「岩瀬の姫か」

「はい」

襖が開く音と同時に男の声が聞こえた。これが義宣の声なのだろう。五年前にも聞いてはいるが、忘れてしまっている。顔を上げるとその声に促されて顔を上げると、目の前にいたのは確かに義宣だった。声は忘れたが、顔は覚えている。

「京は見えて回れたか？」

「お屋形さまのおかげで、楽しい時を過ごせました。ありがとうございます」

「それは良かった。伯母上はお元気か？」

「はい。大御台さまとお会いすることができて、嬉しそうです」  
「そうか」

人当たりのいい笑みを浮かべながら、義宣はその後、下河辺での生活はどうだったか、この屋敷には慣れたか、などと世間話のような話しかしなかった。祥は義宣に問われたことに答えるだけで、これから義宣と閨を共にするような雰囲気とは思えなかった。

当たり障りのない話をしばらくした後、では、また、という言葉を残して義宣は去って行った。寝所にひとり残された祥は、一体義宣は何のためにやってきたのだろう、と首を傾げたくなった。

だが、それから義宣は頻繁に祥のもとへやって来るようになった。側室にするという話は一切せずに、ただ当たり障りのない、上辺だけのものと思えないような話をして、帰って行く。

義宣は何がしたいのだろうか。養母か鏡田に相談したかったが、養母も鏡田もすっかり祥には義宣の手がついているものと思っているようで、何も無いのだとは言いくかった。それに、祥に義宣の手がついていると思っているのは養母たちだけではなく、家中の間も同じようだった。祥に義宣の渡りを告げに来る佐竹家の侍女は、祥のことを「岩瀬御台様<sup>いわせみだい</sup>」と呼ぶ。どういふことか尋ねてみると、祥は岩瀬の二階堂の姫で、義宣の側室だから「岩瀬御台」なのだという答えが返ってきた。

祥の知らないところで、祥は義宣の側室として認識されていた。これはどういふことなのだろう。今度義宣がやって来たら尋ねてみよう。そう思っていたところに、ちょうど義宣の渡りがあると告げられた。

義宣が祥のもとへやって来て、いつものように当たり障りのない話を始める前に、祥は思い切って自分から義宣に話しかけた。

「お屋形さま、お聞きしたいことがあるのです」

「何だ？」

「わたしは、お屋形さまの側室ですか？」

ずっと気にかかっていたことを尋ねると、義宣は躊躇うように黙り込んで、眉間にしわを寄せた。聞かれたくなかったのだろうか。

「家中では、そのような認識が広まっているようだな」

「そのことはわたしも知っております。ですが、わたしが聞いているのは、あなたの認識です」

はぐらかされた。義宣は祥の問いに答えたくないのか、祥が重ねて問うと、不機嫌そうな顔をした。これまで祥に見せていた人のよさそうな笑みが崩れていく。

「俺も、姫を側室だとは思っている」

「では、なぜ正式にその話をなさらないのですか？なぜ、いつも当たり障りのない、中身の無い世間話しかなさらないの？」

わたしは何のために呼ばれたの、と言葉を続けたかったが、義宣の声が祥の言葉を遮った。

「面倒だろう」

「面倒？」

「俺は、口うるさい譜代連中に、世継ぎはまだかと言われることにうんざりしたから、姫を側室にしようと決めた。連中は、御台に子ができないのなら、側室を迎えろとうるさくてな。だが、姫を側室にしたのは連中を黙らせることだけが目的だ。だから、姫のもとへ足繁く通って、世継を儲けようとしているように見せかけた。連中は、俺が姫を側室に迎えて、うまくやっているとも思っているようだ。何も言わなくなった」

義宣は何を言っているのだろう。随分と、自分勝手なことを言っているような気がする。譜代に世継ぎをせがまれるのが嫌だから、祥を仮初の側室にして、その問題から逃げようとしていると言っているのだろうか。

「それは、わたしを利用するということですか？」

「そういうことになるだろうな。だから、姫には正式に話をしなかつたし、閨も共にしなかつた。連中を黙らせることができればそれでいい。姫も、俺に何もされずとも側室として扱われ、良い暮らしができるのだから、悪い話ではないだろう?」

本人を目の前にして、利用しているとはつきり告げ、その上、祥にとつても悪い話ではないだろう、とはどういうことだ。義宣は自分が自分勝手な話をしていると分かっているのだろうか。祥がどんな思いで京へやってきたか分かっているのか。いや、分かっていたら、こんなことは言わないだろう。

側室として迎えられたのだから、義宣が祥を、世継ぎを儲けるためだけの存在、と思っただけでも仕方がないとは思っていた。だが、まさか譜代家臣を黙らせるための道具として扱われるとは思ってもみなかった。

啞然とする祥を見て、義宣はため息をつき、そういうことだ、と呟いて部屋を出て行った。

ため息をつきたいのはこちらの方だと、遠ざかる背中に言っただけだった。

## 岩瀬の姫（四）

義宣は、祥に側室にしようとした真相を話してからも、頻繁に祥のもとへ足を運んでいる。それは、義宣が話していたように譜代家臣たちを黙らせるために必要なことなのかもしれないが、ただ利用されているだけの祥にとっては、空しい日々だった。

これならば、義宣の側室ではなく、他のどこかの家に嫁に出された方がよかったかもしれない。できることならば、婿を取らせてもらって、二階堂家を再興したかったのだが、それが過ぎた願いだということとは分かっている。

祥に真相を話した義宣は、もう人のいいふりをする必要はないと思っただのか、祥のもとへ来ると、一門衆や譜代家臣に対する愚痴ばかり言うようになった。

譜代連中は俺を当主とは思っていない。一門衆は自分の血筋を鼻にかけている。誰も彼もが佐竹という飾りにしがみついているのだ。そう言って義宣はため息をついていた。だが、そんな話ばかり聞かされて、ため息をつきたいのは祥の方だ。

「お屋形さまは、どうしてそのような考え方をなさるのですか？」

愚痴ばかり聞かされていても、祥には義宣が何故そのような考えに至るのが分からなかった。祥が佐竹家について知っていることはわずかでしかないが、義宣は十七歳で家督を継いだと聞いている。初めの頃は、年若いせいで義宣の言葉のとおり、主と思われなかったかもしれないが、祥の見る限りでは、今の家臣たちは義宣を主と思っっているように見える。

「側室を迎えるように家臣たちが勧めたのも、あなたのことを思っ  
てのことではないのですか？」

「違う。連中は、俺のことを思っているのではない。俺に世継ぎが生まれなければ、佐竹家が危うくなるだろう？そうすると、自分の身が危ういから、そう言っているだけだ」

「そうでしょうか？」

「そうだ。一門の奴らも、俺に世継ぎを期待している。俺が養子を迎えることは望んでいないだろうな。佐竹の血が途絶えることを恐れているに決まっている」

「誰かが、そのように言われたのですか？」

「いや、だが言われずともそのくらい分かる」

「そうでしょうか」

「そうだ。特に中務など、そう思っているに違いない。母はそれ以上、養子を迎えることを嫌がるだろうな」

「御東殿と大御台さまがどうかなさったのですか？」

「お前には関係ない」

祥の問いに義宣は答えたが、最後の問いにだけは答えなかった。何か、義久と大御台に思うところがあるのかもしれないが、義宣の今の話を聞いていても、祥には義宣の考えが、ただの思い込みのようには思えなかった。

義宣は誰かに何かを言われたわけではない。ただ、ひとりで勝手にそう思っているのだ。中には、本当に義宣の言うとおりに思っている家臣もいるかもしれない。だが、そうではない家臣のほうが多いと祥は思う。そうでなければ、義宣は今まで十年以上も当主の座に着いていられるだろうが。

家臣たちの言動を、自己保身のために佐竹家を守ろうとしていると捉えるのではなく、本当にお家のことを思っているものだと思えば、もう少し明るい考えを持てるのではないか。

「では、浪人出身の家臣はいかがですか？あの者たちは、お屋形さまがお取立てになって今があるのでしょうか？」

「あいつらとて、同じだ。譜代や一門と違い、何の柵もなく、新たな考えを持った有能な人材ではある。だが、昔からの家臣ではないのだから、俺に何かがあつたらすぐに離れていくに違いない。まあ、口うるさい老臣どもよりは、よほど信用できるがな」

「そうですか」



今まで何度も聞かされてきた愚痴と今日聞いた話で、おぼろげではあるが義宣の考え方というものが分かったような気がする。

義宣は、愚痴を言う時いつも卑屈なのではないか、と思うような言い方をする。だが、義宣は自分が取るに足りない人間だと思っているから卑屈になるのではない。その逆だ。義宣は自分が可愛いのだろう。傷つきたくないのだろう。だから、わざと卑屈な物言いをして、そういうものだと思い込んで自分を守ろうとしている。

それで他人が傷ついてても、恐らく義宣は気付かないのだろう。他人の痛みに気付けるのなら、祥を側室であって側室ではないようなこんな中途半端なままでいさせるわけがない。家臣たちを黙らせるためだけに祥を側室にしたのだとしても、そのことを祥に言わなければまだ良かったのに。

何という人なのだろう。今までも義宣に愚痴を聞かされて、苛立ちを覚えたことはあったが、今日はいつも以上だ。苛立ちを抑えて、祥は深いため息をついた。

「それにしても、わたしにこのようなお話を色々としてくださるなんて、思ってもみませんでした」

ため息とともに吐き出した言葉に、祥は少しだけ嫌味を混ぜた。いつも義宣の愚痴を聞かされているのだ。このくらいは許されるだろう。

祥の言葉に、義宣は口の端に笑みを浮かべて答えた。その笑みは、祥を見下しているように見えた。

「姫のことは、いつでも離縁ができるからな」

「え？」

「姫を側室に迎えたのは、家臣どもを黙らせるため、ということはい前にも話したな。だが、それだけではない。姫は俺の伯母にあたる養母ともども、佐竹家の庇護のもとで生きている。俺が見限れば、姫たちの命運は尽きる。姫は俺の掌中に収まっているようなものだ。だから、姫は俺に絶対に逆らわない。そんな女を俺は探していたのだ。姫はその条件にふさわしかった」

義宣が祥を側室にしようとした本当の真相を聞かされ、祥は言葉を失った。義宣の声が遠くに聞こえるような気がする。

「姫は俺に逆らえない。何か面倒が起きた時は、姫に子ができなかったことを理由に、離縁すればいい。姫は、その俺の決定に逆らえないだろう?」

義宣は自分勝手だ。自分が酷いことをしているという自覚すらないのだ。今まで義宣の愚痴に苛立ちを覚えてきたが、今の祥の胸を占める感情は、苛立ちという言葉では表現しきれなかった。

「いい加減にしてください」

祥の声に反応して、義宣がこちらを向いた。その瞬間、ぱん、と乾いた音が室内に響いた。

右の掌が熱くなってきた。それで祥は自分が義宣の頬を叩いたのだと自覚した。義宣は呆然としている。

じわじわと痛みを感じ始めた右手と、赤く腫れ始めた義宣の頬を、祥はじっと見つめた。

## 岩瀬の姫（五）

何ということをしてしまったのだろう、とは思った。側室という立場を考えれば、ここは謝罪をするべきだということも分かっている。だが、祥は義宣に謝るつもりはなかった。突然頬を叩いたのは悪いと思うが、それだけのことを義宣は口にしたのだ。

「あなたは、どうしてそのような考え方しかできないのですか？もしかして、自分は不幸だとも思っていないの？」

祥の問いに義宣は答えなかった。ただ呆然としているだけだった。突然のことに、まだ思考が追いつかないのだろうか。

「あなたが、家臣たちにないがしろにされていると感じて、それを不幸だと嘆いていらっしやるのだとしたら、それはあなたに問題があるからだわ」

「何だと？」

義宣の目が祥を捉えた。その目は険しかったが、全く恐ろしくなかった。ただ虚勢を張っているようだった。

「俺のどこに問題がある？連中が、俺を認めないだけだろうが」

立ち上がった義宣は扇を取り出して、その扇で祥の顎を上向かせた。視線が真正面からぶつかる。祥は決して義宣から視線を逸らさなかった。

「違います。あなたが自分以外の人間を認めていないのです」

「生意気な女だ。二階堂の養女だからと少し甘い顔をしてやれば、すぐにつけあがる」

甘い顔。義宣のどこが祥に甘かったというのだろうか。最初から義宣は祥を道具として扱い、利用しているだけではないか。義宣が認めているのは、祥が二階堂家の養女であるという部分だけだ。それ以外は、すべて認めていない。だから、義宣は祥に対してあんな態度が取れるに違いない。

「お前は、俺が自分を不幸だと思っているのか、と聞いたな。俺は

自分を不幸だとは思っていない。お前の方こそ、自分の境遇と俺を比較して、自分の方が不幸だと思っているのではないか？だから、俺は不幸ではない。そう思っているのではないのか？」

「いいえ」

確かに、祥を憐れみ、不幸だと言う人はいた。だが、祥は自分を不幸だとは思わない。仮に不幸だと思っているとしても、他人とどちらがより不幸か比べるなど、空しいだけだ。

「そうか。だがな、お前に俺の気持ちなど分かるものか」

義宣が鼻で笑った。祥の否定を信じていないのだろう。本当は不幸だと思っているくせに、と言いたげだった。

「ええ、分かりません。でも、あなたもわたしの気持ちが分かるはずはないわ」

人と自分の境遇を比べているのは義宣の方だ。義宣は自分のことを不幸だと思っているのではないだろうか。

義宣は今まで一度も落城を経験したことがない。肉親を失ってもいない。実家は義宣が当主として治め、安泰している。当主には当主としての苦しみもあるのだろうが、恵まれているはずの境遇を、義宣はなぜこれほど悲観するのだろうか。なぜ、他人を信じず、認めず、苛立っているのだろうか。

家臣たちに対する愚痴以外、義宣の気持ちなど聞かされたことがない。だから、それ以外のことは分からない。義宣も、祥がどんな思いで側室になったかなど知らないではないか。

祥も養母も佐竹家の庇護下で生きている。義宣に見限られるわけにはいかない。義宣の言った通りだ。そのような状況にあるから、自分たちの身を守るために、祥は義宣の側室になったのだ。本当は二階堂家を再興したかった。養母もそれを望んでいたはずだ。その望みを捨てて、義宣の側室になったのだ。そんな祥の思いを、義宣は考えたことなどないだろう。

「お前は、自分の立場を分かっているのか。俺は佐竹家の当主だぞ」  
分かっている。分かっているから、側室になったのではないか。

だが、今の祥の言動を考えれば、立場の自覚がないと思われても仕方がないかもしれない。それでも、義宣には言われなくなかった。ため息をつく、胸のうちにくすぶっていた怒りも一緒に吐き出されたような気がして、少し落ち着いた。落ち着くと、今の義宣の言葉にはつとした。

「あなたは、寂しい方ですね」

「俺を馬鹿にしているのか？」

「いいえ」

そのようにしか考えられないところも寂しいのだ、と心の中で呟きながら、祥は言葉が続けた。

「あなたは、佐竹という名門にしがみついた家臣たちにうんざりなさっているのでしょうか？」

「そうだ。それがどうした。今の話と何の関係している」

「寂しい方」

「まだ言うか」

「だって、あなたは佐竹という名門にしがみつく家臣たちがお嫌いなはずなのに、佐竹という名門が誰よりも何よりも誇りで、それにしがみつかなければ生きていけないのは、家臣たちではなくあなたなのですもの」

だから、義宣は祥を側室に選んだのだ。二階堂の姫ならば文句は言われない、そう思ったのは義宣が自分でも家門を気にしているからだ。かつて名門と言われ、血縁もある二階堂家ならば、名門である佐竹家にふさわしいと思ったのだ。新参の家臣を信じられないと言った時、義宣は彼らが古参ではないから信用できないと言った。そして、先ほどの言葉。俺は佐竹家の当主だぞ。この一言に、義宣の意識の全てが集約されている。

「黙れ」

祥の顎を上向かせていた扇が、祥の顎から離れた。扇を握った義宣の手が振り上げられる。叩かれるのかもしれない。いや、ここまですでに義宣を怒らせ、身の程をわきまえずに無礼を重ねたのだから、殺

されてもおかしくないかもしれない。

養母のことを考えると、今更ながら後悔の念がこみあげてくるが、もうどうにかできるものでもない。

覚悟を決めて祥は目を瞑った。だが、何も起きなかった。そつと目を開けると、義宣は振り上げた扇を畳の上に投げつけた。扇が跳ねて転がった。

「あいつと同じことを、お前も言うのか」

小さく呟いて、義宣は部屋を出て行った。その声は弱々しく、なぜか痛々しいと感じた。

義宣はなぜ怒らなかったのか。確かに怒っていたはずなのに、なぜあの言葉を残して部屋を出て言ったのか。あの言葉の意味は何なのだろう。

義宣に対して怒りを覚えていたはずなのに、義宣の言葉が気にかかり、祥も廊下に出て立ち去った義宣の背中を目で追った。その背中では、なぜか初めて見た時よりも小さく見えた。

## 岩瀬の姫（六）

感情に任せて荒々しく襖を閉めると、思っていたより大きな音がしてしまい、部屋の中で控えていた金阿弥がびくりと肩を震わせた。じつと義宣を見上げる金阿弥の目を見て、深くため息をつきながら、義宣は金阿弥を抱き寄せた。

「金阿」

「今夜は、岩瀬御台様のもとへは行かれないのですか？」

「ああ」

「そうですか」

「嬉しいか？」

「さあ？」

口では色々と言いながらも、義宣の首に回された金阿弥の腕からは、金阿弥の嬉しさが伝わってくるようだった。岩瀬の姫のもとへ足を運んでいる間は、世継ぎを儲けようとしていると見せかけるために琳のもとへは何度か通ったが、金阿弥のことは一度も呼んでいなかったのだ。久々の逢瀬に、金阿弥が喜んでいないはずがない。

じやれるように抱き合い、口を吸うと、金阿弥がじつと義宣を見つめた。

「義宣様」

「何だ？」

「岩瀬御台様と何かがあったから、私を呼ばれたのでしょうか？ 顔に書いてありますよ」

金阿弥の口調は義宣をからかっているようだったが、その目は真剣だった。昔から、この目には弱いのだ。義宣の心の奥底まで見透かしそうな、澄んだ黒い目に。

参ったな、とため息をついて、義宣は金阿弥を解放した。金阿弥は心配そうに義宣を見つめている。

「岩瀬の姫に打たれた」

「え？」

既に腫れの引いた頬を指差してみせると、驚いた声を上げた金阿弥が、そつと義宣の頬に触れた。

「何なのだろうな、あの女は。俺に逆らえない女を選んだはずだったのに、生意気な女だ」

岩瀬の姫の言葉を思い出すと、金阿弥に会って和らいだ心に、再び怒りがわき起こった。何なのだ、あの女は。

「あの女、俺に自分を不幸だと思っているのか、と言ったんだぞ？本当は自分こそが不幸な、悲劇の姫君だとも思っているくせに」

「それは、すごい姫君ですね」

「佐竹家の当主に向かって、よくもあのような口がきけたものだ」

金阿弥は義宣の言葉に頷きながら話を聞いている。金阿弥という心が休まる。

岩瀬の姫は、義宣が自分以外の人間を認めていないと言ったが、それは違う。金阿弥との関係は違う。金阿弥は義宣を認めているし、義宣も金阿弥を認めている。

ただ、ほかの人間が義宣を認めていないだけだ。誰も義宣のことなど見ていない。それを岩瀬の姫は、何を言っているのだろうか。あのようなことを義宣に言った人間は初めてだ。しかも、岩瀬の姫はあの女と同じことを言った。

岩瀬の姫のことなど忘れてしまおうと思って金阿弥を呼んだというのに、思い出すのは岩瀬の姫のことばかりだ。

「あの女、次に俺が会いに行った時に、どんな顔をするのか楽しみだ」

「また、岩瀬御台様に会いに行かれるのですか？離縁なさればよろしいのに」

「離縁はしない。あの女を離縁したら、老臣連中に何を言われるか俺が世継ぎを儲けようとしていないみたいだろう？」

「お世継ぎを儲けようとなさっていると見せかけたいのなら、御台様のもとへ熱心に通われればよろしいのではありませんか？」



「老臣どもは、御台に期待できないから側室を作れと言ったんだ。御台では、駄目だ」

「そうですか」

老臣どものことを思うと、また腹が立ってきて、義宣は、ふん、と鼻を鳴らした。それを見た金阿弥は、義宣の頬を撫でながら小さくため息をついた。

「どうした？」

「いいえ」

何でもありません、と続けようとした金阿弥の口を塞ぎ、再び金阿弥を抱きしめた。金阿弥はおとなしく義宣の口づけを受け入れ、義宣に全てを委ねている。

やはり、金阿弥だけだ。金阿弥は義宣の全てを受け入れてくれる。義宣には金阿弥だけだ。そして、金阿弥にも義宣だけなのだ。

褥に金阿弥を組み敷き、金阿弥の帯を緩めようとした。だが、そこで手が止まってしまった。それ以上先に進もうという気が起きない。義宣に組み敷かれ、瞑っていた金阿弥の目が開かれ、義宣を見上げている。

「どうなさったのですか？」

「そういう気分じゃなくなった」

緩めようとした帯を直し、金阿弥の隣に横になり、褥の中で金阿弥を抱きしめた。

「今日は、このまま眠りたい」

「はい、義宣様」

金阿弥の体温を腕の中に感じながら、義宣は目を瞑った。なぜか、そういえば岩瀬の姫の名前を自分はまだ知らないのだ、と頭の中に浮かんだ。知る必要などないと思っていたため、一度も聞いたことがなかったのだ。いつまでも、岩瀬の姫、では呼びにくい。いずれ、聞いてみようかと、ぼんやりと思った。

庭を飛び交う鳥のつがいを見ながら、祥はため息をついた。

鳥でも、あのように睦まじくいるというのに、祥は今後義宣と睦まじい関係を築けるとは思えなかった。

側室に迎えられて、相手の頬を叩く女などどこにいるだろうか。これは、近々離縁されるだろう。未だにこうして佐竹屋敷にいられることの方が不思議だ。

だが、後悔はしていない。義宣は卑屈で悲観的で、見ていて腹が立ったことに変わりはない。あれは言うべきことだったのだ。

「どうしたのですか、お祥」

「お養母さま」

考え事をしていて、養母が隣に来ていたことにも気づかなかった。義宣とのことを相談するのは、養母しかいないだろう。養母には心配をさせなくなかったのだが、祥は口を開いた。

「お養母さま、わたしお屋形さまと上手くやっていける自信がありません」

「何故？」

「あの方は、他人を認められない方だから。ご自分を不幸だと思って、殻に閉じこもろうとなさるから」

さすがに、義宣の頬を叩いたことは言えなかったが、養母はこの話を聞いてどう思っただろうか。窺うように見ると、養母は小さく苦笑していた。

「お祥」

「はい」

「人は誰しも、自分の腹が一番痛いものですよ」

「え？」

「ですから、義宣殿は自分の境遇が一番辛いと思っています。他人の腹がどれほど痛いのかなど、本人でなければ分かりません。お前も、知らず知らずのうちに自分の腹が一番痛いと思っているのでしょう」

「わたしは、自分が不幸だとは思っていません」

「そうだとしても、どこかに義宣殿を羨んでいるところがあるので。自分と比べて、義宣殿は恵まれた環境にいるというのに、それを不幸だと義宣殿が思っている。だから、お前は義宣殿に苛立ちを覚えて、上手くやっていけない、と思ったのではないですか？」

やはり、そうなのだろうか。他人と自分の境遇を比べるつもりも、自分を不幸だと思うつもりもなかったが、もしかしたらどこかでいつもそう思っていたのかもしれない。

「お前は、義宣殿のことを何も知りません。まずは、義宣殿と話をすべきです」

義宣は何も言わないのだ。義宣のことを知ることは難しい。それに、祥のしたことを考えれば、今後義宣の渡りがあるとは思えない。だが、義宣が寝所を出て行く前に残した言葉が、祥の胸の中に引っ掛かっていた。あれは、どのような意味を持つのだろうか。それを思うと、養母に言われたとおり、義宣と話をしたいと思った。

## 岩瀬の姫（七）

義宣の頬を叩いてから、義宣の渡りがない。それならば、離縁されるかと思つたが、その気配もない。

養母に義宣のことを知るべきだと助言され、祥も少しその気になったのだが、義宣が現れないのならば話にならない。今の立場を考えると、祥の方から義宣に来てほしいと言えるはずもない。それに、どうしても義宣と会って話がしたいというわけでもない。

義宣に対する苛立ちと、義宣への興味が祥の胸の内ではせめぎ合っていた。今は、離縁されずにすんでよかった、と思つていればいいだろう。

義宣の渡りがないまま、養母と平穏な時を過ごしていると、突然大御台が祥と養母のもとへやってきた。大御台の顔はどこか嬉しそうで、このような顔を見るのは初めてだった。大御台はいつも、どこか冷たい空気をまとっていた。今日は機嫌がいいらしく、祥にも柔らかな笑みを向けた。

「阿南姉様、政宗殿が上洛するそうですよ」

「それが、どうかしましたか」

嬉々として政宗の名を口にした大御台に対して、養母は感情の見えない声で答えた。政宗の名を聞いた瞬間、祥もどきりとした。

「会いに行きませんか？甥に会いに行くのですから、義重殿も反対しないでしょう。政宗殿から、懐かしい伊達の話など聞きましょう。姫も、従兄に会いたくはないか？」

大御台は楽しそうだ。なぜ、楽しみに政宗のことを話すのだろう。政宗は蘆名も二階堂も滅ぼした人間だというのに。そのことが不思議だったが、大御台から悪気は感じられなかった。本当に、楽しそうなのだ。

「お芳<sup>よし</sup>」

楽しげな大御台に反して、養母の声は冷たかった。養母が大御台

の名を呼ぶと、部屋の中の空気が、冷たく張り詰めたものに変わった。その中で祥は、大御台の名は芳というのか、などと場違いなことを思っていた。

「お前は、本気で私たちにその提案をしているのですか？」

「阿南姉様？」

「私が政宗と戦ったのは五年以上前のことです。それでも、私は政宗と戦いました。須賀川の城は政宗に攻め落とされました。私は政宗に保護されましたが、それが嫌でお前を頼って佐竹に参ったのです。その私が、どうして政宗に会いましょう。それに、政宗は妹が亡くなった途端に蘆名家を滅ぼしている」

養母の口から実母の話が出た。養母の話を聞きながら、大御台は何も言い返せないようだった。祥も何も言えなかった。ただ、養母と大御台の会話を聞いているしかなかった。聞きながら、養母の静かで深い怒りが伝わってくる。

「そして、その政宗を助けたのはお前です」

「そんな、阿南姉様は私が姉様を死に追いやったとおっしゃるのですか？」

「何もそんなことは言っていないません。政宗は憎いけれど、お前のことを憎むつもりはありません。ただ、お芳、お前は愚かな女です」

「愚か？」

「そうです。お前は末娘で、伊達にいる頃から我儘で甘える子でしたが、それは今も変わらないようですね。私は、二階堂に嫁ぐ前にお前に教えたはずですよ。女は帰る家などないのだと。嫁いだ瞬間から、女は婚家の人間になるのだと。帰る時は、夫が実家に殺される時しかないのだと。私はそのような覚悟をして二階堂に嫁ぎます、お前も佐竹に嫁ぐときはその覚悟をなさい、と私はお前に言いました」

「はい」

「あの子は私と同じ覚悟をして、蘆名を守ろうと必死でした。最期まで、あの子は蘆名の女でした。そして、私は二階堂の女です。今

までもこれから、私は二階堂の女です。それに比べて、お前はどうか？お前は今でも伊達の末娘の気持ちが抜けないのですね」

「確かに、確かに姉様のおっしゃる通り。けれど、阿南姉様も伊達が滅んでしまうのは嫌ではありませんか？恐ろしくはありませんか？米沢が恋しくはありませんか？私は、伊達家が滅んでしまうなんて恐ろしくてたまりませんでした」

「だから、お前は愚かな女だと言うのです」

養母は大御台を一喝した。大御台は目を見開いた。

「お前はもう少し、義宣殿の気持ちや、蘆名の人間の気持ち、私たち二階堂の人間の気持ちを考えるべきです。私は政宗のもとには行きません。お祥はどうしますか？」

「わたしも、参りません」

突然話を振られて驚いたが、祥もはつきりと政宗には会いたくないと告げた。今でも、落城後に会った政宗の顔を覚えている。幼かった祥には、片目の青年が自分の従兄ではなく、自分たちを苦しめた悪鬼にしか見えなかった。だから、会いたくないのだ。

それに、養母の言葉が気にかかる。何を意味しているのだろう。

大御台が、政宗を助けた。それは、どういうことだ。

養母にも祥にも誘いを拒まれた大御台は、何か言いたげな顔をしながらも、黙って部屋を出て行った。だが、大御台が部屋を出てすぐに、あ、と呟く声が聞こえて、祥は部屋の外の様子を窺った。

そこには、大御台の目の前に立つ義宣の姿があった。その義宣と、一瞬目が合ったような気がした。

「義宣」

義宣にとって母親である大御台が義宣の名を呼ぶと、義宣は何も言わずに踵を返して、その場から立ち去った。大御台も何も言わなかった。

義宣が去り、大御台も去った後、入れ替わるように鏡田がやってきた。

「姫さま、今夜お屋形さまのお渡りがあるそうにございます」

「あら、そうなの？」

「ええ。突然お屋形さまに呼ばれたものですから、わたくしは驚きました。わたくしが姫さまにお伝えすると申し上げたのですが、お屋形さまはご自分で姫さまにお伝えなさるとおっしゃいまして」

「え？」

「ですが、やはりお前が行けと、先ほどわたくしに命じられたのです。まったく、お屋形さまは気まぐれなお方ですね」

「そう、分かったわ。ありがとう、鏡田」

義宣があそこにいたのは、祥に会いに来たからだったのか。なぜ、わざわざ自分で足を運んだのだろう。義宣は、養母と大御台の話を聞いていたのか。聞いていたならば、どこからどこまで。

助けを求めるように養母の方を見ると、養母は、自分で考えなさい、としか言ってくれなかった。

何も言わずに立ち去る義宣と、何も言わずに立ちつくす大御台。

政宗を助けたのはお前です。養母の声が脳裏で響いた。

おぼろげだが、義宣を形作る何かが少しだけ見えた気がした。

## 岩瀬の姫（八）

寢所にやってきた義宣は、祥のことを怒るかと思ったが、何も言わずに布団に入り、そのままひとりで寝てしまった。

仕方がないので祥もそのまま寝たが、義宣はわざわざ何をしに来たのだろうか。渡りがあることを、祥に直接伝えようとしていたのに、背中を向けてひとりで寝てしまうとは。

その後も、三日から五日に一度は義宣の渡りがあった。だが、義宣はいつも何も言わず、何もせず、ただひとりで寝るだけだった。義宣が背を向けてしまうので、祥は何も言えず、ただ義宣の隣で寝るしかなかった。義宣と話がしたいと思っていたが、それは叶わなかった。

離縁されるわけではなく、自分の身にも養母の身にも害が及ばないのなら、義宣の好きにすればいい。恐らく、世継ぎを儲けようとしていると見せかけるために、祥のもとへ来るのだろう。だが、自分を叩いた祥のことを許したわけではないから、背を向けて寝ているのだ。

そうだとしても、祥は心の片隅で、義宣が直接祥に会いに来ようとしていたことが引つ掛かっていた。その時、養母が大御台に言った言葉も忘れていない。

眠る義宣の背中を見ながら、祥は養母の言葉を考えていた。養母は、佐竹の大御台に、政宗を助けたのはお前です、と言った。言葉どおりに受け取れば、義宣の母は甥の政宗の命を救ったのだろう。だが、それが何を意味するのか考えなくてはならないのだ。

大御台と顔を合わせた途端、引き返した義宣。政宗を助けた大御台。大御台を叱った養母。

祥の中で、ぼんやりと見えていた糸が繋がった。

あの時、養母が怒ったのは当然だった。養母の言ったとおり、政宗は須賀川城を攻め、二階堂家を滅ぼした。伯母である養母を攻め



た。政宗の命がなくなっていたのなら、須賀川城は政宗によって攻め落とされることはなかったのだ。蘆名家もそうだ。

蘆名と二階堂が政宗に攻められた時、佐竹は援軍にかけつけてくれていた。その戦で、佐竹の大御台が政宗の命を間接的であっても救ったのだとしたら、それは佐竹に対する裏切りだろう。政宗が助かったことによって蘆名は滅び、二階堂は滅んだ。政宗は佐竹を攻めるために、邪魔になる須賀川城を攻めたのだから、佐竹が政宗によって攻められて、もし敗北していれば、今の佐竹家はなかった。

佐竹の大御台は、佐竹よりも実家の伊達家が大事なのだろう。だから、養母と祥に政宗と会わないかと誘ったのだ。恐らく、悪気はないと思うが、少し無神経だと思った。夫亡き後でも、嫁いだ家を守ろうとした養母や蘆名の母とは違う。祥は、母や妻というものは、養母や実母のようなものと疑ったことはなかった。だが、そうではないのが大御台なのだ。

そのことに思い至ると、悲しいような寂しいような気持ちになって、眠っている義宣を起こさないように、そつと背中に取り添った。それから、義宣の渡りは、途絶えずに半月ほど続いている。今日も侍女から義宣の渡りがあると告げられた。

夜になり、義宣は寢所にやってきた。いつもと同じように、何も言わずに布団に入ろうとする義宣を引き留めるために、祥は声をかけた。

「お屋形さま」

義宣は動きを止めて、ちらりと祥を見た。だが、返事はない。

「お話したいことがあります」

義宣の反応はなかったが、気にせず祥は言葉を続けた。返事はないが、聞いている気配はする。

「あなたのことを、わたしは知りたいのです」

「必要ない」

「大御台さまと養母の話聞いて、あなたと大御台さまの様子を見て、わたしは」

「それがどうした。それがお前に何の関係がある。それ以上、その話はするな」

祥の言葉を遮って、義宣が祥の方を向いた。義宣の目は怒りに燃えているようだったが、寂しそうな目でもあった。

「何も知らないくせに、分かったようなふりをして、その話をするな。お前には、俺の気持ちなど分からないくせに」

怒りを込められた低い声は、恐ろしさなど全くなく、ただ寂しさだけが伝わってきた。口では祥を拒みながらも、目が寂しいと訴えているように見える。

「俺のことを何も知らないくせに、俺の母のことも知らないくせに、知ったような口を聞いて、お前は優越感にでも浸っているのか？」

優越感に浸っているつもりはない。ただ、養母から義宣と大御台の話を聞いて、義宣と大御台の様子を見て、義宣のことを知りたいと思ったのだ。養母に言われたとおり、祥は義宣のことを何も知らない。だから、話をして義宣を知りたい。

「お前は何も知らない。お前に分かるはずがない」

「知らないから、分かりたいと思いました」

義宣の気持ち分かるはずない、と言われてしまえば確かに分からないのだろう。だが、察することはできるはずだ。

「お前は、以前俺が他人を認めないと言ったな。それは間違いだ。誰も俺を認めなかった。俺は佐竹の当主としての飾りだ。信じていたものには裏切られた。母親に愛されて育ったお前には、この気持ちは分からないだろうな。俺の母親は、お前の母親とは違う。お前の産みの親とも、養い親とも姉妹のはずなのに、全く違う。お前の母親を基準に考えるなよ」

自分の母親を基準に考えるな、と言われても、祥にとって母親というのは自分の母親たち以外にいないのだから、どうしてもそれが母というものだと思ってしまう。だが、大御台はそうではないのだとは思っていたし、この義宣の口ぶりからもそれがうかがえた。

「俺は」

それ以降の言葉が続かない。恐らく一瞬だったのだろうが、祥には長い沈黙が訪れたような気がしていた。

「母親に愛されなかった」

沈黙を破った義宣の言葉に、祥は胸が痛んだ。なぜ、義宣は自ら愛されなかった、などと悲しいことを言うのだろうか。大御台が政宗を助けたからか。そのことが、義宣を苦しめているのか。

眉を寄せ、苦しげな顔で、愛されなかったんだ、と義宣は呟いた。愛されなかった、と口にするたびに、義宣は自分の言葉に傷ついているようだった。それはそうだろう。母親に愛されないということは、子どもにとってとても悲しい。祥には想像することすらできない。

「だが、俺は」

再び沈黙が訪れた。義宣は眉間に深い皺を刻んでいる。

「母上に愛されたかった」

ぼつり、と呟くように言われた一言が、胸に刺さった。愛されなかった、という言葉よりも深く、生々しく、祥の胸の柔らかい部分を抉るように突き刺さった。

「本当は、ずっと愛されたかった。母上に、愛されたかった」

絞り出すような義宣の声から、義宣の痛みを痛切に感じた。愛されなかった、と言った時以上の痛みと渴望を感じた。まるで、血を吐くような言葉だった。

祥にとっては、今まで何の疑問も抱かず、当然のものだと思っていた母親の愛情を渴望して、愛されたい、と願う義宣の姿は、痛々しく、悲しく、寂しかった。

祥には想像もつかない苦しみと悲しみの中、義宣はずっと愛に飢えていたのか。母親に愛されない苦しみ、祥には分らない。だが、初めて垣間見た義宣の心の内を察するだけで、祥は泣きたくなかった。蘆名の母にも、二階堂の養母にも愛されていなかったら、自分はどうなっていたのだろう。

俯いて、布団を握りしめる義宣の頭を抱きよせ、胸に抱いた。体

勢を崩した義宣の体が祥にもたれかかってくる。その重さを支えるように、きつく義宣の頭を抱きしめた。義宣は祥に抱きしめられて、体を強張らせた。

「お屋形さま」

義宣を抱く腕の力をゆるめ、義宣の顔をじつと覗きこんだ。拒絶と期待が入り混じったような目が、不安げに揺れている。その目は、幼い子供のようなだった。

「わたしがあなたを愛すわ」

祥の言葉を聞いた瞬間、義宣は目を見開いた。信じられない、と言いたげだった。そして、祥から離れようとする。だが、拒みながらも、すぐるように義宣の心が手を伸ばしてきたような気がして、祥は義宣の腕を掴んだ。

もしかしたら、義宣の言う通りなのかもしれない。優越感に浸っているのかもしれない。義宣は哀れだと、同情しているのかもしれない。だが、愛されたい、と願った義宣の心は純粹で、とても愛しいと思ったから、義宣の腕を掴んだのだ。

「大丈夫、怖がらないで」

掴んだ腕を撫で、拒もうとする手を握り締める。じつと祥を窺うようにして見つめる義宣に対して、微笑んでみせると、逆に腕を掴まれ、義宣に抱き寄せられた。

義宣の胸に顔を埋める。愛を求める義宣の心の声が聞こえるような気がした。義宣の背に腕を回して、そっと撫でると、祥を抱きしめる義宣の腕の力が強くなった。

静寂が訪れる。祥には何も聞こえなかった。ただ、義宣の悲しみと寂しさを、抱きしめられた腕の中で感じていた。まるで、この時だけはこの世に祥と義宣の二人しかないようだった。

## 岩瀬の姫（九）

義宣の涙が、祥の肩を濡らした。

大人が寂しいから泣くということを、考えたことがなかった。大人の男が泣くということを考えたことがなかった。だが、いくら年を重ねても、寂しさや辛さを感じなくなるわけがないのだから、大人が泣くのも当然だろう。

そのことを今更感じた自分は、どうしようもない子どもなのだと思うた。義宣の胸に顔を埋めて、祥も泣いた。なぜ泣いているのか、そんなことは分からなかった。

そのまま寄り添いあつて眠り、祥が目を覚ました時には、義宣は祥の部屋からいなくなっていた。

義宣がいなくなつてから、出会つてから今まで、義宣に言つたことを思い返していた。義宣に自分を不幸だと思つているのかと言つた。自分以外誰も認めていないのだと言つた。思い返すと、随分と無神経なことを言つて、義宣の心の内側を踏みじろつとしたものだ。

義宣の言つたとおりだ。祥は何も分かつていなかった。自分が正しいと思つたことを義宣に押し付けていただけだから笑える。

境遇を比較していたのは義宣ではなく祥だった。その人が辛いと思つたのなら、それはその人にとって誰よりも辛いことだというのに、そのことに気づかなかつた。

少しだけ義宣の心に触れた今、祥が義宣に言つたことは、義宣を傷つけたのかもしれないと思うようになった。だが、だから言つて義宣の言動の全てを許せるわけではない。それは別の話だ。いくら、母に愛されなかつた、愛を知らなかつたと言つても、祥を目前にして道具のように利用するつもりだと言つたことは許せなかつたし、卑屈な態度や性格もどうしたものかと思う。

「お祥、また何か悩んでいるようですね」

「お養母さま」

「義宣殿のことでしょう？」

部屋に入ってきた養母の言うとおりなのだが、素直に認めるのは恥ずかしく、祥は何も言わなかった。養母はただ頷いて、祥の隣に座った。

「お養母さま、わたし、あの方のことを理解したいと思います。それはとても難しいことかもしれないけれど、あの方の心を理解したい」

「そうですか。けれど、他人のことを完全に理解することは不可能です。いいえ、できなくていいのです。ただ、完全に理解することはできずとも、思いやることはできますよ」

「人の腹の痛みを察することはできる、ということですね」

「ええ。大事なことは、相手の聞いてほしい話を聞いて、相手の望む言葉をかけること。お前が相手の言葉を聞いて、相手のことを思つて、心が感じたことを言葉にすれば、きっとそれは相手の望む言葉になるでしょう」

「はい」

義宣が聞いてほしい話。義宣がかけてほしい言葉。それは一体何なのだろう。もっと義宣の心に近づきたい。

それを知つて、義宣の心に近づいてどうするのか。自分でも上手く説明できない気がする。愛を求める義宣は愛しいと思ったから。それは義宣に近づきたいと思う理由にならないだろうか。義宣のことを愛しいと思う気持ちと、義宣の言動を許せない気持ちが胸の内に入り混じっている。それでも、義宣の思いに触れて、確かに祥の心は動いた。

義宣が愛を知らないと言うのなら、愛されたいと願うのなら、祥は義宣の愛になりたかった。

岩瀬の姫が言った言葉を、そっくりそのまま信じているわけでは

なかった。

だが、信じたいという気持ちがあった。初めてだ。他人にあんなことを言われたのは。

わたしがあなたを愛すわ。

何度も胸の中で、岩瀬の姫に言われた言葉を繰り返す。正直なところ、嬉しかった。光が差し込んだような気がした。

義宣は今まで、暗闇の底で膝を抱え込んでいるようなものだった。愛されたいと願いながら、何もしてこなかった。それでも愛されたいと願うことをやめられず、幼い子どもを同じ暗闇に引き込んだ。

何も見えない暗闇の中、手探りで金阿弥を抱きよせ、腕の中に閉じ込めた。必死にすぎた。自分には金阿弥だけだと思っていた。

金阿弥は義宣が自ら選んで、暗闇の中に連れ込んだ。逃げ出さないように、義宣だけを見るようにしてきた。だから、金阿弥は信じることができた。金阿弥は義宣を愛してくれた。認めてくれた。義宣も金阿弥だけは認めていた。愛していた。そう思っていた。

だが、岩瀬の姫は違う。側室に選んだのは義宣だが、姫は義宣を拒んだ。おとなしく義宣のものにはならなかった。だが、正面から義宣を見てくれた。金阿弥のように義宣の囲いの中からではなく、外の世界から義宣を見てくれた。そして、きつい言葉で義宣の内面に踏み入ろうとした。義宣の言動に本気で怒っていた。そんな人間は初めてだった。

だからだろうか、義宣も初めて自分の気持ちを他人にぶつけた。

姫はそれを受け止めてくれた。

わたしがあなたを愛すわ。そう言って、義宣に微笑みかけた。義宣の腕の中で、涙を流した。その涙は、義宣の胸に沁みこむようだった。

今夜は、姫の所へ行く予定はない。昨日の今日で、どのような顔をして会えばいいのか、何を話していいのか分からなかった。だが、なぜか足が姫の寝所へと向かった。姫と伯母が母と話をしていたところに出くわした時も、侍女に頼めばよかったのに、なぜか足が姫

のもとへと向かったのだった。

知らせも何もなく出向いたところで、姫は寝ているだろう。そのことは分かっているというのに、なぜ自分は姫のもとへ向かっているのだろう。

姫の寝所の近くまで来て、義宣は足を止めた。驚いた。姫が、寝所の外で空を見上げていた。それを見て、義宣も空を見上げた。今夜は満月か。道理で明るいはずだ。

「お屋形さま」

義宣の存在に気づいた姫は、驚いたようだった。姫のもとへ歩いていき、隣に腰を下ろした。姫はまだ驚いているのか、じっと義宣を見つめているようだった。

「眠れないのか」

「ええ。ですから、外へ出てみたら、満月でしょう？とても綺麗でしたので、見ていました」

「そうか」

義宣が黙ると、姫も黙った。確かに、月は姫の言ったとおり、美しかった。だが、心がざわめいた。波紋が広がるように、静かに。

「姫」

「はい」

月を見上げたまま、姫を呼んだ。姫が義宣の方を向いた気配がした。

「話したいことがある」

何を言っているのだろう。何を話すというのだろう。おかしい。

姫のもとへ勝手に足が動いた時から、自分ではないようだ。だが、言葉は止まらなかった。自然と口からこぼれていた。

「聞いてくれるか？」

義宣も、ようやく姫の方を向いた。姫の目と義宣の目が合う。姫は、昨夜と同じように微笑んで頷いた。

「では、お部屋の中で。ここでは、体が冷えてしまいます」

「ああ」



姫に手を取られ、義宣は寢所の中へ招かれた。姫の姿を月が照らしていた。あたたかい光だと思った。

## 那須の女と伊達の女（一）

城内は朝から騒々しかった。出迎えの支度は整ったのか、婚儀の準備に抜かりはないか、家臣たちや侍女、女中たちは慌ただしく駆け回っていた。

その騒がしさの中、義宣は自室でひとり黙って座っていた。義憲や義久が様子を見に来たが、追い返した。ひとりでいたかったのだ。義宣の許嫁である那須家の姫が、今日佐竹家へ輿入れする。

那須の姫は、義宣が三歳の時に許嫁と決められている。那須家との和睦の証の婚約だったそう。その時、那須の姫は五歳だったと聞いている。義宣よりも二歳年上の姫だ。

義宣と那須の姫の婚約が成立した時に、父は盛大な結納を那須家へ送ったとも聞いている。だが、その後十三年もの年月が経ち、那須の姫の父は死に、義宣も自分の許嫁のことなど忘れてしまいそうになっていた。今更になって、正式に結婚が決まった。

許嫁と言っても、義宣は那須の姫のことなど何一つ知らない。那須家へ婚儀の取り決めの使者として赴いた家臣は、那須家の末娘として大層可愛がられた美しい姫だと聞いていると言っていた。

どのような姫がやってくるのか。しかも相手は年上だ。緊張する。だから、誰にも会いたくなかった。緊張している姿を見られたくなかった。

「若殿」

声をかけられ思念が途切れた。振り返ると、義宣の傳役であった山方久定がいた。久定は嬉しそうににこりと笑った。

「那須の姫君がご到着なさいました」

「分かった」

胸の鼓動が速くなった。分かった、と言った声が上がっていた。よくな気がする。久定とともに、那須の姫を出迎えに行ったが、歩いている感覚がなかった。

「どうやら、輿渡へ出向いた者の話によりますと、那須家からの護衛の者はこちらまでついてきたそうにございます」

「そうか」

「何でも、那須の姫君が、帰ろうとする者たちを引き留め、こちらまでつれてこられたとか」

「そうか」

花嫁の嫁行列は、領地の境目など婿側の家と嫁側の家で定めた場所、実家から婚家へ引き渡されることになっている。そうすることで、両家の婚姻は対等の立場で行われたものだと言張するのだと父が言っていた。

輿渡が済むと、嫁行列の護衛はそのまま婚家までついてくるか、実家へと帰るか、どうするべきと決められているわけではないのだから、那須家の者がこの城までついてきても問題はないのではないのか。

「わざわざ引き留めてまでこちらにつれてこられるとは、那須の姫君は寂しがりなんでしょうか」

「そうかもしれんな」

「若殿」

「何だ」

「いいえ」

久定の言いたいことは分かる。緊張しているのか、と聞きたいのだろう。確かに緊張している。久定の話に返事はしているが、どれも生返事になってしまった。

緊張しているせいで早足になってしまったのか、思っていたよりも早く輿の前に到着してしまった。義宣の姿を見て、家臣たちが頭を下げた。それを見て、輿のすぐそばに控えていた少女が、輿の中に囁きかけた。その少女は、恐らく那須の姫が実家から連れてきた侍女なのだろう。

少女は頷くと、輿の前に履物を揃えた。輿から細い足が覗いた。すっと目の前に那須の姫の姿が現れた。だが、姫は頭を下げたので、

髪に隠れて顔は見えなかった。

一瞬の間の後、姫が顔を上げた。隠れていた顔が見えた。視線がぶつかったが、姫の表情は硬かった。

それでも、美しい姫だと思った。このように美しい女を見るのは、初めてだった。

その後、婚儀の準備が行われた。義宣も衣装を婚礼用に改められ、白無垢を着た姫と二人並んで座った。

仲人に酒を注がれ、三三九度を行い、夫婦の契りを誓った。これで義宣と姫は正式に夫婦となったのだが、杯を重ねただけで夫婦になったのだと言われても、全く実感はなかった。

家臣たちは義宣と姫の婚礼を喜んでいるようだった。父も嬉しそ<sup>う</sup>だった。義宣に結婚をしたという実感はなかったが、宴は盛り上がった。だが、その騒々しさの中、母の顔だけはいつまでも陰しいままだった。

婚礼の宴が終わり、義宣と那須の姫は寢所へ向かった。婚儀は終わった。これからは、この那須の姫と夫婦として生きていくのだ。

今宵が明けて初めて、義宣と姫は夫婦になる。

「那須資胤の娘、八重なすけたねにございます」

「佐竹次郎義宣だ。よろしく頼む、八重殿」

「はい、次郎様じろうさま」

二人の間に沈黙が流れる。八重はにこりとしなかった。輿から下りた時と変わらない、硬い表情のままだ。あの時は八重も緊張しているのかと思ったが、今もまだ緊張しているのだろうか。それとも、笑うのが苦手なのだろうか。

家と家同士の政略結婚に、大きな期待をしていたわけではないが、ここまで堅苦しいとは思わなかった。八重の表情が硬いままなので、義宣も緊張してしまう。寢所の空気は重苦しかった。

「八重殿」

八重の細い手首を掴むと、八重の肩が震えた。八重の表情が硬かったのは、やはり緊張のせいだったのか。

そのまま手を引き、八重を抱きしめた。腕から義宣の緊張が伝わって、八重に笑われてしまうかもしれない。手が震えそうだ。

ぎこちない動きで八重を褥に横たえる。八重はおとなく義宣のなすがままになっていた。八重の白い肌が薄暗い部屋の中に浮かび上がる。美しいと思った。

義宣と八重の影が重なり、二人は夫婦になった。

だが、最後まで八重の表情は硬いまま、緊張ではない冷たさを感じた。その冷たさは、母に似ていると思った。

## 那須の女と伊達の女（二）

佐竹義重は那須に勝てぬと思ったから、自分の嫡男の妻に八重を迎えたいと言いつ出し、和睦を願ったのだ。

八重が佐竹義重の嫡男の妻と定められた五歳の時から、父は何度もこのことを八重に言い聞かせた。

佐竹義重は、義重の父である義昭が父ととりかわした盟約を破つてから、ずっと父との戦いに明け暮れ、一度も父に勝つことができなかった。結城義親の協力を得て父に挑戦した時も、義重は勝利を得ることができなかった。那須の三倍近くの兵力を持ち、物量も那須にはるかに勝る佐竹が、那須には勝てなかったのだから、これは実質的に佐竹の敗北だ。

いつまでも那須と戦っているわけにもいかなないと判断した義重は、嫡男の妻に八重を迎えたいと父に申し出、数多くの神々に誓って和睦を結んだ。

父は佐竹がついに那須に屈服したのだと、このことを誇りに思っていた。八重がいずれ義重の嫡男と正式に結婚し、佐竹家に輿入れすることになっても、相手が申し出た婚姻なのだから、下手に出る必要はないと聞かされていた。

だが、義重は父と和睦を結んで半年足らずで、那須に兵を向けた。何度戦っても、結局佐竹は那須に勝てなかった。父は良い気味だと言っていた。和睦の約束を反故にされても、最初は、こちらにとつて都合の良い条件で八重を嫁がせることができるかもしれない、と思っていたようだが、次第に父は怒りだし、八重を佐竹に嫁がせるつもりはなくなったようだった。

八重には、もっとふさわしい男を探そう、と言われた。父は八重に甘かった。兄も八重に優しくかった。八重は末娘で、八重が生まれた頃、二人の姉はすでに嫁いでいたし、兄とも十一歳年が離れていた。年を取ってからの子どもだから、父は八重に特別甘かったのだ。

ろう。兄も年の離れた妹を可愛いと思ってくれていたのだと思う。

八重の下には腹違いの弟がいたが、異母弟は寺に預けられており、父も母も、兄も八重が独占しているようなものだった。

父も母も好きだったが、八重は特に兄のことが好きだった。

八重が物心ついた時から、兄は父に従い出陣し、華々しい活躍をしていた。八重が将来嫁ぐかもしれない佐竹との戦いでも、兄はいつも勇ましく戦い、佐竹を退けてきた。そんな兄が幼い八重には眩しく見え、その分佐竹は取るに足らないつまらない存在に思えた。

父は八重を佐竹に嫁がせる気はなくなっていたが、八重も兄に負け続ける佐竹になど、いくら相手から望まれても嫁ぎたくないと思っただ。

兄が城にいる時は、いつも兄の後ろをついて歩いていた。兄はどんなに忙しくとも、八重には優しくかったし、可愛がってくれた。兄のことが大好きだった。

兄が妻を迎えた時は、もう八重の兄ではなくなったようで、悲しかった。落ち込む八重を気遣ってくれたのか、兄は家臣の娘で八重と年の近い吉野よしのを八重の側に置いた。

吉野は明るく素直で、すぐに仲良くなった。だが、八重の口から出るのはいつも兄の話ばかりで、吉野には笑われてしまっていた。

八重が十六歳の時、父が死んだ。義重と和睦を結んだ父が死に、義重の嫡男の許嫁になって十年以上が過ぎても結婚の話が出ないのだから、結婚の話は自然と消滅したものと思っていた。父の死後、佐竹との婚姻について、父の跡を継いだ兄も何も言わなかった。

だが、父が死んで一年ほど経った時、突然兄から、年が明けたらいつでも佐竹家に嫁げるようにしておくように、と言われた。

「何故ですか？父上は、わたくしを佐竹に嫁がせる気などないと仰っていたのに」

「その父上が亡くなり、私の代になったから、佐竹は改めて和睦を結べると考えたのだろう。頻繁に使者を寄越して、那須との和睦を願っている」

「父上にも兄上にも勝てぬ佐竹など、また兄上のお力で追い払えば  
よろしいではありませんか」

「八重、私は確かに佐竹に負けない自信はある。だが、勝つことは  
できないだろう。このまま争いを続ければ、いずれこちらも危うく  
なるかもしれない。ならば、相手が下手に出ているこの時に、和睦を  
結ぶべきだと思うのだ」

「わたくしは、佐竹に嫁ぐのは嫌です」

兄の言うことは分かるが、佐竹に嫁ぐのは嫌だった。我が儘を言  
うと、兄は困ったような顔をして、幼いころにしてくれたように、  
八重の背中を撫でてくれた。

「八重、耐えておくれ。相手からの申し出なのだから、下にも置か  
ぬもてなしを佐竹はするだろう。私も、お前が嫁いだら決して佐竹  
は攻めぬと約束する。それに、輿入れには吉野も連れていけばいい。  
吉野がいれば、少しは気が晴れるだろう？」

兄の説得に、八重は頷かざるを得なかった。幼い頃から八重を可  
愛がってくれた兄は、おそらくこの結婚に乗り気ではない。だが、  
那須家の将来のことを考えれば、佐竹との縁組は悪いことではない  
と判断したのだ。仕方がない。兄は、幼いころの昔のように、八重  
だけの兄ではない。那須家の当主なのだ。

「分かりました。兄上のためならば、わたくし佐竹に参ります」

八重の返事を聞くと、兄は輿入れの準備に取り掛かった。準備は  
順調に進み、年明けにはいつでも輿入れできるようになっていた。  
吉野と一緒に佐竹に来てくれるように言うと、常陸はどのようなと  
ころか楽しみだ、と吉野は無邪気に笑った。嫁いでも吉野がこうし  
て笑っていてくれたら、心が休まると思った。

両家の準備が整い、八重は佐竹に輿入れすることになった。兄に  
別れを告げる時は、泣きそうになった。

国境近くで佐竹からの出迎えが、八重の花嫁行列を待っていたが、  
八重は那須からついてきた者たちを常陸まで連れて行った。相手か  
ら望まれて、八重が輿入れをしてやるのだから、そのくらいは許さ



れて当然だろう。

城に到着し、八重を出迎えた義重の息子に、形ばかりの挨拶として頭を下げた。顔を上げた時、わずかに義重の息子の顔を見たが、兄とは全く違う男だという印象しかなかった。

婚礼の宴は源氏の名門を誇っているせい、無駄に盛大で、格式張っていて、嫌気がさした。家臣たちは、表面上は喜んでいようだったが、その中に、なぜ那須の姫などと、と八重を馬鹿にする視線が混じっていることにも気付いた。誰よりも、姑の冷たい眼差しが八重を認めていなかった。

宴が終わり、夜が更け、夫婦として初めての夜を過ごしても、夫である義宣はつまらない男だと思った。いくら兄のためとはいえ、これから死ぬまでこの佐竹の中で暮らすのかと思うと、気が滅入った。

夜が明けて、八重の身支度を整える吉野に、那須に帰りたい、と言いたくなったが、吉野に笑われると思い、言わなかった。だが、それは八重の本心だった。

### 那須の女と伊達の女（三）

佐竹に輿入れをしてから、まだ義重とその妻へ挨拶に行っていないかった。義宣は、八重がとうに挨拶は済ませていると思っているのか、何も言わなかった。八重という時の義宣は口数が少なく、いまだに緊張しているようだった。だが、吉野が毎日早く挨拶に行くよう勧めてくるので、仕方なく吉野を連れて挨拶に行くことにした。

「私がお屋形様と大御台様に、姫様がご挨拶に伺われるとお伝えしたら、お二人ともお喜びでしたよ」

「吉野、そなたあの夫婦に騙されているのではないの？」

「そんなことはありませんよ。もう、姫様。姫様は御台様になられたのですから、もう少し佐竹の方々と仲良くなさっても」

「嫌よ」

「そんな、せめてお殿様とはもう少し仲良くなさってくださいよ。お殿様は姫様のことが好きのようではありませんか。頻繁に姫様のもとへいらっしゃいますし、私が見ている限りでは、いつも姫様のことを見つめていらっしゃいますし」

「年上の女が珍しいだけでしょ」

もし吉野の言うとおり、義宣が八重に好意を抱いているのだとしても、八重は義宣と仲睦まじい夫婦になるつもりなどないのだから関係ない。それに、八重に対していまだに緊張している義宣のことは、つまらない男とは思えない。夫婦になってからまだ一月も経っていないが、八重の義宣に対する印象は、つまらない男でしかなかった。

吉野と話をしながら歩いていると、義重と大御台の待つ部屋の近くまで来ていた。吉野に下がっているようにと手で合図をし、部屋に近づいた。

「私は那須の姫など認めません」

部屋の中から聞こえた女の声に、八重の動きが止まった。この声

は姑の声だろう。その声の後に、ため息も聞こえた。これは、義重か。

「何を言っている」

「私は義重殿が、義宣の許嫁に那須の姫を選んだ時から反対でした。義重殿はそれをご存知でしたのに、なぜ今さら那須の姫を義宣の妻に迎えられたのですか」

「それは、近く的那須と和睦を結ばなければ、遠征の時に危ういからだと何度も説明しただろう」

「しかし、もつと名門の姫を迎えるべきだったと私は思います。那須家など、源氏に従った那須与一の末裔ではありませんか。なぜ源氏の名門が那須の姫など」

「芳」

「私は、義宣には伊達の姫を妻に迎えさせたかった。しかし、今の伊達家には姫がおらぬ。ですから、蘆名の姫を迎えればよろしかったのに。確か、義宣よりも七、八歳年下の姫が蘆名にはいたはず。その姫は、私の姉の子ですから、伊達の血を引いていますし」

「その話は聞き飽きた。大体、対馬が言っていたではないか。義宣は那須の姫を美しいと言っていた、気に入っているようだ、とな。

義宣が姫を気に入っているのなら、それで良いのではないか？お前も姫を認める」

「あの女は、佐竹の人間ではありません」

「いい加減にしないか」

義重が姑を怒鳴りつけたのと同時に、失礼いたします、と声をかけて八重は部屋の中に入った。

その場の空気が凍りつくのが分かる。義重は少しうろたえているようだったが、姑は全く動じることなく、八重を見ようとしてもいなかった。

「ご挨拶に伺うのが遅くなりまして、まことに申し訳ございません。那須資胤の娘、八重にございます。佐竹家との和睦がかない、兄、資晴も喜んでおりました」

八重がにこりと笑ってみせると、義重は安心したのか、笑みを浮かべた。

「わしも資晴殿と縁を結べたこと、嬉しく思っておる。どうか、義宣と睦まじく暮らしてくれ」

義重の言葉に笑みを返し、それ以上は何も言わず、八重は姑の方を向いた。

「大御台様」

声をかけても、姑は八重の方を向かなかった。

「わたくし、先ほどの言葉嬉しく思いますわ」

「姫？」

「だって、わたくし嫁いできてから今まで、一度も自分を佐竹の人間だと思ったことなどありませんもの。貴方が実家の伊達家を大事に思うように、わたくしも那須家が一番大事です。ですから、わたくしこれから佐竹の人間になるうとは思いません。わたくしは、那須の女です」

にこりと微笑んだまま姑に向かってそう言うと、ずっと八重を見ていなかった姑がようやく八重を見た。八重を拒む冷たさを体全体から感じさせていたが、目だけは燃えるように八重を睨みつけていた。

「姫、すまぬな、こいつの言ったことは気にしないでくれ」

「ええ、わたくし気にしておりません。事実ですから」

慌ててこの場を取り繕おうとする義重に頭を下げて、八重は部屋を出た。部屋の外で待っていた吉野が声をかけてきたが、それに答えず足早に自室へ戻った。

やはり、姑は八重を認めていなかった。義重も口では八重を喜んで迎えているように言っていたが、白々しく聞こえた。本心では、義重も那須の姫は迎えたくなかったのかもしれない。

佐竹がどうしてもと望むから、わざわざ嫁いでやったというのに、この扱いは何なのだ。

吉野も対馬とやらも義宣は八重を気に入っているようだと言って

いたが、そんなはずはない。義宣はあの姑の息子だ。義宣も恐らく八重を馬鹿にしているに違いない。

源氏が何だ。佐竹が何だ。那須とて那須与一から続く下野の名族だ。わたくしは那須の女。佐竹の人間などにはならないわ。

「姫様、どうなさったのですか？」

「吉野」

部屋の中で座り込んでいる八重の顔を、吉野が心配そうに窺った。吉野は部屋から離れたところで待たせていたから、姑の言葉を聞いていなかったのだろう。

「吉野、わたくしは那須の女よね？」

「え？ええ、姫様は那須家の姫様です」

「そうよね」

八重は那須の女だ。佐竹に嫁いだところで、その事実が変わりはない。姑の言うとおり、八重は佐竹の人間ではないのだ。

嫌みのつもりで、義重と姑に笑顔で告げた言葉は全て八重の本心のはずだ。姑の言ったことなど気にしてはいない。事実だ。それなのに、なぜ息が詰まるような思いがするのだろう。

「那須に帰りたい」

涙が手の甲に落ちて流れた。なぜか涙が止まらなかった。

姑が憎い。姑の息子である義宣も嫌いだ。義重も嫌だ。佐竹という堅苦しい名門が嫌で憎くてたまらなかった。

那須に帰りたい。だが、帰れない。兄の為に嫁いできたのだ。八重が実家に戻りたいと言い出せば、また那須と佐竹は争いを始めるかもしれない。兄に迷惑をかけるのは嫌だ。

「姫様」

八重が泣きだしたのにつられたのか、吉野の声も涙声だった。

大丈夫、八重には吉野がいる。佐竹が八重を認めないというのなら、八重も佐竹を認めない。八重は那須の女として、好きに振る舞わせてもらう。死ぬまで、八重は那須の女だ。

## 那須の女と伊達の女（四）

八重が佐竹家に嫁いできてから半年以上が経った。半年以上が過ぎて、八重の態度はかたくなで冷たいままだった。

初めは、実家を離れて不慣れな生活を送ることに対する不安が、八重の態度を冷たくさせていたのかと思っていたが、そうではないようだ。八重は義宣に心を開こうとしていない。八重は体を重ねることを拒みはしないが、義宣の腕の中では心のない人形のようにだった。

義宣は八重が嫁いできてから、時間のある時は頻繁に八重のもとへ足を運んだ。特に何か話があるわけではなかったし、話をするわけでもなかったが、八重の顔が見たかった。いつかは、八重の笑った顔が見られるのではないかと思っていた。那須家から同行している吉野という侍女と話している時の八重は、義宣には見せたことのない柔らかい顔をしていたのだ。

いつか、八重が義宣にも吉野に見せるような顔を見せてくれるかもしれない。まだ一年も経っていないのだ。

最近、出陣中の父の留守を任されているため、以前のように八重のもとへ足を運ぶことはできていないが、父が戻ったらまた会いに行こう。来るなど言われてはいないのだから、完全に嫌われているというわけではないと思う。

父の留守中、義宣が父の代わりを務めているが、まだ頼りないと思われているのか、老臣たちは色々口出しをしてきてうるさかった。義宣が何か一つ決めようとするたびに、忠告という名の指図をしてくるような気がする。父が今の義宣と同じ十六歳の時には、義宣の祖父である義昭から家督を譲られていたのだと、父と比べるようなことも言われた。まるで、父が十六歳だった頃に比べ、義宣は不出来だと言われているようだった。

中には、御台様にご懐妊の兆しは見えますか、と言ってくる家臣

もいた。お前には関係のないことだと怒鳴りつけたくなった。八重が義宣に心を開いていないことを指摘されたような気持ちになった。老臣たちに口出しをされながらも、黙々と父の代わりを務めて毎日进行していたが、出陣中の父が血相を変えて城に戻って来た。

義宣が留守を預かっていた太田城の、目と鼻の先にある水戸城の江戸重通が安房の里見義頼と手を組み、佐竹を攻めてくるという知らせを受け、一夜のうちに兵をまとめて帰陣したのだと父は言った。

だが、江戸と里見が攻めて来る気配は全くない。留守を預かっていたのだから、そのような気配があれば義宣も家臣たちも気がつくはずだ。父の話に首を捻るしかなかった。

「義宣、わしは急を告げるお前の書状を見て、太田へ戻って来たのだぞ」

「私の書状ですか？」

「そうだ。お前が、江戸と里見が攻めて来る、急ぎ帰られたし、と告げたのではないか。明日は政宗の首を討ち取らん、と意気込んでいたところに、この書状が来たのだ。この書状で、勝利を逃したようなものなのだ」

「私は、そのような書状知りません」

父と家臣たちの視線が刺さる。父は書状を取り出して義宣に見せたが、全く心当たりがなかった。義宣の筆跡に似せて書いたようだが、義宣が書いたものではない。だが、事実その書状が届いたせいで、父は勝機を逃し、政宗の命を長らえさせてしまったのだ。

「義重殿、ご無事のご帰還、何よりでございます」

緊迫した空気を破るように、母の声が響いた。にこりと微笑んだ母と、握りしめた書状を交互に見て、父は母を睨みつけた。

「話がある。お前も来い」

父に連れられ、母の部屋に三人で集まった。父が義宣から送られたという書状を、母に突き出すと、母の表情が能面のように冷たくなった。

「これは、お前が書いたものだろう？」

「義重殿、私は女です。何故この書状のように男字を書けましようか。義宣からの書状なのですから、義宣が書いたものでしょう」

「義宣は知らぬと言った。大体、太田の留守を預かっている義宣が、江戸や里見が攻めて来るなどという馬鹿げた嘘の書状を、戦場に送るはずがない」

父の言葉に母は黙り込んだ。父の言うことはもつともだ。義宣は何も知らない。だが、この書状を本当に母が書いたというのか。何のために。義宣は、父と母のやりとりをただ黙って見ているしかなかった。

「お前は、いつも何かあれば伊達のことを口にする。今回の戦も、政宗と戦わないでほしい、と出陣前に言っていたな。この書状が届く前に、小野崎が死んだ。陣中で刺殺された。我が軍は、小野崎の無念を晴らす意味も込めて、伊達との決戦に意気込んでいたというのに、この書状だ。まさか、小野崎のことも、お前が仕組んだことではないだろうな」

小野崎というのは、今回の戦で将として軍を任されていた小野崎義昌のことだ。その小野崎が陣中で刺殺された。その後に、あの書状が届いた。話が上手く出来過ぎている。だが、まさかいくら母が伊達家の出身だとしても、そこまで露骨なことはいはずだ。

母の表情を窺うと、母は冷たい顔のまま小さくため息をついた。

「義重殿の言うとおり、この書状は私が出したものです。私の手では男字が書けませんので、東義久に命じて書かせました」

「お前は、自分が何をしたのか分かっているのか。お前のせいで小野崎は死に、勝機を逃した」

「確かに私は書状を出しました。それは政宗殿の命を助けようとして行ったことです。しかし、小野崎のことは私の関与する所ではございません。偶然です」

母の言葉に義宣は愕然とした。母は何を言っているのだらう。政宗を助けようとした。しかも、義宣の名をかたって、偽の書状を出した。



父は怒りを露わにして立ち上がった。手を振り上げ、母を打つのかと思ったが、父は母を打たなかった。ただ、深いため息をついただけだった。握りしめた拳は、怒りで細かく震えていた。

「お前が、政宗を助けたい、伊達家を助けたい、という気持ちは、わしが佐竹を守りたいと思う気持ちに置き換えれば、理解できないこともない。今回の戦は、政宗にとっては亡き父親の仇討ちだったお前にとっても、兄の輝宗殿を死に追いやった畠山は憎かったのだろう。それに味方したわしを憎いとも思っただろう。だが、お前の兄も今回の戦で政宗と戦っているのだ。お前の気持ちだけで、戦を左右する行動を取るな。分かったな」

母は何も言わなかった。黙って父の話を聞いているだけだった。自分の行動を後悔しているのか、正しかったと思っっているのか、母の表情からは読み取れなかった。

今回の戦は、もともと伊達家と畠山家の確執が原因だった。畠山義継は伊達家との和睦の際に、政宗の父親である伊達輝宗を拉致した。政宗は義継を討ったが、輝宗も命を落とした。その仇討ちとして、義継の子どもである国王丸を攻め、国王丸に助けを求められた父や蘆名家が、母の兄である石川昭光たちと手を組み政宗と戦ったのだ。

「中務は、わしの妻であるお前の頼みを断れなかったのだろう。今後、自分の立場を利用して家臣に馬鹿げた命令もするなよ」

母が義久に書かせた書状を丸めて畳の上に投げ捨て、そのまま部屋を出て行った。黙りこむ母をちらりと見たが、義宣も部屋を出た。母は義宣の名をかたってまで政宗を助けたかったのか。それほどまでに伊達家が大事なのか。女とはそういうものなのだろうか。八重にも聞いてみたくなった。お前も実家が大事なのか、実家と俺とどちらが大事なのか。

八重のもとへ向かう途中、義久が前から歩いてきた。義久は、母に協力をした。断れなかったのだろうが、義久が政宗を助けたようなものでもあった。それに、あの書状を実際に書いたのは義久だ。

「中務、小野崎が死んだそうだな。小野崎は、お前の舅だつたはずだが」

「小野崎殿のことは、残念なことでした。まさか、陣中で奴婢ぬひに殺されるとは」

「母が、お前に命じたのではないのか？」

「大御台様のお言葉が全てにございます」

自分の妻の父親が死んだというのに、義久は驚くほどに冷静だった。母は否定していたが、母が義久に命じて小野崎を殺させたと言われても納得できるような気がした。

「ご用がないのでしたら、失礼いたします」

義久は頭を下げて去って行った。義久の向かっている方向には母の部屋がある。もしかしたら、母に呼ばれているのかもしれない。

母は、何を考えているのだろうか。

八重のもとへ行つても、なかなか八重に実家が大事なのかどうか聞くことはできなかった。当たり障りのない話をし、褥に横になつてから、ようやく聞くことができた。

「八重、俺がもし那須家と戦をしたら、お前は資晴殿を助けようと思つか？」

しばしの沈黙。八重は義宣の問いに答えたくないのだろうか。八重の方を見ると、八重は静かに口を開いた。

「思いません」

「そうか」

八重の答えに義宣はほつとした。八重は、母のように義宣を放り出して実家を取ることはないということか。

「兄上は負けませんもの」

「え？」

「それに、兄上が、わたくしがいる家と戦をするはずがありませんから」

「そうか」

八重の答えは、どこかずれている。義宣が期待したものとは何か

が違う気がする。だが、そのずれと違いを義宣は考えようと思わなかった。考えてはいけない。考えてしまえば、認めたくないものが見えてくるような気がする。

母のことも、八重のことも、考えないようにすればいい。問題の真相を考えなければ、見えないものは見えないままにすることができるはずだ。

義宣はそのまま目を瞑った。だが、なかなか眠れなかった。頭の中で、何かがざわめいているようだった。

## 那須の女と伊達の女（五）

年の瀬に、義宣は突然父に家督を譲ると言われた。義宣は八重を妻に迎え、初陣も果たしたのだから、自分は隠居すると言いだしたのだ。

突然のことに驚いたのは義宣だけではなかった。家臣たちは口を揃えて、義宣はまだ若すぎると言った。義宣が父の留守を任された時は、父は十六歳の時には家督を譲られていた、と言って義宣を父と比較していたというのに。やはり、義宣では頼りないと思っっているのだろう。

だが、父は考えを変える気はないようだった。自分が家督を譲られた時も、家臣たちは同じことを言っていたと義宣に言った。家臣たちの言葉は気にするものではない、と励ましてくれたのだろうか。八重に家督相続の話をして、八重はただ、兄に報告の文を書く、としか言わなかった。形だけでも、祝いの言葉を述べてくれるかと思ったが、期待はずれだった。

年が明けた元日、義宣は主殿の上段に父と共に座った。下座には新年の挨拶に登城した家臣たちが並んでいる。一門の北家、東家、南家を筆頭に譜代たちが続き、父に従っている多賀谷重経や、八重の兄である資晴の使者、親戚関係にある宇都宮国綱からの使者などが座っている。見なれた者ばかりだった。

新年の挨拶と、皆の挨拶や去年の働きに対する礼を述べた後、父は咳払いをした。その場が静まり返る。空気が重くなった気がした。「家督相続については、すでに皆に伝えてあるが、この場で正式に告げることにしよう。義宣も十七歳になり、去年のうちに初陣を果たし、妻も迎えている。そこで、わしは隠居をして家督は義宣に譲ることとした」

「僭越ながら申し上げます。お屋形様のご隠居は、まだ早いのではないでしょうか」

一門を代表するかのようになり、北義斯が父に意見した。家臣たちの目が義斯に集まる。義宣は未熟だと、家臣の誰もが思っていることを改めて思い知らされた。義斯の言葉は家臣たちの思いに違いない。「何を言うか、わしも家督は十六の時に譲られた。義宣に譲るのが早すぎるということはない。お前も、息子の又七郎に家督を譲って、隠居暮らしをしてはどうだ？」

父が笑いながら答えたからか、義斯も苦笑した。義斯の息子の義憲は、義宣と同一年だ。元服も共に十三歳の時に済ませている。

「それに、隠居と言ったところで、完全に表へ出ぬわけではない。家督と本丸は義宣に譲り、わしは北ノ郭に移るが、必要な時は義宣を支えよう。皆も、わしと同じように義宣に仕えてほしい」

父に目で促され、義宣も父の言葉に続けて口を開いた。

「至らぬところも多かるうが、皆で私を支えてほしい。よろしく頼む」

「我ら、新しきお屋形様のために力を尽くす所存にございます」

義久がそう言って頭を下げると、他の家臣たちも義宣に頭を下げた。

義久の言葉は、白々しいとしか思えなかった。母の命令で義宣の名をかたつたくせに、よく言う。

ほかの家臣たちも同じだ。父が隠居をしても義宣を支えると言った時、あからさまに安心していた。家臣たちは誰もが、新しい当主となった義宣に頭を下げているのではなく、父に頭を下げているのだ。

祝い酒が振る舞われたあと、ささやかな宴が催され、家臣たちはそれぞれの屋敷へ戻って行った。義宣は、挨拶をしに母のもとへ向かった。宴の席に、母は招かれていなかったのだ。

いくら、母が実家を大事にしていると言っても、息子の家督相続は喜んでくれるだろう。そう思いつつ母に新年の挨拶と家督相続のことを述べると、母は嬉しそうに微笑んだ。その笑みに、義宣は安堵した。

「義宣、家督相続おめでとう。そなたも、従兄の政宗殿のように立派な当主になるのだよ」

嬉しそうに微笑みながら、政宗のようになれ、と母は言った。恐らく、母に悪気はない。本気で言っているのだ。だが、その言葉を聞いて、期待していた自分が愚かだったと思った。こんなことを言われるのなら、父のような立派な当主になれ、と言われた方がよっぽど良かった。

「はい。政宗殿に負けぬよう、努力いたします」

母の言葉に笑顔を返し、今度は八重のもとへ向かった。資晴からの使者には、八重に会って行くように勧めた。懐かしい那須の様子を聞けば、八重が喜ぶと思ったからだ。

八重の部屋の前まで来ると、部屋の中から明るい声が聞こえた。八重と吉野の声だ。こんなに明るい八重の声は、聞いたことがない。部屋に入るのが躊躇われて、義宣はそのまま部屋の前で八重たちの話を聞いていた。

「まあ、本当に？兄上のお子が、今年中には生まれそうだなって、わたくしも嬉しいわ。念願のお世継ぎなもの。ねえ、吉野、お祝いには何を送りましょう？」

「お世継ぎのご誕生はおめでたいことですけど、姫様が勝手にお祝いを送られてもよろしいのでしょうか？今回、お殿様が家督を譲られるということは、佐竹家から那須家へ正式にお知らせがあったのですよね。だから、こうして兄上様のご使者がいらっしゃったわけですし。私なんかが口出しすることではないと思いますが、お殿様にご相談なさらなくてよろしいのですか？」

「そんなことは知らないわ。わたくしは、わたくしの気持ちとして兄上へお祝いの品を送りたいのだから」

「でも、姫様」

「吉野、わたくしは那須の女なのよ。どこへ行ってもわたくしが兄上の妹であることに変わりはないのだから、いいではないの」「でも」

「そんなことより、那須の様子が知りたい。もっと聞かせてちょうだい」

八重に促された使者の話聞きながら、八重は楽しそうに笑っていた。八重が義宣の妻になってもうすぐ一年が経つ。だが、こんなに楽しそうな八重は知らない。吉野という時も、ここまで楽しそうに笑ってはいなかった。

八重は、一体どんな顔で笑うのだろうか。見てみたい。わずかに障子を開けると、八重の顔が見えた。義宣の見たことがない笑顔だった。気持ちが沈んだ。見なければよかった。

障子を閉めてその場を去ろうとすると、背後に人の気配を感じた。振り向くと、吉野が立っていた。

「どうした？」

「あの、さつき、お殿様、お部屋の中を見ていらっしやいましたよね？私、御台様をお呼びしましうか？」

「いや、いい。那須の話で懐かしさに浸っているところを邪魔したくはない」

どうせ、義宣の姿を見れば、八重はあの笑みを消して、いつもの冷たい顔しかしないのだ。そんな顔を見るくらいなら、八重の顔を見ない方がいい。それに、八重は資晴に世継ぎが生まれることに對して祝いの品を送ろうとしているが、義宣には祝いの言葉ひとつ寄越さないのだ。

惨めな気持ちになる。使者は早々に帰してしまった方が良かったのかもしれない。

「使者は今夜、城に泊まっていく。今夜は昔話に花を咲かせればいい」

「でも」

義宣は気を遣って立ち去ろうとしているのだが、吉野はそれが心苦しいらしい。どうすべきか迷っているのが伝わってくる。

吉野、と八重が吉野を呼ぶ声が聞こえた。吉野は八重に返事をしつつも、まだ義宣を見て困った顔をしている。その様子に苦笑しな

がら、早く部屋へ戻るようにと手で合図をした。吉野は頭を下げて、部屋へ戻って行った。

どうやら、吉野は八重と義宣の中を取り持とうとしているらしい。だが、吉野に気を遣われるとかえって義宣の気持ちは暗く沈んだ。侍女に気を遣われるほど、八重との仲は悪いのだ。誰よりも八重の側にいる吉野だからこそ、八重の気持ちがかかる。八重の気持ちは義宣に向いていない。だから、吉野は何とか仲を取り持とうとするのだ。

家臣には未熟者だと思われる。母には政宗のようになれと言われた。八重は那須の女のままで、義宣に心を開こうともしない。家督を父に譲られたところで、何も変わらない。それどころか、父の後見があつてこそその家督相続は空しく、義宣はただ佐竹家の飾りとなったような気がした。



## 那須の女と伊達の女（六）

義宣が家督を継ぎ、佐竹家の当主となつてから初めての年が明けた。

家督を継いでから、この一年の間に義宣がしたことと言えば、父が決めたことを承諾することくらいだった。あとは、義宣が当主として家臣に書を授ける程度で、家督を継ぐ前と特に変わりのない一年だった。

義宣が承諾した父の決めたこととは、弟の義広よしひろを蘆名家あしなの後継ぎにすることだ。義広は五歳の時に白川家の養嗣子として太田城を出て行った。母が大層悲しんでいたことを覚えている。

蘆名家は、当主である蘆名盛隆あしなもりたかが家臣に殺されるという事件の後、生まれて一月しか経っていなかった嫡男である亀王丸が後を継いで当主となっていた。その亀王丸が病で急死したのが去年の十一月のことだ。わずか三歳という幼さだった。

亀王丸の死後、蘆名家の当主の座を巡り、伊達家と佐竹家の間で争いになった。伊達家の政宗は自分の弟の小次郎を当主にしようとしていた。父は、白川家の養嗣子になっていた義広を推した。蘆名家の重臣は義広をぜひ当主に迎えたい、と言ってきたが、政宗も引かなかった。義広は若輩であるため、弟の小次郎のほうがふさわしい、と言つのだ。

父と政宗の争いはなかなか決着がつかなかった。だが、蘆名家の重臣である金上盛備が、須賀川城から亡き蘆名盛隆の母親を呼び寄せたことから流れが変わった。須賀川の女城主おなみとなつて盛隆の母は、伊達家の出身だった。母の姉で、阿南あなみの方と呼ばれている。義宣や義広にとっては伯母にあたる人物だ。

阿南は、反蘆名と思われる行動を取り続けている政宗は信用できない、義広を当主に迎えるべきだ、と主張した。

その主張を金上盛備が支持し、最終的に義広が盛隆の娘を妻にめ

とり、蘆名家の当主となることに決まった。

佐竹家の代表として、この当主争いに参加し、物事を決定してきたのは義重だ。当主である義宣ではない。

ほかに、父は妹のなすを江戸重通の嫡男に嫁がせることを決めた。この縁談は義宣が家督を継ぐ以前から江戸家と話があったことだが、家督を継いだ後も最後に決定を下したのは父だった。

江戸家は佐竹家の支配下にあるといつて間違いないのだが、たびたび佐竹家を攻めようとする姿勢を見せてきた。江戸家の居城である水戸城は、佐竹家の居城の太田城の目と鼻の先にある。危うい江戸家をそのままにしておくよりも、なすを嫁がせて支配を盤石にするべき、と父は考えたのだ。

昨年の時点では、年が明けたら吉日を選んで嫁がせる、という約束を取り付けた。それを承諾したのは義宣だ。なすは、年が明けた現在、ようやく七歳になったというのに、嫁がせてしまうのは哀れだとも思ったが、父の決定を拒むだけの力が、義宣にはなかった。

一体、佐竹家の当主は誰なのだ、と言いたくなる。

家臣たちも、父が当主のように重要なことを決定することに、何の疑問も抱いていないようだ。それもそうだろう。家督を継いだばかりの義宣よりも、長年仕えていた父のほうが、頼りがいがあるに決まっている。中には、未だに義宣を「若殿」と呼ぶ者もいるくらいだ。

義宣は深く溜め息をついた。ちらりと視線を横に移すと、涼しい顔をした八重がいる。夫が溜め息をついても、どうしたのか、という一言もないのだ。

八重との関係も、義宣を悩ませる原因だった。

八重が佐竹家に嫁いできて今年で二年目。未だに、八重に懐妊の兆しは見えない。世継ぎはまだか、と遠回しに義宣も言われているのだから、八重も言われているに違いない。

八重の義宣に対する態度は冷たいが、義宣との閨を拒むことはほとんどないのだ。今まで何度も褥をともししてきた。それでも子が

できないのは、義宣に問題があるのか、それとも八重に問題があるのか。側室を迎えればいいのかもしいし、実際側室をすすめてくる家臣もいるが、義宣は今のところ八重以外の女を側室として迎える気はなかった。

義宣が生まれた時、父は二十四歳、母は二十歳だった。母が佐竹家に嫁いできて、七年目のことだったと聞いている。今、義宣は十八歳で、八重は二十歳だ。まだ二年しかともに過ごしていない。可能性は、まだまだある。

世継ぎについて考えを巡らせていると、ばたばたと廊下を走る音が聞こえた。

「兄上」

足音とともに顔を見せたのは、なすだった。義宣以外に、部屋の中に八重がいることに気付いたなすは、八重に頭を下げた。

「義姉上、こんにちは」

「ええ、こんにちは」

わずかに笑みを浮かべて、八重もなすにこたえた。八重は、義宣以外の人間には愛想笑い程度はするのだ。

「あ、兄上、今日なすの婚礼衣装ができあがりましたの。とてもきれいで、なすはお嫁に行くのが待ち遠しくなりました。兄上が用意してくださったのでしょうか？ありがとうございます」

「そうか、それは良かった。俺も、なすの花嫁姿が楽しみだよ」

「宣通殿も喜んでくださると嬉しいのですけれど」

「きつと、喜ぶだろう」

義宣の言葉を聞くと、なすは嬉しそうに笑った。この七歳の妹が、間もなく江戸宣通の妻となるのだ。義宣は、明るい言葉しかかけられなかった。

なすを呼ぶ母の声が聞こえる。なすは、あ、と声を上げた。

「嫁入り道具を見ている最中に、抜け出てきたのです。兄上にお礼が言いたくて」

「母上に怒られる。早く戻りなさい」

「はい」

部屋に來た時と同じように、ばたばたとなすは戻って行つた。なすの足音が遠のく中で、ぽつりと小さな呟きが聞こえた。

「白々しい言葉」

「八重？」

「あの姫の嫁入りを祝福する人間など、本当はどこにもいないでしょう。女たちが、なぜ江戸などに、と噂をしているのを聞きました」

「確かに、そうだろうな」

八重の言つとおり、城内でなすの婚儀を喜んでいる人間はいないだろう。この縁談を決めた父も、仕方がなしになすを嫁に出すのだ。母も家臣たちも、佐竹の姫をなぜ江戸家の嫁に、と憤っている。皆、幼いなすを哀れだとも思っているのだろうが、名門である佐竹の姫を、支配下にある江戸家にくれてやるということに怒りを感じているのだ。

それに、江戸家のほうでも、佐竹の姫を迎えると言うことは、佐竹の支配が一層強くなることを意味しているのだから、喜ばしい話ではないだろう。

もちろん、義宣にも佐竹の姫がなぜ、という気持ちはある。だが、声高に名門を主張する家臣たちには嫌気がさす。

名門という名にしがみつく古臭い、頭の固い家臣たち。これだから、義宣のことも年若い当主だと侮っているのだ。

「家中には困つたものだ。何も知らないなすは、嫁入りを楽しみにしているのだから、祝いの言葉をかけてやればいいのに。名門、名門とそればかり。辟易する」

「次郎殿は、この家を名門だと思つていないのですか？」

「そういうわけではないが、家臣たちとは違う。この家はあまりにも古い。譜代の家臣たちは、佐竹という家しか見ていない。自分たちの祖先の栄光を自慢するばかりで、自尊心が強い、頭の固い連中ばかりだ。それを変えたいと思つたから、俺は牢人出身の有能な者

を新たに取り立てたんだ」

梅津半右衛門、荒川弥五郎、向宣政たち牢人出身の者を義宣はそば近くに置いている。

「それにしても、家中にも相手方にも祝福されないが不憫だ」  
独り言のように呟いた義宣の言葉に、八重が小さく笑った。顔を上げて八重の顔を見ると、その笑みは、吉野に見せるものとも、先ほどなすに見せたものとも違っていた。

冷たい笑み。ただ冷たいだけではなく、どこか義宣を嘲笑うかのような冷たさがあつた。

「八重」

「いいえ、何でもありません」

八重の笑みは一瞬で消え、すぐにもとの涼しい顔があらわれた。だが、義宣は確かに見た。あのような八重の顔は初めて見た。

一体、八重は何を考えているのだろうか。分からない。今日だけではない、八重の考えていることは、この二年間何も分からない。分かるのは、八重が実家の那須家を大事にしていること。そして、義宣には心を開いていないということだけだ。

## 那須の女と伊達の女（七）

蘆名家の当主となつた義広から、ともに政宗を討たないか、と父に書が届いた。

政宗は蘆名家の領地である会津をたびたび侵攻しており、そのことに対して蘆名の重臣、氏族たちが憤っているのだそうだ。その重臣たちに請われて、義広は父に書を寄こしたらしい。

義広にとって父は隠居をしたといえども頼りがいのある父なのだろう。その気持ちは分かる。だが、今の当主は兄である義宣なのだと言つてやりたい気持ちもあつた。

義宣が当主になってから、当主らしいことなど何もしていない。

当主として、なすを江戸に嫁がせたくらいだ。なすを迎えた江戸も、大掾清幹に攻められた時は、父に援軍を要請している。義宣もともに出陣したが、終始父の指示に従うだけだった。

江戸と大掾の問題が一段落つき、帰陣して少し後に、義広からの書が届いたのだ。

家臣たちを集めて評定を開くと、父は義広の要請に応え、政宗を討つつもりだと皆に告げた。義宣も父の考えに異存はない。弟が助けを求めてきたのだから、援軍を出すのは当然だ。それに、現在の蘆名家は当主である義広が幼い上に佐竹の出身であるため、佐竹に属するような同盟関係にある。その蘆名を見捨てるわけにはいいかない。

ほとんどの家臣は、父の方針に賛同しているようだったが、義久がひとり異を唱えた。

「北城様、政宗は若輩にして、北城様はすでに老練の方。今、北城様が政宗を討ったところで、勝ちを収めても功とすることはできませんまい」

「何を言っている、中務。わしは蘆名の要請に応えて出陣するのだ。そこでの勝利は、わしの功ではなく、義宣や義広のものとなる。わ

しは初めから功など狙ってはいない」

「ならば、北城様のご出陣はおやめください。新たなお屋形様にお任せになればよろしいかと。此度の戦には、岩城殿や石川殿もご出陣とお聞きしました。あの方々に、お屋形様と蘆名様をお任せになつてはいかがでしょうか？」

「ならん。蘆名はわしに援軍を要請した。わしが不在ならば、蘆名は佐竹に見くびられたと思い、義広の指示を聞かなくなるかもしれない」

「北城様のご出陣に加え、岩城殿、石川殿も加勢なさるのであれば、伊達の滅亡は決まったようなもの。その一戦においては、岩城殿も石川殿も北城様のご指示に従いましょうが、この方々はもともと伊達の方。実家が滅ぼされて、北城様へ怨みを持つようにならぬとも限りません」

「中務、お前は何が言いたいのだ」

義久の言葉に父はいら立っているようだった。確かに、今日の義久の言葉はおかしい。岩城常隆や石川昭光が出陣するのだから、父は城に残ってもいいのではないか、と言ったかと思えば、岩城も石川も危ないと言う。確かに、石川は伊達家の出身だ。だが、今までも佐竹とともに伊達と戦ってきた。それに、岩城常隆の父は伊達の出だが、母は父の妹だ。大体、伊達との繋がりならば佐竹にもある。母が伊達の娘ではないか。

三年前、畠山の要請で伊達と戦った時も、岩城や石川はいた。

三年前の戦。あの時、義久は母の頼みを聞き、偽の義宣の書状を作り上げ、政宗を間接的に助けた。

まさか、今も義久は母に頼まれて、父に戦を思いとどまらせようとしているのか。

「私はただ、北城様、お屋形様のことを思い申し上げたのみ。北城様のご出陣なさるのならば、私に先陣をお命じください」

「そうか。だが、お前には義宣のそばで戦の指南をしてもらいたい。それが東家当主としてのお前の役目だ」

「しかしながら、北城様がいらつしやるのですから、お屋形様には北城様が直々にご指南なさればよろしいかと。私は、北城様、お屋形様に対する無礼を詫びるべく、先陣を務めさせていただきたいと存じます」

無礼。ほかの者たちは、この場での義久の出すぎた諫言のことだと思つたろう。だが、義久はそれだけではなく、三年前の戦のことを含めて言っているに違いない。江戸と大掾の戦の時も、義久は率先して先陣を務めた。

「分かった。ならば、先陣は中務とする。義宣もそれで良いか？」  
「はい」

父の言葉に義宣がうなずくと、その場は解散となり、皆戦の準備に取り掛かった。

準備が整い、岩瀬の須賀川へ行くと、すでに義広は到着していて、義宣と父の姿を見つけると嬉しそうに駆け寄ってきた。岩城常隆、石川昭光は援軍を寄こしただけで、自身の出陣はなかったが、白川義親は兵を引き連れ出陣していた。

「義広、蘆名はどうだ？」

義宣が声をかけると、義広は眼を伏せて苦笑いを浮かべた。

「なかなか、難しいものです。関白に従い、長年不仲であった上杉と和睦もする、と関白に誓いの書状を出しましたが、それも重心の金上が提案してきたこと。私はそれに名前と花押を書いたくらいですよ。まあ、関白は大層お喜びで、私に太刀を贈ってくるほどでしたが。でも、兄上も佐竹の当主は大変でしょう？ 当主というのは、大変なものだと割り切って、私は私でいるだけです」

「そうか」

「兄上もいずれ、関白にそのような誓いの書状を送らねばならないのかもしれない」

「ああ、そうだな」

関白、秀吉の名は義宣も聞いている。父のもとに何度か書状を寄こしているのも知っている。だが、未だに関白から義宣への書状は



何も来ていない。今は、関白よりも政宗のほうが必要な問題だ。

義広の言うように、義宣も割り切ってしまう方がいいのかもしれないが、父と比較されること、当主として認められていないと感じてしまうことは、どうすることもできない。五歳年下の弟のほうが、よほど大人びているのかもしれないと感じた。

会津勢と合流したのち、二本松まで兵を進め、そこで伊達と対陣した。

睨みあいはい十日ほど続いたが、政宗が出馬するという噂で戦場の空気が変わった。佐竹の先陣である義久の指揮で、政宗の兵を五十騎以上討ちとることに成功した。

その流れに乘じ、政宗の先手の陣所を打ち破り、兵八十余騎、歩兵千余りを討ちとった。佐竹も兵を二百人近く討ちとられはしたが、流れは完全に佐竹と会津勢にある。

伝令の報告では、政宗が自ら戦場に現れ戦ったが、家老に諫められたそう。母は実家の政宗を大層誇りに思っているようだったが、自ら戦場に出て家臣に諫められるなど、匹夫の勇と紙一重ではないか。

采配を手に、ふん、と政宗を鼻で笑うと、伝令が駆け込んでくるのが見えた。申し上げます、と言う伝令の声は震えていて、何があったのかと思う。父は一切動じることなく、伝令に続きを促した。

「先陣の御東様とともに行動なさっていた岩城様の家臣、上遠野と申す者が、伊達の大將、政宗を生け捕りにしたとのことす」

「何だと、それは嘘ではないな？」

「は、確かに政宗であると」

「中務に、ここへ連れてくるように伝えよ」

「はい」

父と伝令のやりとりを、義宣はただ黙って見ていた。政宗が生け捕りにされた。それが事実であるとは信じがたい。だが、確かに政宗であると伝令が断言するのだから、義久は政宗だと確信したのだろつ。

伝令が去った後、父は黙り込んだ。義宣も黙っていた。義久を待つ間の時間が、いやに長く感じられた。

「北城様、お屋形様」

「中務か」

「は」

陣所にやってきた義久を、義宣はじつと見つめた。政宗がどのような顔をしてここへやってくるのか、目に焼き付けてやろうと思った。

だが、義久はひとりだった。

「中務、政宗はどうした？」

父の問いに、義久は膝をつき、頭を下げた。

「申し訳ありません。私が目を離れた隙に、政宗には逃げられてしまいました」

政宗が逃げた。せっかく生け捕りにすることができた敵の大將に、逃げられてしまった。

政宗の首が胴についているか、いないか、それは何よりも重要なことだと義久が分かっているはずがない。それにも関わらず、逃げられたのだと。

義宣は義久に対して怒りが湧いてきたが、父はただ大きく溜め息をついただけだった。頭を下げる義久を、義宣はじつと睨みつけていた。

## 那須の女と伊達の女（八）

政宗に逃げられてしまった義久を、父は厳しく叱責した。だが、いくら義久を責めたところで、政宗の首を取れるものではない。義久が政宗に逃げられなければ、今頃この戦は終わり、城に戻って祝杯をあげていただろう。佐竹を脅かす伊達という存在がなくなり、佐竹のためにもなっていたはずだ。首を取る、ということは関白の意向に背くかもしれないので、実際は領地割譲の約定を取り付けて伊達へ返すくらいにとどまっただろう。

結局、政宗に逃げられた後、戦いらしい戦いはなく、佐竹も伊達も互いににらみあつて陣を動かなかった。いつまでもにらみ合いを続けていても無駄だと、岩城と石川が間に入って話をまとめ始めたので、岩城と石川の調停で政宗は自領へと戻って行き、義宣も父とともに太田城へ帰陣した。

伊達の兵は討ち取ったが、佐竹の兵も討ち取られ、勝利と言える勝利を収めることができず、しかし敗北らしい敗北もしていない。出陣した兵の数から考えれば、佐竹の敗北とも見えるかもしれない中途半端な出陣に終わってしまった。

政宗を捕えたということを知っているのは、義宣と父と一部の重臣だけだが、このことを知っている者の顔には悔しさが浮かんでいた。

城へ戻り、重臣たちと今後の方針について話し合い、今回の戦は終わった。義久は終始申し訳なさそうにうつむいていた。

政宗を捕え、逃げられてしまった義久。まさか、義久は母に命じられて政宗を逃がしたのではないか。出陣前にも感じたことだ。出陣しようとする父を諫め、出陣を思いとどまらせようとしたのは義久だ。三年前のこともある。

三年前、母の命で義久は自分の舅である小野崎を殺したのではないかと疑った。あれはあまりにも信じがたい話だったので、小野

崎の死は偶然だと思うことにしたが、今回のことは三年前を思えば、あり得ない話ではない。

あり得ない話ではない。だが、あり得ないと思ったかった。いくら実家大事の母でも、甥の政宗を息子である義宣、義広よりも大事に思うことはないだろう。

母は義宣の実の母だ。そのようなことはあり得ない。だが、あり得ない、と何度も言い聞かせるように考えるということは、母を信じていないということにはならないだろうか。

真相を確かめるため、義宣は母の部屋へと向かった。真相を確かめるのは怖い。だが、義宣は母を信じているのだ。恐れる必要はない。

母の部屋の前、声をかけようとする、部屋の中から母と、母の侍女の小大納言の声が聞こえてきた。

「それにしても、ようございしましたね。中務殿があそこまでやってくれるとは思いませんでした」

「ああ、政宗殿が此度の戦で討ち取られ、伊達家が滅亡などということになっては堪らないからね。実家がなくなるのは恐ろしいよ」

「わたくしも、伊達家がなくなるのは恐ろしくうございます」

「できれば、戦そのものを避けたかったのだが、中務もそれは難しかったようだ。それでも、三年前も此度も中務はよくやってくれた」

やはり、母が義久に命じて政宗を助けさせたのだ。義久が戦に反対していたのも、すべて母に頼まれたからだ。胸が締め付けられるように苦しい。心臓を握りつぶされたような感覚だ。ときりとする。震える手で、義宣は母の部屋の障子を開けた。母と小大納言が驚いた顔で義宣を見る。

「義宣、どうかしたのかい？」

何も知らないような顔をして、母が義宣に声をかけてきた。母は義宣が何も知らないと思っっているのだろう。腹が立った。

「母上」

「何？」

「政宗を助けたそうですね。中務に命じて」

母の表情が強張った。小大納言は慌てているようだ。事実だから。強張った母の顔を見て、暗く冷たい感情がじわじわと胸に広がっていった。

母は政宗を助けた。佐竹よりも政宗を選んだ。政宗を助けるということが、どういうことか分かっているのだろうか。母は伊達家のことばかり考えていて、佐竹のことどころか、義宣の気持ちも考えてはいないのだ。義広のことも考えていないに違いない。

実の息子だというのに。息子よりも母は甥の政宗を選んだのだ。これは、明確な裏切りだった。

母は何か言い訳をしたそうに、口を開いたが、母の言い分けなど聞きたくなかった。どんな言葉を並べられても、母が政宗を助けた事実には変わりはない。母は義宣よりも政宗を選んだのだ。

「失礼します」

もう母の顔を見たくなくて、逃げだすように母の前から去った。信じていた。母が義宣よりも政宗を選ぶことを信じたたくなくて、母の愛を信じていた。だが、本当は愛されてなどいなかったのだ。かすかな愛情を信じて、自分に言い聞かせていたというのに、その小さな希望も消えてしまった。

母は義宣より政宗を愛していた。戦場で敵である政宗を助けるということは、いずれ義宣を窮地へ追い込むようなものだ。義宣のことを愛していないから、母はそんなことができるのだ。

思えば、義宣が家督を継いだ時、母は何と言った。政宗殿のように立派な当主に。いつも母の心は実家の伊達家に向いていたのだ。何故、そのことに気付かなかった。

家臣に主として認められなくても、母だけは義宣を愛してくれると思っていた。母なのだから、息子を愛してくれるものだと思っていた。誰に愛されなくても、母に愛されればそれだけでよかった。

だが、裏切られた。実の母に愛されていなかった。それは、絶望だった。実の母に愛されないのなら、もう誰にも愛されないような

気がした。

義久も義久だ。母の頼みを聞いて政宗を助けるなど、宗家への裏切り以外の何物でもない。義宣を当主として軽んじているから、母の頼みを聞くことができるのだ。三年前、義久は義宣の名をかたつて偽りの書状を書いたような人間なのだ。一門の義久がこうなのだから、佐竹という名門にしがみつく家臣たちは、もう誰も信じられない。

その後は、どうしたのかよく分からない。胸にぽっかりと穴が開いたような感覚がして、足もとが崩れ落ちるような感覚がした。どこを歩いているのか、城内を歩いているのに全く分からない。気付いたときには、八重の部屋の前に来ていた。

「八重」

「次郎殿、お帰りでしたの」

「八重」

夫が帰陣しているかどうか分かっていない妻。分かっているにもかかわらず、夫が帰陣しているのだから。それでも、八重は義宣の妻だ。すがりたかった。義宣と八重は夫婦なのだ。誰にも愛されないかもしれない。だが、八重に愛されるのではないか、という思いがまだ胸に残っている。

八重を胸に抱くと、八重はわずかに抵抗した。その時、八重の小袖から書状が落ちた。かな文字で書かれた、八重へ宛てられた書状。義宣が拾うと、八重は血相を変えてその書状を義宣の手から取り返した。

「これは、わたくしのものです。触らないでください」

「那須の、義兄上からのものか」

「ええ、そうよ。わたくしの甥にあたる藤王丸が三歳になったので、そのことなどが書かれていました」

甥の藤王丸。そうだ、分かっていたはずだ。八重も母と同じ、実家が大事な女なのだ。義宣が家督を相続した時、那須の使者の前で見せた笑顔を忘れていない。

抱きしめた八重を突き飛ばして、義宣は立ち上がった。何をするのか、と八重は義宣を睨みつけた。

これが、八重なのだ。今、八重が義宣に向けているこの目が、八重の気持ちを物語っている。

母と同じだ。分かっていただろう。義宣が認めようとしていなかっただけだ。

八重の部屋を出て城内を歩く。目的があるわけではない。何もかもが嫌になって、ただ歩いていた。空を見上げると、月は雲に隠れて見えなかった。

どすん、と何かにぶつかった感覚と、女の小さな悲鳴が聞こえたのは同時だった。視線を声の聞こえたほうへ向けると、女が尻もちをついていた。どうやら、空を見上げながら歩いている、この女にぶつかってしまったらしい。女は義宣を見ると、慌ててその場に平伏した。

「も、申し訳ありません、お屋形様」

「いや、いい」

この女は奥で働いている女なのだろう。義宣よりいくつか年下と見たところか。

「お前、名は何という？」

「はい。小糸こいとと申します」

「そうか」

小糸と名乗った女の手を取り、義宣は再び歩き出した。小糸は、突然のことにただ驚くばかりのようで、おろおろしながら義宣の後ろを歩いている。

誰でもよかった。母にも八重にも見いだせなかったぬくもりを、女の柔らかい体に求めていた。

## 那須の女と伊達の女（九）

徳寿丸様とくしゅまる、と自分のことを呼ぶ声が聞こえる。この声は、乳母のおしばだ。今日は昼から、一門の義久、又七郎、三郎と一緒に弓の稽古をすることになっていた。それが終わったら、義久が何かの講義をするとも言っていた。おしばが徳寿丸を呼んでいるのは、そのためだ。

「徳寿丸様、こんなところにいらっしゃったんですね。さあ、一門の皆様がお待ちですよ。ご準備なさってくださいませ」  
「分かっている」

おしばに急かされながら弓の準備をする。三郎も自分が準備をする時に、徳寿丸に声をかけてくれればよかったのに。三郎の父親は、父の弟でも五年以上前に亡くなっている。父は三郎を哀れに思っ、太田城で徳寿丸と一緒に暮らさせていた。年の近い従兄とは、よく城内で一緒に遊んでいた。今日も朝は一緒にいたはずなのに、自分だけ先に準備を整えるのはずい。顔を見たら文句を言ってる。

はいできました、とおしばに背中を軽く押され、徳寿丸も稽古場に向かった。稽古場にはおしばの言っていた通り、すでに皆がそろっていた。三郎は徳寿丸を見てにやりと笑った。それに少し腹が立ったので、徳寿丸は三郎を無視して又七郎に話しかけた。

「又七郎、すまない、待ったか？」

「いいえ」

「そうか、良かった」

又七郎は一門筆頭である北家の嫡男だ。徳寿丸と同一年で、一門の中では一番徳寿丸と仲が良い。

「徳寿丸様、それでは弓の稽古を始めますが、よろしいですか？」

「ああ、始めよう」

本当はもう少し又七郎と話がしたかったのだが、義久に遮られた。



義久はどうも苦手だ。同い年の又七郎や、年が近い三郎と違って、十六歳も年上だからかもしれない。苦手だから、義久の言うことにはいつも首を縦に振ることしかできなかった。

弓や槍の稽古を始めると、一番生き生きしているのが三郎だった。三郎は徳寿丸よりも正確に的を射るし、槍も刀も手合わせをすると徳寿丸よりも上手だった。三郎のほうが三歳年上だから仕方がないのかもしれないが、三郎に負けるのはいつも悔しかった。今も、三郎は的のほぼ真ん中を射ることができた。徳寿丸は、真ん中からは外れてしまった。

だが、又七郎の矢は徳寿丸よりももっと外側を射ていた。又七郎は武芸があまり得意ではないらしく、いつも徳寿丸が又七郎に武芸を教えていた。その現場を三郎に見られると、からかわれるのだ。今日も又七郎に弓の扱い方を教えたかったのだが、義久がいるので徳寿丸の出番はない。

徳寿丸と又七郎に、的の中心を射るには何に気をつけるべきか口で説明した後に、義久は手本として矢を放った。義久の矢は的のぴったり真ん中に刺さった。

さすがは御東殿、と三郎が茶化すように手を叩いた。又七郎も目を丸くして義久を見上げている。義久は涼しい顔で、徳寿丸と又七郎に稽古を続けるように告げただけだった。

その後何度か徳寿丸は矢を的の中心にあてることができた。又七郎は結局、最後まで真ん中にあてることができなかったが、最初に比べればかなり上達したと思う。

稽古の後は場所を移して、義久の講義だ。三郎は、武芸は得意だが手習いや講義は苦手なので、あからさまに嫌な顔をした。だが、義久に冷たい目を向けられ、首をすくめて徳寿丸の後ろをついてきた。

三郎とは正反対に、又七郎は手習いや講義は得意だし好きなので、とても楽しそうだ。又七郎は徳寿丸と一緒に受ける義久の講義のほかに、わざわざ常光院に通って和尚から教えを受けているというの

だから、学問好きということがよく分かる。

今日の義久の講義は孟子だった。この前は、確か墨家の話だった。その前は孔子。よく義久の頭の中にはそれだけ多くの知識が詰まっているものだと思う。徳寿丸は義久の話を聞いていても、分からないところが多くある。三郎はもっと分かっているように、大きなあくびをしている。又七郎は義久の話を理解しているようで、目を輝かせながら話を聞いている。

「ここまでの話で、分からないところがありますか？」

「よく分からなかったが、孟子の教えでは、謀反を起こしても良いということなのか？殷の紂王は家臣に討たれたのだろう？」

「いいえ。明では皇帝というものは、天から天命というものを受けて天子となるのです。殷の紂王は天命を失い、天子ではなく一夫になり下がっていた。そのため、周が殷を討伐したことは、謀反にはならないのです」

「では、どうすれば天命を受けたとか、失ったとか、そういうことが分かるんだ？天命は見えるのか？」

義久の講義は分かるようで分からない。今日の話は、明の国で皇帝が変わる時は何が原因なのか、という話だった。天命を言われても分からない。殷と周の話を聞いていると、まるで謀反が認められているような気がして、徳寿丸は少し恐ろしくなったのだ。

「徳寿丸様、天命は見えないのです。天の意志は、民が示すのですよ」

「民が？」

「又七郎殿はよくご存じます。御北様も又七郎殿のようなご嫡男がいらっしゃって、ご安心なさっているでしょう」

珍しく義久に褒められて、又七郎は照れて笑った。義久は滅多に人を褒めないのだ。徳寿丸は褒められた覚えがない。

「あの、『民貴しと為す、社稷これに次ぐ、君輕しと為す』という教えでして、天下に良い政治を行って、天下の民の帰服を得るものが王となるのだそうです」

「又七郎は物知りだな」

「和尚様に教わりましたから」

「これは遠い明の国の話ですが、徳寿丸様のご参考にもなりましょう。皇帝や天子や王を当主に置き換えてお考えください」

「それは、えーと、天命というものは民が示すのだから、つまり、民に好かれる良い当主にならねばならない、ということか？」

「はい。民だけではなく、家臣たちにも好かれるお屋形様におなりください。御父上のように」

「それは、民に恩恵を与える仁政を敷く政道で、王道というものののだそうです」

「王道か。では、俺が王道を実行することができず、父上のような良い当主になれなかったら、殷の紂王のように一夫になり下がって又七郎に討たれるかもしれないということか？」

「大まかに言えばそういうことです。それに、徳寿丸様には喝食丸様という弟君もいらっしやいますし、今後新しい弟君がお生まれになるとも限りません。その場合、家督を継がれるのは徳寿丸様には限らないかもしれないということをお忘れなく」

「義久は俺よりも武勇に優れ、学もある。お前がその気になったのなら、佐竹の天命は俺ではなくお前に移りそうだ」

「お戯れを」

徳寿丸は半ば本気で言ったのだが、義久は子どもの戯れと思ったのか、一瞬目を伏せたただけだった。だが、徳寿丸は義久ならば本気を出せば天命を受けることができると思った。もし明の国にある天命というものが、この佐竹にも存在するとしたらの話だが。そう思うと、面白くない。

「義久、孔子だの墨家だの孟子だの、こういう話はもういい。それよりも『孫氏』や『六韜』、『三略』などの兵法を学びたい」

「俺も、兵法がいいなあ。今までの話は難しくてよく分かんなかったし」

「では、次からはそちらの講義をいたしましょう。明の古の教えは

参考にしていたければ」

三郎の言葉に義久は眉をしかめたが、徳寿丸の希望通り次回からは兵法の講義になった。講義の後、義久は表へ戻り、これから常光院に行くという又七郎も別れ、三郎は気づいた時にはどこかに行っていた。

ひとりになった徳寿丸は、おしばのもとへ行った。おしばは、針仕事をしている最中だったので、抱きつくのはやめにした。それに、もし三郎にそんなところを見られたら、からかわれるに決まっている。

「徳寿丸様、御東様の講義は終わりましたか？」

「今終わったところだ」

針仕事の手を止めたおしばにぴたりと寄り添うように、隣に座った。おしばは徳寿丸の顔を見て、ちゃんと話を聞いてくれている。

「今日は、孟子の勉強をしたんだ。もし俺が良い当主になれなかったら、又七郎や義久に討たれるかもしれないのだそうだ」

「まあ、それは恐ろしい」

「うん。俺も恐ろしいと思った」

「でも、徳寿丸様ならば大丈夫。必ず良いお屋形様になれます」

「そうだろうか。俺は、俺よりも義久のほうがふさわしいと思った。だって、義久は俺よりも武芸もできるし、知略も優れている。俺は、武芸は三郎よりできないし、学は又七郎には及ばないし」

「もう、何を弱気におなりですか。わたくしから見れば、徳寿丸様ほどのお子はいらっしやいませんのに。御東様は徳寿丸様よりずっとお年が上ですし、三郎様とも又七郎様とも違って良いのですよ」

「本当に？」

「ええ。わたくしにとっては、徳寿丸様が一番のお子なのです」

そう言っておしばは、徳寿丸を抱きしめてくれた。少し照れくさくはあるのだが、おしばにこうして抱きしめてもらうのは好きだ。安心する。おしばはどんな徳寿丸でも受け止めてくれる。おしばのそばにいる時が、一番心が安らぐのだ。

おしばの胸に頭を預け、徳寿丸は目を閉じた。あたたくて、とても気持ちよかった。

はっと目を開けると、目の前に広がるのは見慣れた天井だった。

夢を見ていた。懐かしい夢。もう十年近く前のことだ。今では南義種と名乗り南家を継いだ三郎、北義憲として父親とともに宗家を支える又七郎。何よりも、今となってはもう会うこともないおしば。幼いころ、徳寿丸の周りには一門の三人がいつもいた。今思えば、あれは父が年の近い三郎、又七郎を徳寿丸のそばに置いて、互いに競い合わせようとしていたのだと思う。そして、三人の目標として義久がいた。その思惑通り、徳寿丸は三郎と又七郎と競い、誰よりも義久を意識していた。

おしばには、元服してからというものの一度も会っていない。元服してからもおしばがそばにいれば、義宣はおしばに甘えてしまう。それを防ぐために、おしばは義宣の前から姿を消したのだ。今は母の侍女のひとりになっている。だが、義宣と顔を合わせたことはない。

夢に見た幼いころの記憶の中に、母は登場しなかった。それは当然だ。義宣の思い出の中に、母との思い出など存在しないのだから母親のように愛してくれたのは、おしばだけだった。

これが武家のならいと言われれば、確かにそのとおりなのかもしれないが、母に愛された記憶は存在しなかった。それで、よく今まで母の愛を信じようと思い続けてきたものだ。笑ってしまう。

あれは幼いころの夢だが、今でも義宣に変わらず根付いている気持ちがある。武芸は義種にかなわない。知略は義憲にかなわない。すべてが義久には及ばない。幼いころから今までずっと思ってきた。義久にはすべてがかなわない。武芸も知略も、家臣たちの期待も、母の信頼もすべて義久のものだ。佐竹家御一門、東家当主、佐竹義久。幼いころ感じたように、義久が宗家の当主になってもおかしく

ないかもしれない。

隣に視線を移すと、小糸と名乗った女が眠っていた。八重の部屋を出て、この小糸とぶつかって、そのまま義宣は小糸を寢所に連れて来ていた。

名前しか知らない。ただ廊下でぶつかっただけの女を抱いた。誰でもよかった。女の柔らかさとあたたかさを求めている。

だが、満たされることなどなかった。女を抱いている時だけは、何も考えずにただ体に溺れることができた。あたたかさも柔らかさも感じた。ただ、それだけだ。

満たされない心は、ただむなしく乾いていくだけのようだった。

## 那須の女と伊達の女（十）

小糸と寝たのは、これで何度目になるだろうか。まだ片手で数えられるだけの数のような気もするし、それよりも多いような気もする。だが、十度は越していないと思う。

初めのうち、当主である義宣と閨を共にすることが恐ろしかったのか、男に犯されることが恐ろしかったのか、それとも義宣の妻である八重に見つかることが恐ろしかったのか、何に怯えているのかは分からなかったが、小糸は震えて小さくなっていた。

数を重ねるごとに震えは収まり、最近では甘えるような態度も見せるようになってきた。八重ならば絶対に見せないような姿だ。

小糸を抱くようになってから、八重のもとへは一度も足を運んでいない。

今も小糸は義宣にしなだれかかるようにして甘えている。甘えられて悪い気はしないが、最近の小糸の態度は甘えを通り越して、義宣に媚びているように見えた。

「お屋形様」

「何だ？」

「あの」

義宣を見上げる小糸の目は、まわりつくような媚びを感じさせた。不快だと思った。

「何か言いたいことがあるのか？」

ええ、でも、と焦らすように小糸はなかなか話を切り出さない。話したいことがあるから声をかけたのだろう。早く言えばいい。何だ、ともう一度催促すると、小糸は義宣の肩にぴたりと寄り添い、呟いた。

「いつ私を側室にしてくださいさるのですか？」

「側室？」

小糸の言葉はあまりにも予想外で、思わずそのまま聞き返してし

まった。だが、小糸の方は聞き返されることに驚いたようだった。

「はい。あの、お屋形様は私を側室になさるおつもりなのではないのですか？」

「違うな」

「え？」

小糸を側室にするつもりなどない。小糸を抱いたのは、小糸を側室にするためではない。女の柔らかさ、あたたかさを求めていただけで、誰でもよかった。側室にするつもりもなかった。何度か小糸を抱いたのは、新しく女に手をつけるのも面倒だと思っただけで、別に小糸を気に入っているわけではない。

「で、ですが、私はもう七度もお屋形様の閨に呼ばれて」

「それがどうした」

小糸の顔が強張っていく。目には涙がたまり、わっと泣き出してしまった。

「私は、お屋形様の側室になれると思い、お屋形様にこの身を差し出したのです。お屋形様と初めて閨を共にした時、私には許嫁がおりました。ですが、お屋形様のお情けを受けた身では、もう許嫁のもとへ嫁ぐわけにはまいりません。許嫁と一緒になれないのならば、お屋形様の側室にと思ったのです。浅はかな考えとお笑いになるかもしれませんが、私にはもうそれしか考えられなかったのです」

「そうか、分かった」

「では」

涙で濡れた小糸の顔が明るくなった。小糸の話を聞いて、最近媚びるような態度を取っていたのは、側室にしてくれとねだるためだったのかと納得した。納得すると、小糸に対する気持ちも一気に冷めていった。もともと気持ちなどないのだが、もう顔も見たくないと思った。

「勘違いするな」

「え」

「お前の事情は分かった。だから、お前の嫁ぎ先を手配してやる。」



家臣の子弟の中に、ちょうどお前に見合つた年の者がいるだろう。

そいつの妻にしてやる」

「そんな、相手の方に、私がお屋形様のお情けを受けた身と知れたら」

「何も言わないだろうよ。俺の家臣だからな」

一門や譜代などの家臣の子弟ではなく、もつと力のない末席の子弟にくれてやればいい。文句は言わないだろう。

小系はただ泣きじゃくるだけだった。目の前でずっと泣かれていても鬱陶しいだけだったので、侍女を呼んで小系を連れていかせた。侍女は、義宣と小系を見て目を丸くしていた。

その後、小系の嫁ぎ先を手配し、小系の父親には金を一粒くれてやった。それで、小系の問題は終わらせた。

小系との関係が終わってから、義宣はひとりの女を何度も抱くことはやめた。多くとも、関係を持つのは三度までと決めた。あまり何度も閨に呼ぶと、小系のように側室にしてくれと言いだしかねない。そのような面倒な事態は避けたかった。

ひとりの女との関係は薄くなったが、代わりに複数の女を相手にするようになった。二、三度閨に呼んで相手をさせて、女が甘えて媚びないうちに、嫁ぎ先を決めるか、金を払って関係を終わらせた。最近では、義宣が八重ではなく侍女などの奥で仕えている女ばかり相手にしている、という噂が女たちの間で流れ始めたようで、自ら義宣のもとへやってくる女もいた。あわよくば側室に、という魂胆が見え透いていて嫌気がさした。

母や八重に見いだせなかったものを、女たちで埋めようとしたはずだったのに、何度も同じことを繰り返すたびに、心はますます冷たく空しくなっていくばかりだった。

あの女たちは、義宣が佐竹家の当主であるから、体を義宣に差し出すのだ。

今夜も、女に金を握らせて追い返した。ひとりで天井に視線を向けていると、襖の向こうから、お屋形様、と声をかけられた。

「何だ？」

「お見送りいたしました」

「そうか」

今日追い返した女は、無事に送られたらしい。そういえば、義宣が追い返す女をいつも送っていくのは、同じ女だった。

襖を開けると、女は驚いて顔を上げたが、急いで頭を下げた。なぜか、この女を相手にしようと思ったことは一度もなかった。この女からは、義宣に媚びる態度が見えないのだ。

「次の相手はお前にする、と言ったらどうする？」

女は考えているのか、深く俯いたまま動かなかった。しばしの沈黙の後、顔を上げて義宣の顔を見つめ、口を開いた。

「尼になりとうございます」

「尼？」

冗談だろう、と思ったのだが、女の目に迷いはなく、言葉もまっすぐだった。夜の闇のように、女の目は深く、それが少し恐ろしかった。

「お屋形様がおなごの心を弄ぶことも、おなごがお屋形様のお情けにあらぬ期待をかけることも、業のなせることなのでしょう。このむなく悲しき連鎖を断ち切るために、私は尼となって仏に祈りを捧げて生きたいと思います」

「お前は、俺を蔑んでいるのか？」

「いいえ」

「では、何だ」

「ただ、お屋形様もおなごたちも、悲しいと」

悲しい。何を言っているのだろうか。確かに、義宣自身もこの行為に何の意味もなく、空しいだけだとは思っている。だが、女たちも結局は金を握らされ、嫁ぎ先を決めれば誰も文句は言わないではないか。

仏に祈られるほどのことはしていないはずだ。だが、女の目は義宣を責めているようだった。

失礼します、と言って去って行った女は、二度と義宣の目の前に現れなかった。もしかしたら、本当に尼になったのかもしれない。だが、義宣は女たちを閨に呼ぶことをやめようとは思わなかった。

## 那須の女と伊達の女（十一）

義宣がいろいろな女に手をつけているという噂が、奥にいる女たちの間で広まっていた。

初めのころ、それは噂に過ぎないのではないかと芳は思っていたが、小大納言の話は具体的で、これが事実なのだと確信するに足るものだった。

義宣は、侍女だろうが家臣の娘だろうが、気に入った女がいれば手をつけて、それなりの金を渡して家に帰しているらしい。中には気に入られてしばらく側に置かれた女もいるようだが、それも側室というわけではなく、義宣が飽きたらほかの女と同じように金を渡して実家に帰しているそうだ。ほかにも、家臣の妻として嫁がせた女もいると聞いている。

そうしていろいろな女に手をつけるくせに、御台のもとには全く足を運んでいないらしい。

義宣は何を考えているのだろうか。女たちを自分の意のままに操れる道具だとも思っているのだろうか。

侍女も家臣の娘も、義宣に呼ばれたら断れるはずがない。そして手をつけられてしまえば、嫁に行くのも難しくなりはしないだろうか。義宣の世話をしている侍女に手をつけるならば、まだ理解できる。それ以外の女にも手をつけて、責任を果たそうともしないのはどうかと思う。

女たちの世話を見るのが嫌ならば、黙って御台のもとへ行けばいいのだ。義宣は、今まで側室をひとりも置こうとしなかったではないか。だが、義宣がどのような意図で側室を置いていないのかは分からないが、芳の目から見て、義宣と御台の中が睦まじいようには見えなかった。だから、義宣は御台を相手にしないのかもしれない。芳としても、あの御台の産んだ子どもが嫡男になるのかと思うと、溜め息をつきたくなるが、御台との不仲の結果がこれなのならば、

どうしたものかとも思う。

本当に、義宣は何を考えているのだろうか。突然、女漁りに目覚めたのか。分らない。だが、これは注意すべき行為だ。義重もいろいろな女に手をつけていた時期はあったが、今の義宣ほどではなかった。同じ女として、義宣に手をつけられた女たちが不憫だ。

「義宣」

廊下で芳の姿を見かけた途端、きびすを返そうとした義宣を呼び止めた。義宣は洪々といった様子で振り向いた。

「お前は、いろいろな女に手をつけているそうだね。そして、飽きたら実家に帰しているそうではないか」

「生活に困らないだけの金は渡してあります。何か問題でもありませんか？」

「もし、その女がお前の子を身ごもっていたらどうする？」

「その時は、俺の子ではないと言えればいいでしょう。事実、本当に俺の子かどうか、そんなことは分からないではありませんか。俺以外の男とも寝ているかもしれませんからね」

「義宣、お前」

何と自分勝手な言い草だろうか。これでは、手をつけられた女たちがあまりに哀れだ。今のところは、義宣の子を身ごもった女がいるという話は聞いていないが、もし今後そのような事態が起こったら、と思うと寒くなる。その子どもが女ならば、まだいい。だが、男だとしたら、御台に子ができぬ以上、その子どもが嫡男となるのだ。

「義宣」

「何ですか」

「お前は、手をつけられた女たちの気持ちを考えるべきだ。もっと、女を大切にすべきだよ」

芳の言葉を聞いた瞬間、義宣の目が見開かれた。そして、はつ、と乾いた笑いを義宣は漏らした。嫌な笑い方だと思った。

「母上がそのようなことをおっしゃるのですか」

「義宣」

義宣の顔に暗い陰が見える。怒りと諦めが入り混じったような目で、義宣は芳を見ている。

「母上にだけは、言われたくありませんでしたよ」

そう言つて立ち去る義宣の背中を、芳はただ黙つて見ていた。義宣の背中には、無言で芳を拒絶していた。

なぜ、義宣がそう言つたのか、芳には分からなかった。

義宣が奥の女たちに手を出しているらしい、という話で奥は持ち切りだった。誰が情けを受けた、誰が誘われた、という話ばかりで、八重はうんざりしていた。

八重はほかの女にばかり手を出して、自分のもとへは一向に足を運ばない義宣に対して恪気を起こしているわけではない。ただ、あきれ果てているだけだ。

別に、義宣が女に手を出すことはかまわない。側室を置きたければ好きなだけ置けばいい。だが、誰かれかまわずに手をつけて歩いているということには、あきれて言葉も出ない。とりあえず、吉野は義宣に何もされていないようなので安心した。

はあ、と溜め息をつくとき、吉野は八重を見て苦笑した。

「姫様、恪気ですか？」

「まさか。なぜ、わたくしがあの男のためにそのような気持ちにならないければならないの？」

「まあ、恪気は七去の一つですし、恪気を起こされないことはよいことだとは思いますが、姫様はお殿様に対して無関心すぎです」

吉野の言う七去は、妻を離縁できる七つの事由のことだ。その中には、嫉妬をすることも含まれていた。

「源氏だから、光源氏の真似事でもしているのかもしれないけれど、わたくしからすれば、ただあきれるばかり。穢らわしい。それに、七去と言えば、わたくしは子もなしていないし、舅と姑に従順でも

ない」

那須の兄も、正室以外の女に手は出していた。だが、兄は義宣と違い、手を出した女は側室にしていたし、責任を持って世話を見ていた。父もそうだった。義宣は違う。つまみ食いでもするように、好き勝手に手を出して、捨てている。

「では、お殿様が光源氏ならば、姫様は藤壺といったところでしょうか？」

「次郎殿の初恋の相手がわたくしだと言いたいのか？」

八重が光源氏を例えに出したからか、吉野は無理やり藤壺の名前を出したような気がする。藤壺といえば、光源氏の初恋の相手で、永遠の理想ではないか。義宣にとつての藤壺が、八重のはずがない。「私はそう思いますけど」

「吉野、そなたはあの男の肩を持つのが好きね」

「肩を持つわけではありません。姫様とお殿様が睦まじくなさつたらいいなあ、と思っただけで」

それは無理な話だ。八重は義宣と睦まじくする気などまったくない。八重はあくまでも兄のために佐竹家に嫁いだのだ。そして、八重が義宣を拒んだのではなく、佐竹家が八重を拒んだのだ。だから八重も義宣と睦まじくする気がない。義宣のことなど、どうでもいいのだ。

だが、最近の義宣の行為と、兄が佐竹と同盟を結んでいる宇都宮を攻めたことで、八重の気持ちは無関心から、義宣を忌む方へ傾いていた。

「それにしても、次郎殿に手をつけられた女の中で、次郎殿が初めて契った男だという女がいたのなら、その女が哀れ」

「なぜですか？」

溜め息をつきつつ眉をしかめる八重に、吉野は首をかしげてみせた。その姿に、今度は八重が苦笑した。

「その女が死んだ時、三瀬川を渡るためには、次郎殿に背負われなければならぬものだもの。ほかに恋い慕う男がいたとしても、死後

の世界で待っているのはあの男。一体、あの男は何人の女を三瀬川の向こう岸へ運ばなければならぬのかしら」

女が死んでから往生するためには、男に背負われて三瀬川を渡らなければならぬ。その男は、女が初めて情を通じた男でなければならぬのだそうだ。だから、義宣がその女にとって初めての男だとしたら、死後に愛しい男に会いたいと切望しても、義宣の背に乗らなければならぬ。女にとって、それは苦痛以外の何物でもないだろう。愛しい男がいるのならば、その男に会いたいはずだ。

「確かに、死後の世界で待っているのは、恋い慕う殿方の方が嬉しいです」

「やはり、吉野もそう思うでしょう？」

「はい。ですが、姫様もお殿様に背負われるのですよね」

「わたくし？わたくしはあの男に背負われたくないわ」

「ですが、お殿様に背負われなければ往生できないではありませんか」

嫌だなんておっしゃらないでくださいよ、と八重を心配する吉野に、八重はただにこりと笑ってこたえた。



## 那須の女と伊達の女（十二）

岩城常隆が兵を發して田村を討つというので、義宣は父と、弟の義広とともに常隆に協力すべく、兵を須賀川に進めた。母が義久に政宗を助けさせてから、そろそろ一年が経とうとしている。

この一年の間に、政宗との間に戦はなかったが、またいつ戦があるか分らない。天下を統一しつつある秀吉は、私的な戦をやめさせようとしているようだが、政宗に攻められた場合、こちらも黙っているわけにはいかない。

佐竹と蘆名は太平城を攻め取ることになったが、守りは固く、そう簡単に攻め落とせるものではなかった。だが、佐竹と蘆名が協力すれば、落とせないものではないだろう、と思っていたのだが、蘆名は城を囲んだまま動かさずとなかった。

そのまま数日が過ぎ、義広は何をしているのか、と父が怒り始めたころ、ちょうど義広は佐竹の陣へやってきた。父は義広を怒鳴りつけようとしたようだったが、義広の顔が強張っているのを見てやめていた。

「父上、兄上、申し訳ありません。蘆名の兵は何をしているのだとお思いでしょう。しかし、数日前から、家中に伊達へ通じているものがいるとの噂があり、動けずにいました。先ほど、城から知らせがあり、政宗が我が黒川城へ攻め寄ろうとしているとのことですよ」

「そうか」

「このままでは、黒川城を落とされてしまうかもしれません。申し訳ありませんが、私は城へ戻り、城を守りたいと考えます」

「それでは仕方がなからう。急いで帰陣し、守りを固めるべきだ」

「ありがとうございます」

父は渋い顔をしていたが、蘆名勢の帰陣を認めた。義広は急いで兵をまとめ、黒川城へと戻って行ったが、なぜ父がその許可を出すのだろうか。佐竹としての許可を出すのならば、当主である義宣が

出すのが当然ではないのか。

だが、弟の危機にそのような小さいことは言っていられない。この思いは、胸の内で留めておくことにした。

義広は黒川城へ戻ってから、義宣は父と太平城攻めを続けていた。もう少しで城は落ちるだろう。太平城を抜くことができれば、佐竹が蘆名の助けに向かうこともできるはずだ。

義宣は太平城を抜いた後、義広を助けようと思っていたのだが、義広から届いた知らせに義宣は愕然とした。父も言葉を失っていたようだった。

義広は黒川城へ帰った時には、すでに蘆名家の族臣である猪苗代盛国が政宗にに応じて、義広に背いた後だった。猪苗代盛国は自分の守る猪苗代城へ政宗ら伊達の軍勢を招き入れ、蘆名との闘いに備えていたのだそうだ。

義広はこれを討つべく、その日の夜のうちに摺上原へ兵を進めた。そして、翌日に伊達勢と戦い、四百騎余りで政宗の本陣である八ヶ森へも迫ったそうだが、ついには政宗に敗れてしまった。義広は、かくなるうへは腹を切るしかない、と死のうとしたそうだが、佐竹家から義広に従って蘆名へ行った者たちに止められ、黒川城へ帰陣した。

義宣たちと別れて義広は黒川城へ戻ったのは、確か三日ほどまえだったはずだ。わずかここ二、三日の間で、蘆名は伊達に惨敗してしまったというのか。

義宣は父と相談し、急いで太平城を攻め落としたが、蘆名の救援には間に合わなかった。義広は黒川城を捨て、蘆名を継ぐ前に養子となっていた白川へ出奔したのだそうだ。

義広は政宗に敗れ、黒川城へ戻った段階で、蘆名家の宿老二人とその息子が政宗に内通していた。宿老が政宗にに応じてしまった以上、城を保つことはかなわず、義広は城を政宗に明け渡ししてしまったのだ。

白川から佐竹の陣へたどり着いた義広は、佐竹家から従って行っ

た大縄、羽石と、白川家にいた頃から世話になっていた舟尾父子、それに妻を連れただけだった。ほかの家臣たちは散り散りになっており、再び集まることがかんうかどうかも分らない。

「私の力が至らないせいで、城を保つことすらかなわず、父上にも兄上にもご迷惑ばかりおかけして、申し訳なく思っております」

「今となつては、どうすることもできない。生きていれば、いつかは蘆名家を再興することもできるだろう。今は、佐竹へ戻り、再起の時を待つしかあるまい」

「兄上、私は佐竹へ戻つてもよいのでしょうか？」

「俺はかまわない。父上は、いかがお思いですか？」

「わしも、今は佐竹へ戻るしかないと思う」

「ありがとうございます。妻のためにも、いつか必ず蘆名家を再興したいと思います。その時まで、お世話になります」

義宣と父の言葉を聞いて、義広は涙を流しながら頭を下げた。義広の妻も、泣きながら頭を下けている。義広の妻は蘆名家の娘だ。蘆名盛隆の嫡女を義広が妻に迎えて、蘆名家を継いだ。義広の妻は、自分の実家が政宗に滅ぼされてしまい、さぞ苦しい思いをしているだろう。義広も、自分が継いだ家を滅亡に追いやってしまい、苦しんでいるに違いない。

そんな弟たちの姿を見ると、義宣も胸が痛む。だが、同時に母への怒りがこみあげてくる。母が義久に政宗を助けさせなければ、義広がこのような目にあうことはなかったかもしれない。それに、今政宗に家を滅ぼされたのは義広だが、明日は我が身かもしれないのだ。

会津恢復をはかり、しばらく兵を須賀川に留めていたところに、秀吉と景勝からの書状が届いた。秀吉の書状は父にあてられたもので、景勝の書状は義宣にあてられたものだった。

秀吉の書状は、景勝から政宗が会津を攻めていることを聞いた、政宗には兵を退くように書状を送ったので、それに背いた場合はこちらが兵を差し向けるつもりでいる、蘆名のことは悪いようにはし

ない、出陣の場合は景勝とよく相談するように、という内容だった。義広は以前から秀吉と好を通じていたため、このような書状が送られてきたのだろう。佐竹でも秀吉とは好を通じている。

景勝の書状も、内容は秀吉と同じようなもので、いざという時には援軍にかけつけるつもりでいる、と書いてあった。

ただ違うのは、秀吉は父に書状をあて、景勝は義宣に書状をあてているということだ。上杉家とは、先代の謙信の頃から親交がある。そのため、景勝は義宣が家督を継いだことを知っているのだ。だから、義宣にあてて書状を書いた。秀吉は、義宣が家督を継いだことを知らなかったのだろう。いまだに当主は父と思っているため、父に書状を出したに違いない。

上方では、いまだに佐竹家の当主は父だと思われているのだと思うと、溜め息をつきたくなった。

秀吉と景勝からの書状が届いたことによつて、佐竹は兵を退くことにした。これ以上留まっても、会津を政宗から取り返すことは難しいだろうし、秀吉が出陣の際は景勝と相談するように、と言っている以上、今はおとなしく帰陣するしかない。

太田城へ戻ると、義広が佐竹へ戻ると聞いていたのだろう、母が出迎えに現れた。

「義広、そなたが無事で本当に良かった。慣れぬ会津の地で、どれほど心細い思いをしていたかと、母は心配していたのだよ。これからは、父上や義宣と一緒に、佐竹のために尽くしておくれ」

義広の手を取り、無事で何より、と嬉しそうに繰り返す母を見て、義宣は怒りを抑えるのに必死だった。母は何を考えているのだ。何が、無事で良かった、だ。母が可愛い甥を助けたせいで、わが子は国も城もすべて失ったというのに。そのことを理解していないのだろうか。この場には、義広の妻もいるのだ。義広もその妻も、何と思っているのか。

その後十月になり、政宗は兵を須賀川に進めた。須賀川は、亡き二階堂盛義の妻である伯母が、女城主として守っていた。伯母は母

の姉にあたる伊達家の長女だった。

義宣としては、出陣して須賀川を助けたかった。須賀川が抜かれれば、政宗が次に攻めるのは佐竹に違いない。だが、秀吉は書状で、出陣の際は景勝と相談するように、と言ってきている。つまりは、出陣するなと言っているようなものだ。

仕方なく、義宣はわずかの兵を援軍として須賀川へ派遣した。だが、須賀川城の城内では、二階堂四天王と呼ばれた守谷や族臣が政宗に内通しており、戦が始まる前から負け戦と決まっているようなものだったらしい。

伯母は宿老の須田盛秀とともに、最後まで政宗に抵抗したが、ついに政宗に捕らわれてしまい、須賀川城は炎に包まれ落城した。二階堂家に最後まで忠節をつくした須田盛秀は、戦の後に佐竹家へやってきたので、義宣が召し抱えた。

母が政宗を助けたせいで、今度は母の姉が憂き目を見た。実家を助けるために、自分の身内がどのような目にあっているのか、母は理解していないのだろう。なぜ、母はこうなのか。考えれば考えるほど、腹の虫がおさまらなかつた。

### 那須の女と伊達の女（十三）

那須の資晴から届いた文を、八重は嬉しそうに何度も眺めていた。一体何が書いてあるのだろうか、と覗こうとすると、さっと隠されてしまい、吉野は八重と顔を見合わせて笑った。

「姫様は、本当に那須の兄上様がお好きです」

「ええ、もちろんよ。甥の藤王丸が順調に大きくなっているようで、わたくしも嬉しい」

「まあ、藤王丸様が。それでは、姫様の頬も緩むというものですね」「それだけではないのよ、吉野」

八重が見たこともない甥の成長を楽しみにしていることを、吉野はよく知っていた。資晴からの文には、いつも藤王丸のことが書かれているはずだが、今回の文はそれだけではなかったらしい。

「兄上は、伊達や北条と通じて佐竹を討つおつもりなのですって」

「え、姫様、それは」

それが八重の嬉しいことなのだろうか。吉野にはよく分からない。首を傾げると、八重が口許に笑みを浮かべた。

「北条は伊達と結んで佐竹を討ちたがっている。伊達が佐竹を滅ぼしたいのは、今までの戦を見てくれば分かるわね？兄上は、そのことを知って伊達に頻繁に書状を送っているそうよ」

「そして、三方から佐竹家を討つと？」

「ええ。その時には、必ずわたくしを那須に連れ帰ってくださいと、この文には書いてあるわ」

「姫様は、そのことが嬉しかったのですね」

「当然じゃない。この家を出て、兄上のもとへ帰ることができるのだから」

八重は、佐竹家に嫁いできた時から、今でも佐竹家を嫌っている。そして、那須の実家が何よりも大事で、兄を慕っている。その八重にとって、佐竹が滅んで那須に帰ることができるというのは、嬉しい

いことなのかもしれない。だが、そう上手くいくものだろうか。

「しかし、姫様。最近、天下は関白のものになったそうではありませんか」

「それは上方の話でしょう？あの北条と伊達と、兄上が組めば佐竹など取るに足らない。次郎殿は、この間も伊達に負けただけ。戦に負けて弟が実家に帰ってくる始末なのだから、笑ってしまっわ」

「私も詳しくは知らないのですけど、大御台様のお話によれば、佐竹家はその関白と好を通じていて、いずれは関白の命で上洛もするのだとか。いずれは北条も関白に屈するのだと伺いました」

「そなた、あの女の言うことを信じるの？そもそも、わたくしの知らない間にあの女のところへ行っていたとは」

本当は大御台のところへ行ったわけではなく、大御台の侍女の小大納言に、ねちねちと愚痴を聞かされただけなのだが、これ以上大御台の話題には触れないでおいただけのほうが良いだろう。

「まあ、いいわ。関白がどれほどのものかは知らないけれど、近いうちにわたくしは、きっと那須に帰れるのだもの」

八重が嬉しそうにしていると、吉野も嬉しい。だが、八重の那須大事の気持ちは、少々行きすぎではないか、とも思う。佐竹家に嫁いできて、もうすぐ五年になるのだから、もう少し佐竹家に馴染んでも良いのではないだろうか。その方が、八重の立場もずっと良くなるはずだ。義宣の子を産んでいない八重の立場は、佐竹家の中では非常に危うい。

どうしたものでしょうか、と吉野が内心首を捻っていると、御台様と八重を呼ぶ声がした。八重が入るように促すと、部屋に入ってきたのは、朝霧あさぎりだった。朝霧は、ここ一年ほどで八重に気に入られた侍女だ。吉野とともに、八重の側近くで仕えている。

「御台様、今夜お屋形様のお渡りがあるそうです」

「断りなさい」

「しかし、姫様、先日もお断りなさったではありませんか。今夜は、お迎えなさってはいかがですか？」

「嫌」

断言する八重に、吉野と朝霧は顔を見合わせた。ここ数力月、八重は一度も義宣に会ってすらいない。

八重の義宣嫌いには困る。一時期、義宣は家臣の娘や侍女、女中など誰彼かまわず手をつけていた。そのことを八重は憎んでいるようだった。汚らわしい、とまで言っている。それが怪気などではなく、八重の本音なのだから困るのだ。もともと義宣に関心がなかった八重が、無関心から嫌悪の感情を抱いてしまった。ほかの女たちに手を出している間は、八重のもとに義宣が来ることはなかったのだが、最近また義宣が八重のもとへ来るようになった。だが、八重は義宣を徹底的に拒もうとしている。

以前は、義宣のことを嫌っていても、褥は共にしていたというのに、いまは最後に共寝をしたのがいつなのかも分からないくらいだ。「御台様、お屋形様のお渡りをお迎えください。大御台様に怒られてしまいます」

「あの女がどう思うと関係ないわ」

つん、と顔を背ける八重に、朝霧は困り果ててしまっている。これから、朝霧は義宣に断りを入れに行かなければならない。それが憂鬱なのは吉野も分かる。今まで断りに行っているのは吉野だ。朝霧は、今回初めて断りに行く。朝霧が目で吉野に助けを求めているのが分かる。仕方なく、吉野は朝霧とともに義宣のところへ行くことにした。

「吉野殿、申し訳ありません。わたし、ひとりでお屋形様のところへ行くのが怖くて」

「いいんですよ、朝霧。私だって最初は怖かったものです。今は、慣れちゃいましたけど」

「それにしても、どうして御台様はあんなにもお屋形様や大御台様がお嫌いなんでしょう？」

「姫様は、確かに大御台様のことはお嫌いですが、お殿様に関しては、お嫌いと言っか、何と言っか」



八重が義宣のことをどう思っているのか、真実は吉野にももちろん分らないが、朝霧の言うとおり嫌っていることは確かだ。だが、なぜ嫌いなのか。気づいた時には、八重は義宣も大御台も佐竹家も何もかもが嫌いだった。那須に帰りたい、と泣いていたこともあった。

「うまく言えないのですが、姫様は、初めからお殿様のことも、大御台様のことも、佐竹家のことも好きになるつもりがなかったように思えます。しいて言えば、初めからこのお家のすべてを拒んでいらつしゃったのでしょうか。姫様は、実家の那須家が何よりも大事なので」

「それでは、お屋形様もお気の毒ですね。お屋形様が何をお考えなのかも分かりませんが、お屋形様は少なくとも御台様を拒んでいらつしゃるわけではないようですから。ただ、一時期の、あの、奥の女たちとのことは、どうかと思いますけど」

「そうなのです。今も、お殿様はいくら断りを入れても必ず姫様にお会いになろうとなさいます。昔から、お殿様は姫様を嫌ってはいない、むしろ好いていらつしゃるように私は思うのですよ」

「吉野殿がおつしゃるならば、そうなのかもしれませんけど、わたしにはよく分かりませんわ」

「それが問題なんですよね。朝霧と同じように、姫様自身がそうお思いではないのだから」

ため息をつきつつ苦笑すると、義宣が待つ部屋の近くまでたどり着いてしまった。吉野は朝霧とふたり、さらに深いため息をついてから、義宣に声をかけた。

## 那須の女と伊達の女（十四）

須賀川城が政宗に攻め落とされ、来春には政宗によって佐竹討伐が行われるか、と家中は動揺していたが、義久と北義斯宛てに秀吉からの書状が届いた。

その書状によれば、来春には小田原征伐に向かうため、佐竹も出陣するように、とのことだった。秀吉は以前も、富士山を見に行きたい、と小田原征伐を匂わせる書状を父に送っていたが、来春ようやくそれが果されることになったようだ。

この小田原討伐についての書状は、関東の領主には送られているようで、宇都宮国綱からどうするつもりか、と尋ねられた。義宣は江戸や大掾にも小田原参陣について書状を送り、八重の実家の那須家にも書状を送った。だが、どこからも良い返書は来なかった。

年が明けて、いよいよ秀吉の出陣が迫ってきた。だが、義宣は間もなく赤館まで出陣しなければならない。伊達の兵が赤館近くまで迫ってきているのだ。私戦は秀吉に禁じられているが、領地を守るためには仕方がない。

出陣前の慌ただししい太田城に、下妻城の多賀谷重経が訪ねてきた。重経は父が当主だった頃、父のもとへ来て旗下に属すると約束していた。娘が生まれたら、必ず人質として差し出すとも誓っていたらしい。多賀谷家のもとの主家は結城家で、今も重経は結城家に従っているが、佐竹の旗下にも属したらしい。何とも不安定な立場だと思う。そのため、父は重経の娘を人質として差し出せることにしたのだ。

重経が連れてきた娘は、まだ幼かった。十歳にもなっていないだろう。重経に促され、娘はたどたく頭を下げた。

「下妻から参りました。多賀谷重経の娘、琳と申します」

「そうか、姫はいくつになった？」

「八つにございます」

八歳というと、弟の能化丸と同年だ。今は実家に戻っている義広は、他家に養嗣子として迎えられ、実家を出て行ったが、心細かったことだろう。この姫は人質としてやって来たのだから、不安も大きいことと思う。

だが、義宣は人質として差し出された幼い姫に割ける時間も、余裕も今はなかった。

「佐竹殿、ふつつかな娘ですが、何卒よろしくお願いいたす」

「多賀谷殿のお気持ち、承知いたしました。父にも伝えておきましょう」

「どうか、お頼み申します」

深々と頭を下げ、重經は太田城を去って行った。今度は結城家へ顔を出すのかもしれない。差し出された姫は、奥を取り仕切る母に預けた。人質を集めて置いている棟に連れて行かれることになるだろう。

正月十日、正月を祝うこともなく義宣は赤館へ出陣した。赤館で伊達とにらみ合っていると、宇都宮国綱から小場義成にあてて書状が届いた。国綱の弟の芳賀高継からも小場義成に書状が送られている。赤館に出陣している義宣に不安を覚えたらしく、小田原へともに参加するという話を忘れないように、と念を押されてしまった。しかも、上方の様子があやしいから急いで帰陣した方がいい、とのことだ。

その書状を見て、義宣は兵をまとめて太田へ帰った。目先の赤館のことなどどうでもいい。以前国綱も、北条との小競り合いから上洛を渋っていたが、秀吉の家臣である石田三成から、所領のことなど後から秀吉がどうとでもしてくれる、献上物も何もいららない、とにかく急いで上洛するように、と言われている。それならば、おそらく佐竹も今政宗に多少領地をかすめとられたところで、何とかするのかもしれない。

太田へ帰陣した義宣は、賀茂社へ小田原参陣の起請文を捧げた。家臣たちには、手柄を立てたものは直参だけではなく、家中、百姓

などまで褒美を与えること、手柄の評価に依怙贖戻はしないこと、討死したものの妻子は粗末にしないこと、などを約束した。

宇都宮とは頻繁に連絡を取り、互いに小田原へむけて出陣する時期を話しあっているが、那須家とはまったく連絡が取れない。八重の兄、資晴はどうするつもりなのだろうか。那須家は宇都宮と戦を繰り返しており、それだけで秀吉の心象はよくないはずだ。しかも、最近では伊達や北条に通じているという噂まである。もしその噂が事実ならば、那須家の女である八重を妻にしている義宣の立場は危うくなる。それは何としても避けたかった。

その真相を確かめたい、という思いもあつて八重のもとへ足を運んでいるのだが、体調がすぐれないとか、月のもののせいだとか、様々な理由をつけられて、八重には閨を拒まれている。義宣も昨年は摺上原での蘆名と伊達の戦以来慌ただしかったため、しつこく八重に迫ることはなかった。だが、今は状況が違う。八重ならば真相を兄から聞いているかもしれないのだ。それに、何力月も八重の顔を見ていない。八重の顔が見たかった。

八重の侍女の朝霧に話をすると、あつさりと今夜は義宣を迎えるとの返事がきた。もしかすると、吉野が八重を説得したのかもしれない。吉野は昔から、義宣と八重の仲を何とか改善させようとしている。

日が暮れて八重のもとへ行くと、しばらくぶりに会ったというのに、八重は相変わらず冷たい顔をしている。その表情は、以前よりももっと冷え冷えとしているようだった。

「八重、久しぶりだな」

「ええ」

「ところで、那須の資晴殿から何か聞いていることはないか？北条や伊達のことについて、いや、聞いていることならば何でも構わない」

「わたくし、何も存じません」

「何も知らないということはないだろう？」

「では、言い方を変えます。仮にわたくしが何かを知っているとしても、あなたにお話しすることは何もありません」

それきり、八重は黙り込んでしまった。八重が母のように実家大事の女であることは重々承知している。義宣に話せば実家の立場が悪くなるという話を知っているのならば、八重は話したがないだろう。この態度は、小田原参陣に関する那須家の去就を知っていると云っているようなものだ。

「八重、お前が実家大事なのは分かる。だが、これは佐竹だけの問題ではなく、那須家の存亡にも関わる問題なのだ。何か知っているならば教える」

「那須家の存亡？それはあなたが決めることではなく、兄上が決めることです」

「いや、天下は関白秀吉のものとなる。俺は関白殿下に臣従するため小田原へ向かう。資晴殿も小田原へ参られた方がいいと言っているんだ」

「そんなことを言っつて、わたくしの実家が関白に刃向うことが怖いだけでしょう？」

確かに、八重の言うことは当たっている。那須が秀吉に刃向うことは恐ろしい。義宣の立場が危うくなる。

「ご安心ください。兄上は負け知らず。関白に負けるはずがありません」

「何を言っている？まさか、資晴殿は本気で小田原へ参陣しないつもりなのか？」

「さあ？」

「八重、資晴殿を説得しろ。小田原へ参陣するように。このままでは、那須家は潰されるぞ」

「そのようなこと、次郎殿に指図されたくありません」

「お前、那須家取り潰しと引き換えに、佐竹も道連れにしようというのか？お前は佐竹を、俺を、恨んでいるようだったからな。兄をそそのかして、佐竹を潰すつもりか？妻の実家が関白の怒りを買え

ば、俺も連座するだろうからな」

「何を言っているのですか？」

八重はとぼけたように首を傾げるが、おそらく義宣の推測通りに違いない。八重は初めから、佐竹を潰す気だったのだ。だから、義宣に心を開かない。義宣の両親にも従わない。那須の兄を慕い続け、兄すらも欺いて、佐竹を潰そうとしている。そうでなければ、義宣が秀吉の怒りを買わないように細心の注意を払っているというのに、資晴が関白に負けるはずがない、などと言うものか。

「那須与一の末裔が何だ。佐竹は源氏の名門だぞ。源氏に従った那須氏の女の分際で、佐竹に楯突く気か」

叫ぶように言葉をぶつけた義宣を、八重は冷たい目で見つめていた。義宣がこれほど怒りに燃えているのに、八重はますます冷やかになっていくようだった。

「愚かな方」

ぼつりと呟いて、八重は笑った。静かなその笑みは、明らかに義宣を蔑むものだった。

那須の女と伊達の女（十五）（前書き）

直接的ではありませんが性的な表現があります。

## 那須の女と伊達の女（十五）

八重の言葉と目に、義宣はますます腹が立つた。何が、愚かな方だ。蔑むような目で義宣を見て、八重は一体何が言いたい。

「あなたは、昔おつしやいました。そう、確か妹君がお輿入れなさる前のことだったかしら。譜代連中は、過去の栄光にしがみつく、自尊心の強い頭の固い奴らばかり、と」

「ああ、確かにそんなことを言ったな。俺は今でも連中は好かない。だが、それとこれと何の関係があると言うのだ？」

八重がにこりとほほ笑んだ。何を考えているのか分からない。八重の笑顔を見たいと思っていたが、このような笑みは見たくなかった。

「あら、おかしいわ。今のあなたは譜代の連中と何も変わらないじやありませんか」

「何だと？」

義宣は眉間にしわを寄せた。それがおかしいのか、八重は小さく声をあげて笑った。その笑いは義宣をますます苛立たせた。

「あなたは、誰よりも佐竹という名門を誇っている。源氏の名門とというのがあなたの誇りなのよ。譜代の連中と一緒に。いいえ、それよりもたちが悪いわ。譜代の連中を嫌いながら、あなたも結局佐竹にしがみつかなければ生きていけないのだもの」

「何が言いたい？」

「過去の栄光にすがっているのはどなた？自尊心が強いのはどなた？佐竹という名門にしがみつく家臣を憎みながら、あなたが佐竹家の当主だから体を開く女しか相手にできないのはどなた？滑稽なこと、あの女たちはあなたが佐竹家の当主でなければ、あなたのいいなりになるはずがないのよ」

八重の言葉が胸に刺さる。義宣が手をつけてきた女たちは、城の奥の女たちだ。女の温もりに癒しを求めて、ただむなしくなっただ



けだった。義宣が譜代家臣を憎むこと、佐竹を誇りに思うこと、女たちに手をつけたこと、何が関係しているというのだ。そう怒鳴りつけたかったが、八重の言葉が胸に突き刺さり、言い返すことができなかった。

「それに、わたくしへの言葉。よほど佐竹家が誇りと思えます。佐竹に傷がつくのは嫌なのでしょう？名門に傷はふさわしくありませんものね。あなたは結局佐竹の人間なのよ。佐竹が何よりも大事で、誰よりも誇りに思っているのです。ふふ、おかしな方。佐竹のお飾りは嫌だ、と佐竹という名門を呪いながら、誰よりも佐竹という名門を誇りに思っているのだから」

義宣を馬鹿にするように笑った後、八重はきつく義宣を睨みつけた。怒りと憎しみに燃えるような目だった。

「佐竹家の過去の栄光をふりかざして、我が那須家を貶めるのであれば、わたくし許しません」

「お前に、俺の何が分かる」

小さく呟いて、義宣は八重の肩を掴んだ。八重は逃げようとするが、逃げさせはしない。

「お離しなさい」

「誰が離すものか」

必死に抵抗する八重の手を、空いている方の手で掴み、肩と手を掴んでそのまま八重を押し倒した。八重は怯えるどころか、ますます怒りを燃やしたようだった。

八重の夜着を肌蹴ると、薄暗い部屋の中でもはっきりと分かる白い肌が現れた。いろいろな女たちと関係を持っていた時も、常に思っていたが、改めて目の前にして義宣は思った。八重よりも美しく白い肌をした女を、義宣は知らない。

八重よりも美しい女など、この世にはいないのだ。

八重は、なぜ義宣を拒むのだ。なぜ義宣に心を開こうとしなかったのだ。なぜ佐竹家を憎むのだ。

なぜ、八重は義宣を愛さなかったのだ。

「八重」

憎らしい。義宣を愛さず、認めず、心を開かず、ひたすら実家を大事に思ってきた八重が憎らしい。母に似た女。那須の兄のことばかり口にして、義宣のことなど見ようもしない。腹立たしい。憎い。

八重を組み敷き、そのまま抱こうとしたが、八重は抵抗をやめない。だが、体の自由を奪われた状態での抵抗など、あってないようなものだった。

八重の抵抗を無視して、嫌がる八重の体を無理やり開かせた。部屋には衣擦れの音と、荒い息だけが響く。義宣は何も言わなかった。八重も無言だったが、必死に抵抗した。悲鳴をあげようもしない。それが、また義宣の苛立ちを増させた。

体だけ力ずくで奪って抱いても、奥の女たちに手をつけた時以上に、むなしいだけだった。

ぐったりと横たわる八重を置いて、義宣は八重の部屋を出た。何をしに来たのだ、自分は。もともと、八重に那須家の去就を聞きに来ただけだったはずだというのに。

新たな情報は得られず、八重との夫婦仲の決裂は決定的なものになってしまった。八重は義宣をますます厭わしく思うだろう。義宣も、八重が憎かった。

義宣が部屋を出て行った後、八重は暗い部屋の中でひとり涙を流していた。

最低の男だ。汚らわしい。悔しい。あの男に、この体を弄ばれた。蹂躪された。体にまだ義宣の感覚が残っている。それが不快でならなかった。

佐竹など滅んでしまえばいい。愚かな当主が道を誤ればいい。その時には、八重は那須へ帰るのだ。凶星を刺されただけで逆上するような男、夫だとしてももう二度と肌を許したくはない。今までは

妻として最低限の務めだろうと耐えてきたが、もう耐えられない。  
那須の兄が恋しい。

「姫様、吉野です。お殿様が退出なさったようですが、何かありましたか？」

吉野の声に、八重は肩を震わせた。まさか、吉野は八重と義宣のやりとりのすべてを聞いていたのだろうか。そう思ったが、吉野の言葉と様子から判断すると、それは違うようだ。八重が義宣に手箒にされたと知っていたら、吉野は冷静でいられるはずがない。

「吉野」

「はい」

「子流しの薬があつたでしょう？はやく持って来て」

「え、姫様？」

「はやく」

八重が怒鳴りつけると、吉野は慌てて薬を探しに行ったようだ。ばたばたと立ち去る足音が聞こえる。

「あの男の子など、産んでたまるものか」

八重の小さな呟きは、闇の中へ溶けていった。

## 那須の女と伊達の女（十六）

八重を無理やり抱いてから、一度も八重の顔を見には行かなかった。会いに行つたところで、八重が義宣に会うとは思えなかったし、会いに行く時間がなかった。

急いで小田原参陣の準備を整え、宇都宮と連絡を取り合い、すぐに宇都宮へ向けて兵を發した。宇都宮国綱と合流し、ともに北条方の城を攻め落としながら小田原へ向かうためだ。今回の出陣には、弟の盛重も加わっている。義広は名を盛重と改め、今回の参陣で蘆名家再興を狙っているのだ。

八重に構っている時間も余裕もなかった。だが、本当は八重に会うのが恐ろしかった。あのようなことをして、八重はどんな目で義宣を見るのか。考えただけで、恐ろしかった。

国綱と合流してからは、少しでも秀吉の心象をよくしようと、下野、壬生、鹿沼の城を攻めた。それに少し時間がかかり、小田原へは思っていたよりも遅く到着してしまつたが、城攻めをしていたのだから、遅参だと叱責を受けることはないだろう。まだ小田原へ到着していないものもいると聞いている。政宗は、まだ参陣していないようだった。

政宗がいまだ到着していないということに安心していると、義久が書状を持ってやつてきた。

「お屋形様、石田治部少輔様からの書状にございます」

「そうか。石田殿は何と？」

秀吉の側近中の側近である石田三成からの書状に、義宣は驚いた。まさか、安心していたが、秀吉は義宣が遅参したと思つてゐるのだろうか。だが、書状を持ってきた義久の表情を窺うと、そこまで深刻な内容ではないようだ。

「関白殿下へのご進物が見苦しくては、お屋形様のためにならない。と。ほかに、細々と注意が書かれておりました。殿下への謁見は

明日とのこと」

「それは、我らの進物では見苦しいということか？」

「おそらくは、そのような意味かと」

「今更言われても、どうすることもできないな。仕方がない。明日の謁見で頭を下げるしかないだろう。今日は休むぞ」

「承知いたしました」

義宣に三成からの書状を渡し、義久は去って行った。義久に渡された書状には、秀吉がいかに義久を高く評価しているかが書かれていた。

秀吉は、義宣が若いゆえに佐竹家中の仕置きは義久に任せようと思っていた、とか、秀吉が佐竹家中で知っているのは義久だけである、とか、義久を賛美することばかり書いてある。

その内容に、義宣は義久を呼びつけて、これはどういうことか説明させたかった。だが、義久を怒っても仕方がない。秀吉は、気に入った者がいれば破格の条件で引き抜こうとするのだと聞いたことがある。おそらく、これもそうなのだろう。そもそも、秀吉が佐竹の中で義久しか知らないということはありえないのだし、ここで義久に腹を立てては秀吉の思うつぼだ。

義久もそれを分かっている、義宣に書状を渡したのだろう。だが、そこまで考えて如才無く振舞う義久に腹が立った。

やはり、幼いころから変わらず、今でも義宣は義久に劣ったままなのだと痛感させられる。

翌日、国綱と連れ立ち、一門衆の義久、義憲、義種らを連れて秀吉の陣へ向かおうとすると、佐竹の陣所の前で立っている者たちがいた。秀吉が寄こしたのだろうか。

「お初にお目にかかります。関白、豊臣秀吉が家臣、石田治部少輔三成と申す。佐竹殿、宇都宮殿でございますか？」

「私が、佐竹義宣にございます」

「宇都宮国綱でございます」

義宣と国綱が返事をする、三成は丁寧な頭を下げた。昨日の書

状では、少々高压で冷たい印象を受けたのだが、本人にそのような印象は抱かなかった。

「関白殿下がお待ちです。ご案内いたしましょう」

案内する、と言って三成は歩き出した。国綱と顔を見合わせ、義宣たちはその後についていくことにした。

「佐竹殿、昨日の書状、ご気分を害されましたかな？」

「昨日の書状とは、我が臣、東義久への書状のことでしょうか？」

「左様です。殿下の命に従って書いた部分と、私の独断で書いた部分があつたのですが、佐竹殿にしてみれば、不愉快な内容だったかと思ひまして」

「はあ」

三成が言っているのは、義宣の進物が見苦しい、と書いたことと、義久を賛美したことについてだろう。おそらく、前者は三成の独断で書いたもの、後者が秀吉の意をくんで書いたものに違いない。

「申し上げにくいのですが、殿下は本日の見ても、東殿を我が家中へ加えようとなさるでしょう。しかし、それは遊びのようなもの。自分の見こんだ者が、どの程度の器か見極めようとなさっているだけなのです。どうか、お怒りになりませぬよう」

「心得ました」

三成に言われずとも、たとえ秀吉が義久を褒めちぎっても、義宣はその場で怒りはしない。怒れば、義宣の器が小さいと思われるだけだ。殿下お戯れを、くらいで留めておけばいいのだろう。

「進物につきましても、正直なところ、これだけでは少々見劣りしてしまふのですが、そこは、関東武士は質実ゆえ、進物までは気が回らなかった、とても申し上げればよろしいでしょう。そこに、殿下への忠誠を誓う言葉があればなおよろしい」

「は、はあ」

三成は親切で義宣に忠告をしているのかもしれないが、これでは自分は田舎者のため進物が見苦しくて申し訳ない、と言えぱいいと言われているようなものだ。義久に宛てた書状や、義久についての

忠告もそうだが、真面目すぎてかえって反感を買っ人間なのかもしれない。本人に悪気がないのは、話をしている表情を見れば分かる。「さあ、佐竹殿、宇都宮殿、こちらが殿下の本陣です」

秀吉の本陣に集まる物資、鉄砲、兵士、武将たちを見て、義宣は言葉が出なかった。それは国綱も同じだろう。今まで関東で繰り広げていた戦では、このような大量の物資も、兵士も見たことがなかった。これが、天下の戦というものなのか。三成の言葉は誤りではなかった。この規模の違いを見せつけられては、関東武士は田舎者と言わざるを得ないだろう。

「殿下、常陸の佐竹義宣殿、宇都宮の宇都宮国綱殿が参られました」「そうか」

三成の言葉にこたえたのは、小柄な皺の多い男だった。唐織の羽織を着て、諸將を従え座っている。この男が、関白豊臣秀吉なのだろう。思っていた人物像とは違って、義宣は驚いたが、秀吉に向かつて平伏した。

「常陸から参りました。佐竹次郎義宣にございます」

義宣に続いて、国綱も平伏し、その後に義久、義憲、義種が続いた。三成に見苦しいと言われた進物だが、献上すると、秀吉は笑みを浮かべ喜んでいようだった。天下人はこのくらいの芝居など、訳ないのだろう。

「我ら関東の者は田舎者ゆえ、見苦しい進物しか用意できず、まこと申しわけなく思っております。殿下の軍門に加わったからには、家中一同殿下の御為戦いましょう」

「いやいや、立派な進物の数々嬉しく思うぞ。しかし、それ以上に佐竹の武勇期待しておる。何せ、坂東太郎、鬼義重とうたわれた常陸介の軍であるからの」

「ありがたきお言葉」

今は父の軍ではなく、義宣の軍なのだが、やはり佐竹といえば父の武勇なのか。

「ところで、そちの後ろにおる者が、東義久か？」

「は。某が東源五郎義久にございます」

「そちの名は聞いておるぞ。さて、源五郎。此度の戦、我らと北条とその優劣を何と思う？」

「はい。関八州は由来、武を用いる地にございます。北条は雄を天下に称しておりますが、寡君義重、義宣の寡兵をもつてすら負けたことはありませぬ。殿下は天下に威を誇り、天下の大兵をもつて戦に臨むのですから、北条を破ることは、掌をかえすが如きことでしよう」

「おう、よう言つた、よう言つた」

義久の言葉を聞いて、秀吉は呵々大笑し、着ていた唐織の羽織を脱いで義久の肩にかけた。

「佐竹には、源五郎のような優れた者がおる。羨ましい限りじゃ。その才を称えて、わしから褒美を授けるぞ」

「ありがたき幸せ。殿下の御為にも、義宣に尽くす所存にございます」

「まこと、佐竹には惜しい逸材よ。そちは幸せ者じゃの、次郎」

笑いながら義宣に話を振った秀吉に、義宣は義久とともに頭を深く下げた。三成は遊びのようなものだと言つたが、秀吉はどこまで本気で言っているのか分からない。

義久が何を思つて、秀吉の問いに受け答えしているのかも、義宣には分からなかった。義久の考えは分からないが、義宣はこのやり取りに少し苛立ちを覚えた。

「そつえば、次郎の弟は蘆名の当主だつたか」

「はい。今は名を改め、蘆名平四郎盛重と名乗っております」

「ほう。まあ、そちの弟のことは忘れておらぬゆえ、安心するよう伝えておけ」

「かたじけなく存じます」

義広という名から、蘆名家の通字である盛の字を入れた盛重に改名していたことが、秀吉に好印象を与えたのかもしれない。蘆名家の再興が許されたと決まつたわけではないが、盛重にとって悪くは



ない結果になりそうで、義宣も安心した。

一通り挨拶がすむと、義宣と国綱は兵を率いて三成の麾下に加わるよう命じられた。三成とともに館林城を攻めることが、秀吉に臣従した義宣に最初に与えられた命令だった。

## 那須の女と伊達の女（十七）

三成、大谷吉継、増田長盛らとともに、佐竹と宇都宮の兵は館林城攻めを行った。秀吉の軍勢をもつてすれば館林城など簡単に落とすことができ、改めて秀吉への臣従を誓ってよかったと安堵した。

その分、今回の小田原攻めに参加していない那須家や、江戸、大掾が気にかかる。長く佐竹を苦しめていた政宗も、ようやく世の流れを認めたのか、秀吉のもとへ参陣したと三成から聞いた。政宗が遅参だと咎められたのだから、今後那須や江戸が参陣したところで処罰は免れないだろう。江戸も大掾も佐竹の支配下にあるというのに、義宣や父の言うことを聞こうとしない。特に江戸は義宣の妹のなすを、重通の息子に嫁がせているというのに。

江戸も大掾も義宣に従って小田原へ参陣しないと分かった時、秀吉に自分の領地を申告する際の書状に、それらの家の領地も佐竹家の領地として書いて申告した。父に既成事実を作ってしまったばい、と言われたのだ。秀吉に、義宣が常陸一国の主であると認められれば、義宣に従わない連中を始末する口実ができる。

その書状を差し出した時、受け取った三成は何も言わなかった。中央にいる三成たちは田舎の常陸の現状など、詳しくは知らないのだろう。そのまま秀吉が認めてくれることを祈るばかりだ。

館林城を落とした後、勢いに乗じて三成らは忍城攻めに取り掛かった。佐竹も宇都宮も三成や吉継らの兵の後方に陣を構え、指示を待っているだけだ。どうやら三成には、秀吉からの命令があるらしく、忙しそうに陣の間を駆け回っていたが、佐竹の兵は特にやることなく、士気が下がりがかけていた。

これが上方の戦というものだろうか、と思っていると、三成に軍議を開くから来るように、と呼ばれた。陣を義久に預け、軍議へ参加すると、三成は忍城の絵図を広げて待っていた。

「此度の忍城攻略は、水攻めを行いたいと思います」

「水攻めですか？」

「はい。殿下が高松城攻めで水攻めを行ったこと、佐竹殿も宇都宮殿もご存知でしょう？」

「ええ、関東にもその噂は聞こえています」

国綱が答えると、三成は絵図を指した。

「これから城を囲む土提を皆さまには築いていただきます」

「しかし、忍城の周りは湿地に沼。水害でも水を被らない城だと聞いておりますが」

「その難攻不落の城を、あえて水攻めにするによって、殿下のご威勢を関東だけではなく広く天下に示せるというものなのです。土堤の計画は、ここ数日のうちに立てました。この計画通りに動いてください」

三成は事細かに、どこの兵がどこの堤をどこまで築く、ということとを説明していった。三成の計画は驚くほど詳細で、ここまで細かく計画を立てるのならば、陣の間を駆け回らなくてはならないだろう、と思った。これが上方の戦というもののか。

陣に戻り、三成の指示通りに義宣が命令すると、命令を聞いた家臣たちは眉をしかめた。戦に来て、ひたすら堤を築くだけなのか、と言いたいようだ。それは義宣にも分かるが、これが指示なのだから従わざるを得ない。

三成の指示に従い、佐竹の持ち場で堤工事の監督をしていると、三成がやって来た。

「佐竹殿」

「石田殿、いかがなさいました？」

「せっかく坂東太郎の戦を拝見できるかと思っていたのですが、佐竹殿や宇都宮殿にこのような工事ばかりさせてしまって、申し訳ないと思ひまして」

「いえ、私たち田舎者は上方の戦を拝見できて参考になっております。伊達と戦っている時は、このような戦はありませんでしたからね」

「そう言っていたけると助かります。殿下に従うということは、これまでの佐竹殿のやり方を貫くことができないということでもあります。今後もこのようなことは多くありましようが、ご承知ください」

「心得ました」

義宣が頷くと、三成は忙しそうに去って行った。実際、忙しいのだろう。おそらく三成はすべての持ち場を見て回っているのだ。感心する。

連日工事を行っていたが、ちょうど梅雨の時期のせいで、土堤はなかなか完成しなかった。ようやく完成したころには、三成はすっかり痩せてしまったようだった。だが、雨は降りやまず、せっかく完成した土堤もところどころ崩れ落ちる箇所が出てきた。見つけるたびに修復しているのだが、雨の勢いに修復作業が追いつかない。雨はその後もしも降り止むどころか勢いを増し、大雨が降るようになってしまった。大雨のせいで土堤は決壊し、濁流が味方の陣に押し寄せた。被害は甚大で、佐竹家でも死者が出た。

その後の軍議で、三成はすべての責任は自分にあるのだと皆の前で深々と頭を下げた。軍議が終わった後は、立ち去る諸将をひとりひとりつかまえて、自分の失敗を詫びていた。

「佐竹殿にも多大なご迷惑をおかけいたしました。申し訳ありません」

「いいえ、石田殿の責任ではないでしょう。雨さえ降らなければ、水攻めは成功していたでしょう。私には石田殿のような土堤の計画すら立てられません」

「佐竹殿、そういうわけにはいかぬのです」

「どういことですか？」

「殿下は私の才を評価してくださっています。ならば、私はいかなる条件においても、水攻めを成功させなければなりません。過程が評価されるわけではありません、結果のみが評価されるのです」

「水攻めは殿下のご命令だったのですか？」

「いいえ、私の考えです。余計なことは考えないでいただきたい」

三成の言葉から、もしかしたら忍城の水攻めは秀吉の発想で、三成はただそれに従っただけなのかもしれない、と思ったが、そういうわけではなかったのか。三成は、義宣の言葉を冷たく否定した。

「とにかく、能力と結果が評価されます。それが殿下のやり方です。だから、私のようなものでも出世することができたのですよ。佐竹殿も頭の片隅に留めておいた方がよろしいでしょう」

「能力と結果がすべて、ですか」

義宣には信じられなかった。佐竹家でももちろん能力のある者は評価しているが、それは一門衆か譜代家臣であることが前提だ。身分の低いものや、新参の浪人者を評価しようとしても、老臣たちはそれに反発する。義宣はそれが嫌で、試しに浪人者を側に置いてみたのだが、老臣たちは、それでは家中に人がいないようだと、言っていた。

だが、三成の言うとおり能力と結果だけで評価をするというのは、義宣が側に置いている浪人者たちも、結果さえ残せば重臣に抜擢できるのだ。三成の言葉は、義宣に新たな考えをもたらした。

忍城はその後、力攻めをしても落ちることはなく、かえって味方にまたしても死者を出してしまった。睨み合いは続いたが、こちらには決め手がなく、忍城も救援を得られず動くことはできなかった。月が明けて七月に入り、小田原城が落ちたという知らせが忍城攻めの陣に届いた。忍城は小田原城開城後、ようやく三成らに引き渡された。

秀吉の待つ本陣に戻った三成を待っていたのは、城一つ満足に落とせない戦下手、計算しかできない頭でっかち、という諸將の冷たい評価だった。だが、義宣は三成の戦と人柄を間近で見ている、その評価は間違いである、と思っていた。

三成は、真面目で優秀な人物だ。ただ、おそらく真面目すぎるだけなのだ。

## 那須の女と伊達の女（十八）

小田原落城後、秀吉は奥州征伐を発表し、義宣は宇都宮国綱とともに、会津への先導と宿舎の用意、食糧の調達を命じられた。

宇都宮に到着してから、義宣は秀吉に呼び出された。義宣の申告した常陸一国と下野の一部について、すべて佐竹領と認める朱印状を渡されたのだ。これで、佐竹家の所領は安堵され、常陸一国は名目上佐竹家のものとなった。だが、実質は独立した江戸や大掾がいまだ存在している。常陸は佐竹家のものではない。

だが、秀吉の朱印状さえあればこれからは違う。大義名分を掲げて討伐することができるのだ。しかも、秀吉から父は常陸の旗頭に任じられた。父は隠居の身であることを理由に、義宣を旗頭にしてほしい、と秀吉に書状を送ったため、義宣が常陸の旗頭だと秀吉に認められることになった。

政宗に攻められ、所領を失っていた弟の盛重も、秀吉のおかげで江戸崎を与えられ、大名として返り咲くことができた。だが、所領の大きさは会津とは比べ物にならないほど小さい。それでも、再び大名になれただけでもありがたいと思うべきだろう。

二番目の弟の能化丸は、此度の小田原攻めの道中に病死した岩城常隆の後嗣として、岩城家に入ることになった。常隆の母は父の妹で、義宣の従兄弟にあたる。常隆のもとに、先年政宗に城を攻め落とされた須賀川の伯母が養女とともに身を寄せていると聞いていたが、二人は母の伝手を頼って佐竹家にやってきたがつていらしい。父からの書状で知った。義宣もそのことには賛成だった。母の良いうちにすればいい。

これで、義宣の頭を悩ませていた所領の問題は解決したが、その代わりに秀吉に叛いた織田信雄を預けられてしまった。信雄のことは父に任せ、太田城に幽閉することにした。常陸の旗頭となったのだから、江戸重通に水戸城を明け渡すように通達したが、重通は義

宣の通達を無視した。いずれ、どうにかしなければならぬだろう。妹のなすが嫁いでいることもあって、穩便にことを済ませたいのだが、そうはいかないかもしれない。

秀吉からの命令は次々と義宣のもとへ舞い込んでくる。今度は、早々に妻子を上洛させなければならぬとなった。まずは、父と母を上洛させなければならない。まだ幼い末の弟の彦太郎も連れて行かなければならぬだろうし、多賀谷重経から預かっている姫も連れて行った方がいいだろう。重経も大名なのだから、その娘を常陸に置いておくわけにはいかない。

義宣も近々、八重を上洛させなければならぬだろう。八重にこの話をしなければならぬのかと思うと、頭が痛い。八重が義宣の話を聞いて、黙って上洛するわけがないのだ。そもそも、義宣の話を聞くかどうかもあるまい。

秀吉は京へ戻って行ったが、戦の後始末のために奥州に残っている義宣のもとに、父から書状が届いた。京は見るものすべてが珍しく、想像とはまったく違つたらしい。秀吉とも謁見したが、父の態度が横柄で、周りの大名たちは憤慨したらしいが、秀吉は武辺者の父は宮中の作法など知らないのだから仕方がない、むしろ好ましいと笑い飛ばしたそう。いかにも父らしいが、義宣が上洛する際には、宮中の作法を徹底的に身につけてから秀吉に謁見しなければならぬと思った。

結局、義宣が常陸へ戻つたのは十月に入ってからのことだったが、すぐに秀吉から、父に代わつて義宣と義久が上洛するようにと命じられた。上洛の際は、義宣の妻子も連れてくるように、と書状には書かれている。

そのことを八重に告げようと、まず吉野を呼び出したが、やって来た吉野は浮かない表情をしていた。

「お殿様、無事のお帰りお祝い申し上げます」

「ああ。お前も知っているだろうが、此度大名の妻子は上洛して、京の屋敷に住むこととなった。父が母と弟を連れて上洛しただろう

？同様に、八重にも上洛してもらわなければならない。ところで、俺が留守中、八重は息災だったか？」

「それが」

「どうした？」

「御台様は、お殿様がお出陣なさってから、体調を崩されまして、今もよくなったり悪くなったりを繰り返しているのです。吐き気が酷く、起きているのも苦痛という日もあったほどで。しかも、その原因も分からないものですから、御台様のおそばには、わたくしと朝霧以外は近づかないようにしております。北城様も大御台様もご心配くださったのですが」

「そんな話、聞いていないぞ」

八重が原因不明の病で、何カ月も寝込んでいるとは知らなかった。病身をおしてまで上洛せよ、とはさすがに秀吉も言わないだろう。病の原因が分からないということは、人につづる病かもしれない。八重を上洛させるわけにはいかないようだ。

「医師にはみせたのか？」

「もちろんです。ですが、ただ首を振るばかり。気鬱の病というわけでもないようだ」

「では、お前と朝霧という者以外、八重とは顔を合わせていないのか？」

「その通りです。もし、北城様や大御台様に万が一のことがあつては、一大事ですので」

「だが、お前たちには何も無いようだな」

「しかし、今後何が起くるかは分かりません。ですから、お殿様も御台様にはお会いにならないでください」

昔から、比較的義宣に対して友好的だった吉野が、ここまで食いつがるのだから、八重の病というのは事実なのだろう。父や母に確かめられないため、吉野の言葉を信じるしかないが、今回は八重の病を信じることにしよう。

「分かった。此度の上洛、八重は常陸に残して行く。だが、必ず八



重に伝える。次回は上洛してもらう、と」

「承知いたしました」

吉野に八重のことを託し、義宣は上洛に向けての準備を整えた。念のため、八重を診察した医師にも話を聞いたが、吉野と言っていることは同じだった。義久とともに上洛すると、確かに京は父の言っていた通り、想像とは違った場所だった。いくら関東が田舎だと言われていても、ここまで違うとは思わなかったのだ。

父は義宣と入れ替わりで常陸に戻っているため、屋敷には母と彦太郎、それに多賀谷の姫しかいなかった。母に挨拶をすると、三成からの書状が届いた。内密に相談したいことがあるのだそうだ。

三成から内密の相談、と言われても義宣には思い当たることがない。八重を連れてきていないことを咎められるのかと思ったが、書面から察するにその話ではないようだ。急いで三成の屋敷を訪れると、義宣を出迎えた三成の表情は硬かった。佐竹にとって、良い話ではないことだけは確かだ。

「佐竹殿、お家の一大事です」

「私が、妻を上洛させなかったことについてですか？」

「いいえ。そうですか、佐竹殿は奥方を此度の上洛にお連れではないのですね。それは、かえって好都合でしょう」

「それは、どういう意味でしょうか？」

「佐竹殿の奥方のご実家、那須家が改易処分となりました」

三成の言葉に、義宣は言葉が出なかった。頭の中に様々な考えが浮かぶが、どれもまとまったものとはならない。ただ、佐竹家が連座処分とならないことを祈るしかなかった。

## 那須の女と伊達の女（十九）

三成の話によると、八重の兄の資晴は、秀吉からの再三の出陣要請にも応じず、結局小田原へ参陣することはなかったらしい。そのことに秀吉は怒り、那須に戦うつもりがあるのならば攻め込もう、とまで言っていたそうだ。

資晴は秀吉に対抗するために寺に立てこもり、ますます秀吉の怒りを買ったのだと三成は言った。

「では、我が義兄は今後どうなるのでしょうか？」

「烏山城は明け渡し、現在は佐良土に妻子とわずかの家臣を連れて蟄居となっております」

「何ということだ」

これを八重が聞いたらどう思うだろうか。それよりも、佐竹家はどうなってしまうのか。急いで常陸への帰路についている父にも書状を送らなければなるまい。

「佐竹殿、大事なのは改易された那須家の今後よりも、あなたの今後でしょう」

「はい、まったくその通りです。しかし、突然のことで、私には良い考えが浮かばないのです」

「離縁なさるしかありますまい」

三成の言葉が義宣の胸に突き刺さる。離縁。つまりは、八重を離縁して那須へ帰せということか。改易され、城を失い、佐良土の館で蟄居をしている資晴のもとに。

「離縁ですか。しかし、石田殿、実は此度の上洛に妻を伴わなかったのは、妻の体調がすぐれず、上洛には耐えられそうにないと判断したからでして」

「佐竹殿、あなたは家臣、領民すべてがかかった父祖伝来の地と、奥方とどちらが大事なのですか？」

「それは」

「よろしいですか？殿下はお怒りなのです。那須家に対して。殿下は那須に連なるものすべてに怒りの矛先をお向けになるでしょう。あなたの奥方もその対象なのですよ。その奥方を離縁せずに側近く置き続けることが、どれだけ危険かお分かりか」

三成の言うことは正論だ。八重を離縁しなければ、佐竹家にも罣が及ぶだろう。三成はそのことを心配して、義宣に助言を与えてくれているのだ。秀吉に長く仕えている三成が言うのだから、そうしなければなるまい。

「幸い、奥方にはまだお子がありませんでしたね。もし嫡男がお生まれになっていたら、嫡子ではなく庶子とするか、養子に出すかしなければならなかったでしょう」

三成の言葉は正しい。分かっている。だが、あまりにも正しすぎて、そこまで言わずとも良いではないか、とも思う。だが、三成が正しいことも、三成に悪意がないことも分かっている。そもそも、なぜ八重を離縁することに対して、ここまで抵抗を感じるのか、義宣は不思議だった。

八重はこれまで義宣に従順な妻だったことは一度もない。子も産んでいない。そして、改易された家の娘だ。離縁すべき条件はそろいすぎていると言っても過言ではないだろう。それに、義宣は小田原征伐の前に八重との不仲を決定的にした。八重は自分を那須の女だと言い張り、義宣を心底嫌っている。それなのに、なぜ義宣は三成の助言に素直にうなずけないのだろうか。

「しかし、石田殿、確か細川殿の奥方は明智光秀の娘であつたにも関わらず、殿下は細川殿に幽閉していた奥方を連れ戻すようにとおっしゃったはずです」

「あの時は、殿下の温情を示す良い機会だったのです。細川殿の奥方のような例外を持ちだされても困ります。佐竹殿、此度の殿下の小田原征伐での狙いは、殿下の武威を天下に示すことでした。逆らうものをねじふせてこそ、殿下のご威光が広く関東、奥羽まで届くというもの。ご理解くださらぬか。殿下は佐竹殿のことは好ましく

お思いなのですから、殿下に命じられる前に先手を打って離縁なさいませ」

「しばらく、お待ち下さりませぬか？」

「承知いたしました。しかし、早めに離縁なさることをおすすめいたします」

「石田殿、ご厚意感謝いたします」

義宣が頭を下げようとすると、三成は手でそれを制した。今まで硬かった三成の表情が少し和らぐ。

「悪い知らせはここまでとしましょう。実は、佐竹殿にはもう一つお伝えせねばならないことがあるのです。こちらは良い知らせだと思しますので、ご安心を」

「は、はあ」

八重の実家が改易され、佐竹家も連座の可能性があるため八重を離縁しろ、という話以上に悪い知らせなどないように思う。ならば、どのような知らせだろうと良い知らせだ。

「常陸の旗頭である佐竹家に逆らう、江戸、大掾、そのほかの国人を征伐しても良いと殿下からのお許しが出ました」

「まことですか？」

「はい。今や常陸は佐竹殿の領地。旗頭に従わない者は、殿下に逆らい天下の平和を乱すものと同類と見なし、征伐せよ、このことです」

「これは、石田殿のお取り成しでしょうか？」

「私は、殿下に少しばかり口添えをしたのみです」

「かたじけなく存じます。さっそく、国許へ向かった父に知らせましょう」

三成に深く感謝を述べ、義宣は急ぎ屋敷へ戻った。屋敷にいる母に那須家改易のことを告げると、母はあからさまに眉をしかめた。ともに上洛している義久にもそのことを告げると、義久も三成と同じことを言った。八重を離縁した方がお家のためだと。

「だが、俺は御台を離縁するつもりはない。御台は原因不明の病で

臥せっているのだ。今離縁するのはあまりに忍びない」

「では、どうなさるおつもりですか？」

「ひとまず、御台の病が癒えるまで、太田城の御台の部屋から一歩も外に出さないようにしようかと思う」

「城内で蟄居させると？」

「ああ。そのことは父に頼もうと思う。それに、殿下から反抗的な国人を征伐しても良いとお許しをいただいた。石田殿のおかげだ。御台のことも、石田殿は大層心配して下さい」

「では、国人たちの征伐も北城様にお任せなさいますか？」

「隠居の身である父には申し訳ないが、そういうことになるな」  
口では申し訳ない、と言ったが、父は久方ぶりの戦に意気込むことはあっても、煩わしく思うことはないだろう。これが、常陸での最後の戦になるかもしれないのだから、父は意気込むはずだ。もちろん、父にばかり戦を任せてしまい、情けない息子だという思いもある。

義久と相談の結果、まずは最も佐竹家に反抗的だった大掾を討つことに決めた。その次は江戸だ。なすを迎えながら、佐竹に従おうとしない。江戸は佐竹の家臣となっていることを理解していないのだ。常陸を治めるのに都合が良い水戸城を明け渡すように要請しても、一向に受け入れる気配がない。

父には書状で、那須家改易のことと、国人征伐のことを知らせた。それと同時に、八重にも実家が改易されたことを告げる書状を、吉野に宛てて送った。

実家が何よりも大事だと言いきった八重は、この知らせを聞いてどうするのだろうか。義宣にはまったく予想がつかなかった。

## 那須の女と伊達の女（二十）

義宣を見送り、八重のもとへ向かう間、吉野は義宣の命を八重にどう伝えたらいいものか、思い悩んでいた。だが、それ以上に、義宣は納得して戻って行ったようだったが、本当に吉野の言葉を信じたのかが気にかかる。

「姫さま、吉野です」

「お入りなさい」

「失礼いたします」

吉野が部屋に入ると、八重は脇息にもたれかかって座っていた。八重の腹は、大きく膨らんでいる。八重は、義宣の子を身ごもっていた。

義宣には、八重は原因不明の病で臥せっていると伝えたが、それは吉野が考えた嘘だ。医師にも金を握らせて、口を割らないようにきつく口止めしているため、医師から義宣に情報が漏れることもないだろう。

「吉野、あの男は何と言っていたの？」

「それが、姫さまにも上洛をしてもらわねば困る、とのことでした」「もちろん、承知しなかったでしょうね？」

「もちろんです。前々から決めていた通りに申し上げました。お殿様は、納得して下さったようです。ただ、この次の上洛の際は、必ずご同行なさるように、と」

八重の妊娠が分かったのは、義宣が小田原へ向けて兵を発した後だった。もともと八重の月ものは安定している方ではなかったが、こない月が続き、体調不良とひどい吐き気を訴えるようになった。吉野も朝霧も八重より年若く、妊娠の経験はなかったが、間違いなく話に聞いていた妊娠の症状だと分かった。

医師に口止めをし、八重の診察をもらった。医師の見立ては、吉野の思ったとおりだった。八重は義宣の子を身ごもった。おそら

く、八重が泣きながら子流しの薬を持つてくるように言つた夜に、できた子なのだろう。

八重に医師の見立てを告げると、八重の顔から血の気が引き、その事実を否定するようにゆるゆると首を振つた。産みたくない、と繰り返して咄く八重を、吉野はただ抱きしめることしかできなかった。どうすればいいのか、まったく分からなかった。大御台に告げることが一番良いのだろうか、とは思つたが、それは八重の望むところではないことは分かつている。医師以外には、ともに八重の側近く仕える朝霧にだけ、八重の妊娠のことを打ち明けた。朝霧もただ驚くばかりで、どうすべきか良い考えは浮かばないようだった。八重は体調がすぐれず、妊娠の衝撃からも立ち直れず、寝込んでしまつていた。

八重は義宣のことを心底嫌つてゐる。名門の当主であることを振りかざし、那須家のことも八重のことも義宣は侮辱している、と八重は思つてゐるようだ。妻を手籠にするような男の子ども、しかも手籠にされた時にできた子どもを八重は産みたくないのだ。

八重の気持ちは吉野にも理解できる。吉野も八重と同じことをされたのなら、産みたくないと思うだろう。だが、八重は佐竹家の当主である義宣の妻だ。八重が産む子は、男でも女でも佐竹家の嫡子となる。

八重の気持ちを思うと、子を流した方が良いのだろうか、と思うが、八重の立場を思うと、軽はずみなことはできないとも思う。それに、せつかく授かつた命を、こちらの都合で流してしまうのは忍びない。

八重が寝込んでゐる間に、吉野は最善の策を考えた。最善は、すべて大御台と義重に告げることだろうが、それを避けて一番良い道はないものか。考えた結果吉野は、八重に子を産むように説得した。八重には、生まれた子どもは吉野が必ず那須家に送り届ける、と約束し、八重の兄の資晴の子として育ててもらふのだと説明した。八重は、吉野の説得に何とか頷いてくれた。那須の子になるのなら、

産んでもいいと思ってくれたようだ。

妊娠のことは吉野と朝霧、そして八重の診察をした医師のみで留め、ほかの人間には伝えない。八重を含めた四人だけの秘密とし、八重は原因不明の病で臥せっていることにすると決めた。そうしているうちに、大御台と義重は秀吉の命令で上洛し、太田城からいなくなった。それは、八重にとっては非常に都合だった。

だが、吉野は本当に那須家に子どもを送り届けるつもりなどなかった。八重を騙すことになってしまいが、産まれた子どもは大御台に預けるつもりだ。その時に大御台にすべてを話し、義宣にも告げてもらうつもりでいる。当然、大御台も義宣も、子の存在を隠した八重を責めるだろう。その責めは吉野がすべて負う。命を差し出せと言われたら、吉野はそれに従う。このことは朝霧にも教えていない。朝霧に教えたのは、八重の子を那須に連れて行くつもりだというところまでだ。

この吉野の考えが最善なのかどうかは分からない。だが、佐竹家の嫡子を産んでほしい、と言えば八重が頷かないことは分かっている。ならば、八重も佐竹家の人間も騙して、子を産んでもらうしかない。女の浅知恵に過ぎないかもしれないが、これが吉野の考え得る八重の気持ちと八重の立場を守る策だった。

子が生まれるまでの間、誰にも八重の妊娠を知られてはならない。だから、上洛前に八重のもとを訪れようとした義宣が、吉野のことを疑っていないかどうか気がかりだった。

「上洛。わたくしに大御台と同じように人質になれと言うのね、あの男は。どこまで、このわたくしを侮辱すれば気が済むのか」

「御台様、お怒りになっては、お腹のお子に障りましょう」

「そう、そうね、朝霧。あの男は憎いけれど、この子には罪はない。那須の血が流れる子なのだから、慈しまなければ」

そう言って、膨らんだ腹を撫でる八重は、母親の顔をしていた。それを見てみると、何としても八重も腹の子も守らなければならぬ、と思う。



その後、義宣は吉野の言葉を信じたらしく、東義久を伴って上洛した。八重の腹は順調に大きくなり、胸も張ってきている。間もなく、八重の子が生まれる。吉野の考えを知らない朝霧は、純粹に子の誕生を待ち望んでいる。吉野も、いろいろな思いはあるが、八重の子が生まれることは嬉しかったし、楽しみだった。

だが、義宣と入れ替わりに義重が間もなく帰国するという知らせが入り、吉野たちの間には緊張が走った。この状態の八重を見られたら、誤魔化しようがない。もしかしたら、義重が帰国中に子が生まれるかもしれない。そうなれば、赤子の声ですべてが知られてしまうだろう。

すっかり失念していたが、子が生まれれば泣き声がするのだ。出産の時もそうだろう。出産の際に城内の人間にはすべてが知られてしまうかもしれない。これは、吉野の策の大きな穴だ。

どうしたものか、と思っていたところに、京の義宣から吉野に宛てた書状が届いた。吉野宛てということは、八重に宛てて書かれたものだ。書状の内容を確かめるべく目を通したが、読み進めるうちに吉野の指は震え、書状を落としてしまった。

八重に何と言えいいのだろうか。那須の兄が改易されたなど、到底言えるはずがない。しかも、城内に蟄居とは。それに、那須にいる吉野の父と母はどうなるのだろう。

「吉野、どうしたの？」

「あ、姫さま」

「そなた宛てにあの男からの書状？」

吉野に用事があったのか、吉野のもとに現れた八重は、足許に落ちていた書状に目を留めてしまった。八重の手が書状に伸びる。その書状を八重に見られるわけにはいかなかった。

「姫さま、どうか、ご覧にならないでください」

「どうしたの、そんなに慌てて。まさか、そなたわたくしに見られては困るようなやりとりを、あの男としているというの？」

「いいえ、違います。違います、姫さま。ですが、それをご覧にな

つてはなりません」

吉野がいくら止めても、八重は書状を手に取り、目をそちらに向けてしまった。八重の顔がほとんど青白くなる。このままでは倒れてしまいそうだった。八重が倒れる前に、吉野はしっかりと八重の体を支えた。

「兄上が、改易。佐良土に蟄居。まさか、兄上が、こんなこと」

「姫さま、お気を確かに。姫さま」

八重は資晴の改易に呆然としていたが、急に眉をしかめて座り込んだ。座り込み、腹を抱えて苦しげな声を漏らしている。

実家の改易という衝撃のせいで、腹の子に影響が出てしまったのか。吉野には、苦しむ八重を前にどうすることもできない。医師を呼びに行こうにも、八重を置いて行くわけにはいかない。誰か来てはくれないかと思ったが、八重は原因不明の病ということにしている。この局には誰も立ち入らないようにしているのだから、誰かが来るはずがない。

「御台様、吉野殿」

小さな悲鳴とともに、朝霧の声が聞こえた。八重と吉野の姿が見えなかったため、探しに来てくれたのだろう。助かった。

「朝霧、早くお医師を呼んでください」

「は、はい」

朝霧が駆けていく足音を聞きながら、吉野は必死に八重を励まし続けた。だが、八重の苦しみは一向に和らがないようで、八重は腹を押さえながら苦悶の表情を浮かべるばかりだった。

## 那須の女と伊達の女（二十一）

朝霧は急いで医師を呼んで来た。医師の指示に従い、朝霧と二人で八重が赤子を産めるように準備をした。だが、ただ手を動かしているだけのような感覚で、頭は麻痺してしまったようだった。

那須家の改易、八重の出産。どれも目の前で起こっている現実だが、信じられなかった。どうすればいいのか、見当もつかない。朝霧は、吉野の隣でうろたえるばかりだ。

その朝霧の様子を見て、ここは吉野がしっかりしなければ、どうにもならないのだと思った。産みの苦しみに耐える八重の手を握り、吉野は八重を励まし続けた。

八重は何とか、赤子を産むことができた。女の赤子だった。無事に赤子が産まれたことに、吉野と朝霧は手を取り合って喜んだが、医師の表情は険しいままだった。医師の顔と赤子を見て、吉野も異変に気づいた。朝霧も気づいたようだったが、八重は疲弊していてまだ気づいていない。赤子は、産声を上げていないのだ。

朝霧の腕に赤子を預け、医師は吉野に耳打ちをした。赤子は、自分で息をすることができないようで、もう間もなく死んでしまうだろう、ということだった。朝霧に支えられながら、自分の腕に赤子を抱こうとする八重を見ると、何と言えればいいものか、言葉につまる。だが、八重も気づいたようだ。

「吉野、赤子が泣かないのは、どういうこと？」

「姫さま」

「なぜ、泣かないの？なぜ」

八重の涙が、赤子の顔を濡らす。医師は赤子を見て、首を横に振った。八重の子は、すでに死んでいた。

それから、八重は臥せってしまった。義宣の子は産みたくないと言っていたが、那須の血を引く子だと思えば愛しいと言っていたし、何より自分の子を亡くすのは辛いのだろう。八重の妊娠は知られぬ

ようにしてきたため、佐竹家の姫として葬儀を出すこともできない。涙を流す八重を、吉野は慰めていた。

だが、いつまでも悲しんではいられなかった。悲しみに暮れる八重に、那須家の改易の話をするのは酷かもしれないが、赤子のこと、八重の今後のことも、はやく手を打たなければならぬ。もうすぐ義重が京から帰国する。その前に、すべてを片づけなければならなかった。

義宣の書状によれば、義宣は那須家改易を理由に八重をすぐさま離縁するつもりはないらしかった。ひとまず、八重には城内の局から出ないようにさせ、謹慎させるとのことだった。望みは薄い、秀吉の怒りが収まることを、義宣は期待しているのだろう。

「姫さま、お辛いでしようが、私の話をお聞きください。朝霧もしつかり聞いてくださいね」

「何、吉野？」

「お殿様からの命で姫さまは、この局から出ることはできません。姫さま、よろしいですね？」

「ええ、むしろ願ってもないことだね。誰にも会いたくない」

「お殿様の命なので、必ず守ってくださいね。それが、今の姫さまにとって最善なのです」

「分かっているわよ、吉野。そなた、様子がおかしいのではなくて？」

「そうですよ、吉野殿。どうかなさったのですか？」

今後どうすべきか、わずかの間に吉野は寝る間も惜しんで考えた。考えた末に出した答えを告げるべく、八重の手を取って、吉野は顔を上げた。

「私は、この城を出奔します。亡き姫君をお連れして」

「吉野、何を言っているの。そなた、正気か？」

「もちろんです。姫君を、佐良土の兄上様のもとへお連れしたいと思います」

もともとは、八重が産んだ子は京の大御台のもとへ連れて行くつ

もりだった。だが、那須家が改易となり、八重が蟄居謹慎となった今となつては、那須の姫である八重の産んだ子は、大御台にとつては邪魔な存在でしかないだろう。しかも、産まれた子はすでに死んでいる。連れてこられても、義宣も大御台も迷惑なだけだ。

だが、この城にいては葬儀すら出すことはできない。墓を建てて弔うこともできないだろう。ならば、八重の兄の資晴を頼つて、佐良土へ行くしかない。そこで、密やかに葬儀を行ってもらい、小さな墓を建ててもらつつもりだ。吉野は尼となつて、亡き姫君の菩提を弔つて生きていく。

それに、このままでは八重の妊娠と出産を隠し続けることは不可能だ。

そのことを告げると、八重は首を振つて吉野の手を握り返してきた。目には涙が浮かんでいる。

「吉野にまで去られてしまったら、わたくしはどうすれば良いの？ 幼いころから、ずっと一緒だったというのに」

「だからこそ、私でなければならぬのです。那須の方々に受け入れていただくには、朝霧ではいけません」

「吉野殿、しかし、その計画は危険なのではありませんか？ 佐良土までの道中、何があるか分かりません。御台様のご実家は、改易なされたのですし」

「ならば、朝霧にはもつと良い考えがあるのですか？」

朝霧も八重も黙り込んでしまった。ほかに考えが浮かばないのだろう。このままでは、近々義重に八重が身ごもっていたことが知られてしまう。それを隠していたこともだ。八重が咎められないはずがない。ただでさえ危うい八重の立場を、さらに危うくしたくはなかった。

「しかし、そなたがいなくなつてしまったら、あの男が気づかないはずがない。そなたには、表と奥を取り次いでもらっていたのだから」

「私のことは、原因不明の病で急死したことにしてください。そう

すれば、姫さまがご病気だったことを疑う者はいなくなることでしょう。あとのことは、朝霧がいれば大丈夫です」

「それしか、方法はないのか」

「はい、私はこれが最善と思います」

「分かったわ。吉野に、すべてを任せましょう」

涙をぬぐい、八重はまっすぐ吉野を見つめた。八重のこうした毅然とした眼差しは、久しぶりだった。吉野がいなくなった後、八重が佐竹家の中でどうなるのか心配だったが、もう吉野は出奔すると決めたのだ。それに、いくら吉野が心配したところで、義宣の決定に口をはさめるわけではないのだから、今自分にしかできないことをする。

「長い間、お世話になりました。お暇をちょうだいいたします」

「吉野、わたくしに尽くしてくれて、ありがとう。そなたは、わたくしの妹のようだった」

「もったいなきお言葉です。私の方こそ、姫さまにお仕えできて、幸せでした」

「吉野殿、行ってしまったのですね」

「朝霧、姫さまを頼みます。それでは、失礼いたします。どうか、お元気で」

手について深々と頭を下げ、吉野は八重の子を抱いて、八重の部屋を出た。八重との別れは辛かったが、不思議と涙は出なかった。

一旦、自分の部屋に戻り、必要最低限の荷造りをし、夜が更けるのを待った。夜が更け、城内が静まり返った頃、吉野は部屋を出て、城を抜け出そうとした。月が出ていなければ、吉野の姿を闇が隠したのだろうが、あいにく今夜は月が明るかった。だが、月の明るさを気にしては、義重が帰国してしまう。

人目を避け、奥を抜け出すことはできた。次は、表を抜けなければならぬ。物音をたてないように、そっと足を進めた。だが、落ちていた小枝を誤って踏んだ時、ぱき、と枝の割れる音が響いた。

吉野の体は緊張で固まった。この音を聞きつけて、誰かここに駆

けつけるだろうか。そんなに大きな音は鳴らなかったはずだが、不安になって視線を動かし辺りの様子を探った。人の気配は感じないような気がする。念のために振り向いた瞬間、吉野は叫びそうになった。だが、口を手で押さえられたため、声は出なかった。

吉野の背後には、義重が立っていた。信じられない。義重は、まだ帰国していないはずだ。

「北城様」

「こんな夜更けに、何をしている。お前は、確か御台の侍女だったな」

「はい、吉野と申します」

「吉野、ここで何をしていた。しかも、お前が抱いているのは、赤子ではないか。どういうことか、ここに御台を呼んで説明させるか」

「それは、お止めください」

「なぜだ？御台は、そなたの主であろう」

「御台様は、このことをご存知ないのです。正直に申し上げます。わたくしは、お城を出奔しようとしておりました。この赤子は、わたくしの子です。生まれてすぐに死にました」

この場で思いついた嘘を口にする、義重は驚いたのか目を見開いた。だが、その表情はすぐに険しいものへと変わった。それにしても、なぜ義重がここにいるのだろうか。帰国の知らせは、まだ奥に届いていなかったというのに。予想外の出来事に、吉野は胸がざわめき、動悸がしたが、頭は妙にさめていた。

「ならば、その赤子是不義密通の子だと？」

「その通りです。御台様にお仕える身でありながら、不義の子を産みました。ですから、わたくしは出奔しようと思ったのです」

「そなたは御台の一番近くにいたはずだ。御台は、そなたの不義に気づかなかったのか？」

「御台様は臥せておられました。お殿様はご上洛の最中。その間、御台様とお殿様の目を盗み、不義を働きました。病で臥せておいでの御台様は、わたくしの身の変化など、お気づきにはなれません」

「相手は誰だ？」

「申せません。どうか、お許しくださいませ」

「まさか、義宣ではなかるうな？義宣は、一時期奥の女とも関係を持っていたようだが」

「それは違います。それだけは、違うと誓えます。わたくしが、御台様の夫であるお殿様と関係を持つことはありません」

必死に言い募る吉野に、これ以上問いただしても口を割ることはないと思つたのか、義重はため息をついた。

「本来ならば、お前の相手も同罪だが、奥を取り仕切る御台は病で臥せり、当主である義宣は上洛中。隠居のわしが、あまり出しゃばつてものう」

「御台様は、何もご存知ないのです。どうか、御台様にはご内密にわたくしは、いかなる罰でも受けます」

「分かつた。相手のことも見逃してやろう。本来、わしはまだ上洛中だ。わしの帰国を知っているのは、城内の表の者のみ。奥の者は知らぬはずだ。お前も、わしがまだ帰国しておらぬと思つて、出奔に踏み切つたのだらうが、惜しかったな。わしは昨日帰国したばかりよ。だが、義宣にはこのことを報告せねばならん。それから、いくらわしが本来はここにいないはずだったとしても、お前まで見逃すことはできん」

「それは、承知しております。ただ、どうかこの子を弔ってくださいませ。お願いいたします」

「子に罪はない。儚く散つた命、墓を建てるくらいのことはしてやるう」

「かたじけなく存じます」

何の目的があつて義重が帰国を奥に隠していたのか、それは吉野には分からなかつたが、義重は吉野が知らない間に帰国していたのだ。あと二日早く出奔に踏み切つていれば、吉野はうまく佐良土まで逃げおおせていたかもしれない。それも、今となつてはどうしようもできないことだ。義重は墓を建てる約束してくれた。それだ



けで、十分ではないか。

おとなしく吉野は膝をつき、義重に首を差し出した。不義を働いた女が出奔しようとしていたのだ。しかも、その女は改易処分を受け、蟄居謹慎を命じられた那須の姫の侍女。討ち首となってもおかしくはない。

義重の抜いた刀を、冬の月が照らした。視界の端で、白刃が光った。八重と過ごした月日を思い、吉野は静かに涙を流した。

## 那須の女と伊達の女（二十二）

義重は義宣と入れ替わる形で京から帰国していたが、それを奥には知らせずにいたのは、江戸と大掾に知られないためだった。今回の義重の帰国の目的は、江戸と大掾を攻めることだ。奥の女に知られたところで、情報が漏れるとは思えにくかったが、義重も義宣もまだ上洛中だと相手に思わせることが今回の要なのだから、義重の帰国を知っている者は少ない方がいい。

三成から正式に江戸と大掾の征伐許可をもらったことを義宣から知らされ、表の留守役たちにも告げると、皆は久々の戦に興奮しているようだった。今、城に残っているのは義重の家臣である老臣たちばかりだ。久々の戦に興奮する気持ちも分かる。

帰国してすぐに作戦を話し合い、まずは江戸から先に攻めることにした。江戸には義重の娘のなすがいる。先に大掾を攻めた場合、残された江戸がなすを殺してしまうかもしれない。なすは、まだ十歳の幼子だ。父や兄の都合で江戸に送ったが、命を散らすにはあまりにも幼すぎる。できることならば、佐竹に戻したかった。母親である芳もそれを望むだろうし、義宣もなすの命は助けたいと思っているはずだ。

義重がなすを救出したいという旨を伝えると、家臣たちも賛同した。佐竹の一人娘だ。死なせたくないという思いが一番だが、まだ十歳なのだからこれからまた違う家に嫁がせることもできるだろう、とも考えていた。家臣たちも、それは分かっているだろう。

作戦が決まった頃には、すでに夜は更けていた。家臣たちを自分の屋敷に帰した後、義重は何となく散歩に出た。久々の城を歩いて見てみたいと思ったのかもしれない。冬の夜風は冷たかったが、このくらいの冷たさが義重には心地よかった。

散歩の途中、女を見つけたのは偶然だった。枝の折れる音と人の気配を感じ、その場に行ってみると、義宣の御台付きの侍女が、赤

子を抱えていた。吉野と名乗った侍女は、その子どもは自分が産んだ不義の子だと言った。御台は病に臥せっていて何も知らないのだから、内密にしてほしい、と言われたが、本当に御台が何も知らないということはないだろう。

吉野は義重が問いただしても、決して相手の男が誰かを明かさなかった。義宣ではないと吉野は言ったが、ここまで必死に隠そうとし、しかも御台には内密にしてほしい、と言うのだから、義重はこの赤子は義宣の子なのだろう、と思っていた。奥に入れる男は、義重と義宣を除けば、義久くらいだ。その義久も、芳が用事を言いつける時に限り、特別に奥に入れるのだから、ほかの男と吉野がいつどのようにして不義を働いたのか疑問だった。だが、義宣の子だとしても、もう赤子は死んでいる。今更、どうしようもないことだ。だから、相手の男の罪を問うことはやめたのだ。

吉野と赤子のことは、本人の希望通り御台には内密にした。吉野は御台付きの侍女なのだから、御台との間に本人同士で話がついているのだろうし、出奔しようとした侍女のことをわざわざ教える義務は義重にはない。義宣が帰国をした際に、義宣に報告すればいいだろう。その時、御台にも告げるかどうかは、義宣と御台の問題だ。江戸、大掾攻めが近づくにつれ、義重は吉野のことも御台のことも忘れて行った。密かに兵を集め、義重は江戸の居城である水戸城を急襲した。義重の思惑通り、江戸の連中は義重も義宣も親子そろって上洛中とばかり思っていたらしく、義重の急襲に大した反撃もできずに水戸城は陥落した。城が落ちる前に、なすだけは家臣が助け出し、義重のもとへ連れて来ている。

なすの夫であった宣通は、父親の重通とともに城を捨て、結城家を頼って逃げ出したようだった。逃げ出した者の命まで奪おうとは義重は思っていない。江戸が滅亡し、水戸城が手に入れば問題は無いのだ。今の太田城より、江戸の居城であった水戸城の方が交通も商業も利便性が高い。

なすは、突然のことに事態を理解できていないのか、義重にすが

って泣くばかりだった。娘のそのような姿を見るのは辛い、義重にはどうすることもできない。

江戸を攻めた三日後、今度は府中城の大掾を攻めた。大掾は水戸城陥落の知らせを受けていたためか、江戸よりは抵抗らしい抵抗を見せたが、その抵抗も空しく一日のうちに府中城は落ち、大掾清幹は自害して果てた。

これで、佐竹家の常陸統一はほぼなったが、まだ江戸や大掾の配下だった者が多い南方では、佐竹に従おうとしない者が多い。それに、江戸と大掾の滅亡を受け、佐竹に対して反発する者も出てきた。義宣が帰国次第、南方の諸豪族も始末しなければならぬだろう。

上洛中の義宣から、帰国は年明けの閏一月になると知らせが来た。常陸一国は佐竹家の所領であるという既成事実はできているため、南方も好きなように攻略して構わないらしい。義宣の帰国まで、義重は南方攻略の方法を考えていた。その合間に、なすの顔を見に何度も足を運んだのだが、なすは義重と顔を合わせても、口をきこうとはしなかった。こんな時に、母親がいればまだよかったのかもしれないが、あいにく芳は上洛中だ。男ばかりの城内にいても、なすの気が晴れることはないだろう、と下河辺の館にいる芳の姉である阿南とその養女の岩瀬の姫に、たまに相手をしてもらうことにした。岩瀬の姫はなすと年があまり変わらないと聞いていたので、話も合うだろうと思ったのだ。だが、なすの機嫌は一向によくならなかった。

年の瀬が迫った頃、義宣は義久とともに秀吉から呼び出された。そして、義宣は従四位下・侍従に、義久は従五位下・中務大輔に任ぜられ、二人とも羽柴姓を賜った。義久はそれに加えて秀吉から桐の紋まで賜っている。義宣は、義久にだけ桐の紋の下賜があったことが気に入らなかったが、今はそれよりも秀吉が那須改易と義宣の妻が那須氏であることをどう思っているかの方が気がかりだった。

義宣と義久が任官の礼を述べ、金を差し出すと、秀吉は嬉しそうに笑っていた。どうやら機嫌がよさそうに見える。にこにこ笑ったまま、秀吉は口を開いた。

「ところで、常陸侍従の妻は那須の女だったな？」

「は、左様でございます」

「此度の上洛には連れて来なかったようじゃのう」

「妻は病で臥せておりましたので。しかし、今は城内の局にて蟄居、謹慎させております」

「何と、まだ離縁してなかったのか。病だろうが何だろうが、那須の女などさつさと離縁してしまえばよかるうに。代わりの女などいくらである。常陸侍従になれば、もっと良い女を儂が手配してやつてもよいのだぞ。関東の田舎女ではなく、京の美人など良いのではないか？」

秀吉のこの言葉で、義宣はいずれ秀吉の怒りも解けるのではないか、という期待は幻想にすぎないと思い知らされた。義宣は、黙って秀吉に頭を下げた。それを義宣が妻を離縁することを了解したものだと思っただけ、秀吉は大きく頷いていた。

だが、秀吉の考えを知っても、義宣は八重を離縁しようとは思わなかった。

秀吉の謁見が終わると、三成が義宣のもとへやって来た。三成の話によると、那須資晴は徳川家康を通じて、嫡子の藤王丸を当主とし、大名として返り咲こうと画策しているらしかった。なぜ、妹婿の義宣ではなく家康を頼っているのだ。それが、義宣には酷く不快だった。

義宣が帰国すると、父から江戸と大塚攻めの詳細を聞かされた。隠居の父に頼ってばかりで情けない思いはあったが、どちらも首尾よく運んだようで安堵した。なすが父と口をきかないというのは、義宣も気がかりだったが、それ以上に父から見せられたものに義宣は驚いた。父が義宣に差し出したのは、女のものに見える長い髪だった。

「父上、これは一体？」

「御台付きの侍女の吉野という女を、お前も知っているだろう？」

「吉野ならば、私も存じておりますが」

「その女のものだ。お前の留守と御台が病で臥せっていることをいいことに、吉野は不義を働き、子をなした。そして、その子連れで出奔しようとしていたのだ。もっとも、その子は生まれてすぐに死んだそうなのだが。それをわしが見つけ、秘密裏に始末した。御台の実家が改易された上に、侍女の不義騒動が表沙汰になってはまずかろうと思つてな」

「それは、大変申し訳ありません。父上にはご迷惑ばかりおかけしてしまつて」

義宣は、ただ父に頭を下げるしかなかった。吉野が不義を働き出奔しようとしていたなど、信じがたい話だ。義宣は吉野のことを詳しく知っているわけではないが、義宣が見る限りの吉野は、真面目で八重のことをよく思っている良い侍女だったはずだ。その吉野が、この時期に八重を裏切り見捨てるようなことをするだろうか。

父に迷惑をかけたことを詫び、義宣は奥へ向かった。八重に事態の真相を問わなければならないし、那須家改易のことと話し合わなければならない。八重と顔を合わせるのは、一年ぶりに近い。小田原参陣や会津征伐、上洛が重なり、八重の顔を見ていなかった。八重の方も、義宣には会おうとしなかった。だが、いい加減話し合わなければならない時がやって来たのだ。

八重のもとへ向かうとすると、なすが立つていた。義宣を出迎えてくれているのだろうか。それにしては、なすの表情は暗い。

「兄上、お久しぶりです」

「なす、心配していたぞ。父上と口をきかないそうではないか。父上も心配している」

「だって、父上は宣通さまとなすを引き裂いたのです。確かに、江戸家の方々はなすに冷たかったけれど、宣通さまはなすを大事にしてくださいのに」

大粒の涙をこぼすなすに、義宣は何と言葉をかけていいのか分らず、膝について視線を合わせた。だが、今はなすに構っている場合ではない。はやく八重と話をしなければならぬのだ。

「兄上も父上と同じです。兄上は、義姉上のところへ行かれるのでしょう？義姉上のご実家が改易されたから、義姉上はもういらないとお考えなのでしょう？」

「そんなことはない」

「嘘。兄上も父上も、自分のことしか考えていないの。なすや盛重兄上や能化丸のことなんて、道具としか思っていないのです。義姉上のことも同じ」

なすの涙ながらの訴えが胸に刺さる。義宣は、弟や妹たちを道具だとは思っていない。だが、幼くして他家に養子に出され、嫁がされてきた弟、妹のことを真剣に思っ て来たかと言われると、そうではないのかもしれない。八重のことも、心配しているのは八重ではなく、自分の身と家のことだけなのか。確かに、一番心配なのは家の行く末だ。それは、八重を道具としか思っていないということなのだろうか。

「兄上はずるい」

そう叫んで、なすは義宣の前から走り去った。幼いなすの言う言葉は、子どもだからこそ偽りが無い。だから、義宣の胸に深く突き刺さるのだ。

義宣が八重を離縁したくないのはなぜだ。秀吉や三成の言うように、はやく離縁した方が良くに決まっている。八重は義宣を憎んでいる。義宣も、八重に拒まれたあの時から、八重が憎いと思っているはずだ。実家が大事で、義宣のことを一度も見ようとしなかった八重が、憎いと思ったのではなかったか。

なすの言うとおり、義宣が八重を道具としか思っていないのならば、ここまで悩まずとも、とつくに離縁しているはずだ。今の八重は、義宣にとって脅威ではあるが、利用価値などまったく無い。

義宣となすのやりとりが聞こえたのか、八重が自室から顔を出し

た。義宣を見た瞬間、八重の目には蔑みと嫌悪が浮かんだように見えた。その表情を見ると、資晴が家康を頼りにしているという話も思い出し、八重のことが酷く憎らしく思えた。だが、離縁しようという気持ちにはならないのだった。



## 那須の女と伊達の女（二十三）

義宣の姿を認めると、八重はすぐに自室へと顔を引つ込めた。だが、義宣は八重が障子を閉める前に、閉めかけた障子を開け放った。八重は義宣を睨みつけるように見上げている。なすと話している時は、自分が八重を道具としか思っていないのか、なぜ離縁したくないと思うのか、と考えていたが、八重の顔を見ると、そのような考えは頭の中から消えてしまった。

「久しぶりだな、八重。病は癒えたようでは何よりだ」

「心にもないことをぬけぬけと。よくも、わたくしの前に姿を見せられたものだこと」

「夫が妻を訪ねて何がおかしい？」

「夫？妻ですって？笑わせる」

「ところで、いつもお前に付いている吉野の姿が見えないが、どうしたんだ？」

吉野という名を口にする、八重の表情にわずかに動揺の色が見えた。八重は父も知らないことを知っているに違いない。吉野の死には、何か隠しておかなければならない秘密があるはずだ。

「吉野は、わたくしの病がうつって死にました。気の毒に、わたくしにずっと尽くしてくれていたというのに」

八重の言っていることは嘘だ。吉野は父に殺された。これで、八重と吉野は共謀していたことが分かる。おそらく、八重も吉野の赤子のことは知っていたはずだ。今となつては、本当に八重が病で臥せっていたのかどうかあやしい。吉野の不義が知られぬように、口占を合わせていたのかもしれない。

「八重、お前は本当に病で臥せていたのか？」

「いきなり、何を言うかと思えば」

「お前が臥せっている姿を誰も見ていない。吉野ともう一人の朝霧とかいう者しか見ていないはずだ。本当に病だったという証はある

か？」

「吉野は、わたくしの看病をしていて、わたくしの病がうつって死んだのです。それが証ではありませんか」

「吉野は、出奔しようとしていたところを父に見つかり、父の手で殺されている」

父から渡された吉野の切られた髪を八重に突き付けると、八重は小さく悲鳴を上げて吉野の遺髪を義宣の手から奪い取った。八重の目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「事实はどうなんだ？お前は、なぜ俺とともに上洛しなかった？吉野の子の父親は？俺が家のために駆けずりまわっている間、お前たちは奥で何をしていたというんだ」

吉野の遺髪を握り締めたまま、八重は俯き小さく笑った。何がおかしいというのだろうか。義宣が不在の間、この城の中で何が起こっていたのだ。小田原参陣に会津征伐、上洛と上方の情勢についていくのが精一杯だった義宣は、奥で何が起こっていたのかまったく分からない。しかも、今は八重の実家が改易され、義宣の立場は危うくなりかけている。その那須の女である八重は、何がおかしくて笑っているのだ。八重の態度に、義宣は苛立った。

「わたくしが、なぜ上洛をしなかったのか？そんなことも分かりませんの？あなたのような男ともに京になど、行きとうなかったからに決まっているではありませんか。しかも、わたくしの可愛い吉野が身重とあらば、吉野を置いて行くことなどできるはずもありませんし。あなたが留守の間、わたくしたちは吉野の子を無事に産ませようとしていた。それだけのことだわ」

八重が上洛しなかったのは、義宣とともに行くのが嫌だったからだと言うのか。笑みを浮かべる八重が憎く思えた。

「お前は、奥を取り締まる御台という立場にありながら、侍女の不義密通を見逃すどころか、それを祝ってやろうとしていたのか？」

「何が悪いの？たとえ、どんな事情でできた子であろうと、その子に罪はない。子には、何の罪もないというのに」

吉野の子は、父の話によれば生まれてすぐに死んだはずだ。そのことを思い出したのか、八重はさめざめと涙を流している。義宣のことを気にかけたことなどないというのに、死んでしまった吉野とその子のためには、八重は目を赤く腫らして涙を流す。そのことも、義宣の苛立ちを増させた。

八重には、これ以上吉野の出奔のことを聞いても口を割りそうにはない。それに、吉野の証言と父の見た吉野の姿、八重の言葉から考えるに、吉野の出奔は間違いなく不義の子をなした故のことだろう。八重が上洛しなかったのは、義宣についてくるのが嫌だったことと、吉野が心配だったことが理由だとも分かった。

那須家改易の上に、侍女の不義密通、更には八重が病ではなくただの我がままで上洛しなかったことが明るみに出れば、ただでさえ不安定になりつつある義宣の立場は一層悪くなる。ここは、父と同様に目を瞑るしかないだろう。

「分かった。吉野の不義密通は不問にしよう。八重も、次回から上洛すれば問題はないはずだ」

「上洛？」

「ああ。今は、殿下のお怒りが解けるまでお前を蟄居、謹慎させるが、いずれ許されたら、上洛してもらうからな」

「わたくしを離縁なさらないのですか？」

「ああ」

「信じられないわ。わたくしを上洛させて、関白の慰み者として差し出すおつもり？改易された家の女にはそれが似合いたとでも？わたくしを差し出して、少しでも関白の機嫌を取るおつもりなのかしら？」

「誰も、そんなことは言っていない」

八重の物言いに義宣は思わず怒鳴ってしまった。義宣が八重を離縁しないのは、そのように下衆な考えがあるからではない。八重を秀吉に差し出すなど、考えたこともなかった。だが、八重を離縁しないとしたら、八重に残された利用価値は、その程度のものだ。

那須家との同盟の証としての意味は、八重にはすでない。那須家は義宣ではなく家康を頼りに復興の道を探っている。もう、那須家と佐竹家の間で同盟が交わされることはないだろう。人質としての意味もない。資晴が義宣ではなく家康を選んだ時点で、八重は資晴に見捨てられたようなものだ。

離縁しない理由など、どこにもない。秀吉には離縁するように言われているし、資晴は義宣の顔に泥でも塗るように家康に媚びている。

義宣とともに上洛しなくなかった、と言い放った八重が憎らしいだが、離縁はしたくない。なすの言うとおり、八重を道具としか見ておらず、まだ何か利用価値があるとでも思っているのか。そんなことはないはずだ。ならば、なぜ八重を離縁しない。八重は、こんなにも憎しみをこめて義宣を睨みつけていると言うのに。

だが、約一年ぶりに見た八重は、たとえ憎しみに燃える顔であっても、秀吉のすすめる京女の誰よりも、美しかった。

「とにかく、八重は太田城の奥の局で謹慎だ。奥の局から出ることは、決して許さない」

「分かりました。あなたがそのつもりならば、わたくしは自分の力で那須へ帰るわ。わたくしは、那須の女ですもの」

最後にもう一度謹慎のことを告げ、義宣は奥を後にした。背後から八重の叫びが聞こえる。一年前ならば、吉野が後を追って来て、何とか義宣と八重の仲を取り持とうとしていたものだった。まだ一年前のことはずなのに、ひどく遠い昔のように思える。

八重のもとを去った義宣は、まっすぐ父の部屋へ向かった。父は、義宣の留守中に残された南方の豪族たちを一網打尽にする計略を練っていたのだ。あとは、義宣が父と相談を重ね、実行に移せばいい。とりあえず、あの間は八重には謹慎をさせておけばいいだろう。八重をどうするかは、次の上洛までに決めればいい。今は、まず南方の豪族を片づけることが先だ。

義宣は、父との相談の結果、南方の豪族たちを太田城に招くこと

にした。ちょうど、城内の梅が見ごろになっている。梅見の宴を開き、その場で佐竹への追従を誓わせる。書状には、梅見の宴を楽しみたい、ということだけを書いたが、佐竹への追従を誓わせられるということくらい、豪族たちは理解しただろう。

二月九日、南方の諸豪族を招いた盛大な梅見の宴が太田城で開かれた。豪族たちの表情は暗い。江戸と大掾を討った佐竹を警戒しているのがよく分かる。居並ぶ豪族たちの前に、義宣は父とともに現れた。その後ろには、義久、義憲、義種ら一門衆が続いている。

「皆よく集まってくれた。私は、常陸一国は佐竹家のものと関白殿下から朱印状をいただいている。それにも関わらず、江戸や大掾は我らの命を聞かず、むしろ逆らった。それ故に、今日のような結果となったのだ。皆には、よく分別をしてもらいたい」

義宣の言葉に、豪族たちは渋々頭を下げた。だが、中には頭を下げようとしない者たちもいた。それを義宣は見逃さなかった。後ろに控える義久に目配せをすると、義久は黙って頷き、姿を消した。

「皆の決意、佐竹は嬉しく思う。では、今日は我が城内の梅を存分に楽しんでもらおう。ちょうど、紅梅が見ごろになっているからな」

義宣が言い終わると同時に、庭に張っていた幕が一斉に上がった。幕の向こう側には、刀を手にし、襷掛けをした家臣たちがそろっている。豪族たちは、突然のことに反応が遅れているようだった。

「小高治部少輔、相賀詮秀、手賀高幹、武田信房、貴様らはお屋形様への追従を誓わなかった。よって、この場で死をもつて従つてもらおう」

家臣たちとともに幕の陰に移動していた義久が、先ほど頭を下げなかった四人を指差し、後ろに控えている家臣に合図を送った。家臣たちが四人に斬りかかる。だが、さすがに事態を理解した豪族たちが大人しく斬られるはなかった。小高らは家臣とともに佐竹家に刃向ったが、多勢に無勢では、抵抗の時間は短かった。四人は家臣ともども斬られ、その血は城を赤く染めた。

小高らに刃が向かうと、その場にいた者たちは我先にと逃げ出そ

うとした。それを、義憲と義種が指揮を取り追いかけて行った。ある者は諦めておとなしく縛につき、ある者は自害して果てた。また、ある者は城外まで逃げおおせたものの、結局捕まり殺害された。おとなしく縛についた者たちは、命だけは助かるのではないか、と期待に満ちた眼差しで義宣を見上げていたが、義宣は義久にその者たちも殺させた。

梅の咲く庭は血で赤く染まり、白梅もまるで紅梅のようだった。城の壁も豪族たちの血で赤く染められている。城内には、血のにおいが充満していた。もしかしたら、八重も奥でこの騒動を聞きつけ、血のにおいを嗅いでいるのかもしれない。

「お屋形様、此度の梅見の宴に招いた豪族は、すべて始末いたしました」

「そうか」

「これで、常陸一国は名実ともに我らが佐竹家のものとなりました」  
「ああ。俺の威勢も常陸中に広まるというものだ。これで、佐竹に逆らおうとする者は、この常陸から消え失せただろう」

義久の報告に義宣が頷くと、父も感慨深げに頷いていた。父や祖父の念願だった常陸一国の統一が、義宣の代でなったのだ。秀吉という権力者の後ろ盾があつてこそその成果だが、常陸が佐竹家のものになったことに変わりはない。梅見の宴に豪族を呼び、その場で暗殺するという計略は、父の考えに義宣が考えを加えてできたものだった。父は、見せしめに何人か殺せばいいと言ったが、義宣は集まった者すべてを殺すことにした。それによつて、佐竹家の威勢を示したかったし、自分自身の権威も示したかった。

義宣は、来月居城を太田城から水戸城へ移すことにした。血濡れた城は佐竹家の新体制にはふさわしくなかったし、何より水戸城の方が、利便性がいい。城替えとともに、義宣は口うるさい老臣たちからの脱却を目指していた。それがうまくいくかどうかは、まだ分からない。父はわずかな老臣たちとともに太田城に残ることになった。

太田城の奥の局で謹慎させている八重は、そのまま太田城で謹慎させることにした。那須家の問題が何とかなるまで、義宣は八重を太田城で謹慎させ、水戸城に呼ぶつもりはなかった。

## 那須の女と伊達の女（二十四）

父に太田城をまかせ、義宣は家臣を引き連れて水戸城へ移った。

八重は予定通り太田城に蟄居させたままにしている。しばらくは水戸城の改築や城下の整備に専念したいが、三成からは近々秀吉が九戸征伐を命じるだろうと知らせがあった。またすぐに国許を離れなければならぬのかもしれない。

三成の書状は、九戸征伐のことだけではなく那須家のことにも触れていた。資晴が家康を通じて復興を目指していることは知っていたが、秀吉が資晴の息子である藤王丸に知行地を与えることを検討し始めたらしいのだ。秀吉の怒りは収まったのかと思ったが、それと八重のことは別の問題らしく、早々に那須の女は離縁した方が良くいと三成にまた忠告されてしまった。

その書状を太田城から水戸城へ来ていた父に見せると、父は渋い顔で義宣に書状を返した。

「御台は、太田城ではなくどこかの寺にでも幽閉した方がよいのではないか？」

「寺に幽閉ですか？」

「そうだ。いくら蟄居、謹慎させているとはいえ、御台はまだ城内に住んでおる。それよりは、寺に幽閉した方が殿下の心証は良くなるのではないかのう。お前が、あくまでも離縁をしたくない、と言うならばな」

父の言葉には少しとげがあるようだ。父も、八重のことは離縁した方が良いと思っているのだろう。それは当然だ。義宣の方がおそらくおかしいのだ。だが、現在の当主は義宣だからか、父は離縁しろとは言ってこなかった。

「父上は、母上が政宗を助けたと知った時、母上を離縁なさりませんでしたね」

義宣は嫌みを言いたい訳ではなかった。ただ、母が義久に命じて



政宗を助けた時、父はなぜ母を離縁しなかったのだろう、と思い、この問いをしてしまった。その理由を聞けば、義宣が八重を離縁したくないと思う気持ちにも説明がつくかもしれない。

「あれはお前たちの母親であつたことだし、此度のように実家が改易されたわけでもないからな」

「では、もし小田原で伊達家が改易されていたら、母上を離縁なさりましたか？」

「せんだろ。わしひとりが伊達の女を離縁したところで、伊達にゆかりのある女はほかにいくらでもある。それに、お前の母は政宗の叔母でしかない。だが、御台は違う。改易された当主の妹だ」

確かに、父の言うとおり父と義宣では置かれた状況が違う。そのためか、義宣が納得するような答えは得られなかった。

「父上は、二度も政宗を助けた母上を、憎いと思つたことはないのですか？なぜ、側室を置かれないのですか？」

この問いに、父は面食らつたようだった。息子の前に、その母親のことをどう言えいいものか、迷っているらしい。眉間にはくつきりと皺が刻まれている。だが、この問いの答えが聞ければ、義宣は今度こそ自分の感情にも説明がつくような気がした。

「憎いと思つたことがないと言えば嘘になるかもしれん。だが、憎いという感情だけでは、お前たちは産まれておらんのだぞ。それに、あれはああ見えて、嫉妬深い。表には出さぬが、わしが女に手をつけたと知ると、内心は烈火のごとく怒るのだ。そういうところが、まあ、可愛いと思えなくもない。何より、長年連れ添つておれば、情もうつるというものよ」

「そうですか」

「わしも、昔のお前のように女中に手をつけたことくらいある。だが、あれを怒らせると恐ろしくてな。孕ませるような失敗だけはせぬように、あれには知られぬように手をつけておるのだ」

父の話を総合すれば、父は母を憎らしいと思つたことはあるが、結局のところ母を愛しく思っているようだ。それが、夫婦の絆、夫

婦の情というものののだろうか。義宣と八重の間に、そのようなものが存在しているとは思えない。八重とは、連れ添って六年だ。六年しか経っていないのか、と思うが、もう六年も過ぎたのか、とも思う。その間、八重に嫌われはしたが、嫉妬などされたことはなかった。

「そうだ。お前は、あれに似ているかもしれん」  
「母上に？」

頷く父を見て、義宣はそうだろうか、と内心首を傾げた。父の話を聞き、母に似ていると言われても、義宣は自分の気持ちに説明をつけることなどできなかった。説明はつかないが、まだ八重を離縁したくないと思っている。

会話を打ち切り、父は太田城へと戻って行った。父を送った後、義宣は太田城にいる八重の侍女に宛てて書状を書いた。吉野が死んだ今、八重の侍女は朝霧といった女だったはずだ。

八重を離縁したくない。だが、秀吉の心証を損ねたくはない。父に言われた通り、義宣は八重を寺に幽閉することにした。いずれ、秀吉の許しを得たら、寺へ八重を迎えに行く。それで、この場を何とかしのぐしかなかった。

義宣に蟄居、謹慎を命じられてから、八重は一步も奥の局から外には出なかった。そもそも、義宣に命じられずとも、奥の局から出るつもりなどまったくない。だが、奥にいても表の騒動は伝わってくる。先月の梅見の宴は、恐ろしい惨劇だったのだろう。話を聞いただけで、血の臭いが奥まで漂ってきそうだ。

激しい言い争いをしてから、八重は一度も義宣に会っていないが、義宣が太田城で反抗的な諸豪族を暗殺したという話は聞いている。陰湿で凄惨で、あの男のやりそうなことだと思い、嫌悪したものだ。つた。

血塗られた城に八重を留めておくのも、義宣の嫌がらせなのかも

しれない。八重を離縁しないと、血塗られた城に閉じ込め、義宣は八重を追いつめようとしているに違いない。離縁という手段ではなく、八重の自害という形で、那須家改易に決着をつけたいのだろうか。

だが、正室が自害など、名門である佐竹家には不似合いなのではないか。義宣が、正室の自害という外聞の悪いことを、好んで八重にさせようとしているとは思えない。あの男は、佐竹家という名門が何よりも大事なのだ。そのために、八重を犠牲にすることはあっても、自分が泥をかぶることはないに違いない。

吉野が殺され、多くの血が流された城の奥で、八重は日がな一日何をすることもなく過ごしていた。朝霧が話し相手になってくれるほかは、誰とも会わず、口をきかず過ごしている。少し、気が滅入ってきた。

佐良土で蟄居させられているという兄は、どう過ごしているのだろうか。懐かしい那須の地はどうなってしまったのだろうか。

朝霧は表に呼ばれて、局にはいない。暇を持て余した八重は、嫁いでくる時に那須から持ってきたものを探すことにした。少しでも那須にいた頃の思い出に浸れるものが見たかった。だが、物の管理はすべて吉野に任せていたため、八重ひとりではどこに何があるのか分からない。手探りで探してみると、白い打掛を見つけた。これは、嫁入りの際に兄が八重のために仕立てさせた婚礼衣装の打掛だ。懐かしい。兄は、この衣装を着た八重を美しいと言ってくれたものだ。同時に懐剣を渡して、八重が佐竹に嫁ぐ以上は、佐竹を攻めないと約束してくれた。兄からもらった懐剣を、今も八重は大事にしている。その時は、まだ八重は那須にいて、吉野も隣で笑っていて、兄もすぐそばにいた。あの頃のことを思うと、涙があふれる。

だが、今となってはこの白い花嫁衣装も、八重にとっては死に臨むための白装束にしか見えなかった。思えば、佐竹家に嫁いだ時から、八重は死んだようなものだったのだ。八重を佐竹の人間として

認めようとしない姑や家臣。いきなり女中たちに手をつけだし、八重を手箒にした忌むべき義宣。吉野を殺した舅。義宣に罪があったとしても、その子には何の罪もないというのに、義宣との間にできた子は死んでしまった。多くの人間の血で赤く染まった太田城。なぜ、八重はこんなところにいるのだろうか。吉野は命をかけて八重を守ってくれたが、今の八重に生きる意味はあるのだろうか。

兄は北条とともに豊臣秀吉や佐竹など滅ぼし、八重を迎えに来てくれるのだと思っていた。その兄は、豊臣秀吉のせいで烏山城を追われ、佐良土に蟄居させられている。兄が八重を迎えに来るということが、今となっては夢幻に過ぎないというのならば、いつそ八重を佐良土に送ってくれればいいのに。

打掛を手でなぞり、物思いにふけっていると、廊下を駆ける足音が聞こえてきた。この局にやって来る人間は朝霧だけだ。朝霧がこちらへ向かっているのだろうか、こんなに慌ててどうしたのだろうか。

「御台様、お屋形様よりの書状が届きました」

「そう。何と書いてあったの？」

「それが、御台様に耕山寺に移られるようにとのことです」

「寺へ移れですって？今でさえ、わたくしは蟄居させられているというのに、あの男は、今度はわたくしを寺に幽閉しようとしているのか」

朝霧は否定も肯定もしなかったが、細かく震える手を見れば、八重の幽閉が事実であると分かる。義宣は何を考えているのだろうか。寺に幽閉など、このような屈辱に八重はもう耐えられなかった。血なまぐさい太田城も、どのようなものか知らぬ寺も、もう嫌だ。

「御台様、いかがなされますか？お拒みになれば、大変なことに」  
「そうね。そなたの身にも危険が及ぶかもしれない。それは、わたくしとしても避けたいところ」

朝霧が怯えないように、にこりとほほ笑んでみせると、朝霧は明らかに安心していた。吉野が死に、梅見の宴での暗殺があり、朝霧

も心穏やかではなかったのだろう。

「次郎殿に返書をしたためましょう。朝霧、筆と紙の用意をなさい」  
「はい、ただいま」

来た時と同じように、朝霧は廊下を駆けて行った。何も急ぐ必要はない。返書など、書くつもりはないのだから。

兄からもらった懐剣を手に取り、鞘を払った。懐剣の刃は鋭く光り、八重の顔を冷たく映し出していた。

## 那須の女と伊達の女（二十五）

兄からもらった懐剣に映る自分の顔をしばし見て、八重は胸に懐剣の切っ先をあてた。

もはや、生きていたところで何の意味もない。那須に帰ることは許されず、帰る家も失った。兄のもとへ行くことはできない。妹のように思っていた吉野も失った。この身は辱められ、その結果生まれた我が子も死んだ。血なまぐさい城で蟄居、謹慎すら耐えがたいというのに、この上寺に幽閉という屈辱が与えられようとしている。それに、最近では城に須賀川からやってきたという幼い姫が入りしている。その姫は、姑の姉の娘らしいが、城に出入りを許されているということとは、もしかしたら義宣は、あの姫を後妻に迎えるつもりなのかもしれない。だから、八重を幽閉しようと言うのだ。離縁はしないと言いながら、後妻を迎える用意をしているに違いない。

ならば、八重に残された道はひとつしかない。多くの血で染まった太田城を、八重の血でも染め上げるのだ。佐竹家を名門だと誇りに思っている義宣にとっては、妻の自害は名門に傷をつける醜聞に違いない。妻の実家が改易されたことも、耐えがたいに違いないのだから、八重が自害した時、義宣がどのような顔をするのか、想像すると滑稽で笑いたくなってくる。

義宣は、八重を妻だと言ったが、八重は最初から義宣を夫だとは思っていなかった。八重の心は常に遠く離れた那須にあった。佐竹家に嫁いだのも、義宣におとなしく抱かれていたのも、未だにこの城に留まっているのも、すべては兄のためだ。兄に頼まれたから、兄のために八重は義宣の妻になってやったのだ。そのことを、義宣は分かっている。

八重は佐竹義宣の妻ではない。那須資晴の妹だ。

那須の女の覚悟と意地を、義宣に思い知らせてやる。八重は自ら

の力で、那須に帰るのだ。

懐剣を握る手に力をこめ、一気に胸に突き刺した。血が飛び散り、白い婚礼衣装を赤く染めるのを、八重は見た。あれは、婚礼衣装ではない。血染めの死装束だ。

「御台様」

朝霧の絶叫が響いた。だが、その声は遠く聞こえる。走り寄って来た朝霧は、涙を流してうろたえているようだった。

「御台様、何ということ。わ、わたし、人を呼んで参ります」

「朝霧」

「は、はい」

「あれを、次郎殿に」

「御台様のご婚礼の時の。お屋形様に、お渡しすればよろしいのですね？」

「あれは、わたくしの死装束よ」

「必ず、お屋形様にお渡しいたします、御台様」

血に染まった婚礼衣装を指差すと、朝霧は八重のその手をとって、何度も頷いた。八重に近寄り、手を取ったせいで朝霧の小袖も八重の血で染まっていた。

「朝霧、懐剣を抜いて、止めを」

「そんな、わたしにはできません。御台様、お医師を呼べば、きっと」

朝霧が涙を流して首を振る間にも、八重の体からは血が流れ、命は徐々に削られていく。朝霧には、八重に止めを刺すことはできなさうだ。苦しみに耐えながら、八重は自ら懐剣を再び握り、胸から抜こうとした。

「佐竹の者ども、那須の女の覚悟を、思い知るがいい。わたくしが、御家の行く末を見守ってくれる」

佐竹の者に与えられた辱めを、八重は決して忘れない。八重の血とともに、八重の思いはこの城に染みつき、佐竹の者を苦しめるだろう。だが、八重の魂は佐竹になど縛られない。遠く懐かしい那須

へと帰るのだ。

息は苦しかったが、それだけ言い放ち、八重は胸に刺さっている懐剣を引き抜いた。血が勢いを増して流れ出す。朝霧の悲鳴が聞こえたような気がした。

遠のく意識の中、八重は寿亀山と烏山城、そこに流れる那珂川を見た。幼いころに兄と遊んだ、懐かしい那須の景色だった。

八重が自害したという知らせを、義宣は信じられなかった。だが、太田城にいる父からの知らせなのだ。父が、義宣に八重の死を偽るはずがない。

心臓を鷲掴みにされたようだ。心臓が早鐘を打っている。八重の死を聞いた時、一瞬頭の中が真っ白になった。何も考えられず、何も聞こえなかった。時が止まったようだった。

落ち着いてくると、すぐにも太田城へ行つて真相を確かめたい気持ちが増えかかっていたが、それと同じくらいに、なぜこのような時に自害などするのか、という憤りもあった。今の義宣は危うい立場にいるのだ。妻が自害したと秀吉に報告したら、何とかわれるか分かったものではない。だが、それ以上に信じられないという思いが強かった。

水戸城に父がやって来た。八重の死について、義宣と話をするためだろう。

「御台は、本当に自害したのでしょうか？」

「そのようだ。わしは、直接自害する瞬間を見たわけではない。だが、部屋の状況から考えるに、あれは自害以外ありえぬ。御台の部屋は、血で赤く染まっていた。御台の側にいた侍女は、病死だと言っているのだが、それは嘘だろう。病ではあのようにならぬ」

「遺書は、あったのでしょうか？」

「いや、見つかっておらぬ。だが、あの侍女が遺言を聞いた可能性はある。決して口を割らぬのだが。口を割らぬということは、遺



言があつたとしても、良い遺言ではないということじゃ。聞かぬ方が良い」

「そうですか」

遺書がないのならば、八重の自害は以前から計画していたものではなく、突発的なものだったのだろうか。そうであつてほしい。

「御台の顔を、見に行つてはなりませんか？」

「やめておけ。殿下が何と思ひになるか分からぬ以上、下手に動かぬことだ」

「はい」

「明日、御台の側におつた侍女を連れてこよう。御台の死体のそばで泣いていたのだ。葬儀の手配も、わしが進めておく」

「分かりました。お願いいたします」

頭を下げると、父は葬儀の準備に取り掛かるため、太田城へと戻つて行つた。ひとり残された義宣は、呆然と座り込んでいた。考えることは多いはずだ。秀吉や三成にどう報告するのか。葬儀はどうするのか。家臣たちにはどう説明するか。京にいる母にはどう言うか。だが、何も考えられない。眠つてしまいたいと思つたが、眠ることもできなかった。

考えが頭の中を巡つてまとまらない。だが、ひとつだけ義宣の頭の中から決して離れない考えがあつた。秀吉に何と思われるのか。これから佐竹家はどうなるのか。そのことが何よりも気がかりだつた。なぜこのような時に自害をするのだ、と八重に対する憤りを覚える。

八重の死を悼む気持ちがないわけではない。だが、生きている間も義宣は八重が憎かつた。死してからも義宣を苦しめるのかと思うと、やはり憎いと思うのだ。

夜が明けるまで、義宣は一睡もできなかった。日が昇り、太田城から八重の侍女がやってきたと知らせを受けた。やってきた侍女は、朝霧だつた。手には、血で染まつた白い打掛を持っている。その打掛を、義宣は知っていた。八重と結婚した時に、八重が着ていた婚

礼衣装だ。

朝霧は平伏して、義宣に打掛を渡した。その打掛を手に取り、血の跡を指でなぞる。朝霧がわざわざこの打掛を持ってきたということは、八重が渡すように命じていたのだろう。血で染まった白い打掛。まるで、切腹した武士の死装束のようだ。

そう思った時、義宣は、はっとした。そうか、八重は自分の意地を通すために自害したのだ。那須の女としての意地を通すために、死を選んだに違いない。以前、八重は言っていたではないか。自分の力で那須に帰る、と。それは、こういうことだったのだ。そして、義宣にこの血に染まった打掛を渡したのは、自分は最初から義宣と結婚したとは思っていなかった、とでも言いたかったからだろう。

何という女だ。どこまで義宣を拒絶し、馬鹿にすれば気が済むのか。この時、義宣は八重の死を悼む気持ち以上に、八重を憎む気持ちが強かった。八重が憎くてたまらなかった。

目の前で震える朝霧に、八重の死因を聞くと、朝霧は父が言っていた通り病死だと答えた。おそらく、八重をかばっているのだろう。朝霧の声は震えていた。

怯える朝霧に、この打掛を燃やすように命じた。だが、朝霧は八重の打掛を燃やしてしまうのが嫌なようだ。義宣は打掛を掴み、自分で燃やすと言った。朝霧には、太田城に戻り、八重の持ち物をすべて燃やしてしまえと改めて命じた。八重に関するすべてを、燃やして消し去ってしまったかった。義宣の剣幕が恐ろしかったのか、朝霧は慌てて太田城へと戻って行った。

朝霧が立ち去った後、義宣は小姓たちが止めるのも聞かず、手ずから八重の打掛を火にくべた。打掛が炎に包まれ燃えるのを、目をそらさずに見つめていた。

「どこまでも、那須の女か」

義宣の呟きは、炎にのみこまれて消えた。八重の打掛は灰となり、風に舞って飛んでいったが、八重の自害は、打掛に染みついていた血のように、義宣の心の奥底に染みついたようだった。

その後、三成に妻は病死したと報告すると、秀吉はそれを信じたようだった。もう那須家のことで義宣に何か言うことはない、と三成からの書状に書かれており、義宣は安堵した。それと同時に、那須家が資晴の子の藤王丸を当主とし、五千石の大名として返り咲いたとも聞いた。だが、義宣にとつてはどうでも良いことだ。妹が死んだと報告する必要もないだろう。那須家と佐竹家の縁は、八重の死の前からとつくに切れている。

家臣たちや母にも、八重は病死したと告げた。八重は、原因不明の病のために上洛していない、ということになっていたのだから、誰もが病死に納得していた。

太田城に戻った朝霧は、義宣の命令通り八重に関する物はすべて焼いたようだった。父が立ち会ったと言っているのだから、間違いない。だが、父が取り上げていた八重の懐剣は、どこを探しても見つからなかったらしい。朝霧の姿も、八重の物を処分した次の日から見えなくなつたと聞いている。

八重の死後、義宣の後妻は、母の姉で義宣にとっては伯母にあたる阿南の養女、蘆名家の血を引く二階堂家の姫がふさわしい、という話が出た。だが、多賀谷重経がなかば強引に父に頼みこみ、母とともに上洛している人質の多賀谷家の姫と決まった。

八重の葬儀は、八重を幽閉するはずだった耕山寺で、密かに行つた。義宣は一度も、八重の死に顔を見なかった。

## 開く花（一）

話したいことがある、と言って訪ねてきたのは義宣の方だったが、義宣は黙ったまま口を開かなかった。岩瀬の姫に、自分のことを話そうと思ったのだが、自分の胸の内の感情が、うまく言葉にならなかった。

そもそも、本当に話すつもりがあつたのかも疑わしい。自分のことは、あれだけ可愛がつてそばに置いている金阿弥にさえ、話したことがないのだ。できることならば、何も話したくはない。

だが、聞いてほしい。理解してほしい。何も話したくない、という気持ちと、誰かに話したくて聞いてほしくてたまらない気持ちが、義宣の中でせめぎ合う。その結果、義宣は話したいことがある、と言いながら、黙り込んでしまっているのだ。

義宣が黙り込んでいる間、姫も黙って義宣と向かい合つて座っていた。姫には、母に愛されたかつた、と言いながら泣くという醜態をさらしてしまっているのだから、自分のことを話すのを恐れる必要はないのかもしれないが、今はまだ言葉にすることができなかった。

母に愛されなかつた、愛されたかつた、ということは口にできても、八重が自害したことは言えそうにない。

「お屋形さま」

姫に呼ばれて、視線を上げた。姫は、義宣がなかなか話したそうとしないことに、しびれを切らしたのだろうか。だが、そのようには見えなかつた。姫は義宣に微笑みを向けていた。

「わたしの話も、聞いてくださいますか？」

「ああ、聞かせてほしい」

姫の申し出に義宣は頷いた。自分のことは話せそうにない。それならば、姫の話を聞き、姫のことを知りたいと思った。

「ありがとうございます。わたしの父は、蘆名盛隆。母は大御台様

の姉であり、養母の妹に当たる伊達家の姫でした」

姫は、自分の生い立ちをゆっくりと話し始めた。両親のこと、姉や妹や弟のこと、養女に出された時のこと。その時々に分かたが何を考え、何を思い、これまでの時を過ごしてきたのか、義宣に伝えようとしているようだった。

「養母は、わたしを養女に迎えて、婿を取らせて、二階堂家を継がせるつもりでした。その時、二階堂には男子がいませんでしたから、わたしが養女に出される前に、父が家臣に殺されました。なぜ父が殺されなければならなかったのか、その時のわたしには分かりませんでした。ただ、恐ろしくて、悲しくてたまらなかった。後になって、父は痴情のもつれで家臣に殺されたのだという噂を聞きましたが、わたしは信じません」

義宣も、蘆名盛隆が家臣に殺された理由は、痴情のもつれだと聞いている。以前、父が蘆名盛隆をひいきにしていた時は、父が盛隆に懸想したのではないか、などという根も葉もない噂も立ったものだった。盛隆はおそらく男色家であったために、そのような噂が立つのだらうと思っていたが、姫にとっては優しい父親だったに違いない。

「その後、須賀川に養女に出された時は、父の死後まもなくということもあり、わたしはとても悲しく辛かったです。ですが、養母は厳しくも優しく、本当に母親のように接してくれましたから、悲しみも辛さも、消えていきました」

「そうか」

「けれど、その時も長くは続かず、伊達政宗によって蘆名家は滅亡、二階堂家も滅ぼされました。最初、わたしたちは政宗に保護をされたのですが、わたしはちつとも嬉しくはなかった。政宗は、わたしの実家と今の家を滅ぼした者。それが戦国の世の常といえども、今でも、わたしは政宗を憎いと思います。その後は、ご覧の通り、こうしてお屋形さまのもとでお世話になっております」

姫が話したことのほとんどは、起こった出来事として義宣も知っ

ていた。姫が今までどのような道を歩いてきたのか、人づてに聞いた話で理解していた気になっていたが、本人の口から話を聞き、その時の思いを聞き、初めてその時起こった本当のことを知ったような気がした。そして、話をするようになってから、まだ数月しか経っていない姫のことまで、理解できたような気がした。

姫は、感情を交えながらも、淡々と自分の身に起こったことを話していた。だが、話の内容は淡々と他人人話せるようなものではない。姫は、自分の中で過去を消化し、現在を生きることのできる人間なのだろう。義宣は、まだ過去が自分の中でどうすることもできず、くすぶり続けているというのに。

姫にとって辛かったはずのことも、すべて話してくれたのだから、義宣も話さなければならぬだろう。義宣が口を開こうとすると、姫は小さく頭を振った。

「話したくないのであれば、無理にお話しになることはありません。わたしは、あなたにわたしのことを知ってほしかったから、お話ししたまでのこと。お屋形さまが、わたしにお話しになりたいことがあるのなら、ご自分がお話しても良いと思った時に、お話しくださいませ」

「すまない。俺の方から話したいことがあると言っておきながら」「いいえ」

姫の手が義宣の手に重ねられた。その手を義宣は握り締めた。姫の手はあたたかかった。義宣の冷たい手も、あたたまるようだった。「そうだ、大事なことを言い忘れておりました」

「何だ？」

「わたしの名は、祥と申します、お屋形さま」

「さち？」

「瑞祥の祥と書きます」

「良い名だな」

「ありがとうございます」

女の名は、その女の家族や側近く仕えている侍女など、ごく親し

に限られた人間しか知らないものだ。義宣も、名を知っている女は少ない。母と妹、妻のほかには、以前名を聞いた侍女くらいしか知らない。八重に仕えていた吉野も朝霧も、八重がつけたものだろうから、顔を合わせて話をしていても、義宣は名を知っているわけではなかった。そもそも、昔は女の名を問うことは、求婚と同義だったはずだ。つまり、女が自らの名を明かすということは、男に対して心を許したということになるのではないだろうか。

岩瀬の姫は、祥という名を義宣に告げた。祥は義宣の側室となり、義宣を夫として認めたのだ。

「祥、俺の名は、義宣だ」

「ええ」

「義宣と呼んでほしい」

「え？ですが、それは大層無礼にあたるのでは？」

「俺が、そうしてほしいんだ。もともと、元服の時、俺の名は義憲になり、ともに元服した北家の又七郎が義宣になるはずだった。だが、俺は又七郎の名の方が羨ましく思えて、交換してもらった。父や家臣たちは笑っていたな。義宣という名は、俺が自ら選んだものだ。だから、その名で呼んでほしい」

祥が自らの名を義宣に預けたからか、義宣も祥に義宣という名で呼んでほしかった。金阿弥に、義宣と呼ばせていたのも、祥に話したのと同じ理由からだった。

義宣の要望に祥は戸惑っているようだったが、義宣の手を握り返し、少し照れくさそうに笑った。

「では、二人きりの時だけ、そう呼ばせていただきますね、義宣さま」

その夜、義宣はそのまま祥のもとで過ごした。その夜以来、義宣は以前よりも頻繁に祥の部屋を訪れるようになった。

## 開く花（二）

今までは夜が更けてから祥のもとへ通っていたが、あの夜以来、義宣は日中も時間の許す時は、祥のもとへと通った。特に何か用事があるわけではない。古田織部に習い、多少は自信のある茶の湯を振舞ってみたり、他愛ない話をしたりするだけだが、以前とは違う空気がそこには存在しているようだった。それが義宣は心地よかった。可愛がっている金阿弥と二人でいる時とは、何か違うものを感じる。

祥のもとへ頻繁に通うようになり、義宣は祥の部屋が質素であることに気がついた。下河辺の館から呼び寄せただけであるため、必要最低限の荷物しか持つて来てはいないのだろうが、常陸一国の領主の側室にしては、あまりにも質素だった。

「岩瀬、長持や唐櫃などは、下河辺の館では足りているのか？」

祥は質素儉約を好んでいるのか、それとも下河辺の館への配慮が今まで足りなかったのか、どちらなのか判断がつかなかったため、直接祥に聞いてみると、祥は首を傾げた。伯母と、側に控えていた侍女の鏡田が顔を見合わせていた。

「わたしは特に不自由ないと思うのですが、お養母さまはいかがお思いますか？」

「そうですね、確かに不自由はしていません。もともと落城後、あちこちに世話になった私たちに持ち物は少ないのですから」

「しかし、そのお荷物が少ないということ自体が、わたくしは問題だと思えますよ。後室御前も姫様も最低限の衣服と調度品しかお持ちではないのです、お屋形様」

「鏡田、そのようなこと、お屋形さまに申し上げなくても良いではないの」

「どうやら、祥は不自由を感じていないらしいが、鏡田はもう少し衣服も調度品も整えてほしいと思っているようだ。それは当然だろ



う。いくら落城し、滅亡したといえども、祥は二階堂家の姫なのだから、それに見合っただけの整えはほしいはずだ。

「そうですね。せめて、貝合わせの貝桶はほしいと思っていたのですけれど、義宣殿の側室となったのですから、これももう必要はありません」

「貝桶ですか、伯母上？」

「ああ、気を悪くなさらないください。私は、もともとこの子に婿を取らせて、二階堂家を再興させたいと思っていましたのです。婚禮用に、下河辺でも貝桶くらいは用意しておきたいと、以前思っていただけのこと」

貝桶は、嫁入りの際に重要な役割を果たすものだった。嫁の長持や唐櫃などとともに花嫁行列の前方を行き、婚家に到着してからは貝桶を嫁の実家の方から婚家へ渡す、貝桶渡しの儀が行われる。貝桶は、貝合わせに使う貝が入った桶で、貝合わせの貝は二枚貝であるため、対になる貝がひとつしかない。そのことから、貞淑さの象徴とされている。

祥の養母である伯母が、いつか祥が誰かと婚姻を結ぶ時のために、貝桶を用意しておきたかったというのは理解できる。その話を聞いて、祥を側室に迎えたものの、目に見える形で祥との関係を示したことはないのだと気づいた。

側室を迎えたところで、正室を迎えるような嫁入り行列も、三日に渡る祝言も執り行うことはない。だが、祥は本来側室に迎えるような家柄の姫ではなかった。伯母の言ったとおり、婿を迎えて二階堂家を継ぐ立場にある姫だったのだ。しかも、母の姪であり、義宣にとっては従妹でもある。そのことを思うと、形だけでも祝言を挙げて、側室として迎えるべきである気がしてきた。

「分かりました。岩瀬にも伯母上にも、私の配慮が足りなかったようです。急ぎ、必要と思われるものを水戸城へ用意させましょう。今度帰国する時に、姫も伯母上も私とともに帰国し、下河辺の館ではなく水戸城内に住んでもらうことにします」

「まあ、義宣殿、私はそのようなつもりで言ったのでありませんよ。年寄りの戯言でしたのに」

「お屋形さま、わたしたちは今の生活で十分なのです。どうか、お氣遣いなさらないでください」

祥も伯母も慌てていたが、義宣は決めたのだ。祥には、二階堂家の姫として、義宣の側室として相応しい待遇を与えなければならぬ。衣服や調度品が足りないというのなら、新調させるまでのことだ。祝言も執り行う。もともと、あくまでも祥は側室なのだから、正室を迎えた時のような盛大な祝言は行わない。貝桶渡しの儀と式三献を、奥の女たちだけで行えば良いだろう。それ以上のことをしては、正室としての琳の立場がなくなってしまう。

祥のもとを去り、義宣は表の自室に戻った。そこでは、宣政と政光、それに金阿弥が義宣に与えられた仕事をこなしていた。金阿弥は宣政や政光に比べるとまだ子どものように思えるが、二人に質問をしながら、よく働いている。さすが、神童と呼ばれただけのことはある。義宣に気づくと、三人は手を止め、頭を下げた。

「内膳」

「はい」

「街へ出て、貝桶と長持を用意させる。それに、扇と白い装束も必要だな」

「貝桶に長持、白い装束。妹姫様のご婚儀がお決まりですか？」

「いや、違う。入れる紋は月丸扇ではない。三つ盛り亀甲花菱の紋だ」

政光が妹のなすの嫁入り道具の支度だと思っても無理はない。なすは、幼いころに江戸家から連れ戻して以来、どこにも嫁がずに常陸に残っている。もう今年で十八歳になった。金阿弥と同じ年だ。政光に言われて、なすの嫁ぎ先もいい加減決めなければならぬと思いついた。

「三つ盛り亀甲花菱の紋と言いますと、岩瀬御台様のためのものでしょうか？」

「ああ、そうだ。形だけだが、祝言を行うことにした。相手は二階堂家の姫だ。それに相応しい礼を尽くさねばな」

「お任せください」

政光は義宣の命を受け、街へと出て行った。残った宣政は仕事に戻ったが、金阿弥は義宣を見上げていた。その表情は、何か義宣に訴えているようだった。

「どうした、金阿？」

「いいえ、何でもありません。失礼いたしました」

義宣が声をかけると、金阿弥は目を逸らし、宣政と同じように仕事に戻った。その姿を見て、宣政や政光に比べればまだ子どもだと思っていたが、金阿弥ももう十八歳になったのだと改めて思った。ついこの間まで、小さく可愛らしい子どもだったと思うのだが、今となつては同朋にしておくのが気の毒なくらいに成長している。金阿弥と同じ年ごろの譜代の子弟は、とつくに元服を済ませて、新たな名を名乗っているのだ。妻を迎えている者もいる。

義宣の気持ちとしては、いつまでも金阿弥をこのままそばに置いておきたかった。義宣の心の一番近くにいるのは金阿弥だ。だが、それは無理な話だった。金阿弥はこれから大人になっていく。義宣の我がままで、今までも大人になる機会を失わせたきたのだ。そろそろ、髪を伸ばさせる時期が来たのかもしれない。どこから妻を迎えさせるかも、決めておいても良いだろう。

政光の妻は、義宣の元服の際に神馬を牽く役割を担った馬場政直の娘だ。宣政は、義宣に仕え始めた時には、既に妻を娶っていたため、譜代家臣の娘を妻にはしていない。現在、追放中の金阿弥の兄、憲忠もまだ妻を娶っていないが、政光同様譜代家臣の娘を娶らせるつもりだ。金阿弥の妻も重臣の娘にしたい。

祥との祝言と同時に、金阿弥の将来のことも考えつつ、義宣は母に祥と祝言を挙げるつもりだと告げた。母は大層喜んでいて、琳のもとにも事情を説明しに行ったが、琳は浮かない顔のまま、小さく頷いただけだった。祥との祝言は、祥を正室に迎えるものではなく、

二階堂家の姫に対する礼であり、琳の地位を脅かすものではないと言い聞かせたのだが、琳の表情は晴れなかった。国許にいる父には、後で報告の書状を出せば良い。

祥と伯母に祝言のことを伝えると、祥は琳に悪いと遠慮していたが、鏡田は喜んでいた。伯母も口には出さなかったが、喜んでいようだった。それは祥にも分かったらしく、伯母と鏡田の様子を見ると笑顔で頷いた。

義宣が命じたすべての物を政光が整え終えると、吉日を選んで祝言の日取りを決めた。仲人は、祥の侍女の鏡田と、母の侍女の小大納言ということにした。母と伯母以外に、父の名代として伏見屋敷にいる弟の彦太郎を参加させ、一門を代表して義久も祝言に参加させた。奥の女たちだけで行うつもりだったが、家のことであるため、一門の誰かは参加させるべきだと考え直し、ともに上洛していた義久を参加させたのだ。

祝言の日は、花嫁行列がやってくるわけではなかったが、松を組んで火を焚かせた。鏡田の手から小大納言の手へ、義宣が用意した二階堂家の家紋入りの貝桶が渡され、貝桶渡しの儀が行われた。その後、祥が着座している向かいに義宣が座った。白い打掛をまとった祥は、緊張しているのか、頬をかすかに染めていた。その様が初々しく、好ましかった。

小大納言と侍女たちの手によって式三献が行われ、義宣と祥の祝言は無事に終わった。本来ならば、返礼、色直しとまだ二日間続くが、側室を迎える形だけの祝言だったため、一日で終えたのだ。

祝言の後、義宣と祥は寢所に入った。二人で床につき、ようやく祝言はすべて終わった。こうして、祥は改めて、義宣の側室となったのだ。

## 開く花（二）

義宣から夜に呼び出されることが、ここ最近まったくなかった。

義宣は、岩瀬の姫を側室に迎えると言っていたため、その姫のもとへ通っていて、金阿弥に構う時間がないのだろうと思っていた。それでも、義宣は何度も金阿弥だけと言って、何年も二人の時間を過ごしてきたのだから、これは一時的なもので、いずれ以前と同じような日々が戻って来るのだと思っていた。

だが、義宣は見せかけの側室だと金阿弥に言っていたにもかかわらず、頻繁に岩瀬の姫のもとへ通っていた。夜だけではなく、日中も足を運び、親しげに言葉を交わしているのを見たこともある。その間、義宣は金阿弥を寢所に呼ぶことはなかった。

義宣は、金阿弥のことなど、もう何とも思っていないのだろうか。金阿弥や宣政がいる前で、義宣は政光に貝桶や長持を用意するように命じた。それが嫁入り道具だということくらい金阿弥にも分かる。金阿弥も、政光と同じように、義宣の妹のためのものだった。思ったが、違った。それは、岩瀬の姫のためのものだった。義宣のもとに岩瀬の姫が嫁入りするための道具だ。

見せかけの側室に、それだけの礼を尽くすはずがない。義宣が最近、岩瀬の姫のもとへ足繁く通っていることと合わせて考えれば、義宣が岩瀬の姫を見せかけではない、正式な側室として迎えようとしていることはすぐに分かった。義宣が、岩瀬の姫に対して特別な思いをかけていることも分かった。

なぜ、義宣はそこまで岩瀬の姫に思いをかけるのか。金阿弥のこととはどう思っているのか。義宣の考えが分からず、ただ辛かった。義宣に何か言いたかったが、何も言えなかった。金阿弥は義宣を問い詰められる立場ではないのだ。

その後、義宣は岩瀬の姫と祝言を挙げた。お前だけ、と義宣が金阿弥に言い続けた言葉は偽りだったのだろうか、と思った。ついこ

の間まで、三日にあげず呼び出されていたのが嘘のようだ。岩瀬の姫を側室に迎える前、姫を側室に迎えたとしても、金阿弥との関係は変わらないと義宣は言っていたというのに。寝所に呼ばれることを望んでいるわけではない。ただ、義宣との変わらぬ関係を望んでいるだけだ。

はやく元服を迎え、宣政や政光のようにもつと義宣の役に立ちたいという思いももちろんあるが、今はまだ義宣だけの金阿弥でいたかった。できることならば、元服を迎えてもこの関係を終わりにしたくない、と心の片隅で密かに思っていてさえいるのだ。

一度も寝所に呼ばれないまま、義宣と岩瀬の姫の祝言が終わり、しばらく経った頃、義宣から久々に声がかかった。やはり、義宣には政景が必要なのだろうか。義宣は、金阿弥との関係を終わりにするつもりがないのか。お前だけ、という言葉は信じてもいいのだろうか。信じてもいいに違いない。義宣が金阿弥を呼ぶということは、まだ金阿弥は必要とされているということなのだ。仕方のない人だ、と思いながら寝所へ向かった。

「殿、梅津金阿弥にございます」

声をかけると、義宣から入るように促された。襖を開けて寝所に入ると、義宣は夜着ではなく平服のまま金阿弥を待っていた。どういうことだろう。

「殿？」

二人きりの時に呼ぶように言われた呼び方で呼ぶのは憚られた。今日の前にいる義宣は、金阿弥だけの義宣ではなく、佐竹のお屋形様だった。

「今夜は、お前と話がしたいと思って、呼び出したんだ」

「そうですか」

「金阿弥、今年でいくつになった？」

「私は、今年で十八になりましたが」

何を聞いているのだろうか。金阿弥の年齢は義宣の妹と同じなのだから、義宣が忘れていないはずがない。義宣の考えが分からない。

金阿弥が首を傾げると、義宣は持っていた扇を開いたり閉じたりして、ぱちりと音を鳴らした。

「そろそろ、髪を伸ばしても良い頃だろう」

髪を伸ばす。それは、金阿弥に元服の準備をしろと言っているのと同じだ。同朋は剃髪し主君に近侍している。髪を伸ばすということとは、もはや同朋ではいられないということだ。これが何を意味するのか、金阿弥は考えたくなかった。

「名も、金阿弥のままではな。新たな名乗りを考えた。髪が伸び始めたら、もえもん茂右衛門と名乗るがいい。お前の兄は半右衛門だからな」  
「茂右衛門ですか」

「もう十八なのだから、妻を迎えてもおかしくない年でもある。髪が伸びたら、山方対馬守の娘と婚約しろ。対馬は分かるな？」

「はい。殿の傳役でいらつしゃった対馬殿ですね」

「ああ。対馬の娘は、今年で十歳だそうだ。まだ妻とするには幼すぎる。今のところは婚約ということにして、娘が十三歳を過ぎたら正式に結婚すればいいだろう。どうだろうか？」

「対馬殿が、私で良いとおっしゃるのなら」

「それは良かった」

新たな名乗り。山方久定の娘との婚約。いずれは、金阿弥も元服し、妻を迎えることは分かっていた。だが、気持ちがついていかない。義宣は決定的な言葉を言わない。だが、義宣はどのような意図で金阿弥にこの話をしているのか、考えたくないが金阿弥にも分かっているのだ。

金阿弥が義宣の言葉に頷き、山方久定の娘を妻に迎えることを認めると、義宣は満足げに頷いた。そんな義宣を金阿弥は見たくなかった。

「金阿」

「はい」

「お前は、もうここに来なくていい。俺は、もうお前をここには呼ばない」

聞きたくなかった言葉が、義宣の口から伝えられた。今までの話で、もうここには来なくていいと言われるのだろうとは思っていた。認めたくなかった。信じたくなかった。考えたくなかった。だが、聞き間違いではなかった。

もう寝所に来なくていいということは、金阿弥との関係を終わりにすることなのだ。なぜ、義宣は突然そんなことを考えたのだろうか。金阿弥に髪を伸ばすように言って、新たな名乗りも考えて、許嫁まで決めて。金阿弥にとっては、すべて突然のことのように思えた。

岩瀬の姫と祝言を挙げたからだろうか。岩瀬に姫を愛すようになったから、金阿弥など不要になったのだろうか。そんなに、岩瀬の姫にほれ込んだのだろうか。政景を寝所に呼ばなかった間に、何が起ったというのだ。わずかな期間で、義宣と岩瀬の姫はどのような関係を築いたというのだ。金阿弥と義宣の六年以上かけて築き上げてきた関係は、岩瀬の姫の数ヶ月に劣るといえるのか。

義宣はまっすぐに金阿弥を見つめている。金阿弥をもうここには呼ばないと言った言葉は、嘘ではないのだと思ひ知らされた。

「良かった」

「何だと？」

「私からは、はやく髪を伸ばしたいだなんて、到底言えませんがね。周りが元服していく中、私だけいつまでも剃髪した頭では、肩身が狭かったのですよ。本当に、良かった」

俯き、袴の裾を握り締め、何とか一息に言い切った。しっかりと言い切ったつもりだったが、思った以上に声が震えていた。涙が目にとまっていく。このままでは、こぼれ落ちてしまいそうだった。義宣には涙など見られたくない。そもそも、泣く理由などないはずなのだ。

「失礼します」

絞り出すように、なんとかそれだけを口にして、逃げるように政景は義宣の寝所を飛び出した。政景の名を呼ぶ義宣の声が聞こえた



が、無視をした。深夜だということなど構わず、足音を大きく立てながら、足早に歩いた。早く、義宣の寢所から遠ざかりたかった。

歩いている間に、涙が頬を伝って流れ落ちてきた。手で拭っても一向に止まる気配がない。何度も手の甲で拭ううちに、擦れて目が痛くなったが、そんなものは気にならなかった。

悲しかった。悔しかった。寂しかった。空しかった。腹が立った。だが、やはり悲しいという気持ちが一番大きいような気がする。はやく大人になりたいと願ったこともあったが、今は新たな名乗りも髪を伸ばすこともまったく嬉しくない。

お前だけ、と言ったのに。何度もそう言っただけで、口を吸って、体を重ねてきたのに。全てが嘘のように思えて、政景は廊下の隅に座り込み、膝を抱えて涙を流した。

だが、何故泣いているのか、何故こんな気持ちになるのか、その理由は分からなかった。気づきたくなかった。

## 開く花（四）

金阿弥に茂右衛門と名乗るように言い、山方久定の娘を許嫁にするように命じてからも、義宣の態度は変わらなかった。変わったのは、金阿弥という名が茂右衛門になったことと、それに伴い同朋から祐筆に出世したこと、寢所に呼ばれなくなったことだけだ。

それ以外のことで、義宣の茂右衛門に対する態度は変わっていない。今までと同じように、側において重用してくれているし、先輩である宣政や政光と同じように様々な仕事を任せてくれる。そのことが茂右衛門は嬉しかったが、同時に恨めしかった。

いくら義宣の側にいても、茂右衛門は以前の金阿弥ではない。義宣には金阿弥だけで、金阿弥には義宣だけだったあの頃とは違うのだ。茂右衛門は今でも自分には義宣だけだが、義宣には岩瀬御台という人間が現れてしまった。義宣は、茂右衛門だけの義宣ではなくなった。

義宣は、何度も金阿弥だけだと言った。俺にはお前だけだ、と何度も言ったではないか。だから、何も変わらない関係がずっと続いて、金阿弥は義宣のもので、義宣は金阿弥のもので、義宣には金阿弥がいなければ駄目なのだと、ずっと思っていた。

だが、違ったのだ。義宣は変わっていく。岩瀬御台を愛したから、という身勝手な理由で茂右衛門を突き放し、置き去りにして、変わっていく。茂右衛門は何も変わらないのに、義宣は変わってしまう。義宣は、茂右衛門に岩瀬御台のことは何も言わなかったが、岩瀬御台を愛したから茂右衛門が不要になったのだということくらい、言われずとも分かっている。

精一杯の虚勢を張って、義宣が岩瀬御台を愛したことは良いことだと自分に言い聞かせた。事実、良いことだと思ってもいるのだ。これで義宣には世継ぎが生まれるかもしれない。良いことだ。そして、これはごく当たり前のことだ。茂右衛門もいずれは山方久定の

娘と正式に夫婦となり、子をなし、義宣だけの金阿弥ではなくなる。久定の娘との結婚は父も喜んで承諾したため、茂右衛門と久定の娘は許嫁となった。

分かっている。いつまでも子どもじみたことを言つて、駄々をこねても仕方がない。だが、違う。そのような問題ではない。これは全く違う問題だ。子どもがいずれは大人になるだとか、いつかは終わりが来るのだとか、そのようなことではないのだ。

宣政、政光と茂右衛門を集め、今後の世の流れがどうなるのか議論をしている義宣を見る。義宣は、茂右衛門を突き放したことなど忘れたかのようにだった。まるで、金阿弥を可愛がっていたことまで忘れてしまったように見える。

「太閤殿下は、近頃お加減がすぐれぬらしい。寝たきりだという噂も耳にしている」

「しかし、醍醐で盛大な花見が行われた時は、まだお元気だったのでは？」

「ああ。俺も殿下のお姿を拝した。お元気そうに見えたのだが、あの花見以来床に臥すことが多いそうだ。治部殿は心配無用と言っているが、実際のところはどうかのさうな」

義宣と政光の会話も、茂右衛門の耳には半分ほどしか入っていなかった。秀吉の体調の話をしているということは、秀吉亡き後のことについて義宣は話したいのだろうか、とぼんやりと思った。

「このようなことを申し上げるのは、恐れ多いことはありませんが、仮に殿下がお隠れになったとしても、秀頼様がいらつしやる限り、安心なのではありませんか？」

「右近殿、何をのんきなことをおっしゃるのですか。秀頼様は幼いのです。幼君を奉じるふりをして、自らが権力を握ろうとする輩がおらぬとは限りますまい。古の献帝と董卓など良い例です」

「内膳の言つとおりだ。治部殿が秀頼様の董卓になることはありえないが、董卓や曹操の座を狙う人間は少なからずいるさうな。茂右衛門はどう思う？」

「あ、はい、そうですね」

政光の指摘に苦笑する宣政を見ていたのだが、義宣に声をかけられて茂右衛門は現実には引き戻された。今は、義宣との過去を回想し、感傷に浸る場ではない。何を考えていたのだろうか。そもそも、義宣と茂右衛門の間には何の契りもなかったというのに。たとえば茂右衛門が、自分の義宣への思いは誠なのだと、その証として腕に刀を突き刺したとしても、この結果が変わっていたとは思えない。

「私も内膳殿のおっしやるとおりだと思います」

「茂右衛門にまでそう言われると、私も立つ瀬がありません」

「まったくだ。右近があつた治部殿と同じ年とは思えん」

「治部様と比べられては、かないませぬ。殿、どうかご勘弁を」

宣政の一言に義宣は笑っていた。政光もかすかに笑みを浮かべている。茂右衛門も、思わず笑ってしまった。宣政は照れ臭そうに頭をかいている。茂右衛門より二十一歳も年上でありながらも、少し抜けているところのある宣政が茂右衛門は好きだった。義宣も政光も茂右衛門と同じだろう。政光の政の字は、宣政から取ってつけられたものだった。

「まあ、しかし、今日明日殿下がお隠れになるわけではなし。異変が起きれば、治部殿が知らせてくださるだろう。その際は、俺は治部殿に従うつもりでいる。治部殿には一方ならず世話になっているからな。一門衆や譜代の連中が、その時に何を言ってくるかは分からないが、俺の気持ちはこのようなものだ」

「私も殿のお考えに賛成です。治部様には、私もお世話になりました。頭の堅い連中には、殿や治部様のようなお考えは理解できぬかもしれません」

義宣と政光の言葉に、宣政と茂右衛門も頷いた。それを見ていた義宣は、何か思い出したのか、はっとして茂右衛門の方を向いた。

それに、茂右衛門は思わずびくりと肩を震わしてしまった。

「茂右衛門、半右衛門のことなのだが、あの喧嘩沙汰から三年が経ったことだし、俺が岩瀬を側室に迎えた祝いに、半右衛門を呼び戻

そうと思つて常陸の又七郎に書状を出してみた。又七郎からの返書が届いたのだが、半右衛門の奴、常陸ですでに妻を迎え、今では女と男一人ずつ子までいるのだそうだ。まったく、出奔、追放という扱いにしているというのに、何をしているのだから」

「しかし、半右衛門に嫡男が生まれたのはめでたいことでしょう」

「そうだな。俺は、半右衛門にも譜代の娘を娶らせたかったのだが、北家の家臣の娘を妻に迎えるとは。俺の譜代と浪人の融合策はこれで一つ失敗だ」

兄の結婚と嫡男の誕生は嬉しかったが、岩瀬御台を側室に迎えた祝い、という言葉が茂右衛門の胸に刺さった。義宣の心は、茂右衛門から遠く離れ、今はもう岩瀬御台のもとにあるのだと思い知らされた気がした。

「半右衛門は見つけ次第切腹、と一応約束しているのだから、妻子を連れての帰参は先送りにせねばなるまい。茂右衛門や梅津家の者には悪いが、半右衛門の帰参はもう数年待つてもらいたい」

「帰参が許されるだけでも、ありがたきことと存じます。半右衛門の命があるだけで、梅津の者どもは喜んでいるのですから」

「ならば良いのだが。ああ、それから、常陸の対馬から茂右衛門宛ての書状が届いている。後で目を通しておけ」

義宣から書状を渡され、茂右衛門は懐にしまいこんだ。その後は、秀吉亡き後の世の流れについての話は出ず、譜代と浪人出身の家臣の融合策や、常陸にいる兄の話などで盛り上がった。日が暮れ解散となり、茂右衛門は与えられた部屋に戻り久定からの書状を取り出した。

久定の書状の内容は、茂右衛門が祐筆に出世したと新たな名乗りをもらったことの祝いと、久定の娘との婚約が成立したことを喜ぶものだった。久定は義宣の傳役だったため、浪人出身の茂右衛門と娘の婚約も、義宣の命だと思えば承諾したのだろうが、内心は喜んでいるはずがない。茂右衛門は義宣に重用され、可愛がられてもいたが、譜代家臣たちがそれをよく思っていなかったことは知っ

ている。

久定の書状を読み終えると、もう一枚紙が入っていることに気づいた。開いてみると、かな文字で書かれた文だった。字のおぼつかなさから考えるに、久定の娘が書いたものだろう。十歳の少女が書いたものであるため、一部読みにくい箇所はあったが、文章の内容は少女らしい明るく初々しいものだった。

いきなり許嫁だと言われて困惑しているが、いずれ茂右衛門に会う時を楽しみにしている。茂右衛門のことをよく知らないので、できれば文を送ってほしい。その前に、まずは自分のことを知ってほしいと思ったので、父の書状と一緒に文を送ってもらった。

久定の娘からの文の内容は、大体そのようなものだった。ほかに、茂右衛門との婚約を告げられてから見た夢の内容が書かれていた。春はとうに終わったのだが、久定の娘が見た夢は春の晴れた景色だったそうだ。

文を読み終えると、最後に、はな、と名が書かれていた。久定の娘は、はなという名らしい。夢に見たという春の景色と、はなという名が重なって、茂右衛門の中で、はなは春の似合う少女のように思えた。

返書を出さなければなるまい、と思い茂右衛門はすぐに筆を執った。久定へ婚約の礼を述べる書状を書き、はなにもやさしいかな文字で文の返事を書いた。その文の最後に、はなの見た夢から連想した句を書いてみた。義宣は連歌が苦手なようで、滅多に連歌の興行はないが、茂右衛門は和歌や連歌が好きだった。

春にはるかさなる世々の久しさよ。

子ども相手に、わざわざ夢想の句まで書き添えて、何をしているのだろうとも思う。だが、これは義宣が茂右衛門に望んだことなのだ。茂右衛門を突き放し、自分は岩瀬御台を愛し、茂右衛門に妻を娶れと言った。茂右衛門の気持ちなど、まったく考えてくれなかった。

それが当然のことなのだと分かっている。はなへの文を書きな

がら、義宣への思いを心の底に封じ込めようとした。もともと茂右衛門は義宣の家臣だった。そのことが変わったわけではない。今も昔も、茂右衛門は義宣の家臣で、それ以外の何者でもなかったのだ。ただ、茂右衛門が少し思い違いをしていただけのこと。

義宣と茂右衛門は何も変わっていない。昔から、今でも主と家臣というだけだったのだ。

## 開く花（五）

近頃、琳の体調がすぐれなかった。吐き気を訴え、何も食べたくないと言う日も珍しくはなかった。琳が人質として佐竹家に送られる以前から、琳のそばにいた昌は琳のことが心配でならなかったが、この体調の変化は、懐妊の兆しとしか思えなかった。

琳に、医師に診てもらうようにすすめると、琳は最初嫌がっていたが、昌の説得によって医師の診察を受けた。結果は、昌が思っていたとおりだった。琳は妊娠していた。義宣の子どもだ。男だろうが女だろうが、義宣にとって初めての子ということになる。

「御台様、おめでとうございます。早速、お屋形様と大御台様にお知らせしなくては」

「お昌、ありがとう。でも、私怖くもあるの。お屋形様のお子を私が身ごもったなんて」

「何を仰せですか。このお子は、御台様のお子でもあるのですよ。」

昌は御台様のお子がお生まれになるのが楽しみ。孫ができるような気持ちです」

「まあ、お昌ったら。随分若いおばあさま」

昌は琳よりも一回り年上だが、さすがに琳の言うとおり、この年では若い祖母だろう。初めての妊娠に浮かない顔をしている琳を励まそうと言ったのだから、琳の顔に笑みが浮かんで昌は嬉しかった。琳が義宣の子を身ごもったことを怖がるのは、初めての妊娠ということもあるだろうが、この子が佐竹家当主にとって初めての子であることも原因だろう。先の御台には子ができなかった。琳は義宣の妻になって、今まで大御台に何度も子ができないのかと催促されてきたのだ。自分の子ができたことに対する喜びよりも、佐竹家の当主の子どもを身ごもったことへの重圧の方が、今の琳の心を占めているのだと思う。

それに、義宣は新たに迎えた側室と祝言を行っている。そのこと



も琳の心を痛めさせ、浮かない表情の原因になっっているに違いない。側室の姫は名門と言われた二階堂家の姫で、義宣の従妹でもある。それに比べて琳は、佐竹家に従う多賀谷家の姫で、もともとは人質として差し出されていたのだ。肩身が狭い思いをずっとしてきた。義宣は岩瀬の姫を側室に迎えてからも、琳のもとへ足を運んではいるが、回数は岩瀬の姫よりも少ないように思える。

「では、昌は大御台様をお呼びして参ります。その後で、お屋形様にもお知らせしましょう」

「お願いね」

昌が大御台の侍女の小大納言に琳の懐妊を伝えたと、小大納言は昌の言葉が信じられなかったようで、間違いないかと聞き返してきた。信じられないのも無理はないだろう。先の御台を迎えて以来、十年以上義宣には子ができたことがないのだから。小大納言から話を聞いた大御台は、小躍りでもしそうなほどに喜んでいて。昌が懐妊したわけでもないというのに、昌の手を取って、よくやってくれた、と言った。そして、急いで琳の部屋へと向かった。その後ろを昌は小大納言とともに従った。

「御台、おめでとう。よくやってくれた。三年前に蘆名の盛重には嫡男が生まれたが、義宣にはまだだろうかと首を長くして待っていたのだよ」

「大御台様、ありがとうございます」

「これでお家も安泰でございますね、大御台様」

「そのとおりだ、小大納言」

琳に子ができないかと催促していた時の態度が嘘のように、大御台も小大納言も相好を崩している。その喜びように、琳はますます戸惑っているようだった。

「この子が男でも女でも、私は嬉しい。名はなんとつけようか。男ならば徳寿丸で決まりだけれど、女ならばどのような名が良いだろうか？」

「大御台様、お気はやすぎでございます。第一、お子のお名

前を決められるのはお屋形様と御台様ですよ」

「ああ、すまないな、御台。小大納言の言うとおり。年寄りの戯言と思っておくれ。義宣の子が生まれるのが嬉しくて仕方がないのだ」

「いえ、大御台様にお喜びいただけて、私も嬉しいです」  
「本当に良かった。先の御台には子ができなかった。義宣が手をつけた女たちも、誰も身ごもることはなかった。義宣には種がないのかと思っていたが、それは違ったようだ。あの女たちが石女だったのだろう」

大御台は嬉しそうに笑みを浮かべながら話をしているが、琳は口で言うほど嬉しそうではなかった。大御台の言葉が琳の胸に刺さっているのだ。大御台は悪気があって言っているのではないだろうが、先の御台を石女と言うことはないだろう。琳も身ごもることがなければ、大御台にそう言われていたのだと告げているようなものだ。大御台は琳に対する配慮が足りない。何人もの女と関係を持ちながら、今まで一人も身ごもることがなかったのだから、義宣に何か問題があると考えの方が道理だ。

だが、琳は不義密通を働いてなどいないのだから、義宣の子ができた以上、今までの女に問題があると考えるのも仕方がないのかもしれない。義宣は大御台の息子だ。息子に問題があるとは思いたくないのだろう。

ひとしきり喜んだ後、大御台は琳に体調に気をつけるよう助言を与え、去って行った。大御台と小大納言が去るのを見送って、昌が部屋に戻ると琳は小さくため息をついていた。

「御台様、お加減がすぐれないのですか？」

「違うの、そういうわけではないけれど。私がお屋形様のお子を身ごもったということが、どういうことなのか。それを思うと、何だか苦しくなってきた。大御台様のお話を聞いて初めて気づいたのよ。お屋形様が、私が不義密通を働いたから身ごもったのだとお思いになっただろうでしょう」

「まさか。御台様が不義密通など。お屋形様がお思いになるはずあ

りません。もし、そのようなことを言い出す者がいたら、昌がこらしめてやります」

「うん、ありがとう、お昌。そうよね、お屋形様は、きつとお喜びになるわよね」

日が暮れた後、義宣に琳のもとへ足を運んでくれるよう話をしに行く、今夜は岩瀬の姫のもとへ行く予定がなかったのか、義宣はすぐに琳のもとへやって来た。

「琳、俺に話したいことがあるそうではないか。昌から聞いたぞ。何か、奥で不都合でもあったか？」

「い、いえ。そのようなことは、ありません」

「では、何だ？」

「は、はい。あの」

義宣は琳に対して、高圧的な態度で接しているわけではない。だが、人質時代に佐竹家の当主に逆らってはいけない、と思い続けたことが今でも琳の心を支配しているようで、琳は義宣の前に出るとおどおどしてしまうのだ。義宣も、そのあたりを理解して、もっと琳に対して優しく接してくれればいいのに、と昌は常に思っている。

「私、お屋形様の子を、身ごもりました」

絞り出すように琳が告げると、義宣は目をまるくしていた。義宣も琳の言葉が信じられなかったのだらう。

「琳、それは間違いないのか？」

「はい。お医師に診ていただきました。間違いないことです」

義宣の反応がない。琳は恐る恐る義宣を見上げた。昌も義宣の表情を見ている。義宣は、何とも言い難い表情をしていた。琳の懐妊が信じられない、というような、懐妊を喜ぶような、驚きと喜びが入り混じったような表情だった。だが、琳の不義密通を疑っているようには見えなかった。

「琳」

「はい」

「何と言えいいのか。俺にとつても初めてのことだ。体をいえよ」

「あ、はい」

「めでたい。すぐに国許にも知らせよう。明日は祝いの宴でも開こうか」

「お屋形様、御台様はお体に気をつけなければなりません。宴の席は、少々」

「そうか、そうだな。体をいと言ったのは俺だというのに。すまん。それにしても、俺の子か。言われても信じられないな」

小さく笑みを浮かべ、義宣は琳の腹に手を当てた。その様子に、ようやく安心したのか琳も笑顔を見せた。琳の笑顔を見て、昌も安心した。どうやら、義宣は琳との間に子ができたことを、喜んでいるようだ。ただ、長年子ができなかったため、義宣も戸惑っているのだろう。もしかしたら、義宣は大御台とは違い、自分に種がないと思っていたのかもしれない。

「私も、信じられません。私の中に新たな命が宿っているなど」

「まったく。腹が大きくなってくれば、実感もわくのだろうか。」

そういえば、多賀谷の義父上は弟の彦太郎を養嗣子に迎えたいと以前から父に打診していたな。俺の子ができた祝いに、弟を多賀谷家の養子に出してもいいかもしれない」

「まあ、まことですか」

多賀谷家は琳の兄の三経が家督を継ぐはずだったが、重経は何を考えているのだろうか。佐竹家から養嗣子を迎えるということは、三経は廃嫡になるのだろうか。琳は父である重経の希望がかなえられることに喜んでいて、兄のことまで気が回っていないようだ。それも仕方がない。琳は人質に出される前から重経を恐れていた。

夜更けまで琳を起こしては、腹の子にさわるかもしれない、と義宣は弟の彦太郎の多賀谷家入りについて少し話をする、琳の部屋を出て行った。昌は義宣を見送るために、義宣に従っていたが、琳の部屋からだいぶ離れると、義宣は立ち止まって振り返った。

「昌、琳の懷妊は母上には知らせたのか？」

「はい。大御台様、小大納言殿にはすでにお知らせいたしました」

「そうか。岩瀬は知っているのだろうか？」

「いいえ。わたくしはお知らせしておりません。大御台様が岩瀬のかみ様にお知らせなさったかもしれないませんが」

「母上が伯母上に、か。分かった。昌、岩瀬には琳の懷妊をまだ知らせずとも良い。しばらくは、内密にしておけ」

義宣の言葉に、昌は衝撃を受けた。琳の懷妊を知った時の義宣の何とも言い難い表情は、岩瀬の姫へ何と説明するか思案している顔だったのだろうか。内密にしておくことは、どういうことなのだろうか。岩瀬の姫に知られては、何か問題があるのだろうか。

「はい、仰せのままに、お屋形様」

義宣に真意を問い詰めたかったが、琳の侍女という立場の昌には、そのようなことは許されない。この場合は、義宣の命に領いて琳のもとへ戻った。だが、義宣への不信感昌の心に深く刻み込まれた。もともと昌は、琳に優しい態度で接することのない義宣のことが、琳の夫とは言え好きではなかったのだ。

部屋に戻ると、琳は大御台にも義宣にも懷妊を喜ばれたことで、ようやく少し安心したように見えた。その琳に、義宣が岩瀬の姫には懷妊を内密にするようにと言われたことなど、言えるはずがなかった。

## 開く花（六）

岩瀬の姫には琳の懷妊を知らせぬよう、義宣に言われてから、昌は義宣の行動に注意するようになった。義宣が何を考えて、昌にこのことを命じたのか分からない。分からないからこそ、昌は不安だった。

義宣は、琳の懷妊を確かに喜んでいた。だが、岩瀬の姫のもとへ通うこともやめなかった。岩瀬の姫の部屋から出てくる義宣を、昌は何度も見ている。岩瀬の姫の部屋から出てくる義宣の表情は、琳には見せないものだった。その時の義宣の雰囲気から、まだ義宣は岩瀬の姫に琳の懷妊を告げていないように思えた。

義宣が岩瀬の姫を寵愛していることは、誰の目にも明らかだった。側室に過ぎない姫のために、形だけの祝言を挙げ、三日にあげず通っている。いまだ子ができぬことがおかしいと思えるほどだ。

そもそも、義宣は琳が妻になる前、先の御台が存命中の間も側室を置いたことはなかったはずだ。女中に手をつけていたという話は聞いたことがあるが、どの女も正式な側室にはならなかった。家臣たちに側室を迎えることをすすめられたため、岩瀬の姫を側室にしたのかもしれないが、わざわざ祝言まで挙げているのだ。岩瀬の姫は義宣にとって特別なのだろう。側室にすぎないはずなのに、岩瀬の姫は岩瀬御台などと呼ばれている。

そこまで義宣に寵愛されている岩瀬の姫に、琳の懷妊を内密にするということとは、義宣に何か考えがあるとしたか思えなかった。昌の考えすぎなのかもしれないが、義宣は琳の子を岩瀬の姫の子ということにするつもりなのかもしれない。女中の誰かが産んだ子ということにして、岩瀬の姫の子にしてしまうかもしれない。そして、それを機に琳を側室に格下げし、岩瀬の姫を正室にしようとしたとしても、あり得ない話ではないように思える。

義宣は、あくまでも正室は琳であり、岩瀬の姫の存在は琳の立場

を脅かすものではないと言っているが、どこまで本気で言っているのか分かったものではない。昌は、琳には内密で岩瀬の姫のもとへ行くことにした。義宣には口止めされているが、岩瀬の姫に琳の懐妊を告げるつもりだ。義宣が何か行動に移す前に、岩瀬の姫にも琳が義宣の子を身ごもったのだと知らせておけば、琳の立場を守ることに繋がるだろう。考えすぎだとは思うのだが、昌は黙っていた。なかった。

昌が岩瀬の姫のもとを訪れると、姫は快く昌を招き入れた。姫の部屋には、姫の侍女と養母である二階堂後室もいた。琳の懐妊を告げるには、ちょうどいい。

「わたくし、御台様にお仕えする昌というものです。本日は、突然の訪問にも関わらず、お招き入れくださりありがとうございます」

「いいえ。お昌殿には、一度お会いしていますね。御台さまは、お元気ですか？」

「ええ、それはもう」

岩瀬の姫の言うとおり、昌は一度姫に会ったことがある。姫が側室に迎えられた時、琳のもとへ挨拶に来たのだ。その時以来、久しぶりに見た岩瀬の姫の顔を見たが、岩瀬の姫は特別美しいというわけではなかった。何が義宣を惹きつけるのか、昌には分からない。身びいきだが、琳の方が顔立ちが可愛らしいと思う。

「ところで、本日はどのような用向きでいらっしゃったのでしょうか？」

そばで控えていた岩瀬の姫の侍女が口を開いた。侍女は、昌の突然の訪問を不審に思っているようだった。

「特別、用事があるというわけではないのですよ。ただ、岩瀬の姫様をご存知ないことを、わたくしは知っているようですので、お教えするべきかと思ひまして」

「わたしの知らないこと？何でしょうか？」

「まあ、岩瀬の姫様は本当にご存知ないのですか？」

「お昌殿、姫様に対して、少々無礼なのではありませんか？」

「鏡田、わたしは気にしていないわ」

昌の言葉に、鏡田と呼ばれた姫の侍女はかすかに怒りを見せたが、姫はそれを制した。昌の態度よりも、昌が知っていて自分が知らないということの方が気になっているようだ。姫は昌の礼を欠いた物言いにも気を悪くすることはなかったし、昌に笑みを向けている。だが、その円満そうな人柄が、昌はかえって気に障った。

「無礼なのはどちらでしょうか、鏡田殿」

「どうということですか？」

「岩瀬の姫様は、お屋形様の側室というお立場にも関わらず、家中において岩瀬御台様などと呼ばれていらつしやいます。これは、御台様に対して、無礼甚だしいではありませんか」

「お昌殿、何をおっしゃるかと思えば」

「姫様がお屋形様の従妹でいらつしやるからでしょうか？それとも、蘆名家の姫であり、二階堂家の姫でもいらつしやるから？そんな姫様は、側室であつても御台様と呼ばれて構わないということでしょうか？」

岩瀬の姫に対して文句を言いに来たわけではなかったのだが、昌はこのことを以前から思っていたのだ。一度言葉にしてしまうと、止まらなかった。鏡田は昌の言葉に怒りをあらわにしているが、岩瀬の姫も二階堂後室も黙って昌を見つめていた。

「御台様は、幼い頃からずっと佐竹のお家の人質でした。先の御台様が亡くなられたあと、まだ十を過ぎたばかりの幼い姫様が、お屋形様の御台様になりました。御台様のご実家は、結城家に従いつつも佐竹家に従っておりまして。お父上が背信なされば、妻といえども御台様はきつと斬られましょう。先の御台様はご病死ということになっていますが、実は自害なさったとか、お屋形様が死に追いつたのだとか、そんな噂も御台様はご存知です」

昌が岩瀬の姫に向かって、琳がいかに佐竹家で心を痛めて暮らしてきたのか説いていると、廊下から足音が聞こえてきた。その足音は、岩瀬の姫の部屋に近づいてきている。急いでいるようだった。



「岩瀬殿、こちらに私の侍女が参つたと伺いました。お部屋に入つてもよろしいですか？」

「御台様。鏡田、御台様をお通しして」

足音の主は琳だった。琳にはここへ来ることを告げなかったが、誰かが昌の姿を見て、今までの話も聞いていたのだろう。琳は青ざめた顔で、昌の袖を引き、帰ろうと目で訴えたが、昌はまだ肝心なことを言っていないのだ。琳とともに戻るわけにはいかなかった。「御台様はお屋形様には一切逆らわず、従順でおとなしい妻でいらつしゃいました。それなのに、なぜ貴方様の方がお屋形様には可愛がられるのか」

「お昌、岩瀬殿に何を言っているの。お屋形様がどう思われるか」

「貴方様はお屋形様に可愛がられている。しかし、お屋形様のお子を身ごもられたのは、御台様でございます。貴方様ではありません」

「お昌、もうやめましょう」

琳は昌の袖を握り締め、これ以上岩瀬の姫に対して無礼なことは言わないでほしいと訴えている。義宣が可愛がつている岩瀬の姫に無礼を働いて、義宣の機嫌を損ねることを恐れているのだろう。岩瀬の姫は何も言わなかった。昌の無礼に怒っているようには見えなかった。ただ、呆然としている。

「え？」

一瞬の沈黙の後、岩瀬の姫は小さく呟いた。驚きのあまり表情が固まっている。それは、二階堂後室も鏡田も同じだった。この三人は、義宣から何も告げられていなかったのだから、当然の反応だろう。だが、驚いているのは琳も同じだった。琳は、義宣が琳の懷妊を岩瀬の姫には内密にしようとしていたことを知らなかったのだ。

「あなた、お屋形様から何も聞いていないのですか？」

岩瀬の姫の沈黙は、何よりも雄弁な沈黙だった。琳は黙り込む岩瀬の姫を見て、悲しそうな顔をしたが、同時にわずかばかりの喜色も浮かんでいた。

「お昌殿とおっしゃいましたか。貴方が何のためにここへ来たのか、

よく分かりました。御台様、娘の分も、私からお祝い申し上げます。後日、娘とともにお祝いのご挨拶に伺わせてくださいませ。お昌殿が教えてくださなければ、とんだ無礼を働くところでした」

「ありがとうございます、岩瀬のかみ様。こちらこそ、昌の無礼の数々、お許しただけでしたら幸いです」

「後室御前、よろしいのですか？」

「鏡田、落ち着きなさい。よろしいですね、お祥？」

「え、ええ。御台様、おめでとうございます。お昌殿、教えてくださいさつてありがとうございます」

岩瀬の姫は何とかそれだけ言い、頭を下げた。それに琳も目礼を返し、琳と昌は岩瀬の姫のもとを去った。

「お昌、今日のことを、私はお屋形様に言わない。きつと、あの方と言わないと思う。あの方は、そういう方だと思うの」

「昌もそう思います。御台様、差し出た真似をして、申し訳ありませんでした」

「うん。こんなことは、もう二度としないで。けれど、お昌が私のことを思って行動したのだということは、分かっているから」

「申し訳ありません」

「お昌」

「はい」

「私、あの方に、御台様と呼んでほしくなかった。側室なのに、御台様と呼ばれる人に、御台様と呼ばれたところで、私は自分がみじめに思えたわ」

琳の涙が、ぽつりとこぼれ落ちた。静かに涙を流す琳の肩をそつと抱いた。琳の肩は細く頼りない。まだ十六歳の少女だというのに、この身には佐竹家のお世継ぎを宿しているのだ。義宣にとって初めての子は、琳の子どもだ。岩瀬の姫の子ではない。

琳の涙を見て、昌は岩瀬の姫を寵愛し、琳を不安にさせる義宣を恨めしく思った。同時に、琳を脅かすすべてから、琳を守るのだと改めて決意した。

## 開く花（七）

琳の懷妊を知ってから、義宣は常陸に追放していた憲忠を呼び戻すことにした。譜代家臣たちは、憲忠の帰参にあからさまに嫌な顔をしていたが、琳の懷妊による恩赦だと告げると、世継ぎの存在にすっかり舞い上がってしまい、憲忠のことなどどうでもよくなったようだった。伏見の佐竹屋敷に帰参した憲忠を見て、茂右衛門は喜んでいて。茂右衛門は、ここ最近気落ちしているようだったので、心配していたのだ。

「帰参のお許し、かたじけなく存じます。殿のため、ご恩に報いるため、それがし身を粉にして働きます」

「呼び戻すのが遅くなってしまう、悪かった。だが、追放したはずのお前が、常陸で妻を迎え、子をなしているのが悪い」

「は、はあ。その、何と申し上げればいいか」

義宣が意地悪く言う、憲忠は申し訳なさそうに俯いてしまった。政光と宣政は苦笑していたが、茂右衛門は兄のその様子が恥ずかしかったのか、そっぽを向いていた。

「まあ、いい。子の誕生はめでたいことだ。俺にも、ようやく子ができた。そういえば、内膳も妾が身ごもったと言っていたな？」

「はい」

「互いに、男が生まれるといいのだが。いや、女であってもいいんだ。半右衛門、常陸の父の様子はどうか？」

「北城様は、それはもうお喜びで、それがしに上洛したら燈明寺に寄進するように命じられました。北城様は、燈明寺に随分と熱しに帰依なさっているのですな。此度のご懷妊も、そのご利益とお思いなのでしょうか？」

「燈明寺か。俺も話には聞いている。父は数年前から、上洛のたびに足を運んでおられるらしい。噂では、俺と同じくらいの年の女と会っていて、それは父の女なのとか、隠し子なのとか言われて

いるな。くだらん噂にすぎないが」

憲忠の話によれば、父は京の燈明寺への寄進だけではなく、領内の神社や寺も再建を行っているらしい。孫ができ、何か思うところでもあったのだろう。無事の誕生を願ったことなのかもしれない。義宣も子が無事に生まれることを願っている。もちろん、琳の体のことも心配だ。

琳の懐妊によって、義宣は琳の父である多賀谷重経が以前から望んでいた、弟の彦太郎の多賀谷家入りを決めた。今回、憲忠が持参した父からの書状によると、父も異存はないらしい。三成に伺いを立てたところ、そちらも異存はないと許しが出た。まだ彦太郎は正式に多賀谷家の養嗣子になったわけではないが、琳の妹との婚儀を進めているところだ。

重経は居城である下妻城周辺を自領とし、鬼怒川以西の地を長男の三経に与えるつもりのようなのだ。三経は佐竹家を頼りにする重経とは違い、結城氏への臣属を望んでいるらしく、彦太郎が養子に入ること、多賀谷家は二つに分かれることになる。多賀谷家の嫡流は、あくまでも三経なのだそうだ。

彦太郎と琳の妹との婚儀の話をする、琳は父の希望が叶ったことを喜んでいて。少しでも心が軽くなったのなら、体にもいいだろう。琳の腹は、よく見ると膨らんでいるような気がする。

だが、初めての子に喜んでばかりもいらなかった。醍醐の花見以来、床に就くことの多くなった秀吉だが、近頃では起き上がることも難しくなっているのだそう。体のあちこちの痛みを訴え、涙を流していると聞いている。誰も口には出さないが、秀吉に死が間近に迫っていることは明らかだった。

自分の死後のために、秀吉は五人の大老と五人の奉行を新たに置いている。五大老の一人だった小早川隆景亡き後は、上杉景勝が大老となった。上杉家と佐竹家は、先代の謙信のころから誼を通じている。義重は謙信から刀を贈られており、その刀を大層大事にしていた。義宣に家督を譲る時に刀もともに譲られた。その刀は長いば

かりで、使い勝手が悪かったため、義宣は刀を短く加工して脇差しにしていた。その方が使いやすかったのだ。そのことを知った時の父の落胆ぶりはすさまじいものだった。武士の魂に何をするのだ、と怒鳴られたものだ。

そのような縁があつて、代替わりをした現在も、義宣と景勝は良好な関係を築いていた。景勝が大老になった時は、祝いの言葉を述べに上杉屋敷まで出向いている。その時の景勝の話では、秀吉はもう一月もつかどうか、というほど病状が進んでいるようだった。

その後、上洛している大名たちは伏見城に集められ、秀頼への忠誠を示すために血判誓紙を作成させられた。同時に、大名同士の私婚禁止、同盟禁止などの新たな政令も定められた。このような誓紙を何枚作つたところで、どれほどの効果があるものか、とは思うが、義宣も親指を切り血判を押した。秀頼へ変わらぬ忠義を誓うこと自体には、異存はない。諸将が血判を押していくところを、三成が監視していたのだが、三成は以前見た時よりもやつれていた。それに反するように、五大老の中の最有力者である徳川家康は、福々しさを増しているようだった。

誓紙を提出し、屋敷へ戻ろうとすると、三成に呼び止められた。

「佐竹侍従殿、此度は奥方のご懐妊、おめでとうございます」

「ありがとうございます。こちらこそ、弟の多賀谷家への養嗣子の話、ご承諾かたじけない」

「いえ。この話をした時、ちょうど殿下はご加減がよろしかったのですよ。佐竹侍従の好きなように、との仰せでした」

「殿下のご加減は、それほどまでによろしいのですか？」

この聞き方は、秀吉に対して無礼にあたるかもしれないが、話に聞いているよりも秀吉の具合がよさそうなので、義宣は驚いたのだ。「稀には。しかし、ほとんどの場合は佐竹殿もお聞き及びのとおりにございます」

三成はこめかみを押さえてため息をついた。ほとんど寝ていないのだらう。目の下には隈がくつきりと浮かんでいる。

「殿下は、しきりに内府に秀頼様のことをお頼みしておられるが、内府がどう思っていることや。涙を浮かべて、殿下のお言葉に頷いてはいるのですが。佐竹殿は、内府と隣国でしたな。内府には、くれぐれもご用心なさいませ。あの狸、何をしでかすか先が読めぬ」  
「ご忠告、痛み入ります」

家康を警戒するようにと告げると、三成は忙しそうにその場を去って行った。おそらく、昵懇にしている大名たちに家康を警戒するように告げて回るつもりなのだろう。秀吉の死期が迫り、三成は秀吉に次ぐ実力者を警戒している。義宣は、家康のことはあまり好きではないが、三成のような警戒心を持つてはいなかった。義宣が家康を好いていないのは、ただ単に源氏を称して大きな顔をしているから、という個人的な感情によるものだった。だが、隣国が家康の治める大国であるということに関しては、義宣も警戒心を抱いている。家康が何か考え起こし、攻め入られたら到底太刀打ちできない三成に言われた通り、義宣ももう少し家康を警戒した方がいいのだろう。

屋敷に戻ると、祥の侍女の鏡田から、祥が義宣の渡りを待っている、と告げられた。ここ数日、祥は義宣の渡りを自ら願っている。琳の懐妊が分かってからも、以前と変わらず足を運び、以前と同じ態度で接しているのだが、どうしたのだろうか。祥にも、特に変わった様子は見られなかった。いつも通り、義宣を笑顔で迎えていたはずだ。

母と小大納言には、祥たちにはまだ琳の懐妊を告げぬようにと口止めしてあるし、琳や昌が祥にわざわざ告げに行くはずがない。こちらでも口止めをしてあるのだ。

秀吉の死が迫り、心に余裕をなくしつつある状況で、祥に琳の懐妊を知られたくなかった。

今まで、鏡田に祥の願いを告げられても、多忙を理由に断っていたが、そろそろ祥のもとへ行った方がいいかもしれない。今日は登城して身も心も疲れているが、祥の顔を見れば疲れも癒えるだろう。

琳の懷妊は嬉しいが、それと祥を可愛いと思うことは別だ。

今夜は祥のもとへ行くと告げると、鏡田は頷いて、急いで奥へと戻って行った。

## 開く花（八）

昌が御台の懷妊を祥に告げに来てから数日後、祥は養母とともに御台に祝辞を述べに行った。御台は、昌の行動を詫び、昌も謝罪の言葉を口にしていたが、昌の表情にはどこか勝ち誇ったような印象を受けた。

その後、大御台のもとへも祝辞を述べに行くと、大御台は祥たちが知るよりも以前から、御台の懷妊を知っていたらしく、早く孫の顔が見たいものだ、喜んでいた。どうやら、奥の女たちの中で、御台の懷妊を知らなかったのは、祥と養母と鏡田だけだったらしい。義宣が口止めしていたのだろうか。

「まったく、あのお昌という女は、姫様に対して無礼でしたこと。」

御台様は、ご自分の侍女の監督もできぬのでしょうか」

「鏡田、もうお昌殿のことを言うのはおやめなさい。きっと、鏡田もわたしが同じ立場に立たされたら、お昌殿のことを言えぬようなことをしたと思うわ」

「それは、そうかもしれないが。それにしても、お屋形様もお屋形様です。何故、姫様に御台様のご懷妊を内密になさろうとしたのか」

先日の騒動以来、鏡田は昌と義宣に対して腹を立てていた。祥も、昌の言動を良いものだとは思えなかったが、それよりも義宣が祥に御台の懷妊を内密にしていたことが心に引つかかっている。

「お養母さま、お屋形様はなぜわたしに内密になさろうとしたのでしょうか？ 殿方とは、そのようなものなのでしょうか？」

「さて、それは私にも分かりかねます。亡き夫には側室がいまませんでしたし、何より私は女の身ですからね」

養母に助けを求めたかったのだが、はぐらかされてしまった。これは、自分で考える、ということだ。確かに、義宣と祥の問題で養母に助けを求めたとしても、養母は義宣ではないのだから、どうす



ることもできない。

「お祥は、義宣殿に御台様のご懐妊を内密にされて、どう思ったのですか？」

「わたしですか？最初は、なぜだろう、とひたすらに思っていました。本当に、なぜなのか分からないのです。今は、疑問に思うだけではなく、悲しいと思っています」

「それは、何故ですか？」

「わたしはお屋形様を愛しいと思っていて、きっとお屋形様も同じ気持ちでいらっしゃるのだろうと、思っているからなのだと思います」

「そうですね。事実、お屋形様のご寵愛が深いのは、御台様よりも姫様です。誰が見ても分かることではありませんか」

「鏡田、そのような言い方は、よろしくありませんね」

「申し訳ありません、後室御前」

鏡田の言うように、義宣にそこまで深く寵愛されているのかは分からないが、少なくとも義宣と祥は、互いのことを他人とは違った存在だと思っているはずだ。少なくとも、祥は義宣を特別な存在だと思っている。腹を立てたこともあったが、母の愛を求めて泣いた義宣を、愛しいと心から思っているのだ。義宣も、祥のことを憎からず思っているということとは伝わってくる。だからこそ、義宣の考えが理解できなかった。

義宣が何を考えているのか知るために、義宣と話がしたかったのだが、義宣は多忙を理由に祥と会おうとはしなかった。鏡田に何度も義宣への取り次ぎを頼んでいるが、義宣の渡りは実現していない。確かに忙しいのだろう。奥にも秀吉の病状が悪いという話は聞こえて来ている。だが、多忙だけが理由なのだろうか。大御台の話と御台の態度から判断するに、義宣は御台の懐妊を知ってから、祥のもとへ普段と変わらぬ様子で足を運んでいた。義宣の渡りがなくなつたのは、昌が祥のもとへ来てからだ。

偶然なのかもしれないが、御台のことがあり、祥に顔を合わせたく

なくなつて、義宣が祥の希望に応えてくれないのかもしれない、とも思えた。

だが、祥は義宣と話がしたい。一時でいいから時間を作ってくれないか、と何日も前から頼んでいる。それでも義宣は、なかなか会いに来てくれなかった。何度も義宣へ話を通しに行く鏡田は、日を重ねるごとに不機嫌になつていった。

そのような日を何度か重ねるうちに、毎日不機嫌顔で奥に戻つて来る鏡田が、満足げな表情で戻つて来た。今夜、義宣の渡りがある。突然のことで驚いたが、祥は自室で義宣を待った。義宣に尋ねたいこと、言いたいことを胸の内で整理しているうちに、足音が近づき、部屋の前でぴたりと止まった。

「祥、久しぶりだな」

襖が開けられ、義宣の声がした。義宣の不機嫌は悪くなさそうだったが、どこか疲れているような気がする。

「義宣さま、お話ししたいことがあります」

「突然だな。それは、今夜話さなければならぬのか？」

祥が真剣に話があると言っているのに、義宣は面倒そうに苦笑した。疲れているから、祥の話を聞くのは面倒だと思つてゐるのだから。祥は、大事な話があるから何日も義宣に来てほしいと頼んでいたのだ。今夜話さずに、いつ話すというのだ。義宣の不機嫌が悪くなるかもしれないが、祥は構わず話を続けた。

「御台さまのことについて、お話ししたいのです」

「御台？」

何事もないようにふるまつてゐるが、一瞬義宣の眉がぴくりと動いた。祥はそれを見逃さなかった。

「御台さまのご懐妊、おめでとうございます」

そう言つて頭を下げたため、祥には義宣の顔は見えなかったが、室内の空気が一瞬にして変わったのは分かった。義宣に肩を掴まれ、顔を上げられた。義宣の顔には、焦りと苛立ちが見えた。

「誰から聞いた」

「自然と耳に入りました」

「自然と？」

眉間に深い皺を刻み、不機嫌そうに義宣はため息をついた。もしかしたら、祥の言葉を嫌味だと思ったのかもしれない。そう受け取られても仕方がないかもしれないが、祥は義宣に子ができたことは本当にめでたいことだと思っているのだ。義宣にとっては初めての子で、佐竹家にとっては大事なお世継ぎになるかもしれないのだから、めでたいと思わないはずがない。

ただ、義宣が御台の懐妊を知りながら、それを祥に隠そうとしていたことが問題なのだ。

「義宣さま」

「何だ」

「どうして、わたしに教えてくださらなかったのですか？」

「何を」

「御台さまが、ご懐妊されたことです」

祥が何を言いたいのかわかっているくせに、逃げるように、何を、と義宣は言う。なぜ、そこまでして祥に御台の懐妊を隠しておきたかったのか、理解できない。

「ここ最近忙しかったから、すっかり忘れていたんだ」

「嘘」

「嘘じゃない」

「義宣さまは、御台様のご懐妊を知ってから、わたしのもとへいらっやっていたはずです。その時に、お話くださればよかったのに」

凶星をさされたせいなのか、義宣は祥の言葉を聞いて黙り込んだ。あからさまに不機嫌になった義宣の態度と、この期に及んでも祥に嘘をつこうとすることに、だんだんと腹が立ってきた。

「どうして教えてくださらなかったのですか？わたしが」

「嫌だったからだ」

「え？」

黙り込んでいた義宣が、祥の言葉を遮って口を開いた。何が嫌だったのだろうか。

「お前が、こうして嫉妬をして俺を問い詰めるだろうと思ったから、教えるのが嫌だったんだ。御台が身ごもったのは、祥を側室に迎えた後だ。祥を側室にしてからも、俺は御台のところへ足を運んでいた。そのことについてお前は怒って、俺を責めているんだろう？」

ため息を深々とつきながら、眉間を抑える義宣に、啞然として祥は言葉も出なかった。義宣は何を言っているのだ。祥がいつ、義宣が御台のもとへ足を運んでいたことに対して嫉妬し、義宣を攻めたというのだ。

「祥が怒るくらいなのだから、御台は泣いているかもしれないな。あいつに泣かれるのは困る」

口には出さなかったが、義宣の言葉や態度からは、祥のことも御台のことも面倒だと思っっているということが伝わってきた。御台と義宣がどのような関係を築いているのか祥は分からないが、義宣の態度が腹立たしかったし、自分よりも年下の少女のことが気の毒に思えた。

「まさか、義宣さまにそんなことを言われるとは思いませんでした」「祥？」

「わたしは、嫉妬してこんなことを言っているではありません。あなたがわたしに何も言うてくださらなかったことが悲しくて言っているの。わたしと義宣さまは、まだ出会って幾月しか経っていませんけど、時など関係なく、わたしはあなたが愛しいと思っていますし、あなたもわたしのことをそう思ったださっていると思っています。わたしたちの間には、確かに信頼と呼んでもいいものが生まれたと思っていました。それなのに、御台さまがご懐妊しているとわたしが知ったら嫉妬をするだろうから、それが面倒だと思われるていたなんて、悔しくて、悲しい」

話している間にだんだんと声が大きくなり、最後は叫ぶような声になってしまった。それに、話しているうちに感情が昂ってきて、

涙も滲んだ。義宣は冷めた目で祥を見つめていた。

「だから、これが嫉妬しているということなんだろう?」

「違うわ」

何も分かっていない義宣の言葉に対して否定の言葉を叫ぶと、浮かんでいた涙が零れ落ちた。一度零れてしまうと、涙はもう止まらなかった。祥の頬を伝い、握り締めた手の甲に落ちる。

「嫉妬ではありません。確かに、義宣さまのお子を身ごもられた御台さまが、羨ましいという気持ちがないとは言いません。御台様にできて、なぜわたしにはできないのだろう、とも思います。けれど、違うの。わたしが言っているのは、あなたがわたしに隠しごとをなさったこと。しかも、知ったらわたしが嫉妬するだろう、などという理由で。それが、悔しくて悲しいのだとわたしは言っているのです」

涙ながらに訴える祥に、義宣はため息をついた。今日だけで、いったい何度義宣はため息をついただろう。祥に一瞥を投げ、義宣は立ち上がった。

「義宣さま」

まだ話は終わっていない。引き留めようとして義宣を呼んだのだが、義宣は振り向くことはなく、ただ襖の前で一度立ち止まった。

「これだから、女は面倒なんだ」

小さく呟かれた言葉には、お前だけは違うと思っていたのに、という響きも含められているような気がした。その言葉は、祥にとって衝撃だった。義宣にとって、祥は一体何だったのだ。

「どうして」

振り向こうとしない義宣の背中に、どうして、と言葉を投げかける。それでも義宣は振り向かなかった。

「どうして、あなたは互いに理解しようと、歩み寄ろうとなさらないの。どうして、すぐにご自分の殻に閉じこもろうとなさるの」

祥は、義宣の性格には多少の難があると思いながらも、それも義宣という人間の一部なのだと思います、義宣を愛しいと思っていた。義

宣も、祥にどのような面があっても、それも含めて祥を憎からず思ってくれているのだと思っていた。そうでなければ、自分の頬を叩いた女を、側室にするだろうか。だが、義宣は自分に都合が悪くなると逃げようとする。なぜ、話し合おうとしないのだ。歩み寄ろうとしないのだ。自分の思い通りにいかなければ、もうどうでもよくなってしまうのか。話をする価値すらないと義宣は思っているのか。

悔しい。悲しい。所詮、祥など義宣にとってその程度の存在なのだと思い知らされたようで、悔しくて悲しくてたまらなかった。

襖が開いて、閉じる音がした。急いで廊下に出てみたが、義宣はもう、いなかった。

## 開く花（九）

義宣と口論をしてから、義宣は一度も祥のもとを訪れようとしなかった。以前、祥が義宣の頬を叩いた時も、義宣は祥のもとへしばらく来なかった。あの時と同じだ。

義宣との口論のことを、祥は養母にも鏡田にも知られないようにしていたが、義宣の渡りがないことで、義宣との間に何かがあったことは知られてしまっているだろう。なるべく表情や態度に出さないようにはしているつもりだが、祥の様子もおそらくここ数日おかしいのだと思う。養母も鏡田も、いつも心配そうに祥を見ていた。

「姫様、先日のお屋形様のお渡り以来、お元気がないようですけど、何かあったのですか？わたくし、心配でなりませぬ」

「鏡田、ありがとう。心配をかけてごめんなさい。もしかしたら、わたしはお屋形さまに嫌われてしまったのかもしれないわ」

「お屋形様が姫様をお嫌いになる？そのようなこと、信じられません。そうですね、後室御前」

「ええ。私もお祥の話に驚きました。義宣殿はお前のために形だけとは言え、祝言まで挙げてくださった。その義宣殿が、どうしたとこののでしょうか？」

顔を見合わせて首を傾げる二人に、嫌われてしまったかもしれない、などと簡単に言うべきではなかったのだと思った。だが、誰かに行き場のない自分の気持ち聞いてほしいという思いもあったのだ。養母と鏡田ならば、祥の話を聞いてくれる。

「わたし、お屋形さまに御台さまのご懐妊を黙っていた理由をお尋ねしました。お屋形さまは、最初忘れていたのだとおっしゃいましたが、わたしが問い詰めたら本当のことをお話しくださった。お屋形さまは、わたしが御台さまのご懐妊を知って、嫉妬するのが嫌だったのだそうです。泣いてすがろうとしたわたしに、お屋形さまは、だから女は嫌なのだ、と」

思い出して言葉にするうちに、あの時の悲しさと悔しさが蘇ってきた。祥を見る義宣の目には、祥に対するあたたかい愛情のようなものは感じられなかった。面倒なことになった、と思っていることしか伝わってこなかった。

「何と酷いおっしゃりようでしょう。姫様は何も悪くないではありませんか。そもそも、御台様のご懐妊を内密にしようとなさったお屋形様が悪いのです。それなのに、これではまるで姫様が悪いように聞こえます」

「鏡田、ありがとう。けれど、わたしの話はわたしに都合のいいように話しているだけだと思うわ。きっと、お屋形さまのお話を聞いたら、また違うのだと思う」

「そうだとしても、お屋形様のお言葉はあまりにも酷い。姫様、お屋形様のような殿方は、おそらくずっとそのままでございますよ。真剣につきあつて、痛い目を見るのは女の方と決まっています。わたくしは、お屋形様にこれ以上深入りなさるのはどうかと思います」

鏡田が祥を心配してくれる気持ちはありがたいし、言いたいことは分かる。義宣のあの性格は、一朝一夕で改善されるものではないだろうし、これ以上深入りして傷つくのは祥だけなのかもしれない。だが、なぜ義宣は祥にあのようなことを言ったのか、何を考えていたのか、今は何を思っているのか、知りたいと思う。義宣が祥のことをどう思つて、あの行動と言葉に至ったのか、それを知らなければ、祥は納得できなかった。

「お祥は、どうしたいのですか？ 鏡田の言つとおり、義宣殿とは距離を置きたいと思いませんか？」

「いいえ」

「まあ、姫様」

「確かに、わたしはお屋形さまのお言葉に傷つきました。もうあの方のことなど知らない、と思わなかったと言えば嘘になります。しかし、わたしはまだ諦めたくないのです」

「諦めたくない、とは？」



「鏡田の言つとおり、これ以上お屋形さまに深入りすれば、わたしは傷つくのかもしれませんが。嫌な思いもするでしょう。しかし、わたしはまだ何も分らない。お屋形さまご自身のことも、わたしのことをどう思っているのかも。今ここで、わたしがお屋形さまのことを諦めてしまえば、お屋形さまは二度とわたしのもとへはいらっしゃらないと思います。それが、わたしは嫌なのです。自分でも、なぜなのか分かりませんが、わたしはまだ、お屋形さまが愛しい」

泣きたい訳ではなかったのだが、涙があふれてこぼれ落ちた。涙を拭おうとすると、祥の手が届くよりも先に、養母に涙を拭われていた。

「お祥、相手を愛しいと思う心は、理屈ではありません。自分でうにかできるものではないのです。お前が義宣殿を愛しいと思う気持ちが少しでもあるならば、諦めるのはお止しなさい。お前は、義宣殿を理解したいのでしょうか？ならば、辛くとも話し合わなければなりません。さあ、もう泣かないで。お前が泣くと、私も鏡田も悲しくなります」

「ありがとうございます、お養母さま」

義宣のことを諦めたくないという気持ちは真実だ。だが、実はもう義宣のことなど考えずに、このまま終わりにしてしまおうかという考えが、心の片隅にあったことも否定できない。養母の言葉で、祥の心は決まった。たとえどんなに傷ついても、納得できる答えを見出すまで、祥は義宣を諦めない。

理由など分らない。自分でも、やめておいた方がいいとも思う。だが、祥は義宣のことが、今でも確かに愛しいのだ。

祥に泣かれてから、義宣は琳のもとへ真相を確かめに行った。祥に琳の懐妊を知られたのは、昌が祥に教えたからだと思ったのだ。だから、琳も義宣が祥に内密にしようとしたことを知って、泣いて

いるのではないかと思った。

だが、琳も昌も特に変わった様子は見られなかった。義宣も、そんな二人に祥に教えたのかと聞くことはできなかった。琳は義宣を恐れているのだから、もし義宣が機嫌を悪くするようなことをしたのならば、必ず態度に現れるはずだ。その琳の様子がおかしくないということとは、この二人は何もしていないということなのだろう。

琳の腹は、前に見た時よりも膨らんでいた。腹の中の子は、確実に成長しているのだ。今の琳に負担になるようなことは言うべきではない。祥のことは、何も言わない方がいいはずだ。体を大事にするように告げると、琳はかすかに微笑んで頷いた。

祥の言ったとおり、おそらく自然と耳に入ったのだ。人の口に戸は立てられない。いくら義宣が口止めをしたところで、いずれ知られてしまっていたに違いない。それが、思わぬ形で、予想以上に早く知られてしまっただけのことだ。

だが、祥にはなるべく知られたくなかった。知ってしまったら、祥は琳のもとへ通っていた義宣に対して、怒るに決まっている。昔、手をつけた女たちはそうだった。側室にしてほしいとせがまれたり、ほかの女とも関係を持っていると知ると泣き喚いたりした。だから、女は面倒だと思っているのだ。祥も女である以上、ほかの女たちと同じなのだろうと思っていた。義宣の予想は外れなかった。祥は泣いていた。

祥は、八重とも琳とも違った、優しい女だった。そのことに、もしかしたら祥はほかの女とは違うのではないか、という期待があった。だが、結局は祥も女であることに変わりはなかったのだ。

落胆する気持ちが強いが、義宣は祥の言った、義宣を愛す、という言葉も忘れられなかった。確かに、その言葉通り祥は義宣を愛していたように思う。それが、義宣は心地よかったし、癒されていた。そのことを思い出すと、祥を泣かせてしまったことに対して、罪悪感を覚えもする。

謝った方がいいのだろうか。どうやら、義宣は祥を怒らせて、泣

かせてしまったらしい。謝って祥の気が済むのならば、謝ろうと思う。やはり、祥がいなければどこか寂しい。

あの夜以来、しばらく祥のもとへは足を運んでいないため、気まぐさはあったが、義宣は鏡田に祥のもとへ行くと伝えるように命じた。鏡田の態度は常と変わらなかったが、どこか義宣に対する冷たさを感じた。

## 開く花（十）

祥の部屋の前までやってきて、義宣はためらっていた。謝らなければならぬだろう、と思いつて来たのだが、何と言えいいのか分からない。思い返せば、他人に対して自分の非を認めて謝ったことなど、ほとんどないような気がする。そもそも、そこまで他人と深く関わりあつてこなかったのだ。このような時、どうすればいいのか分からない。

とりあえず、ここで突っ立っていても始まらないことは分かる。

襖に手をかけて開くと、祥の背中が見えた。

「祥」

声をかけても、祥は振り返らなかった。真っ直ぐに伸ばされた背中とはかすかすにも動かず、義宣の存在を無視しているようにも見えた。「祥、怒っているのか？」

怒っているから振り向かないのだろう。怒っているか、と聞いても祥は全く反応しなかった。これは、本気で怒らせてしまったようだ。以前、祥を怒らせて頬を叩かれたことがあるが、その時とは様子が違う。静かに深く怒りに燃えているように見える。

「先日は、すまなかつた」

祥には見えていないが、わずかに頭を下げると、祥の背中が動いて、義宣の方を向いた。真剣な目に真っ直ぐ見据えられる。自分が酷く悪いことをしたような気持ちになった。

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、ご自分がなぜ謝られているのか、理由を分かっているの？」

「お前を泣かせたからだ」

祥を泣かせたから、謝らなければならないと思った。だから謝っている。だが、その答えに祥は表情を曇らせた。謝れば祥の気が済

むだろうと思つたのだが、それだけでは許されないのだろうか。ほかに、祥は何を望むというのだ。義宣は祥に落胆したものの、自分の非を認めて謝罪しようとしているというのに。

「では、なぜわたしが泣いたか、その理由はお分かりですか？」

「それは、俺が、御台が身ごもったことを祥に教えなかったからだろう？」

「わたしが、御台さまのご懐妊を内密にされて、なぜ泣いたのか。その理由はお分かりですか？」

「同じことを聞いてどうする？俺が教えなかったから、泣いた。そうだろう？」

「そうですか」

そうですか、とはどういうことだ。確かに祥は、義宣が琳の懐妊を教えなかったことを怒って、泣いていたはずだ。違つと否定していたが、その怒りには琳に対する嫉妬もあるのだと義宣は思っている。違ふのだろうか。ますます表情を曇らせる祥に、義宣は眉間に皺を寄せた。自分は何か間違つたことをしているのだろうか。間違っているのだとしたら、何が間違っているのだ。

「今日は、もうお帰りください」

「何故だ？」

目を伏せて再び義宣に背を向けようとした祥の肩を、義宣はとつさに掴んだ。祥は悲しげに義宣の目をじつと見つめる。その目は、義宣を責めているようだった。謝っているのに、なぜそんな顔をされなければならない。

「あなたは、わたしが泣いた理由も分からずに謝っていらつしやるからです。ただ形として謝っているにすぎません」

「そんなことはない」

今まで女に泣かれることは面倒だと思っていた。謝ろうと思つたことなどなかった。だが、祥は違ふのだ。謝って、関係を修復したいと思つた。祥がいなのは寂しいと思つた。だから謝っている。

「義宣さまは、どうしてわたしに謝罪なさるの？」

「お前を泣かせたからだとさつきも言っただろう」

「そうではなくて、謝ることにどのような意味があるのですか？」

「お前との関係を修復したいと思ったからだ」

「修復とは？」

「以前と同じように、俺の側にいてほしい」

「そうですか」

「まただ。そうですか。最初から、どうも祥との会話が噛み合っていない気がする。それはなぜだ。なぜ、祥は義宣が謝っているというのに、その謝罪を受け入れようとしない。義宣の考える謝罪と、祥の要求する謝罪は違うのだろうか。」

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、あなたを愛しているわたしが好きなのね」

「どういう意味だ？」

「あなたにとつて、都合のいいわたしが。心など捨てて、あなたを愛するわたしが好きなのですね」

「何だと？」

「以前のように、とは、あなたを愛するわたしに戻ってほしいということ？」

何を言っているのだ。謝りに来たのに、かえって話が拗れている。祥は、何に怒っているのだろうか。分からない。何を言えいいのか、どうすればいいのか分からない。義宣にとつて都合がいいとはどういうことだ。心を捨てると、義宣は一度も言っていないではないか。

「わたしはあなたを愛しく思っています。だから、あなたに嫉妬をするだろうと思われて、面倒だと思われて、それが悲しくて、悔しくて、情けなくて泣いたのです。わたしは傷つきましたが、怒っているわけではありません。結局あなたは、それを分かってくださらなかったのね」

「祥」

「あなたが好きなのは、あなたを愛しているわたし。それも、あなたにとって都合のいい愛し方をするわたし。わたしの心をすべてあなたに捧げて、嫉妬もしなければ、あなたにとって都合の悪いこともしない。ただ、わたしはあなたを愛するだけ。そんなわたしを、あなたは求めているのでしょうか。それでは、心の存在しない人形と変わりありません。義宣さまのわたしに対する要求は、あまりにも大きすぎます」

「俺は」

「何ですか？わたしの言っていることは、間違いですか？ならば、言葉で説いてください。態度で示してください。あなたはわたしに愛を望んだ結果、ただ奪おうとしているに過ぎないのではないということを。あなたもわたしを愛しいと思ってくださっているのだと」  
何か言いたかったが、言葉が出てこなかった。何を言っても言い訳にしか聞こえないだろうし、そもそも言い訳すら思い浮かばない。何を言えばいいのか、本当に分からないのだ。祥は何を言っている。義宣は祥を人形とは思っていないし、祥から何かを奪おうとは思ってもいない。確かに、以前はもののように扱ったこともあったが、祝言を挙げてからは、大事にしてきたつもりだ。それに、傷ついたのは祥だけではない。義宣も同じだ。

言葉に詰まった義宣を見て、祥は悲しげな顔のまま苦笑したように見えた。その表情は、悲しげだったが、どこか義宣を憐れむようでもあった。

「結局、義宣さまは誰よりもご自分が好きなのだわ」

その一言に、胸を刺されたような気持ちがあった。違う、と言いたかったが、否定の言葉はなぜか口から出なかった。祥の肩を掴んでいた手から力が抜けた。祥は目を伏せて、義宣から視線をそらした。祥の目には涙が光っているように見えた。

「悲しいわね」

この言葉が義宣に対して言ったものか、それとも祥自身に対して言ったものか、どのような意味を持つのか、分からなかった。目を

伏せた祥からは義宣と話し合う意思を感じられず、義宣もこれ以上話す言葉が見つからなかったため、何も言わずに部屋を去った。

祥の部屋を出てから、ずっと頭の中で、悲しいわね、という祥の言葉が響いていた。今後どうすればいいのか、義宣にはまったく分からない。非を認めて謝罪したはずなのに、かえって祥にまた泣かれてしまった。なぜ、このような結果になってしまったのか、理解できなかった。



## 開く花（十二）

はなとの婚約が成立した時、はなからもらった文に返書を出すと、はなからまた文がきた。はなの文は、字がのびのびとしていて、紙いっぱい書いても、まだ書き足りないというほどに、たくさんのことが書かれている。内容は、どれも幼い少女らしく、日常の些細な出来事や近況なのだが、そこから読み取れる天真爛漫さに、茂右衛門は微笑ましい気持ちになっていた。

はなからの文はまだ二通目だが、たった二通からでもはなの人柄が見える。はなは、まだ見ぬ許嫁である茂右衛門を、一心に慕っているようだ。はやく会いたい、と結びには書かれている。そんな文を見ると、何だかむず痒い。もしかしたら、幼い金阿弥だった頃の茂右衛門を見る義宣の気持ちというのは、このようなものだったのかもしれない。今思えば、金阿弥だった頃は、おかしいくらいに義宣を慕っていた。

お前だけ、という言葉信じて、金阿弥にも義宣だけだと思っていた。何と幼く盲目的で、愚かだったのだろうか。

「茂右衛門」

「兄上、何かご用ですか？」

はなからの文を懷にしまい、茂右衛門は顔を上げた。兄にはなの文を見られると、冷やかされるのだ。自分も妻には惚れぬいているくせに、許嫁ができた茂右衛門を冷やかして楽しんでいる。

「いや、俺ではない。殿がお呼びだ」

「殿が、私を？」

何か茂右衛門に言いつける仕事があるのだろうか。義宣は、茂右衛門を突き放した後も以前と変わらずに、茂右衛門を重用してくれている。だから、突然呼び出されることは珍しくない。だが、兄に茂右衛門を呼ぶように頼むくらいならば、兄に仕事を言いつければいいはずだ。何か、別の用事のような気がする。

呼び出しに応じて義宣のもとへ行くと、茂右衛門が声をかける前に義宣に手を引かれ、部屋に引き入れられた。突然引つ張られ、茂右衛門は転びそうになってしまった。だが、義宣の腕に抱きとめられたため、茂右衛門が転ぶことはなかった。

なぜ、義宣は茂右衛門の手を引き、抱きとめるのだ。まるで、金阿弥だった頃のようなではないか。義宣は、何を考えている。

「失礼いたしました、殿」

頭を下げ、義宣の腕から抜け出そうとしたが、義宣は茂右衛門を放そうとしなかった。驚いて顔を上げると、義宣は思い悩んでいるようだった。

「殿」

「何だ？」

「なぜ、私をお放しにならないのですか？」

「放したくないからだ」

「なぜ、私をお呼びになったのですか？」

「やはり、俺にはお前だけだからだよ」

そう言つて義宣は、茂右衛門を抱きしめようとする。茂右衛門は何とか腕を突つ張り、義宣の腕から抜け出した。一体、何のだ。義宣は何がしたい。俺にはお前だけ、だと。その言葉を信じてきた金阿弥を捨てて、はなの許嫁である茂右衛門にしたのは誰だ。今更、何を言っているのだ。義宣の理解できない言動に、茂右衛門の心は乱れた。

「もう、私のことは呼び出さないと言つたのに」

「ああ、そう言つた。だが、それは寢所に呼ばないと言つただけのこと、ここに呼ばないと言つていない」

「それは、屁理屈というものです」

「茂右衛門？」

「いい加減にしてください。私のことを、馬鹿にしないでいただきたい。私は貴方の玩具ではありません。都合のいい時だけ構うなんて、やめてください。昼間から呼び出して、何をお考えですか。私

がいつまでも僧形でいるのが不憫だと、貴方は私に髪を伸ばさせたのではないのですか？」

「それは、そうだが」

義宣はきまり悪そうに眉を寄せた。いい加減にしてほしい。なぜ、茂右衛門がこんなことまで言ってやらなければならないのだ。何のために、もう茂右衛門を寢所に呼ばないと決めたのだ。岩瀬御台を愛しているからではなかったのか。それが、義宣が見つけた幸せだったのではないのか。あつさりと茂右衛門を部屋に呼んで、そんなものだったのか、義宣の気持ちは。

「私はもう大人です。貴方だけの子どもではありません。私を大人にしたのは、貴方です。それなのに、貴方は勝手です。私の気持ちを考えたことなど、ないのでしょう。今でも、私が貴方だけの金阿弥だと思っていたのですか？」

「俺は今でも、俺のことを一番理解しているのはお前だと思っている」

「私も、今でも貴方のことを理解できているとは思いますが。だからこそ、あなたは酷いお方だと言うのです」

「酷い？」

「ええ。貴方は、私を可愛がってくださいました。しかし、それは貴方を一心に慕う私が可愛かっただけなのです。そして、私も同じでした」

義宣は、本当にどうしようもない人間なのだ。弱くて自分勝手に無神経だ。茂右衛門のことなど、何も考えていない。だが、茂右衛門も同じだ。金阿弥だった頃は盲目だった。義宣と何も変わらない。そんな二人が、これ以上の関係を築けるはずがなかったのだ。義宣に突き放されて、はなと文のやり取りをして、少しずつ分かってきた。

義宣は今後、岩瀬御台と新たな関係を築くのだろう。御台には子もできた。御台とも、茂右衛門とは違う関係を築くはずだ。茂右衛門も、まだ見ぬ許嫁と義宣とは違う絆を結びたいと思う。

「お呼びになるのなら、私ではなく岩瀬御台様になさってください」  
「その岩瀬と、喧嘩のようなものをした。なぜ、このようなことになったのか、俺には理解できない。だから、お前を呼んだんだ」

「そうでしたか。やはり、貴方は何と酷いお方なのでしょう」

「なぜだ、茂右衛門？」

「ご自分でお考えください。私は、仕事に戻ります。許嫁に文の返書も書かなければなりません」

「お前は、まだ見たこともない、何度か文をもらっただけの許嫁を、愛しているというのか？」

「分かりません。殿のおっしゃる通り、まだ相手のことを私はよく知らないのですから。だからこそ、理解したい、歩み寄りたい、そのための努力をしたいと思います。私だけでも、相手だけでも、この努力は実を結びません」

義宣は黙り込んでしまった。眉間に深く皺を刻み、ますます思い悩んでいるようだ。義宣は自分が酷いことをしている自覚がない。おそらく、岩瀬御台との喧嘩というのも、義宣に原因があるのだろう。義宣が自分自身で、何が悪いのか、なぜ嫌われてしまったのか、もしれないのか、気づかなければ意味がないと思う。

失礼します、と言い残して茂右衛門は部屋を去った。義宣には散々偉そうに無礼なことを言ったが、そんなことを言えるのも、義宣が茂右衛門を処罰することはないだろう、というおごりのためだ。茂右衛門も、まだ義宣から完全に離れることができていない。これが、純然たる主と家臣としての絆となるように、茂右衛門も義宣も努力をしなければならないだろう。

はなからの文を取り出して、茂右衛門はじっと眺めた。仕事が終わったら、すぐに返書を書こう。まずは、許嫁と新たな関係を築くことから始めるのだ。

## 開く花（十二）

謝罪をしに行ったのに祥に受け入れられず、茂右衛門に慰めてもらおうと思ったら、茂右衛門にも拒絶されてしまった。二人とも似たようなことを言っていた。自分は義宣にとって都合の良いだけの人間ではないのだと、言っていたのだと思う。

祥に言われただけならば、生意気なことを言う女だ、くらいにしか思わなかったかもしれないが、長年そばに置いていた茂右衛門にも言われてしまったの。義宣は二人がそう感じるような言動をしているのだらう。

思い返してみれば、義宣が祥に琳の懐妊を知られなくなかった理由というのは、祥に嫉妬をされなくなかったからだだった。女というのは醜い嫉妬をするもので、それが面倒だという思いは確かにあった。だが、それ以上に、祥にはひたすら義宣を愛し慰めることを期待していたのかもしれない。おそらく、ほかの女とは違う、観音のような女であることを期待していたのだ。

茂右衛門も、もともと金阿弥をそばに置いたのは、自分だけを見つめる無垢な存在を手に入れたかったからだだった。何も知らない子どもだった金阿弥に手をつけて、後戻りできないようにして、最後は捨てたようなものだ。茂右衛門は、祥が義宣の前に現れたから捨てられたと思っただけでおかしくない。義宣自身は、金阿弥だった茂右衛門を早く大人にしてやろう、という気持ちから元服させたのだと思っただけで、祥の存在が影響していたのだらう。

この義宣の考えが、祥のことも茂右衛門のことも傷つけたのだと思うが、それ以外にどうすればいいのか義宣は分からなかった。愛してほしい、自分だけを見てほしいと望んだ結果なのだ。ほかにどうすれば愛情も相手自身も手に入れられるというのだ。まったく分らない。

昔、奥の女たちに手をつけた時と同じなのだと思う。あの時、女

のことなど考えていなかった。自分勝手に、一時の安らぎを求めていただけだった。今も、祥のことも茂右衛門のことも考えていなかったから、二人とも傷つけてしまったのだらう。

奥の女たちに手をつけていた時、ある女に、悲しい、と言われたことがあった。あの女は、あの後どうしているのか分からないが、祥も同じことを言っていた。妹のなすには、義宣はずるいと言われたこともある。

昔を振り返ると、今までも義宣は自分本位に他人を傷つけてきたような気がする。八重のことも、傷つけて追いつめていたに違いない。

自分本位に愛情を求めることの何が悪い。それ以外にどんな方法があるのだ。義宣を理解できない方に問題があるのだ、と開き直りたい気持ちもある。だが、開き直ってしまったら、もう二度と祥は義宣に微笑みかけてくれないだらう。それどころか、義宣に顔を見せてもくれないかもしれない。それは嫌だった。

祥が義宣のことをどう思っているのか、それを思うと恐ろしかった。今すぐ祥のもとへ行って謝りたいが、祥は義宣の謝罪を受け入れないだらう。どうすれば、祥は義宣を許してくれるのだらうか。祥は義宣に対して怒っているわけではないと言っていたのだから、許しを請うこと自体が間違っているのかもしれない。

茂右衛門に、義宣は酷いと言われた。それは、人を心のない玩具のように扱っていたからか。そうではないということを、祥に示せばいいのか。祥は、祥を愛しく思っているのだと言葉と態度で示せ、と言っていた。ならば、それを示せばいいのだらうが、方法が分からない。愛しいと思うということは、どういうことだ。

祥には、なぜ歩み寄ろうとしないのだと言われた。茂右衛門は、許嫁と理解し合い、歩み寄りたいと言っていた。義宣は以前、祥に自分のことを話そうとして、結局話せなかった。今こそ、あの時話せなかった義宣の過去を、祥に話す時ではないだらうか。義宣も、茂右衛門が許嫁と理解し合おうとするように、祥と理解し合うべき

なのだと思う。

義宣の話を祥が聞いてくれるかは分からない。だが、祥の言っていた、歩み寄ると言うことは、こういうことなのではないか。今まで誰にも話したことの無い義宣の過去と想いを、祥に理解してほしい。それ以外、取るべき道が見つからなかった。

祥には、母に愛されなかったのだと話したことはあったが、八重のことは何も話していなかった。祥だけではない。誰にも、八重のことは話せなかった。話すだけではなく、八重が死んでから、八重のことを考えることすらほとんどなかった。思い出すのが辛かったのだ。

八重の死、八重との生活、八重のすべてがいまだに義宣の心を苦しめる。だから、意図的に八重のことは考えないようにしてきた。

その八重のことを、祥に話す。話して、何が変わるかは分からない。だが、どうすればいいのか分からないのだ。分からないのなら、思いついたことを実行するしかない。

夜が更けてから、義宣は祥の寝所に向かった。向かうことを告げてはいない。鏡田に取り次ぎを頼めば、また嫌な顔をされるのだろうし、何より今夜渡ると宣言するのは恐ろしかった。まるで夜這いのようなが、奥の者たちを起こさないようにそっと歩いた。だが、今夜は満月だ。この明るさでは、誰かに見つかってしまうかもしれない。

祥の寝所の近くまで来て、義宣は足を止めた。祥が寝所の外で月を眺めていた。こんなことが、少し前にもあった。祥が義宣に対して、わたしがあなたを愛すわ、と言った翌日、義宣が祥の寝所へ向かった夜のことだ。あの時、義宣は話したいことがあると言っておきながら、結局何も言えなかった。祥は、話したい時に話せばいいと言ってくれたのだった。まるで、あの夜の続きのようだ。

義宣の気配に気づいたのか、祥が義宣の方を見て、驚いた顔をした。祥の隣まで歩いて行く間、祥の目はじつと義宣を見つめていた。「以前も、こんなことがあったのを覚えているか？」

「ええ、もちろん。あの時は春で、今は秋になったという違いはあります」

「そうだな」

義宣は立ったまま、祥の顔を見ていた。月に照らされた祥を見ていて、義宣は跪いてしまいたいような気持ちになった。

「祥」

「はい」

「話したいことがある」

祥はまっすぐに義宣を見つめている。その視線の強さに、思わず目を逸らしたくなるが、義宣も祥を見つめ続けた。

「聞いてくれるか？」

「はい」

頷いて祥は立ち上がり、義宣を寢所の中へと招いた。障子は開けたままにしたので、部屋の中にまで月明かりが入ってくる。祥は義宣に座るよう勧めたが、義宣は立ったまま、義宣を招いた祥の手を握り締めた。

「俺には、今の御台の前に妻がいた。那須の女だった」

「ええ。存じております」

八重の話は、のんびりと座ってできるわけがない。祥の手を握ったのは、義宣が不安になったからだ。突然何を言い出すのかと、祥は驚いているかもしれない。

「こんなことを、祥に言うのはおかしいと思う。気を悪くするだろう。だが、言わせてくれ。あの女は、美しかった。誰よりも美しかった。俺は、あの女以上に美しい女を知らない。冷たく誇り高い、美しい女だった」

「義宣さま？」

自分でも、何を言っているのだろう、と思う。だが、止まらなかった。今まで形にすることを避け続けてきた八重に対する葛藤、苦しみ、思いがうまくまとまらずに胸につかえている。いきなり、昔の妻は美しい女だったと言われても、祥は何と反応すればいいのか



分からないだろう。

「だが、あの女は死んだ」

義宣の手が細かく震えた。声も震えているようだ。絞り出すような声しか出ない。祥は眉を寄せ、黙って義宣の顔を見つめていた。

「俺が、死なせたようなものだ」

祥の手を強く握りしめ、義宣はその場に膝をついた。祥がどのような顔をしているのかは分からない。何を思ったかは分からないが、息をのむ気配がした。

八重は太田城で自害した。遺書はなかった。八重の侍女の朝霧から遺言のようなものは聞いたが、義宣に血に染まった婚礼衣装を渡すように言っていただけだった。どこまでも那須の女だと言い張るかのような八重が、憎かった。たまらなく憎かった。

だが、同時に、心の奥底で思い続けていたのだ。目を背けて考えないようにしていただけで、ずっと思っていた。八重は自害したが、義宣が死なせたようなものなのだと。義宣が、八重を殺したようなものなのだと、思っていた。

## 開く花（十三）

膝をつきうなだれる義宣の肩に、祥の手がそつと置かれた。握り締めていなかった方の手が置かれたのだ。顔を上げると、祥は義宣の視線に合わせるようにしゃがみこみ、困惑の表情を浮かべていた。「義宣さま、どうか落ち着いて。順を追って、わたしにお話しくださいませ」

八重のことを思い出して、落ち着いてなどいられるか、と思ったが、祥の言うとおりだ。感情に任せて話すだけでは、祥に何も伝えられないだろう。落ち着いて話すために、その場に腰を下ろした。祥も向かい合ってその場に座った。手は、まだ握り締めたままだ。

「先の御台は、名を八重といった。俺がわずか三歳の時に決められた許嫁だった。家の問題で、実際に結婚したのは十六になってからだった」

「お八重さまは、那須家の姫さまでいらっしやいましたね」

「ああ、そうだ。家臣の中には、なぜ那須家の姫が俺の妻になるのだ、と反対している者もいたようだった。だが、俺はそんなことはどうでもよかった。年上の妻の美しさに、年若かった俺は目を奪われたものだった」

今でも八重の嫁入り姿が目には浮かぶ。白い打掛がよく似合っていた。その打掛は、六年後に八重自身の血で赤く染まった。そして、義宣の手で燃やしたのだ。

「八重は、妻として確かに俺に体は開いた。だが、心はいつまでも那須の女のままだった。俺に心を開いたことなど、一度もなかった。微笑みかけたことも、なかった。那須から同行している侍女には、いつも笑みを見せていたというのに。母が中務に命じて密かに政宗を救った時も、八重は慰めるどころか、自分の兄は戦に負けることなど無いのと言っていた。それから数年経って、再び母が中務に命じて政宗を助けた時も、八重は俺を拒むだけだった。その憂さを

晴らすために、俺は、奥の女たちに手をつけて、女の柔らかさを求めた。まあ、空しいだけだったがな」

義宣が自嘲するように笑うと、祥は悲しそうに眉をひそめた。

「八重は、そんな俺を汚らわしいと言った。触れるなど言った。俺は結局佐竹という名門が何よりも大事なのだと、八重は言った。祥にも同じことを言われた」

祥はかすかにうなずいた。祥も、まだあの時のことを覚えていたのか。義宣は、祥が八重と同じことを言うのだから、随分と衝撃を受けたのだ。

「俺は、八重を無理やり抱いた。なぜ、この女はここまでかたくなに俺を拒むのか、と頭に來たのだった。憎かった。たまらなく、八重が憎いと思った。だが、俺が無理やり抱いても、八重は誰よりも美しかった。むしろ、俺は八重が恐ろしくなった。それからしばらくは八重の顔を見なかった。あいつは、病と称して誰とも会おうとしなかったんだ」

病と称していた八重だが、実際は仮病だった。侍女の吉野が不義密通を働き、子をなした。それを八重は隠そうとしていたのだ。その吉野は、父に出奔しようとするところを見られ、斬られた。吉野の子は、父がどこかに墓を建てたはずだ。

祥は眉をひそめたまま、黙って義宣の話聞いていた。義宣も、祥に返事を求めることもなく話し続けた。

「その後、八重の実家である那須家は改易された。妻の実家が改易され、俺は太閤殿下に離縁を迫られた。だが、不思議と、俺は八重を離縁する気には一度もなかった。だから、俺は八重を太田城に謹慎させた。八重がいる間に、太田城で南方の館主を謀殺したこともあった。八重のいる太田城を、俺は血に染めた。それから二月後、今度は八重の血で、太田城は赤く染まったのだった」

祥の手を握り締めたまま、義宣は俯いた。八重の血で赤く染まった打掛が脳裏に浮かぶ。義宣が最後に見た八重の顔は、怒りに燃え、義宣を憎むものだった。

「俺が、八重を追いつめたんだ。無理やり抱いて、屈辱を与えた。謹慎をさせた時、あいつは俺を憎んでいた。屈辱を感じていたのだろ。その上、寺へ幽閉しようとしたのだ。あの誇り高い女が、死を選ぶのは当然だ。だから、俺が八重を殺したようなものなんだ」  
ついに言った。他人に八重のことをすべて話した。義宣が八重に抱いていた思いも、何もかもすべて。祥はどのような顔をしているのだろうか。呆れているかもしれない。

「それから、今は茂右衛門と名乗っているが、金阿弥と出会った。俺は、俺だけを見つめる存在が欲しかった。だから、幼かった金阿弥をそばに置いた。そして、抱いた。今は、もうそんな関係ではなくなっただが」

俯いたまま、茂右衛門との過去の関係も話した。金阿弥は、八重を失った時に、ちょうど義宣の目の前に現れたのだった。義宣は、金阿弥の純粹さにどこか救われるような思いがあった。だが同時に、幼い子どもにそんなことを求める自分を、醜いとも思っていた。

茂右衛門のことも話し終えると、義宣は目を瞑って口を閉ざした。祥が何と言うのか、それを待っていた。祥の言葉を待つ間の沈黙は、さほど長くなかったのだろうが、義宣には随分長く感じられた。

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、お八重さまに恋をなさっていたのね」

「恋だと？」

思いもしない言葉に驚き、思わず顔を上げた。祥は悲しげな表情のまま、義宣をまっすぐに見つめている。

「ええ。あなたは、お八重さまのことが誰よりも好きだった。だから、すべてを欲して、執着していたのだと思います」

「俺が、八重に惚れていた」

「けれど、お八重さまを欲した結果、あなたは奪うことしかできなかった。わたしは、そう思います」

「八重のことが、好きだったのか」

自分が八重に惚れていたと言うことが信じられず、確認するように呟いた。呟くたびに、それは事実であるような気がしてくる。今まで見てきたどの女よりも、八重が美しいと思うのは、義宣が八重に惚れていたからなのか。八重に拒絶されて、無理やり抱いたのも、八重のすべてが欲しかったからなのか。

「義宣さまにとって、お母上との問題も大きいけれど、一番の問題は、お八重さまなのでしょね。お八重さまに愛されなかったことが、お八重さまに自害されたことが、今でもあなたの心を苦しめている」

惚れていたから、離縁しようとは思わなかったのか。自害されたことも、ここまで義宣を苦しめるのか。

涙があふれ出した。八重のことを思うと、涙が流れ出す。その涙を、祥がそつとぬぐった。

「俺は、八重が好きだった。この世の誰よりも。今更、分かった。だが、どうすればいいのか、あの頃の俺はまったく分からなかった。自分の気持ちを、持て余していたのだな」

「お八重さまを失って、義宣さまをとて苦しまれたと思います。けれど、今わたしにこのお話をなさったのは、なぜですか？」

「祥に、俺のことを知ってほしかった」

「わたしに慰めてほしかったの？」

「違う。祥は、自分のことを俺に話してくれただろう？話したくないことも話してくれたと思う。だから、俺も誰にも話せなかったことを祥に聞いてほしかった。俺は、祥の話を聞いて、祥のことを理解したと思った。俺のことも、理解してほしいと思ったんだ」

「今でも、わたしが御台さまに嫉妬して怒っているとお思いですか？」

「もう、思っていない。すまなかった、祥。俺は、これからどうすればいい？どうすれば、お前の言った、歩み寄るということができるのだろう？分からないんだ」

助けを求めるように、祥にすがった。義宣の頬に、あたたかいも

のが触れた。祥の手が、義宣の頬を包み込んでいた。

「分からなかった、という理由で、あなたがこれまでなさってきたことが許されるのか、わたしは分かりません。わたしはお八重さまや、義宣さまのお手がついた女たちではありませんもの。ただ、わたしは、今までの義宣さまを悲しいと思います」

「悲しい？」

「はい。これからどうすればいいのか、それはわたしにも分かりません。わたしも、独りよがりな考えで、あなたを傷つけたのかもしれない」

祥が目を伏せる。そんなことはない、と言いたかった。だが、言うてはいけないような気がした。

「義宣さまの問いに、わたしは答えを持ちません。ただ、望みを申し上げることはできません」

「何だ？」

「奪う恋ではなく、与える愛を知ってください。悲しい過ちは、繰り返さないで。わたしがあなたを愛すわ。だから、あなたは、お母上や御台さま、生まれてくるお子、茂右衛門のことを愛してください。できれば、わたしのことも愛していただけると嬉しいのですけれど」

母に愛されなかったと嘆いた夜、祥は同じ言葉を義宣に与えた。

あの時から、祥は義宣に愛を与えていたのだ。胸が詰まる。祥が義宣に与えているものを、義宣も人に与えられるのだろうか。分からない。だが、努力をする。今まで、八重や手をつけた女たちだけではなく、母にも茂右衛門にも祥にも、自分は何も与えることはせず、ひたすらに求めているだけだったのだろう。それは、ただ空しいだけだったのだ。

八重に抱いた気持ちが恋だと言うのなら、祥には八重とは同じ恋という感情は抱いていない。だが、八重に抱いた暗く激しい感情とは違う、あたたかい感情を祥には抱いている。これが、愛するということなのだと思う。

「祥」

「はい」

「好きだ」

「わたしも、義宣さまが好き」

祥の目からも涙がこぼれた。今度は、義宣が祥の涙をぬぐった。

祥の腕を引くと、祥は義宣の胸に体を預けた。腕をまわして、抱きしめる。

あたたかさが、体の奥までしみ込むようだった。

## 開く花（十四）

祥の胸に顔を埋める。義宣の髪が肌に刺さるのか、くすぐったそうに祥は身じろぎした。そのかすかな動きも、愛しいと思う。

肩に手をかけ、褥に押し倒すと、祥はまるで処女のように恥じらった。祥の裸を見るのは初めてではない。今まで、何度も情を交わしてきている。祥が恥ずかしがったため、開けていた障子は閉めたが、月明かりが入るように隙間をわずかに開けていた。

かすかな明かりだとしても、自分の姿が映されて恥ずかしいのだろうか。初々しい反応が可愛い。

「祥」

「義宣さま」

互いの名を呼び、唇を合わせる。何度も口を吸っているうちに、祥の腕が義宣の頭を抱くように、首にまわされていた。口を吸い、唾液が混じり合うのと同じように、義宣と祥の体もひとつになっていくような気がした。

なぜ、祥を傷つけ、突き放すようなことが言えたのだろうか。祥は、今までずっと義宣に愛を注いでくれたというのに。そのことが分からなかったのだから、何と愚かなのだろう、と思う。茂右衛門に、義宣は酷い、と言われたが、そんな言葉では片づけられない。

「好き」

唇を話した瞬間、小さな声で囁かれる言葉に、義宣は泣きたくなかった。なぜ、祥は今でもこうして、義宣のそばにいてくれるのだろうか。

胸を掴み、肌を撫でていくと、小さく喘ぎながら、祥の体はだんだんと紅潮していく。赤みを帯びた白い体と、褥に広がる黒髪に目を奪われる。綺麗だった。祥は、綺麗だ。

祥の体に沈み込み、ひとつになるように、義宣は祥を抱いた。祥



のあたたかさに、体だけではなく、心も満たされていた。

一つの褥に二人で横になると、祥は甘えるように義宣の腕の中に収まった。義宣は、黙って祥の髪を撫でていた。そうしていると、おだやかな気持ちになってくる。祥の髪を撫でながら、今後祥をこのまま伏見に置いておくべきなのか考えていた。

祥は側室なのだから、伏見屋敷に置いておく必要はない。伏見の奥は母と琳のものなのだから、祥は常陸に帰した方がいいのかもしれない。琳は子を身ごもっているのだし、これ以上祥を伏見に置いておくのは、琳のためにもよくないような気がする。祥とともに伏見屋敷に來ている伯母も、常陸に帰った方が、気が楽だとも思う。

だが、せっかく祥とともに生きていこうと思ったのに、常陸に帰れ、というのは酷いだろうか。今までの義宣ならば、そばに置いておかなければ安心できなかったが、今ならば離れていても大丈夫だと思える。もちろん、多少の不安は感じるが。

「どうかなさったのですか？」

褥に横になってから黙ったままの義宣を不審に思ったのか、祥は義宣を見上げてきた。

「考え事をしていた」

「まあ。わたしは、まだ義宣さまとの余韻に浸っておりましてのに、もう考え事ですか？」

「祥のことを考えていたんだ」

「本当？」

「何というか、楽しい考え事ではない」

常陸に帰らせた方がいいか考えていたのだから、楽しい考え事ではない。何と切り出せばいいか、なかなか思い浮かばない。仕方がないので、義宣は考えていたことをありのままに話すことにした。

「祥、伯母上とともに、常陸に帰らないか？」

「常陸に？」

「俺は、祥が嫌いだから言っているのではない。それは、分かってくれると思うが」

「ええ、もちろん」

「御台が身ごもっているだろう？伏見に祥を置いておけば、気が休まらないかと思つてな」

「義宣さまの考えていることが、何となく分かつたような気がします」

祥は体を起こして夜着を整えた。義宣を見つめる祥の目は静かで、義宣の考えに反対しているわけではないようだ。

「では、わたしは養母と鏡田とともに、下河辺へ帰ることにいたします」

「いや、下河辺の館ではない。前に、伯母上にも言つただろう。今度帰国したら、水戸城内に住んでもらうと」

「では、水戸のお城に？養母とともに参つても、よろしいのですか？」

「ああ。まず、国に書状を送つて、城内を整えさせる。それから、伯母上たちと归ればいい」

「分かりました。では、お子が無事にお生まれになるよう、水戸でお祈りしながら、義宣さまのお归りをお待ちしております」

祥が頭を下げると、髪が頬にかかった。その髪を耳にかけて、義宣は祥の頬を撫でた。その手に、祥の手が添えられる。

「いつになるかは分からないが、俺が帰国した時、八重の墓に一緒に行つてくれるか？俺は、八重が死んでから一度も墓に手を合わせていない」

「ええ、参りましょう。でも、何だか少し妬けてくるわ」

ふふ、と笑つた後に、祥は口許を手で隠し、目を伏せた。はつとしたようだったが、どうしたのだろうか。

「お亡くなりになつた方に嫉妬をする女は、お嫌いですか？」

「まさか。祥の方こそ、いい加減俺に愛想を尽かさないか？」

「いいえ。あなたが愛しい」

義宣も祥が愛しい。たまらなくなつて、義宣は祥を抱きしめた。祥の手も義宣の背に伸ばされる。祥を大事にしたい。愛しい。目が

合つと、どちらともなく唇を重ねた。

これが、幸せというものなのだった。

それから半月後、祥は伯母と鏡田とともに常陸へ向けて発った。水戸城内を整えるように命じた書状はまだ届いていないだろうが、祥たちが到着する頃には、城内も落ち着いているはずだ。

出立前、伯母は祥から話を聞いているのか、義宣を見て笑った。

鏡田は、まだ怒っているようで義宣に対する態度が良いとはいえず、祥に注意されていた。義宣が祥にしたことを思えば、鏡田の態度はもつともだ。

祥は別れ際、無事に子が生まれて、母子ともに健康であるように、と祈りを口にし、伏見を去って行った。秀吉の容体が芳しくない状態では、いつ帰国できるか義宣は分かったものではない。次に会う時までのために、祥の顔をじつと見つめた。祥も義宣を見つめ、微笑んでいた。

祥の一行を見送り、屋敷に戻ると、ちょうど茂右衛門と会った。

茂右衛門には祥の出立の手配をさせていたのだ。ようやく、仕事が一段落したのだろう。

「岩瀬様は、無事に」ご出立なさったようですね」

「ああ。次に会えるのはいつになるのやら」

「ならば、ずつとおそばに置かれればよろしかったのに」

「それは、駄目だ」

義宣の言葉を聞いて、茂右衛門は目を丸くした。この間まで義宣のそばに置かれ続けていた茂右衛門にしてみれば、信じられない言葉だったのだろう。驚いた後に、茂右衛門はにやりと笑った。元服してから、茂右衛門は少し生意気だ。だが、その生意気なところも義宣は気に入っている。

もう昔のような関係ではなくなったが、今でも茂右衛門はほかの家臣の誰よりも特別だった。

「そうですか。では、私はほかにも仕事がございますので、失礼いたします」

礼をして義宣の前を去ろうとする茂右衛門を呼びとめて、すまないと一言謝りたかった。だが、今まで義宣が茂右衛門にしてきたことは、謝って済むものではなかったし、謝るべきではないような気もする。謝って楽になるのは、義宣だけだ。

茂右衛門を呼びとめようとした手を下ろし、義宣は琳のもとへ足を運んだ。腹の中の子が急激に成長するわけはなく、琳の様子はあまり変わっていないようだった。だが、琳が言うには、この間腹の中の子が動いたらしい。義宣も琳の腹に手を当ててみたが、よく分からなかった。

祥が常陸へ向けて出立してから半月も経たないうちに、三成から急の知らせが届いた。それは、秀吉が伏見城で息を引き取ったことを伝えるものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9993t/>

---

道程

2011年8月19日19時35分発行